

江別市

ついでしかり
対雁 2 遺跡 (2)

—石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 12 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



航空写真(2000年8月12日撮影)



基本土層 (69-161) SW→NE



遺物集中1 検出状況 E→W

例 言

1. 本書は、石狩川改修工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した、江別市対雁2遺跡の発掘調査報告書である。対雁2遺跡の調査報告書として2冊目となる。
2. I～VI章の執筆は、西田茂・三浦正人・鈴木信・酒井秀治が分担し、文責は各項目の文末に括弧で示した。編集は酒井が主となって行った。
3. 現場の遺構図・調査状況図・土層図などの作図・整理は、三浦・鈴木・吉田・酒井・三浦千晴・石丸奈智が担当・従事し、酒井が統括した。
4. 調査写真は吉田裕吏洋が担当した。調査写真の一部は酒井・西田が分担し撮影したものもある。遺物写真・写真図版の編集は吉田が担当した。
5. 遺物整理は、土器を鈴木、石器等を酒井が担当した。
6. 遺物の実測・トレースは土器を三浦千晴が、石器・石製品は高橋幸恵が行い、各担当者が統括した。
7. 放射性炭素年代測定は加速器質量分析法(AMS)で株式会社地球科学研究所に依頼し、報文を掲載した。
8. 樹種同定は農林水産省森林総合研究所 平川泰彦氏の指導のもとに、菊池育子が行い執筆した。
9. 調査にあたっては下記の諸機関、各氏から御指導・御協力をいただいた。
江別市教育委員会、江別市郷土資料館、恵庭市教育委員会、恵庭市郷土資料館、
千歳市埋蔵文化財センター、北広島市教育委員会、石狩市教育委員会、
札幌市埋蔵文化財センター、北海道開拓記念館、ホクトヤンマー株式会社
高橋正勝、直井孝一、園部真幸、野中一宏、稲垣和幸、佐藤一志、兼平一志、上野秀一、
羽賀憲二、仙庭伸久、秋山洋二、出穂雅実、藤井誠二、大谷敏三、田村俊之、高橋 理、
豊田宏良、上屋真一、松谷純一、大林千春、長町章弘、遠藤龍畝、石橋孝夫、工藤義衛、
北澤 実、西澤千鶴、葛西智義、瀬川拓郎、小林幸雄、長谷山隆博、野村 崇、森岡健治、
澤田 健、小野哲也、鈴木康之、山田昌久、赤沼英男、平川泰彦、大津 直、岡 孝雄、
田近 淳、村野紀雄、富川 徹、西脇昭夫、関矢信一郎、松山 潤、高間和儀、君 尹彦、
卜部信臣、安井幸雄、田中 實、田中利一、伊藤兼平、豊田實大、田中和夫、渡辺真志、
関 信行、飯田 基、山本 巖、畑 宏明、大沼忠春、千葉英一、田才雅彦、工藤研治、
西脇対名夫、宗像公司

記号等の説明

1. 遺構の表記は以下に示す記号を用い、原則として調査順に番号を付した。
 - P : 土坑
 - F : 焼土
 - S : 集石
 - FC : フレイク集中
2. 遺構図の縮尺は、スケール等の入っているもの以外は、原則として40分の1である。
 - 遺構平面図に方位記号がない場合は、上がN-23°-Eである。
 - 遺構平面図の+はグリッドラインの交点で、交点傍らの名称記号は右下の区画を示す。
 - 遺構平面図の・小数字は、その地点の標高(単位m)である。
3. 遺構の規模は、「長軸の上端/下端×短軸の上端/下端×確認面からの最大深・最大厚」で示してある。一部破壊されているものは現存長を()で示し、不明のものは一で示した。
4. 遺物実測図と土器拓影図の縮尺は、原則として以下のとおりである。一枚の図面に違う縮尺の図が配置されたものには、スケールを付したものもある。
 - 復元土器 : 3分の1 土器拓影 : 3分の1 土製品 : 3分の1
 - 剥片石器 : 2分の1 礫石器 : 3分の1 石製品 : 2分の1
5. 石器・土製品・石製品の大きさは、「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。

目 次

口 絵
例 言
記号等の説明
調査要項

I 調査の概要

1 調査にいたる経緯	1
2 調査の概要	5
3 本書の概要	5
4 西側の再試掘調査について	7

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境	
(1) 位 置	13
(2) 地 形	13
(3) 周辺的环境	13
(4) 洪水と治水事業	17
2 歴史的環境	
(1) 対雁（ツイシカリ）の語義	18
(2) 石狩川の諸記録	18
(3) 対雁の諸記録	23
(4) 遺跡、遺物についての諸記録	26
3 周辺の遺跡	
(1) 石狩川左岸（対雁2遺跡付近）汀線採集の遺物について	27
(2) 関矢留作の遺跡調査	30
(3) 後藤寿一の遺跡図	36
(4) 江別市内の遺跡	41

III 調査の方法、遺物の分類

1 調査の方法	49
2 土層の区分	53
3 遺物の分類	
(1) 土 器	57
(2) 土製品	58
(3) 石器・石製品	58

IV 遺構と遺物

1 土坑と出土遺物	
(1)概 要	59
(2)土坑出土の土器について	67
(3)土坑出土の石器等について	71
2 焼土と出土遺物	
(1)概 要	73
(2)焼土出土の土器について	92
(3)焼土出土の石器等について	95
3 集石と出土遺物	
(1)概 要	97
(2)集石出土の石器等について	100
4 フレイク集中と出土遺物	
(1)概 要	101
(2)フレイク集中出土の石器等について	104
5 遺物集中と出土遺物	
(1)概 要	107
(2)遺物集中1出土の土器について	108
(3)遺物集中1出土の石器等について	108

一覧表

V 包含層出土の遺物

1 土 器	121
2 石器等	149

一覧表

VI III層の調査

161

VII 自然科学的分析

1 江別市対雁2遺跡放射性炭素年代測定結果報告書 (株)地球科学研究所	165
2 木質遺物の樹種同定について	177

写真図版

報告書抄録

目 次

I 調査の概要

図 I - 1	対雁 2 遺跡の位置	2
図 I - 2	河川敷の整備状況	3
図 I - 3	丘陵堤	4
図 I - 4	年代測定値の概略	6
図 I - 5	範囲確認調査試掘穴と 平成12年度のトレンチ位置	8
図 I - 6	トレンチ調査での遺物出土	9
図 I - 7	土層柱状図	10
図 I - 8	試掘調査の遺物	11

II 遺跡の位置と環境

図 II - 1 - 1	調査区の位置	14
図 II - 1 - 2	対雁 2 遺跡周辺の地形(1)	15
図 II - 1 - 3	対雁 2 遺跡周辺の地形(2)	16
図 II - 2 - 1	水面の高さ	19
図 II - 2 - 2	『石狩川治水計画調査報文』 の図(1)	20
図 II - 2 - 3	『石狩川治水計画調査報文』 の図(2)	21
図 II - 2 - 4	『石狩川治水計画調査報文』 の図(3)	22
図 II - 2 - 5	請願の図	24
図 II - 3 - 1	調査区と現在汀線の位置	27
図 II - 3 - 2	採集地点位置	28
図 II - 3 - 3	採集された土器	29
図 II - 3 - 4	野幌部落の遺跡	31
図 II - 3 - 5	関矢留作の遺跡などの地図	32
図 II - 3 - 6	遺跡分布図	33
図 II - 3 - 7	遺跡の位置	34
図 II - 3 - 8	「志文別遺跡之図」	35
図 II - 3 - 9	泥炭層調査の場面	35
図 II - 3 - 10	遺跡の位置略図	36
図 II - 3 - 11	空中写真をもとに 作成した地形図	37
図 II - 3 - 12	北海タイムスの記事	38
図 II - 3 - 13	江別市内の遺跡(1)	43
図 II - 3 - 14	江別市内の遺跡(2)	44

III 調査の方法、遺物の分類

図 III - 1 - 1	調査区設定図	51
図 III - 1 - 2	調査範囲図	52
図 III - 2 - 1	土層図(1)	55
図 III - 2 - 2	土層図(2)	56

IV 遺構と遺物

図 IV - 1 - 1	土坑位置図	59
--------------	-------	----

図 IV - 1 - 2	P - 12・16・17・22・19 ・21	61
図 IV - 1 - 3	P - 15・10・11・13・14 ・20	63
図 IV - 1 - 4	P - 24・25・18・23・2	65
図 IV - 1 - 5	土坑出土の土器(1)	68
図 IV - 1 - 6	土坑出土の土器(2)	69
図 IV - 1 - 7	土坑出土の土器(3)	70
図 IV - 1 - 8	土坑出土の石器	72
図 IV - 2 - 1	焼土位置図	74
図 IV - 2 - 2	II - 1 層の焼土(1)	75
図 IV - 2 - 3	II - 1 層の焼土(2)	76
図 IV - 2 - 4	II - 1 層の焼土(3)	77
図 IV - 2 - 5	II - 2 - 上層の焼土(1)	78
図 IV - 2 - 6	II - 2 - 上層の焼土(2)	79
図 IV - 2 - 7	II - 2 - 上層の焼土(3)	80
図 IV - 2 - 8	II - 2 - 中層の焼土	81
図 IV - 2 - 9	II - 2 - 中 1 層の焼土(1)	82
図 IV - 2 - 10	II - 2 - 中 1 層の焼土(2)	83
図 IV - 2 - 11	II - 2 - 中 1 層の焼土(3)	84
図 IV - 2 - 12	II - 2 - 中 2 層の焼土(1)	85
図 IV - 2 - 13	II - 2 - 中 3 層の焼土(2)	86
図 IV - 2 - 14	II - 2 - 中 3 層の焼土(3)	87
図 IV - 2 - 15	II - 2 - 中 3 層の焼土	88
図 IV - 2 - 16	II - 2 - 中 4 層の焼土	89
図 IV - 2 - 17	II - 2 - 中 5 層の焼土	90
図 IV - 2 - 18	II - 2 - 下層の焼土	91
図 IV - 2 - 19	焼土出土の土器(1)	93
図 IV - 2 - 20	焼土出土の土器(2)	94
図 IV - 2 - 21	焼土出土の石器	96
図 IV - 3・4 - 1	集石・フレイク集中 位置図	97
図 IV - 3 - 2	S - 8 ~ 14	99
図 IV - 4 - 2	フレイク集中 2 ~ 8	103
図 IV - 3・4 - 3	集石・フレイク集中 出土の石器等	105
図 IV - 4 - 4	フレイク集中 8 出土の 遺物接合図	106
図 IV - 5 - 1	遺物集中 1	107
図 IV - 5 - 2	遺物集中 1 出土の土器(1)	109
図 IV - 5 - 3	遺物集中 1 出土の土器(2)	110
図 IV - 5 - 4	遺物集中 1 出土の石器	111

V 包含層出土の遺物

図 V - 1 - 1	復元資料(1)	125
図 V - 1 - 2	復元資料(2)	126
図 V - 1 - 3	復元資料(3)	127
図 V - 1 - 4	復元資料(4)	128

図V-1-5	復元資料(5).....	129
図V-1-6	復元資料(6).....	130
図V-1-7	復元資料(7).....	131
図V-1-8	復元資料(8).....	132
図V-1-9	復元資料(9).....	133
図V-1-10	復元資料(10).....	134
図V-1-11	破片資料(1).....	135
図V-1-12	破片資料(2).....	136
図V-1-13	破片資料(3).....	137
図V-1-14	破片資料(4).....	138
図V-1-15	破片資料(5).....	139
図V-1-16	土器分布図(1).....	140
図V-1-17	土器分布図(2).....	141
図V-1-18	土器分布図(3).....	142
図V-1-19	土器分布図(4).....	143

図V-1-20	土器分布図(5).....	144
図V-1-21	土器分布図(6).....	145
図V-1-22	土器分布図(7).....	146
図V-1-23	土器層別出土分布図(1).....	147
図V-1-24	土器層別出土分布図(2).....	148
図V-2-1	石器等(1).....	151
図V-2-2	石器等(2).....	152
図V-2-3	石器等(3).....	153
図V-2-4	石器等器種別分布図.....	154
図V-3-1	包含層出土遺物分布図.....	155

VI Ⅲ層の調査

図VI-1	Ⅲ層調査範囲図.....	162
図VI-2	自然木出土状況図.....	163

表 目 次

II 遺跡の位置と環境

表II-2-1	現在流路に於ける観測水位.....	19
表II-3-1	掲載土器一覧.....	28
表II-3-2	江別市内の遺跡(その1).....	45
表II-3-3	江別市内の遺跡(その2).....	46
表II-3-4	江別市内の遺跡(その3).....	47

III 調査の方法、遺物の分類

表III-3-1	在地系深鉢・浅鉢の口縁部 ～胴部の施文記号一覧.....	58
表III-3-2	深鉢・浅鉢の底部形態の 記号一覧.....	58

IV 遺構と遺物

表IV-1	遺構出土掲載土器一覧(1).....	112
表IV-2	遺構出土掲載土器一覧(2).....	113
表IV-3	遺構出土掲載石器等一覧.....	114
表IV-4	土坑一覧.....	115
表IV-5	土坑出土遺物一覧.....	115
表IV-6	焼土一覧(1).....	116
表IV-7	焼土一覧(2).....	117
表IV-8	焼土出土遺物一覧(1).....	118
表IV-9	焼土出土遺物一覧(2).....	119
表IV-10	集石一覧.....	119
表IV-11	集石出土遺物一覧.....	119
表IV-12	フレイク集中一覧.....	120

表IV-13	フレイク集中出土遺物一覧.....	120
表IV-14	遺物集中一覧.....	120
表IV-15	遺物集中出土遺物一覧.....	120
表IV-16	遺構出土遺物一覧.....	120

V 包含層出土の遺物

表V-1-1	包含層出土掲載 土器一覧(1).....	156
表V-1-2	包含層出土掲載 土器一覧(2).....	157
表V-2	包含層出土掲載石器等 一覧.....	158
表V-3	包含層出土遺物一覧.....	159

VI Ⅲ層の調査

表VI-1	Ⅲ層出土自然木樹種同定結果.....	164
表VI-2	¹⁴ C年代測定結果.....	164

VII 自然科学的分析

表VII-2-1	自然木サンプルの 樹種同定結果集計.....	180
表VII-2-2	炭化材サンプルの 樹種同定結果集計.....	180
表VII-2-3	炭化材サンプルの 樹種同定結果.....	180

図 版 目 次

I 調査の概要

図版 I - 1	遺跡遠景	189
図版 I - 2	試掘調査	190
図版 I - 3	試掘調査の遺物	191

II 遺跡の位置と環境

図版 II - 1	遺跡の周辺(1)	192
図版 II - 2	遺跡の周辺(2)	193
図版 II - 3	表採土器	194
図版 II - 4	噴砂	195

III 調査の方法、遺物の分類

図版 III - 1	基本土層(1)	196
図版 III - 2	基本土層(2)	197

IV 遺構と遺物

図版 IV - 1	土坑(1)	198
図版 IV - 2	土坑(2)	199
図版 IV - 3	土坑(3)	200
図版 IV - 4	土坑(4)	201
図版 IV - 5	土坑(5)	202
図版 IV - 6	土坑(6)	203
図版 IV - 7	土坑(7)	204
図版 IV - 8	土坑(8)とその土器(1)	205
図版 IV - 9	土坑の土器(2)	206
図版 IV - 10	土坑の土器(3)	207
図版 IV - 11	土坑の土器(4)	208
図版 IV - 12	土坑の石器	209
図版 IV - 13	焼土(1)	210
図版 IV - 14	焼土(2)	211
図版 IV - 15	焼土(3)	212
図版 IV - 16	焼土(4)	213
図版 IV - 17	焼土(5)	214
図版 IV - 18	焼土(6)	215
図版 IV - 19	焼土(7)	216
図版 IV - 20	焼土の土器(1)	217
図版 IV - 21	焼土の土器(2)	218
図版 IV - 22	焼土の土器(3)	219
図版 IV - 23	焼土の土器(4)	220
図版 IV - 24	焼土の石器	221
図版 IV - 25	集石(1)	222
図版 IV - 26	集石(2)	223
図版 IV - 27	集石の遺物(1)	224
図版 IV - 28	集石の遺物(2)	225
図版 IV - 29	集石の遺物(3)	226
図版 IV - 30	集石の遺物(4)	227
図版 IV - 31	集石の遺物(5)	228
図版 IV - 32	フレイク集中(1)	229

図版 IV - 33	フレイク集中(2)	230
図版 IV - 34	フレイク集中の遺物	231
図版 IV - 35	遺物集中 1	232
図版 IV - 36	遺物集中 1 の土器(1)	233
図版 IV - 37	遺物集中 1 の土器(2)	234
図版 IV - 38	遺物集中 1 の土器(3)	235
図版 IV - 39	遺物集中 1 の石器	236

V 包含層出土の遺物

図版 V - 1	調査前状況	237
図版 V - 2	調査開始状況	238
図版 V - 3	調査風景(1)	239
図版 V - 4	調査風景(2)	240
図版 V - 5	調査風景(3)	241
図版 V - 6	調査風景(4)	242
図版 V - 7	調査風景(5)	243
図版 V - 8	遺物出土状況(1)	244
図版 V - 9	遺物出土状況(2)	245
図版 V - 10	遺物出土状況(3)	246
図版 V - 11	遺物出土状況(4)	247
図版 V - 12	遺物出土状況(5)	248
図版 V - 13	調査完了状況	249
図版 V - 14	埋め戻し作業	250
図版 V - 15	包含層の土器(1)	251
図版 V - 16	包含層の土器(2)	252
図版 V - 17	包含層の土器(3)	253
図版 V - 18	包含層の土器(4)	254
図版 V - 19	包含層の土器(5)	255
図版 V - 20	包含層の土器(6)	256
図版 V - 21	包含層の土器(7)	257
図版 V - 22	包含層の土器(8)	258
図版 V - 23	包含層の土器(9)	259
図版 V - 24	包含層の土器(10)	260
図版 V - 25	包含層の土器(11)	261
図版 V - 26	包含層の土器(12)	262
図版 V - 27	包含層の土器(13)	263
図版 V - 28	包含層の土器(14)	264
図版 V - 29	包含層の石器(1)	265
図版 V - 30	包含層の石器(2)	266
図版 V - 31	包含層の石器(3)・石製品	267
図版 V - 32	包含層の石器(4)	268

VI III層の調査

図版 VI - 1	基本土層	269
図版 VI - 2	調査風景(1)	270
図版 VI - 3	調査風景(2)	271
図版 VI - 4	自然木出土状況(1)	272
図版 VI - 5	自然木出土状況(2)	273

調 査 要 項

事 業 名：石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査

事業委託者：北海道開発局石狩川開発建設部（1月より国土交通省北海道局石狩川開発建設部）

事業受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

遺 跡 名：対雁2遺跡（北海道教育委員会登録番号：A-02-110）

所 在 地：江別市工栄町地先（石狩川河川敷緑地）

調 査 期 間：平成12年5月8日～平成13年3月30日（発掘 5月8日～10月31日）

調 査 面 積：2,400m²

調 査 体 制

第2調査部長	鬼柳 彰
第2調査部第3調査課長	西田 茂（発掘担当者）
〃 主査	三浦正人
〃 主任	鈴木 信
〃 文化財保護主事	吉田裕吏洋（発掘担当者）
〃 文化財保護主事	酒井秀治（発掘担当者）

I 調査の概要

1 調査にいたる経緯（図 I-1～3）

石狩川の治水事業は1910年（明治43年）から本格的に始まった。

江別市域においても築堤、護岸、掘削、浚渫などの改修工事が、治水計画の改定をしながら長期的な観点のもと実施されてきた。1917年（大正6年）策定の計画において、対雁と篠津の大曲流部が直線化されることになり、篠津地区については1923年着工で1933年（昭和8年）には通水にいたった。残された対雁地区の直線化の計画は、いく度かの治水計画の改定にあたって常態に保持され具体化が検討されてきた。

直線化が対雁地区において具体化し始めたのは、1970年からであり、工業団地造成と関連するものである。地区住民の住居移転が現実のものとなり、開校90周年を経ていた対雁小学校が4番通り5丁目近くに移転したのは1972年（昭和47年）9月のことであった。以後、石狩川の堤防と道道石狩沼田線（現在では国道337号と呼ばれている）が切り替わる。古くからの計画で「堤防予定地」とあったところに土が盛られ「対雁築堤」ができていく。そして広がった河川敷の一部では、河川環境整備事業のひとつとして1975年から「高水敷整備」工事が着手され、1981年に完了した。これによって、石狩川河川敷緑地は江別市が管理、運営する運動公園として野球場、サッカー場、自由広場が整備されたのである（図 I-2）。

そのような治水事業が進展するなか、1981年8月上旬、石狩川の中流域、下流域において大洪水が発生した。これによって、あらためて石狩川本流の整備計画が改定され、護岸の嵩上げ(+2.00m)が実施されることになった。この築堤嵩上げは、堤防の安全度を高めるために「丘陵堤」として施工されるものである。「丘陵堤」の堤防構築には良質で多量の土砂を必要とするので、対雁地区の「高水敷」部分の土砂も使用されることになり、運動公園の切り下げが計画され、「中水敷」の公園として再整備されることとなった。（図 I-3）

この工事は1987年、89年、90年と順次おこなわれ「石狩川改修工事に基づく築堤盛土材の採取」が進行した。1991年12月「築堤盛土材の採取」にあたって、工事施工の立場にある石狩川開発建設部江別河川事業所から江別市教育委員会へ、埋蔵文化財包蔵地の有無の照会がおこなわれている。範囲は旧豊平川よりも上流側14万 m^2 というものである。

江別市教育委員会は、埋蔵文化財に関しては所在を確認するための調査が未実施であること、および対雁番屋跡に近く、さらに樺太アイヌ強制移住地に近接しており江別の歴史にとって重要なところであることにかんがみ、1992年4月から順次、所在確認調査を実施した。

江別市教育委員会がおこなった1992年10月21日から10月31日までの試掘調査により土器、石器等の検出があり、遺跡の存在が明らかになった。この調査は3.7万 m^2 を対象とするもので、うち約2万 m^2 が遺跡の範囲と報告され、遺跡名称は対雁2とされた。

工事計画の変更が不可能であるために発掘調査を必要とする埋蔵文化財包蔵地について、石狩川開発建設部は、その調査を1999年度、財団法人 北海道埋蔵文化財センターに委託した。北海道埋蔵文化財センターは6月から9月末までの調査計画を立案し、実施した。この調査は、遺跡の範囲確認と遺物包含状態のより詳細な把握を目的とする試掘的な発掘である。1999年度の調査結果は、2000年3月に報告書として刊行されている（『江別市 対雁2遺跡(1)』）。

以上のような経過のなかで、2000年度の発掘調査は5月から10月末まで行った。

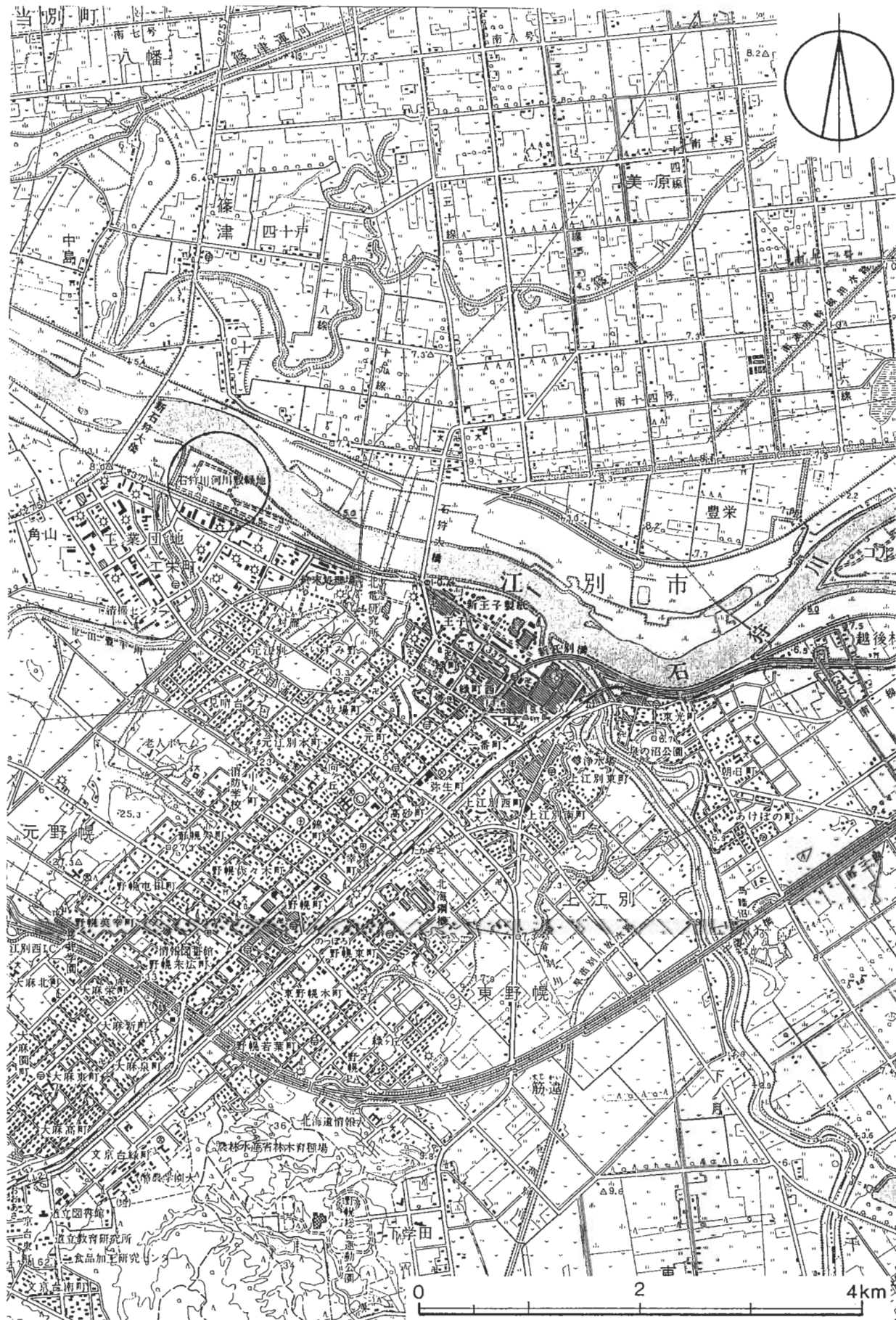


図 I-1 対雁 2 遺跡の位置

(この図は、1997年国土地理院発行の5万分の1地形図「江別」を複製し、加筆したものである。)

緑の回廊づくり（江別地区）

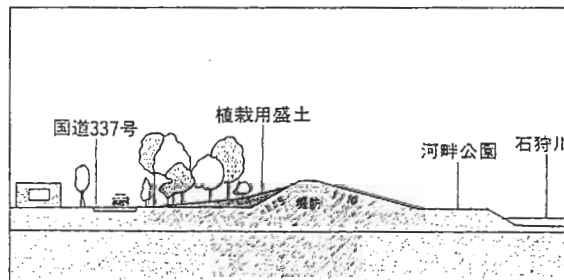


ここ江別の「緑の回廊」づくり

丘のようになだらかでゆったりとした堤防をつくり、樹木を植えて緑の空間をつくります。樹木は成長するにつれて憩いの空間をつくりだし、防風林の役目もします。また、いざという時は水防の資材にもなります。

場 所

新石狩大橋と石狩大橋の間、石狩川の左岸に広がる「石狩川対雁築堤」。この、約2,300mの長さで、約20mの幅の空間に樹木を植えます。



□施設整備平面図

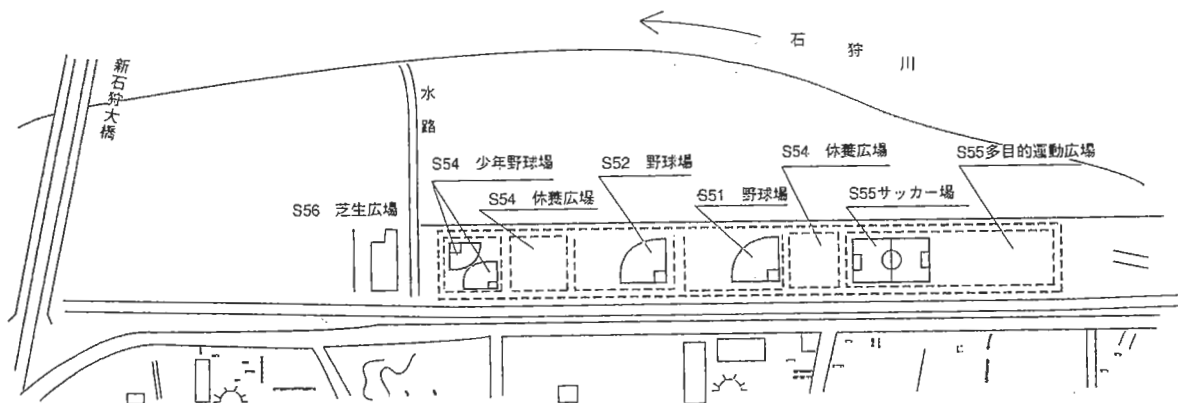


図 I - 2 河川敷の整備状況（『江別河川事業所史』より）



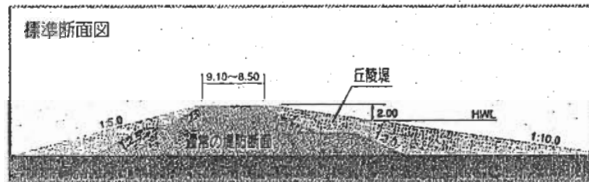
丘陵堤は斜面をゆるやかに
することにより、断面を広くし、
安全性と親水性を高めた堤防です。

丘陵堤

丘陵堤でやすらぎとおいを

石狩川下流域は、泥炭が広く分布した軟弱地盤となっています。そのため、通常の堤防より斜面のゆるやかな丘陵堤をつくることで、堤防の安全性を高めるとともに、水辺に近づきやすい空間を創造しています。

■丘陵堤の断面図



丘陵堤の効果

堤防の安全性の向上

堤防の断面を大きくすることにより、堤防の決壊等に対する安全性が向上します。

親しみのある水辺に

高さを感じさせず見渡しがよい丘陵堤の景観は、川を利用する人々に安心感を与えてくれます。

水防活動も安全に

ゆるやかな斜面は堤防水際付近の水の流れを緩和するため、水防活動の際にも安全性を高める効果があります。

土を有効利用

浚渫や掘削などで発生した土砂は、丘陵堤をつくる際に有効に活用されています。

丘陵堤から魅力ある水辺空間を

国道337号線沿いにある石狩川対雁築堤では、丘陵堤のゆるやかな斜面を利用して植樹を行い、緑豊かな憩いの空間をつくっています。

(緑の回廊づくり)



■緑の回廊づくりイメージ図

図 I - 3 丘陵堤 (江別河川事務所のパンフレット)

2 調査の概要

前年の試掘調査をもとにした、遺跡についての予測的な評価は以下のようなものであった。

石狩川の増水時堆積物のなかに焼土、土器、石器等が検出されており、遺物、遺構の残存状況はきわめて良好である。縄文時代晩期～続縄文時代初頭の大集落(住居、墓地、祭祀の場、捨て場、通路、広場などの空間)の可能性が高い。

以上のように推定される対雁2遺跡の調査は、広大な範囲を掘り尽くすものになるので、以後の調査においても記録化が十分になされるような方法を検討し、実行した。さらに試掘調査の報告では、調査範囲の全体にわたって崩壊しやすい土質であることも述べているので、作業進行上の安全確保には、人力作業部分では直立壁の高さを1m以下に保つなど、細心の注意を払った。また、考古学的な尺度でいえば、短い期間に形成された多くの焼土や炭化物が重複して検出される場所では、遺構相互の上下関係(時間の先後関係)を明示できる資料化につとめた。

今年度の調査範囲は、東側半分は遺構、遺物ともに密度は薄く、西側になるにつれて遺構、遺物の密度が濃くなると予測されており、ほぼそれに近い結果であった。遺物が検出されるのは、試掘調査では地表下2mほどまでが明らかになっていたが、今回もほぼそれに近い結果である。

前回の調査で、その出土数量の多さの故に作業を中断した部分を調査した。土器集中1、土器集中3と呼称しているところである。

試掘調査で得られていたのは縄文時代晩期の資料である。これよりも古い時期の資料の有無を明らかにする調査も行った。このことについては、今回の調査範囲では「無」という結果である。

3 本書の概要(図I-4)

遺構は土坑17、焼土105、集石7、剥片集中7、遺物集中1である。遺構のほとんどは調査範囲の西側部分で検出されている。いずれも時期は縄文時代晩期末の頃と推定している。

遺物は土器、石器等約33000点である。遺物の分布は遺構の濃淡に重なるように西側が多くなっている。土器は縄文時代晩期末葉のもので、器形は深鉢、鉢、浅鉢、皿、壺、注口などがある。

定形石器は石鏃、石錐、スクレイパー、石斧、たたき石、台石、砥石である。その他、頁岩剥片がまとまって検出されたものがある。接合作業を行った結果、長さ30cmほどの垂角礫1個体であることがわかった。土製品は焼成粘土塊である。蛇紋岩製の勾玉も出土している。

自然科学的分析では年代測定と木質遺物の樹種同定とがある。年代測定値はクルミ殻、樹木片などを用いての¹⁴C年代測定である(165ページ)。前年度の測定値との比較、および遺跡全域での資料採取の概略をみるために、平面での位置、略断面図へのはめ込み、年代数値を重ねたのが図I-4である。II層と呼んでいる縄文時代晩期の生活面の年代値は2500付近に集中し、III層として区分している標高4mほどの樹木などは2900ほどに集中している。これは400年ほどの時間で砂層の堆積が4mほど進んだということである。

樹種同定は顕微鏡観察でおこなった。縄文時代晩期の遺物包含層よりも深い部分、標高4mほどのものでは、大部分がヤナギである。これらの資料は遺跡の立地する地形がどのように形成されたのかという観点からも重要なものである。前回の調査同様噴砂(砂脈)は、発掘した調査区のほぼ全域にわたって見られた。走行は略南北であり、標高3mよりも深いところから発しているようである。

発掘調査に並行して行った周辺探索で、現石狩川の汀線付近で縄文土器などを採集できたので、これらも紹介してある(29ページ)。

写真図版では整理作業の終了した遺物のみならず、遺物の出土状況を詳細に示した。さらに土層の堆積状況を記録化する意味もこめて作業状況も多く掲載してある。(西田)

3 本書の概要

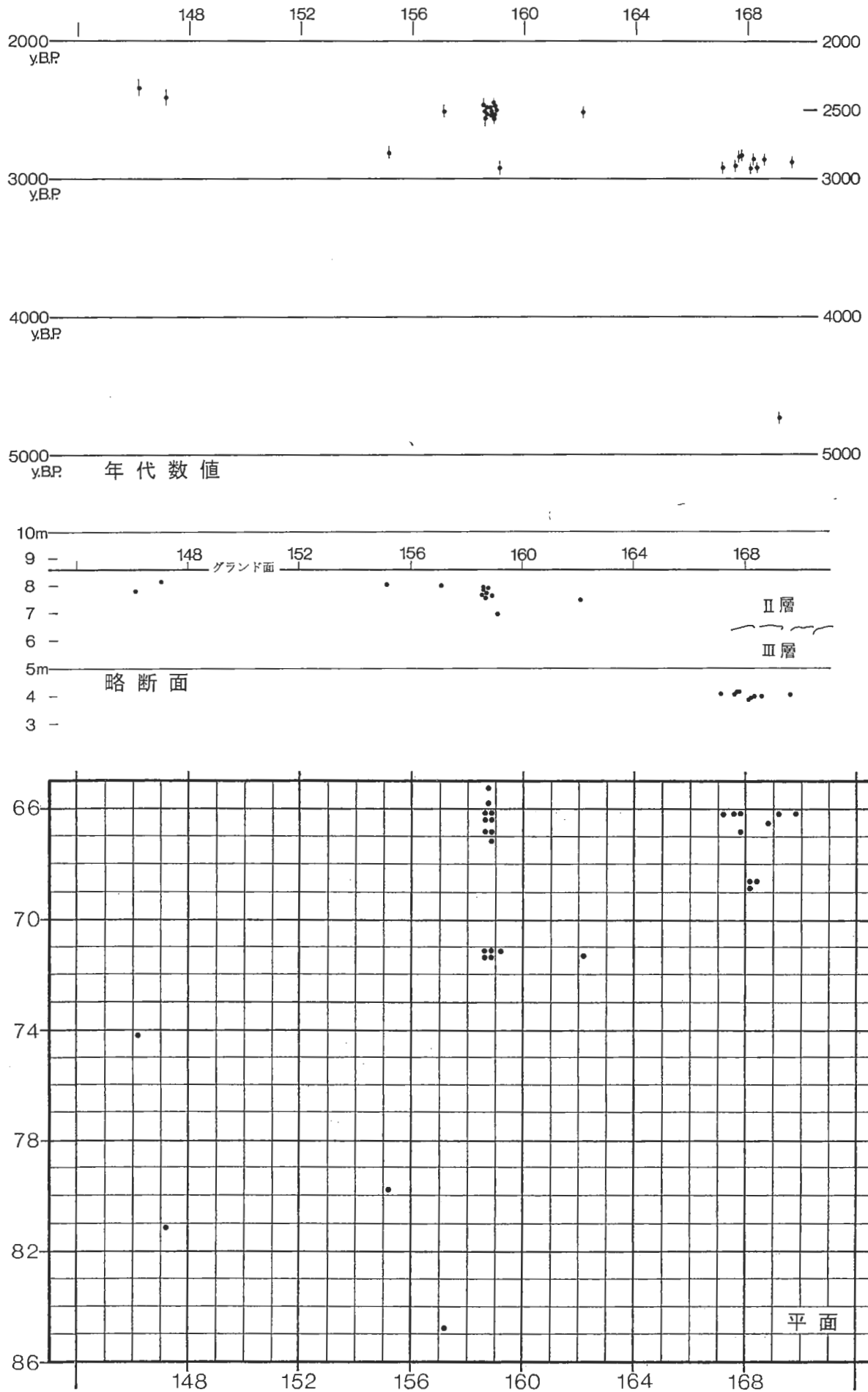


図 I - 4 年代測定値の概略 (採取位置など)

4 西側の再試掘調査について（図 I-5～8）

対雁2遺跡の範囲確認調査は、1992年10月に江別市教育委員会により行われている。この時は、河川敷約3.7万㎡を対象とし、現状の2万㎡の調査範囲を確定した。河川敷とされていた区域での未登録の縄文時代遺跡を確認できたことは、大きな成果であった。

しかるに1999年当センターにおける一年目の試掘的調査の最中、バックホウで表土を剥いだ部分のトレンチ調査において、調査範囲西側ライン外約5mの地点(81-134区)のⅡ-2層から縄文時代晩期の土器片29点と石鏃1点が確認された。また、やはり範囲外西の73-134区の掘削表土(Ⅰ層)から土器片34点、74-134区から2点の出土がみられ、さらに範囲内西辺付近の78-136区Ⅱ-1層から続縄文時代初頭の土器片60点が集中して出土した。調査中での遺跡立地等の検討から、この遺跡は石狩川とともに旧豊平川の河口と密接な関係にあることがわかり始めていた。そのため、これらの遺物出土により、調査範囲の西側＝旧豊平川側への、遺跡範囲の拡大の可能性が調査員間で話し合われた。

調査員間の内部検討では、以下のような結論を得た。すなわち、1992年当時の試掘は、20mスパンの土木重機掘削土の遺物確認(図 I-5)であったため出土遺物がなく、西側部分が遺跡として取り込めなかったものと推定される。したがって、遺跡の範囲を確定するためには、試掘穴設定の密度を上げるか、連続的な層を観察し遺物検出を試みる試掘方法が必要とされる。以上のような見解を、北海道教育庁生涯学習部文化課へ報告した。

北海道教育委員会と協議の結果、2000年度内の調査予算で10月に再試掘を実施する運びとなった。調査方法は、日程や予算を考慮してトレンチ方式とし、バックホウで71ラインと81ラインに幅2.5mの2本のトレンチを入れ、さらに20mごとに2m以上の深掘りかけることとした。10月4～6日の3日間の予定で、事前に草刈やトレンチ設定をすませた。当日は、文化課の工藤研治主任の指導のもとに、81ライン東側(81-132区)から西側にトレンチ掘削し、掘削土を精査し人力で遺物確認をしていった。

掘削土はできる限り層ごとに分け置いた。2本のトレンチをあけ終えた後、20mごとの深掘りに入った。またその都度、セクション図を作成した。3日間でⅡ層のすべての土砂を精査した結果、図 I-5・6 に示したごとく、71ラインで土器1点・炭化物12カ所のほか礫・軽石など、81ラインで土器1個体と5片・石鏃1点・たたき石1点・砥石1点・obs. フレイク1点・炭化物9カ所・焼土1カ所のほか軽石などを検出した。中でも注目されるのは図 I-8 の復元個体で、81-117d・81-118a区から出土した続縄文時代、後北C₂・D式の注口土器である。この1個体土器の存在や土器片・石器・炭化物等の点在は、遺跡範囲拡張を示す十分な証左となる。調査後、トレンチはバックホウとブルドーザーで埋め戻し旧状に帰した。崩壊しやすい土質なので、今回の試掘調査でも深く掘り下げた部分は少ない。下層には続縄文時代よりも古い時期の遺構・遺物があると推定できる。

この結果に基づき文化課は、開発局石狩川開発建設部に対し、対雁2遺跡の調査については西側110ラインまでの概算で12,500㎡を調査範囲に取り込み、「要発掘」と回答した。これを受け、2001年1月30日付で国土交通省北海道局石狩川開発建設部から、再試掘地区は工事による現状変更が避けられないことから発掘区を拡大変更して調査してほしい旨の文書が、文化課に到着したと連絡を受けている。したがって再試掘部分は、来年度以降の調査に取り込まれることになろう。今後、工事計画とリンクした発掘調査計画の立案が必要となってくる。

(三浦)

4 西側の再試掘調査について

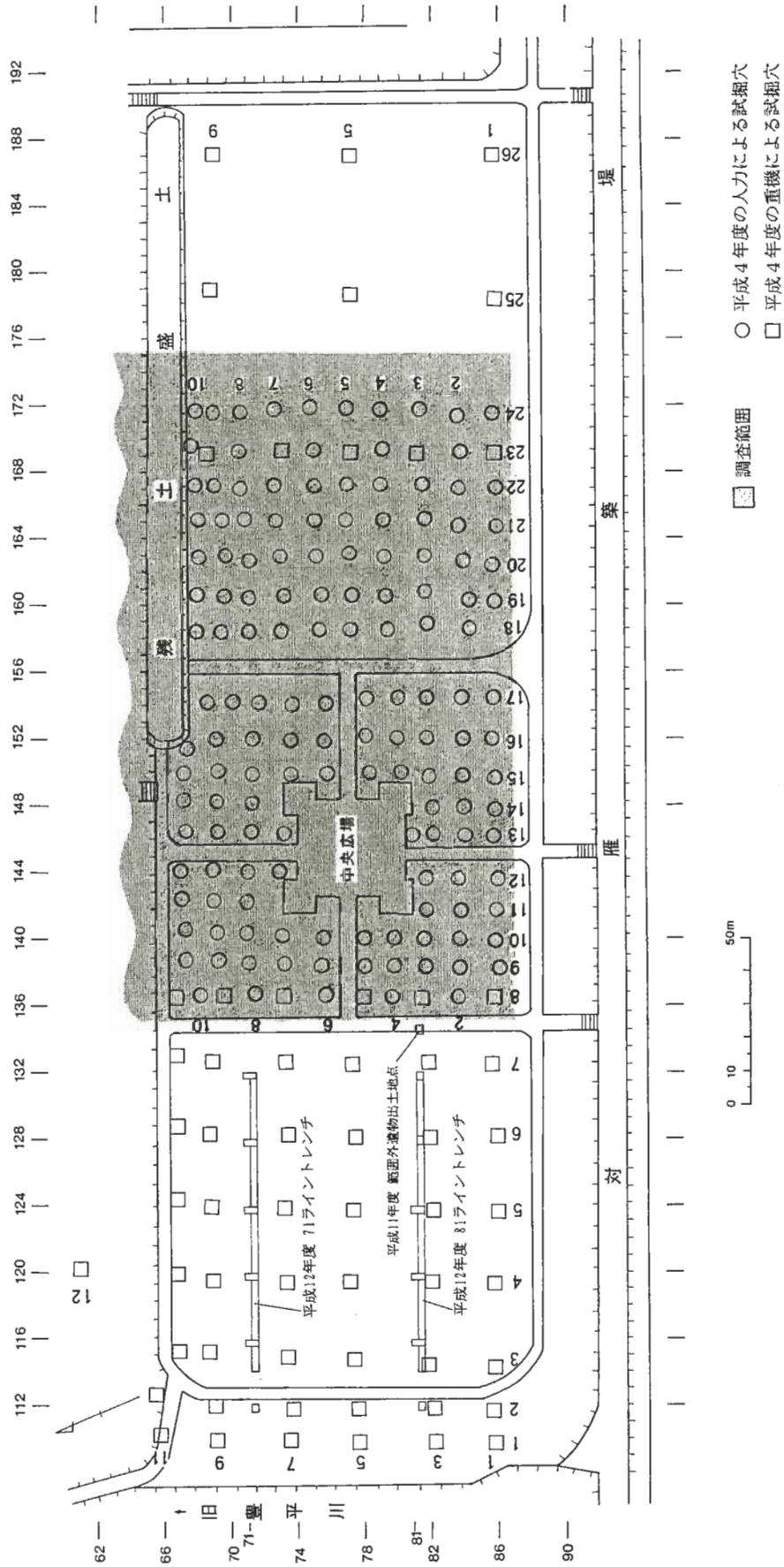


図 I - 5 範囲確認調査試掘穴と平成12年度のトレンチ位置

4 西側の再試掘調査について

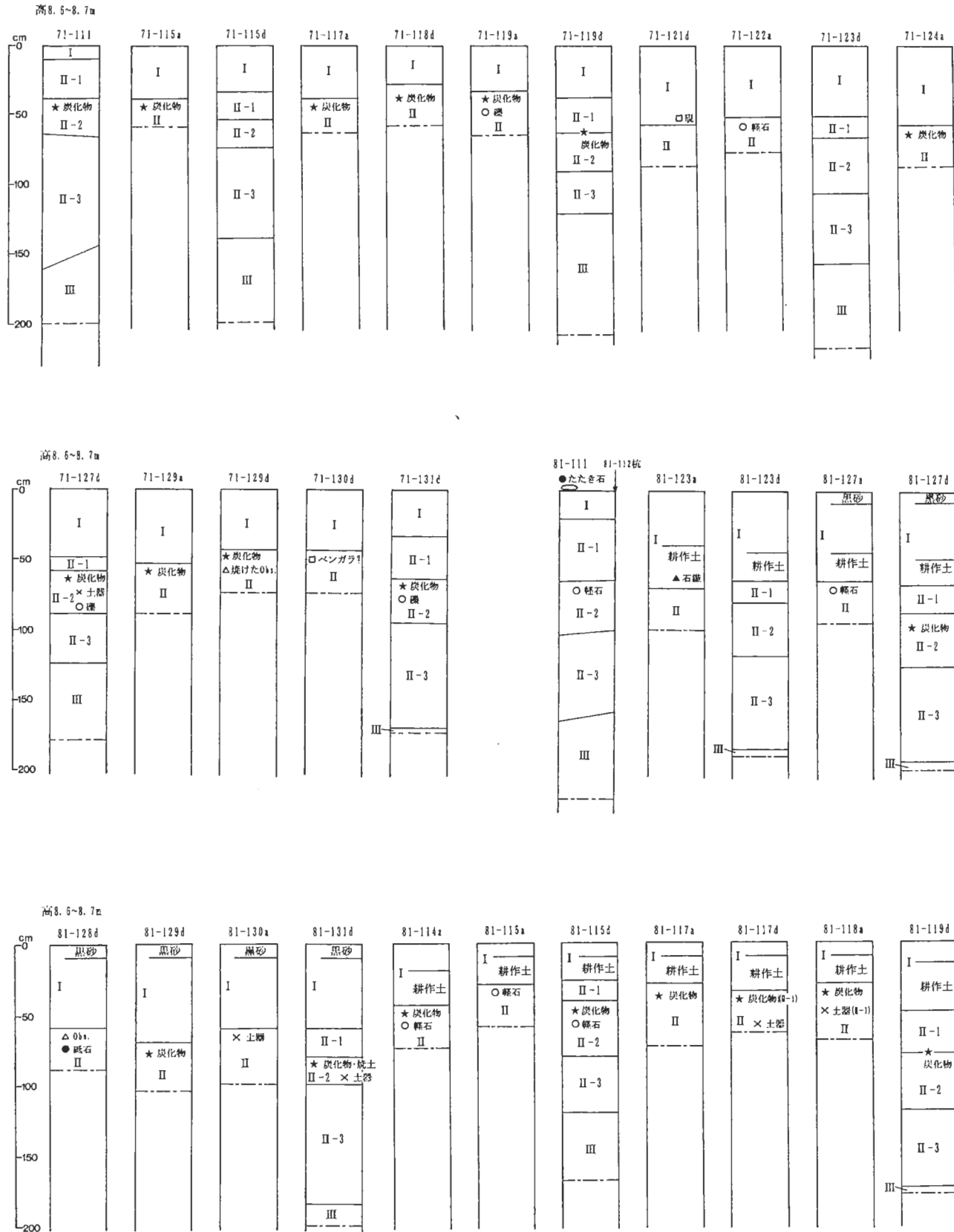


図 I - 7 土層柱状図

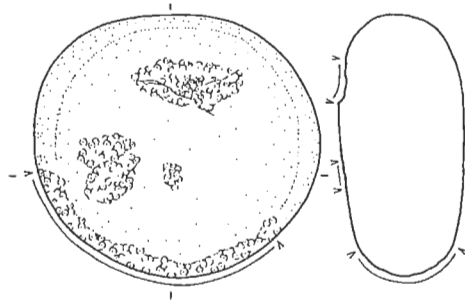
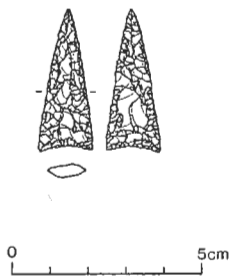
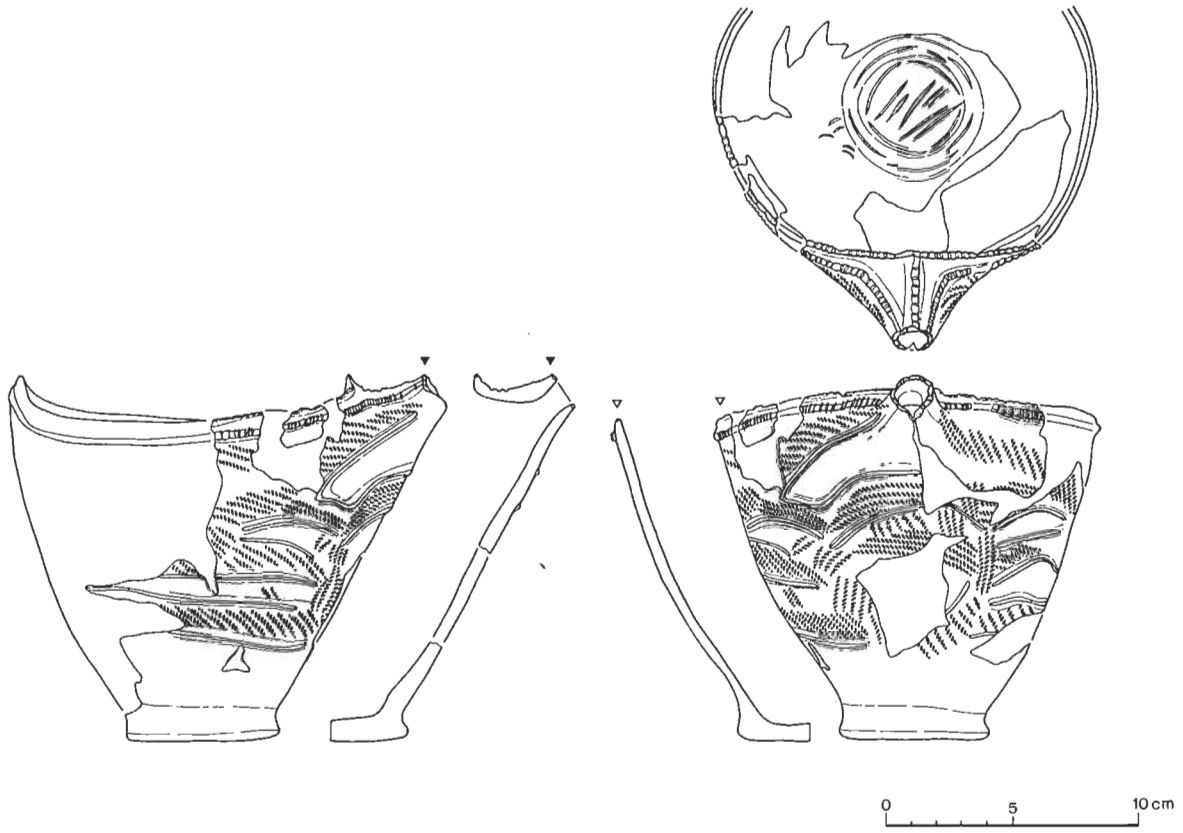


図 I - 8 試掘調査の遺物

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

(1) 位置 (口絵1、図I-1)

対雁2遺跡は、JR江別駅の北西約3.5kmに位置している。石狩川の南岸であり、旧豊平川との合流点よりも上流側である。標高は8～9mであり、現在は堤防によって区切られて、石狩川の河川敷地になっている。ここらでの石狩川の水面高は、低水期で0.3mほどである。

江別の市街地とは、終末処理場のある低地部分をもって分離された場所である。江別の市街地から北に石狩川を越える橋は石狩大橋であり、さらにここから下流3kmにあるのは新石狩大橋である。対雁2遺跡は、この新石狩大橋の上流1kmほどにある。

5万分の1地形図から割り出した遺跡の位置は、調査区の東南部が東経141度31分21秒、北緯43度7分34秒である。

(2) 地形 (口絵1、図I-1、図II-1-1・2・3、図III-1-1)

対雁2遺跡の調査予定地は図II-1-1、図III-1-1に示した。東西の長さ200m、南北の幅100mの範囲である。遺跡の広がりには南北方向および西側にのびることは確実であるが、遺物の分布状態から判断すると、東側はこの線引きが妥当であろう。江別市の運動公園造成によって、均平化がすすみ、ほぼ平らな地形になっている。

図II-1-1は空中写真をもとに1999年8月に作成した地形図である。運動公園造成以前の自然地形を理解するために空中写真は、1966年、1971年撮影のものを使用している。これを見ると調査予定範囲は、石狩川から400mほど隔たった、標高9mほどの高い場所であることがわかる。この標高9mを結んでみると、南北に長い島状のものが浮かんでくる(図II-1-2)。

図II-1-3は、50年程前の2.5万分の1地形図である。石狩川は対雁の下流からは直線化されており、旧豊平川が合流する辺りの水深は9mである。緩やかな流れは汽船の航路であることもわかる。対雁の学校から東方へ、江別のほうに進んでいくと二つの道が合流する。この合流点は村人にとっては、重要な指標の一つであり、「分かれ股」と呼ばれていた。この地点での土地の高さは、6.6mとなっている。対雁での最高地点は、この図では「対雁橋」の東縁にあり、9.2mである。

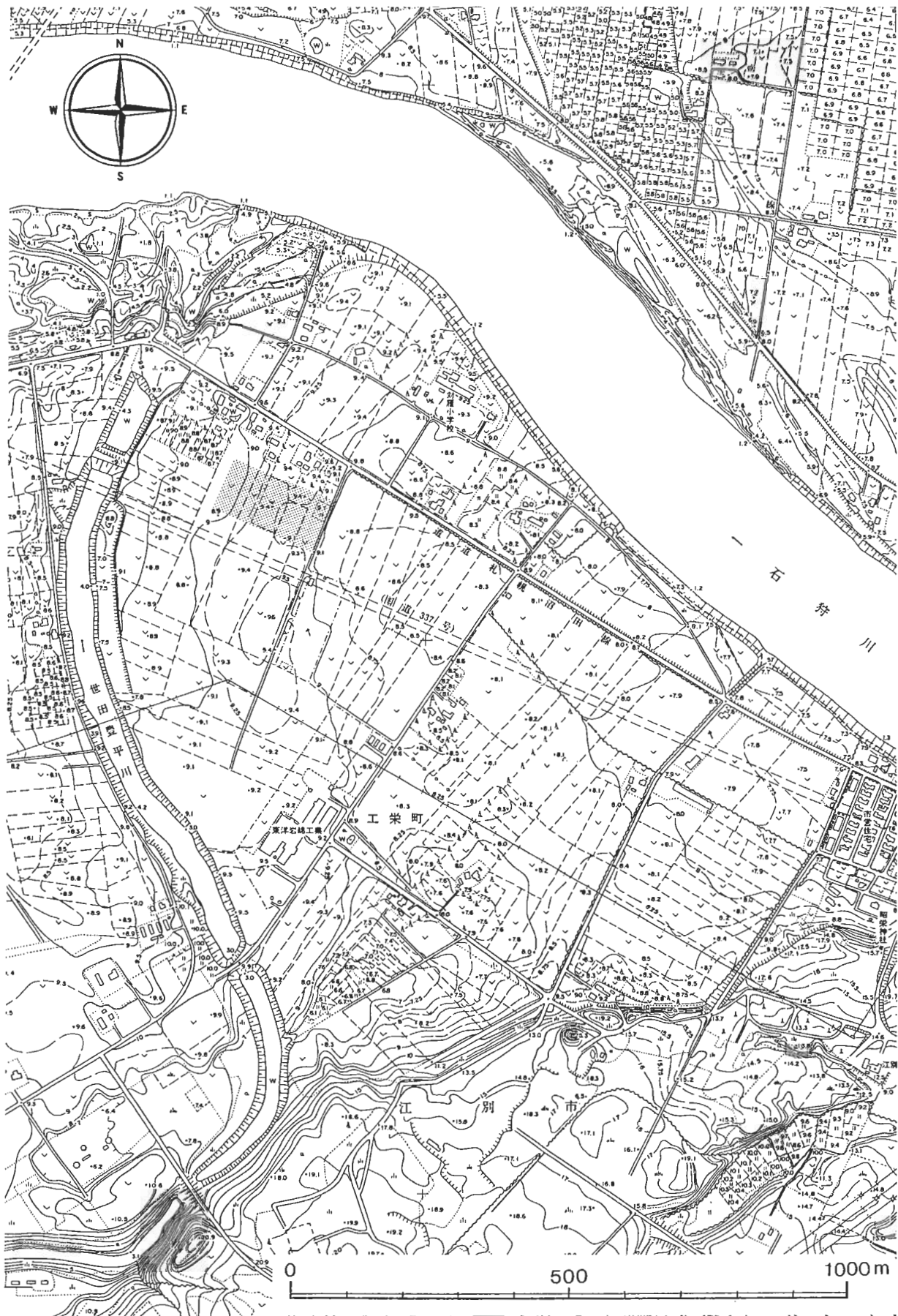
北海道の中央部を北から南に流れる石狩川は、江別市域にいたって大きく西北へ曲がり、対雁2遺跡から北西に約33km流れて石狩市で日本海に注いでいる。石狩川は河口から上流100kmほどは低平な地形の中を流れており、河口から70kmであっても水面は標高10mほどでしかない。したがって、この下流域はきわめて低平な地形であり、流路に沿う周辺地形を区分すると、対雁2遺跡が立地するところはひとつの高まりとしてとらえることができる。

(3) 周辺の環境 (図I-1、図II-1-1・2・3)

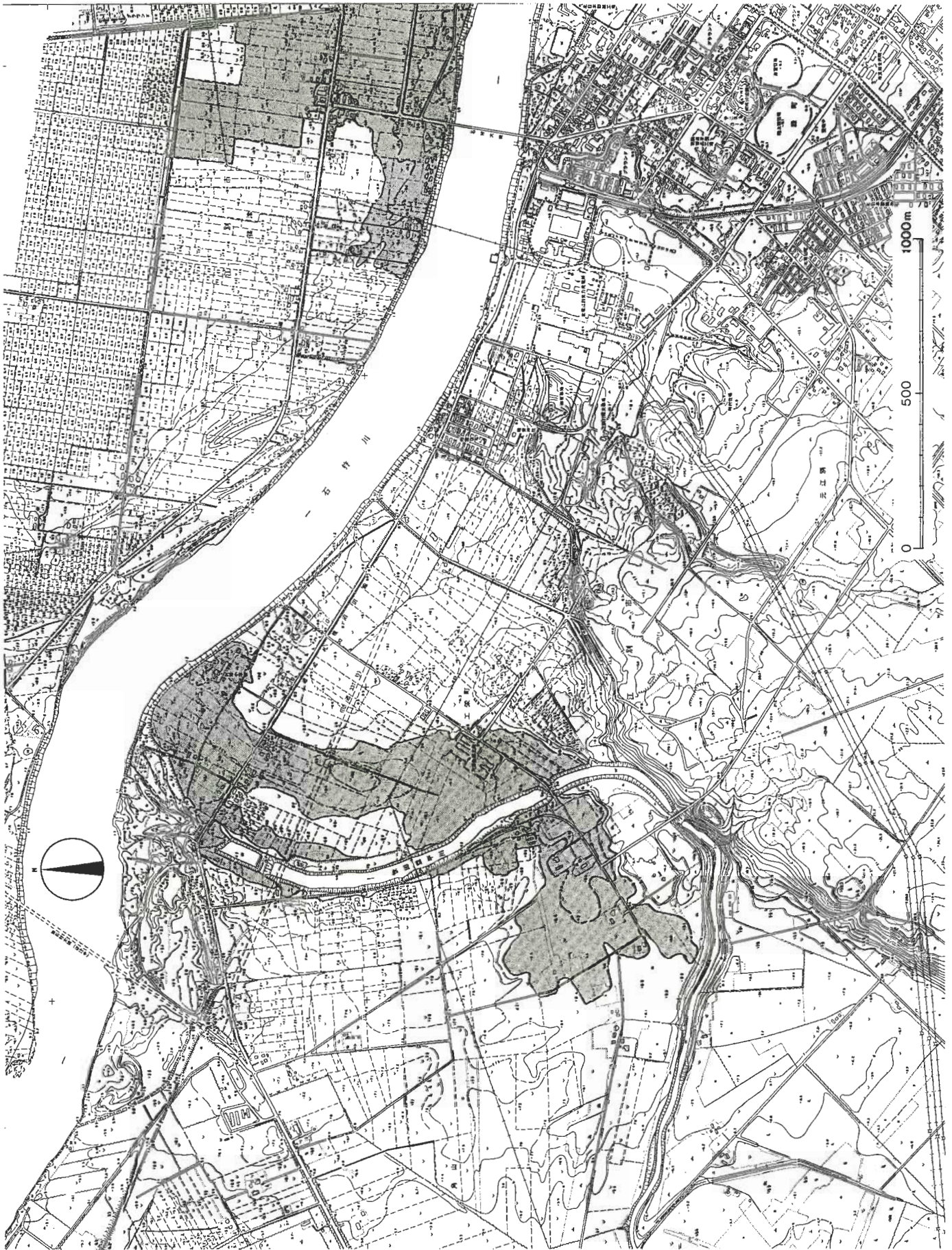
昨年の試掘調査着手前は、1976年以後に造成、整備された河川敷地の運動公園であった。したがって地形は平坦で、植生は芝生に代表されるような管理されたものであった。そして遺跡調査が始まり芝生の管理がなされなくなって一年を経過した2000年夏には、荒地雑草といわれるものが多く見られるようになった。7月下旬までに目に付いたものとしては、以下のような草本である。

オオバコ、ヘラオオバコ、コウリントンポポ、カワラナデシコ、タンポポモドキ、エゾノギシギシ、ムラサキツメクサ、シロツメクサ、ヒメジョオン、ヨモギ、コメガヤ、エゾノキツネアザミ、セイタカアワダチソウ、ネジバナ、クサフジ、オオツルイタドリ、オオイタドリ、アレチマツヨイグサ、ツユクサ、オニノゲシ、ノボロギク、キジムシロ。

1 位置と環境



図Ⅱ-1-1 調査区の位置 (アミ目部分)



図Ⅱ-1-2 対雁2遺跡周辺の地形(1) (アミ目部分は標高9m以上)



図Ⅱ-1-3 対雁2遺跡周辺の地形(2)

(この図は、1952年(昭和27年)地理調査所発行の2.5万分の1地形図「江別」を複製したものである。)

堤防よりも南側は、1970年から本格的に稼動した工業団地である。その西側の流路は、旧豊平川である。工業団地は、旧豊平川の西岸にも広がっている。さらにその西側は農耕地であり畑、牧草、放牧地である。江別の市街地は野幌丘陵の上であり、南西方向に野幌、大麻へと拡大発展している。

石狩川の北岸には、農耕地が広がっている。明治時代に設定された殖民区画である号線道路に沿って民家が点在している。低平な地形であるが相対的に高いところに人家、畑、牧草、放牧地がある。整備された水路にもかかわらず、水田は畑作物のところもある。

新石狩大橋の北には、かつての石狩川の本流蛇行の跡である河川地形がよく残っている。

以下、自然地形がよく残る1966年の空中写真から作成した図Ⅱ-1-1・2で説明する。

対雁2遺跡の調査予定範囲は、図示したところ幅100m、長さ200mである。遺跡の北東250mに対雁小学校がある。小学校は標高9mの高い場所に立地し、北辺は石狩川の本流に接している。1877年(明治10年)の対雁教育所設立から1972年の対雁小学校移転にいたるまで、対雁の学校はこの位置にあった。このことは明治以降の地図によく表現されている(図Ⅱ-1-3)。

小学校の南側に緩い弧を描いて走る道路は、1876年(明治9年)の「旧樺太アイヌ」移住に伴う地割に由来するものである。さらにその南側150mに直線で延びるのは、1876年に建設された、札幌から対雁、江別を経て幌内太へ達する道路の一部である。最後には道道札幌沼田線と呼ばれ、バス路線ともなったこの道路は、河川敷地となって廃止されるまでは、江別における主要な道路のひとつであった。周囲の土地区画は、これらの道路から直角に延びるものであり、主に畑として利用されている。

この図において破線で直線に延びて(国道337号)と表示してあるのが、現在堤防に沿って走る国道337号である。図の左上で、石狩川に延びる破線の直線は、建設中の新石狩大橋である。

石狩川の南岸は断崖である。対雁小学校のあたりから石狩川を見ると、足下には8~9mの崖が続いていたことになる。旧豊平川(この図では世田豊平川)が石狩川に合流する付近は、三角州に類似する地形であり、融雪期などの増水時には水没するところである。湿地あるいは砂浜状の荒地である。この合流点の東端に川縁まで直線で延びた道は、かつて渡船場へ連絡していたものである。渡船場跡の周囲の家屋、畑をみると、定期的な増水は5m近くまであったことになる。

(4) 洪水と治水事業

自然河川としての石狩川は、季節の変化のなかで定期的に増水期、低水期を繰り返している。おもな増水期は春の融雪と夏、秋の多雨である。春の融雪増水は4月中旬から5月中旬までの期間に生じ、降雨による相乗効果が著しい。夏の多雨増水は7月中旬から8月上旬の梅雨前線が関係するものである。秋の場合は8月下旬から10月上旬までの台風や低気圧がもたらす多雨である。

融雪増水は継続時間の長さ、多雨増水は地域と期間の限定に特色がある。いずれにしても増水は、氾濫し洪水になりがちである。石狩川流域の氾濫の規模、家屋、農作物に与える被害などについては、明治時代以降、関係する行政当局により、詳細な記録が積み重ねられている。

明治時代以降の農業社会の進展、農耕地の拡大とりわけ水田稲作地の増加は低平地の利用のため、氾濫がもたらす被害を増大させることになった。そこで洪水被害の軽減をめざして石狩川に関しては治水事業が行われることになる。事業計画の策定に先立って、まず流路、流水の実態調査が行われる。初期の調査記録としては、1872年(明治5年)の高畑利宣の『石狩川実地検測図』、1873年と翌1874年におこなわれた「ワスソンとデイ」の測量調査が知られている。

石狩川についての理解を深めるための調査は1879年(明治12年)に始まる水量の調査であろう。これは1901年(明治42年)に岡崎文吉が『石狩川治水計画調査報文』として取りまとめ、「対雁水測所」における水位の変化が詳細に記録されている。

2 歴史的環境

地名「ツイシカリ」は、近世にあつては、東蝦夷地の勇払から西蝦夷地の石狩までの内陸横断の経路にあつており、旅行者の記録するところとなり、多くの文書が残っている。当時、東蝦夷地と西蝦夷地とを連絡するのは水路なので、ツイシカリは石狩川を上ってくると最初の停泊地、千歳川を下ってくると最後の停泊地である。対雁2遺跡が立地する付近が「ツイシカリ」と呼ばれるようになるのは19世紀中頃からであり、それ以前は石狩川の北岸の地が「ツイシカリ」と称されていたようである。

対雁に陸路が確保されたのは、1858年(安政5年)の石狩との間の道路開削にはじまる。そして1876年(明治9年)に札幌との陸路が開かれ、同時に内陸部への通過点の一つとなった。開拓使の内陸部開発政策による、石狩川流域における陸路の開通、確保は、やがて野幌丘陵を横切り江別地区を通るものとなってゆく。明治政府の鉄道を含めた陸路の整備は、対雁地区にとって主要交通路からの逸脱離反を意味していた。

前回の報告書では18世紀、19世紀の旅行記などの古文書、古地図、近代の地図などをもとに歴史的な環境、土地利用の特色などを確かめてみた。ここではさらに19世紀後半、20世紀前半のいくつかの資料を掲げて、対雁地区への理解を深めておきたい。

(1) 対雁(ツイシカリ)の語義

対雁(ツイシカリ)という地名はアイヌ語に由来するものである。その語義についてはいくつかの説があるが、ここでは永田方正の「沼のある曲がりくねった川」を引用するにとどめる。『北海道蝦夷語地名解』(初版明治24年;1891年)の復刻版(1984年)は、以下のように書いてある。

トイシカラ (To ishikara) 回流沼「ト」ハ沼ナリ「イシカラ」ハ回流ナリ此沼ハ「ヌプロベツ」ト「ハシウシュベツ」ノ間ニアリテ清水湧出回流セリ故ニ名ク文政年間上対雁ト称シ石狩十三場所ノ内トス明治四年対雁村ヲ置ク
ト イシカラ メム (To ishikara mem) 白石村ニアリ古ヘ対雁川ノ源泉ナリシガ札幌川ト合流セシ以来漸次ニ埋没シ今僅ニ小池ヲ存ス
ト イシカラ プト (To ishikara putu) 渦沼口 対雁川口ヲ云フ

石狩(イシカリ)国 原名「イシカラベツ」(Ishikar'a pet)回流川ノ意石狩川口ノ邊川脈最屈曲回流シテ川上塞ルガ如シ故ニ名ク初ヨリ全川ニ名ケタルニアラズ対雁ノ原名ヲ「トーイシカラ (To ishikara)」ト云フ回流沼ノ義ナルガ如シト此ハ「パニウングル(中川ノ人)」ノ説ナリ

「パニウングル(上川人)」云フ「イシュ、カラ ベツ」(Ishu-kara-pet)ナリ、「イシュ」ハ美ク「カラ」ハ作ル、美ク作りタル川ノ意太古「コタン、カラ、カムイ」(国作神クニツクリノカミ)拵指ニテ大地ヲ画シ此川ヲ作り給ヒタリ故ニ名クト

和人某云「イシカラベツ」ハ「鳥尾ニテ箭羽ヲ作ル處」ノ意ナリト老夷笑テ曰ク此説ハ非ナリ石狩アイヌ鳥尾ヲ「オイシュ」(Oish)ト称シ「イシ」(Ishi)ト呼バズ 【後略】

(2) 石狩川の諸記録(図2-2-1~5)

① 『北海道地誌要領』(北海道開拓使、緒言は明治7年12月)石狩国大川の項

これは開拓使が作成した地誌である。当時北海道全域を管轄していた役所でも、石狩川に関してこれくらいしか記述できなかったのである。

大川 石狩川 上川郡石狩岳大瀑布ニ出テ諸流ヲ合シ石狩ニ至リ海ニ入ル長サ百六十七里幅未詳

② ここに示す表、グラフは、『石狩川治水計画調査報文』1909年(明治42、岡崎 文吉)をもとにしたものである。表は、「明治37年7月洪水時 篠津、生振間 放水路開通したるものと假想した

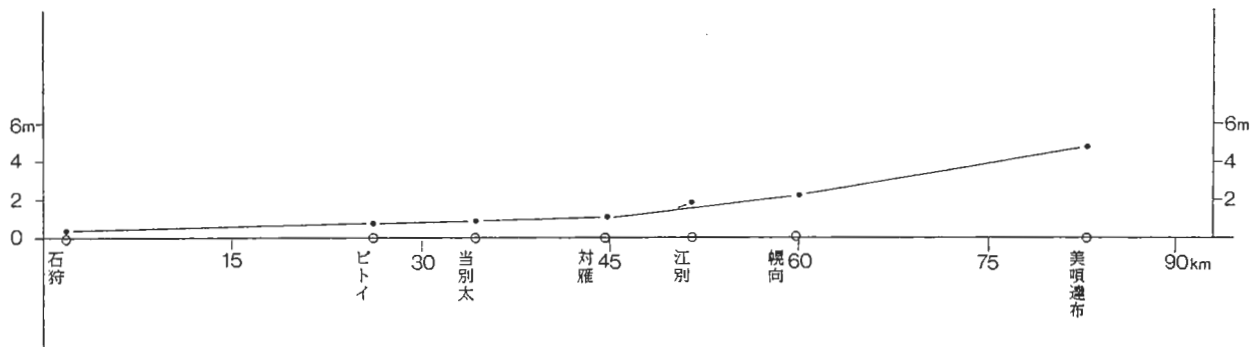
「水位推定図表」のなかにある数表の一部であり、西田による作り直しである。

表Ⅱ-2-1 現在流路に於ける観測水位

水測所 (地名)	石狩	ピトイ	当別太	対雁	江別	幌向	幌達布 〔臨時〕	美唄達布
常水位 (尺)	1.84	2.46	2.77	3.69	6.03	7.49	ナシ	15.91
濬筋里程 (里、町、間)	0.16.32	6.23.4	8.25.16	11.14.46	13.4.21	15.8.00	18.25.00	21.2.10

濬筋（ミラスジ：船の通行に適する底深い水路）里程というのは、河口の基準地点から川の流路をさかのぼった距離のことである。単位は里、町、間となっている。対雁の水測所は、河口から11里14町46間のところで、通常の水位は3.69尺である。明治時代後半の度量衡法では、1尺：33分の10メートル、1間：6尺、1町：60間：360尺、1里：36町：2,160間：12,960尺である。

したがって河口から対雁の水測所まで147,876尺、これをメートルに換算すると44,810.9メートルとなり、約45キロメートルであり、水位は1.1メートルほどである。グラフにも顕著なように、ゆるゆるとした流れであり、航行河川として有利であったことは述べるまでもない。



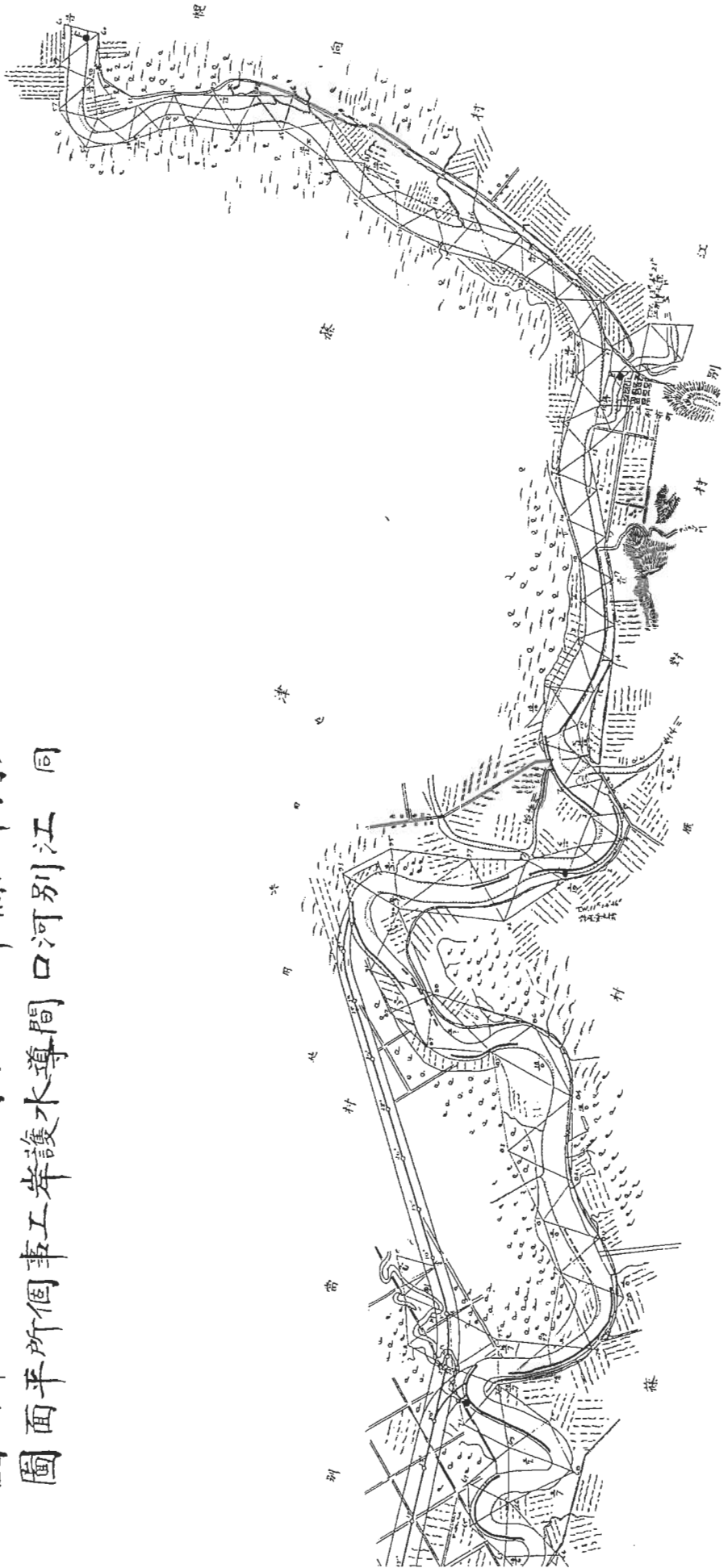
図Ⅱ-2-1 水面の高さ

図Ⅱ-2-2・3・4の河川図は、『石狩川治水計画調査報文』にある図の部分図である。原始河川としての石狩川、自然状態での対雁の様子である。これらによると対雁の水測所(量水標)は、豊平川の合流点よりも下流側約1.5kmに位置していた。対雁には2本の道路が認められる。対雁から道路を、西のほうへ川に沿って行くと石狩であり、南西のほうに向えば札幌に達する。東への道は江別市街を経て、上川地方へ通じるものである。江別市街の東縁には鉄道が敷設されている。江別の水測所(量水標)は、石狩川の本流ではなく、江別川(現千歳川)にあって、鉄道よりも下流側に位置している。

③ 図Ⅱ-2-5は『石狩川治水請願及理由書并ニ略図』のなかの「石狩川略図」である。これは『空知地方史研究』第32号(1998年6月、空知地方史研究協議会)に「石狩川治水期成会略史」として田中 實が紹介、引用している図から採った。いきさつは田中の紹介文に詳しいが、1898年(明治31年)の石狩川大水害を受けて、流域住民が石狩川の治水工事を請願した。請願の代表者名は、石狩川治水調査会会長 大塚 貢であり、明治32年6月1日付け、北海道庁長官男爵 園田 安賢殿あてである。

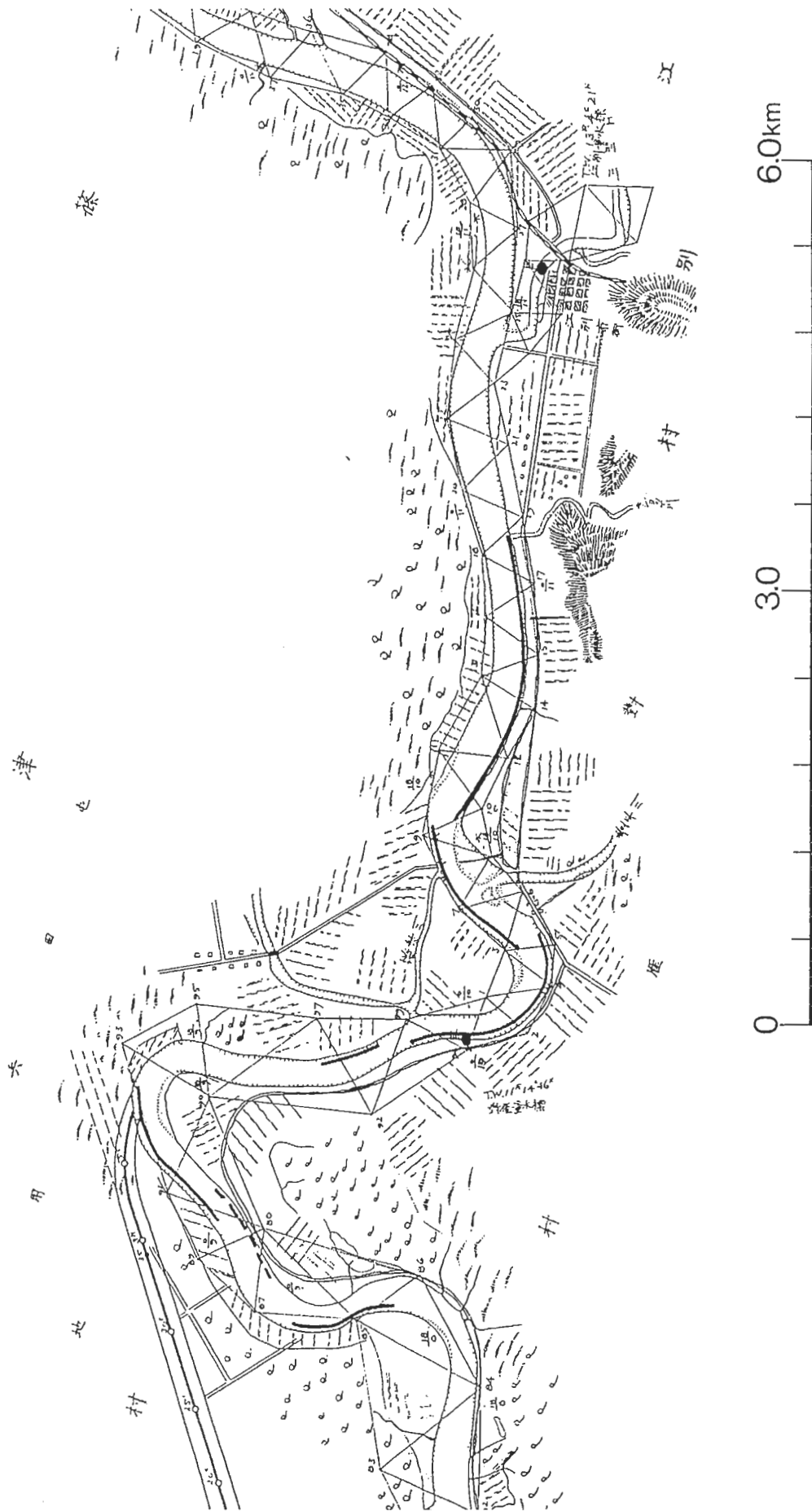
洪水防止のために急ぎ水路の開鑿が望まれるところは、「堀鑿請願ノ箇所」としてある。この「生振村」の水路に相当するものは、現在では石狩川の本流となって実現している。水害の根本的な防

石狩川篠津生間振放水線平面圖
 同河別口水導護岸工事所平面圖

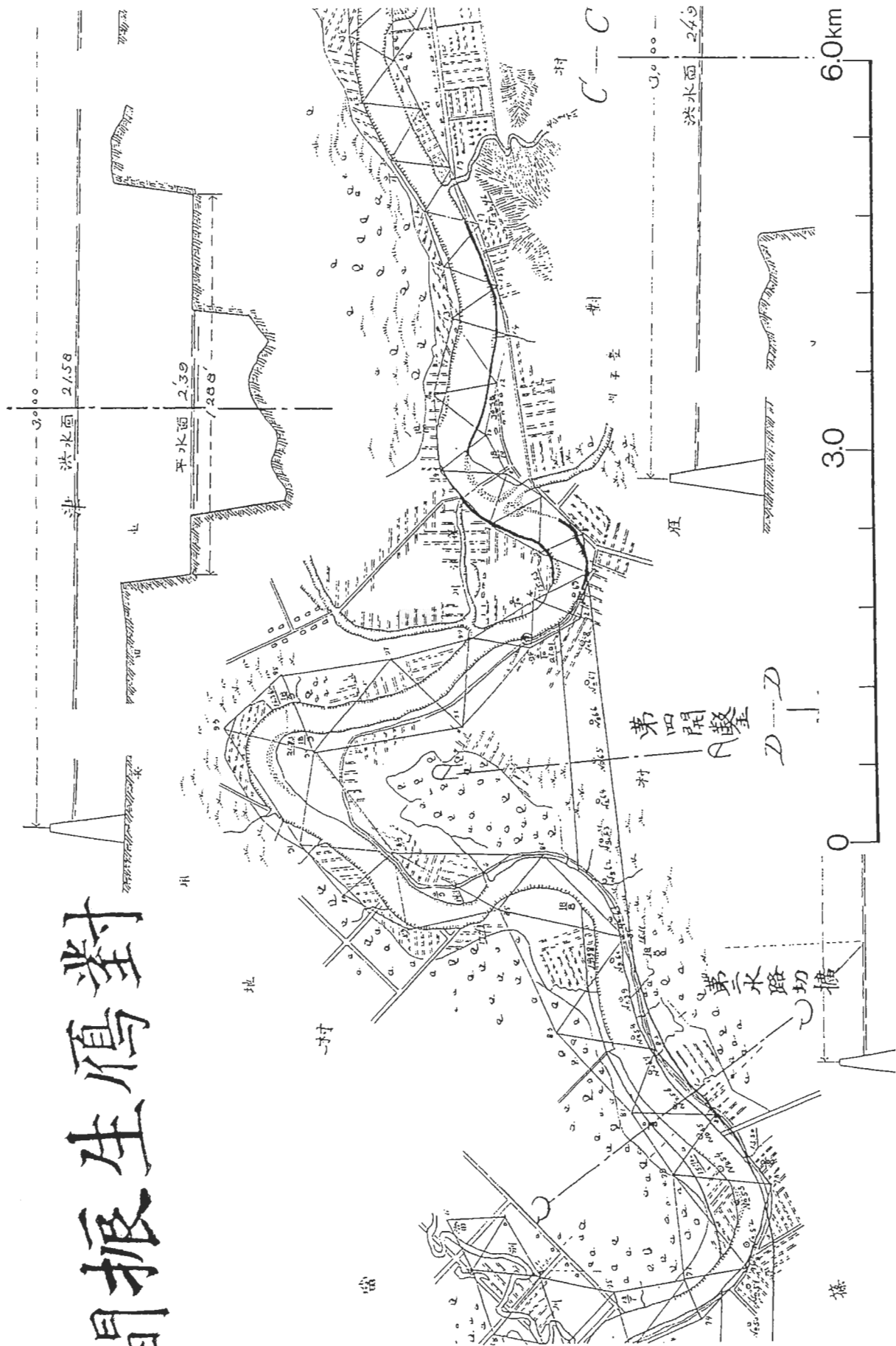


縮三尺万分之一

図Ⅱ-2-2 『石狩川治水計画調査報文』の図(1)



図II-2-3 『石狩川治水計画調査報文』の図(2)



図Ⅱ-2-4 『石狩川治水計画調査報文』の図(3)

止策としていずれ施工が必要なところは「掘鑿見込ノ箇所」としてある。これは石狩川の本流を大きく西側に移設する案である。開鑿水路の長さが30km近くになるこの請願計画は、100年を経ても着工にいたらなかった。

(3) 対雁の諸記録

④ 夕張、空知、樺戸三郡出張、山林川沢地理水理等調査、及ヒ開拓見込ノ件 上申

これは1975年（明治8年）道庁から派遣された高畑利宜が、夕張郡、空知郡、樺戸郡を視察しての「開拓見込」の復命報告書である。当時の石狩川下流域の地形、植生などの観察記録でもある。

第一条 （省略） （以下の句読点は西田による）

第二条

一 石狩川支流字シノツ川筋、桑林ニ於テ養蚕御開之儀者、曾而上局御見込モ有之、既ニ先般黒田長官、松本大判官ニモ実地御検分被為在候末。今般同川筋地理水理ヲ委シク検究仕候処、同川上ニ至リ廣大ノ谷地アリ。常ニ悪水溢レ落、故ニ虻蚊杯ノ毒虫多ク発生候ニ付、若シ該所ニ蚕室ヲ立ツル時ハ、虫害不歌加之何程御手入相成ト雖モ、清水ヲ用ユル能ワス。然ラハ、自然製繭等ノ障碍ニモ相成候哉。依之蚕室建設ノ儀者、豊平川筋高岨之地ヲ撰ミ、御造築相成、追々盛大ニ被行候上者、幌内石炭ヲ用イ、同処ニ於テ上州富岡ノ如キ製絲場ヲ、御設ケ相成可然哉。調図相添、上申仕候事。

但 從石狩川口至シノツ太 川路凡 九里

從札幌表 至シノツ太 陸路凡 五里半

第三条

一 札幌郡字エベツ川ハ、石狩支流ノ内ニモ大ニシテ、水中深シ。川口ヨリ同川上字エベツパロ迄凡八里間ハ、穩流ニシテ運輸ノ便、至極良善タリ。或ハ左右ニ廣野ヲ抱ヘ、且ツ夕張太ヨリエベツ川上字アシリカマカ迄ノ間凡ソ五里間、両側トモ野桑ニ富ミ、就中字エベツパロニハ尤数多アリ。委シク之レヲ検究スルニ殆ト千根ト云ヘシ。然ル処、イザリ太者上下桑林ノ中央ニシテ四方ノ便理ヲ得、且ツ陸道水理トモ頗ル便宜ヲ得。随テ川清ケレバ、同所ニ於テ蚕室ヲ設ケ、製繭ヲ盛大ニナスヘシ。將又、エベツ川口ヨリイザリ太迄凡七里間ニ、農家三百戸ヲ移殖スルニ足レリ。故ニ、エベツ川筋字ヲサツトウ迄ノ間ハ、當分官用地ニ御見込相可然哉。別紙調図相添、上申仕候事。

但 從石狩川口至エベツ太 川路凡 十里

從エベツ太至イザリ太 川路凡 七里

從イザリ太至エベツパロ 全 凡 二里

從篠路太 至エベツト 平均川巾 五十間

同 深サ 七尺五寸

從エベツ太至エベツパロ 同 川巾 十二間

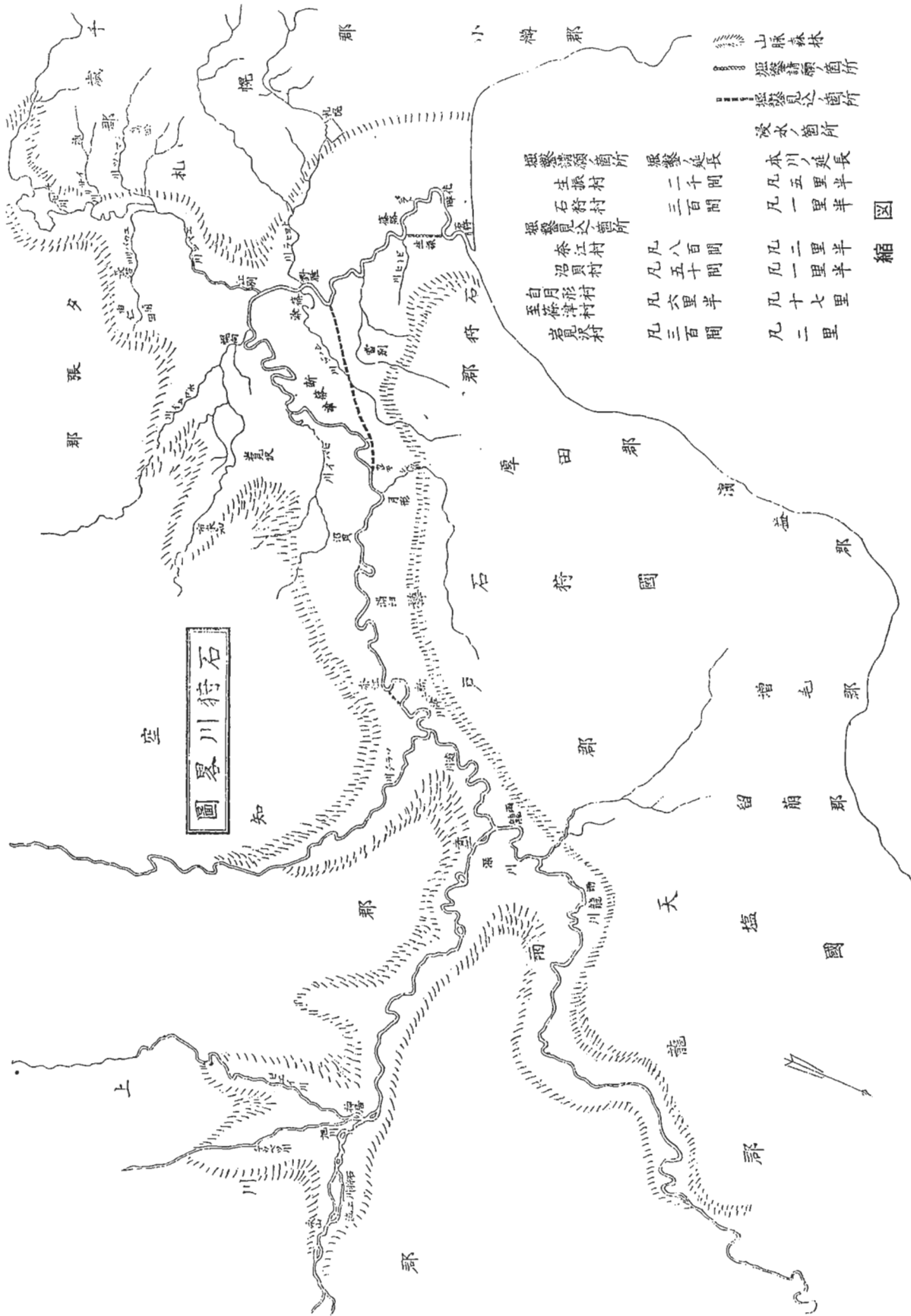
同 深サ 五尺

第四条

一 シノツ川筋、及エベツ川筋等ノ桑林委シク之ヲ検分スルニ、多クハ山蒲葡（葡萄の誤記か：西田）ノ下タ木トナリ。其甚シキハ蒲葡ヲ捕取スル為、良桑ヲ伐リ倒スアリ。且ツ天然桑ニシテ、葉形小サク、品位宜シカラズ。是ハ天然成立ノ俣ニアル為ナリ。故ニ悉ク蒲葡ヲ伐リ捨、桑ノ枯枝ヲ伐払、悉皆手入方當秋ノ内、御着手相成候得ハ、明年ニ至若萌發出シ究メテ良桑ヲ見ルニ至、必然ト奉存候事。

第五条

一 札幌郡字エベツボロヌツツ者、近郡第一等ノ廣野ナリ。即チ調図之如ク、大凡一千万坪余アリ。然リト雖、谷地氣ニテ、雪代或ハ連雨洪水之節ハ一円水溢レ、在来ノ俣ニテハ耕耘スル能ハス。



図II-2-5 請願の図

故ニ、エヘツ川筋宇ケシ子ノタツフト云澤流ヨリ、幌向ニタ股（フタ股の意味か：西田）辺江向ケ、大下水ヲ掘割、排水ノ道ヲ要スル時ハ、移民又ハ開墾、或ハ牧畜等ヲ起スニモ究畢ノ地ト奉存候事。

但 從石狩河口至恵別幌ヌツフ 川路凡 十里余

（以下、第六條から第二十二條まで省略）

右、庸愚之檢、聊御用辯ニ相成候儀モ御座候ハ者、其廉々江翼者、御指令被成下度、復命立方此段奉伺候也。

明治八年 十四等出仕 船越長善

九月 日 十一等出仕 高畑利宜

大判官 松本十郎 殿

⑤『開拓使事業報告』第四編 「教育」の対雁学校の項（以下の句読点は西田による）

対雁の学校は1976年（明治9年）10月、「対雁移民教育所」として開設された。そして、明治11年10月北海道開拓使長官黒田清隆、大書記官調所広丈が学校を視察する。このとき黒田長官が「富貴在苦勞力行」と「対雁学校」の扁額を書いた。ここに示すのは、農作物の収穫量である。

明治13年4月 生徒校内空地三千坪ヲ開墾シ、農業現術ヲ習ハシメ、収穫ハ生徒午餐ノ料ニ供ス。

6月 建築成ル廣五十一坪餘、経費千七百七十二圓餘、構地一萬千餘坪、開校式ヲ行ヒ、対雁学校ト名ク。生徒70名、内八級生45名、六級生25名。……共有漁業益……

本年収穫セシ穀蔬生藪等左表ノ如シ。

馬鈴薯 12000合 玉葱 1000合 大豆 240合 珥豆（コウトウ：ささげ） 120合 小豆 120合
粟 200合 蘿蔔（ラフク：だいこん） 100本 藪 1132合 麻 20000目（奴：もんめ）

⑥『開校100周年記念誌 ついしかり』（昭和53年9月3日）対雁小学校100周年記念事業協賛会

ここに引用するのは、標高10mに満たない低平な地形にもかかわらず、良好な湧き水があった話である。空中写真（1966年、1971年撮影）をもとに作成した地形図（図Ⅱ-1-1、1999年作成）にも、学校の池は表現されている。これと同じように湧水による池と思われるものが、対雁2遺跡の北方約100mの位置にも認められる。ここは道道札幌沼田線の南に接する民家の庭であり、図Ⅱ-1-2によれば、標高9mで囲まれるような地形を読み取れる。

「対雁小学校の思い出」元職員 岩佐 正元（大正11年4月から12年3月まで代用教員。13年4月から昭和4年10月まで正教員の訓導）

〔(前略) 当時の対雁小学校は、石狩川の左岸2百米程の地点にあり、校地の周辺は落葉松の並木で囲まれ、校舎の大部分—教室1、屋内体操場（31坪程）、玄関（4坪）、便所—が、開校当初からの物で、40数年を経た古い建物で、その年に新築した教室が1つ附いていました。〕

校地内には、校舎の外、御真影奉安所（煉瓦造）、校長住宅（木造平屋16坪程）があり、校舎と校長住宅の間に掘抜井戸があって井戸水が渾々と湧出し、その水を利用して小さな池が出来ていました。

校庭は、校門から玄関までの通路と1周百米の走路の外は芝生となっており、校庭の東辺に、ブランコと鉄棒が1基づつ設けてありました。（後略）

(4) 遺跡、遺物についての諸記録

⑦『東京人類学会報告』第14号(明治20年4月)

「内耳鍋の話」(明治20年2月13日、本会第27回ニ於テ述ブ) 神田孝平

(前略) 又、旧友藤井忠弘氏は前年北海道に奉職せられし時、此種の鉄鍋一枚を獲て蔵せられた事が有ったようですが、夫れは石狩国空知郡対雁村にて土人が掘出したのを譲り受けられたので、提耳は三つ有ったと申事です。しかし欠損せし者で深く珍重せられず、望む人ありて譲りたりと申されました(話順十番)。(後略)

⑧『東京人類学会雑誌』第104号(明治27年11月)

「北海道旅行中人類学上の見聞」 文学士 中澤 澄男

予、今年の夏期休暇を幸として北海道札幌へ旅行せり。今、其の間経験したる人類学上の事柄を略記すべし。

函館(略)、室蘭(略)、札幌(略)

江別 堅穴を発掘せる翌日、札幌より東方汽車一時間程の江別村に行けり。屯田兵村なり。村中一雑貨店の前の道にて一石片を拾へり。其の形大は石斧の破片に似たり。然れども其の刃は磨ける痕跡ありて、甚鈍し。而かして一方の表面は磨剥されて黒色を呈し、他方は淡茶褐色なる此石の表皮を保てり(一)。其翌日十八日、江別村より十余町なる対雁村に行く。此地は明治九年樺太アイヌを移住せしめし所なれども、彼等は今は石狩に行て全住居せず。眞願寺の後方の小丘に此のアイヌの墳墓あり。行きて見るに酋長の墓あり。(中略)

又此の辺にて土器片を拾へり。又此地に用ゆる小舟は独木舟の如くにて二箇の木材より成り。長さ七間許に幅は二尺余なり。二人にて立ちながら櫂を漕ぎ行くを見たり。

小樽及び塩谷(略)、帰途(略)

(以下、省略)。

⑨『河野常吉ノート、考古篇2』宇田川 洋校註(1983年)

第三篇 遺跡篇(145ページ)

第三節 尾形順一郎氏

一、明治36年(?)、対雁にて樺太アイヌの墓を掘りたり。樺皮にて頭部を包みありたり。副葬品のみ採りて他は元の通り埋め置けり。副葬品は

鍋二個(一は鉄鍋、一は素焼の内耳鍋)

耳環一對

石斧一個、石鑿一個

樺太玉数多

鎗一個

刀二本、一は日本刀、一は鞘が唐銅にて日本刀

漆器一個 但巴紋を附す

天然石に穴を穿ちたるもの

(西田)

3 周辺の遺跡

(1) 石狩川左岸(対雁2遺跡付近)汀線採集の遺物について

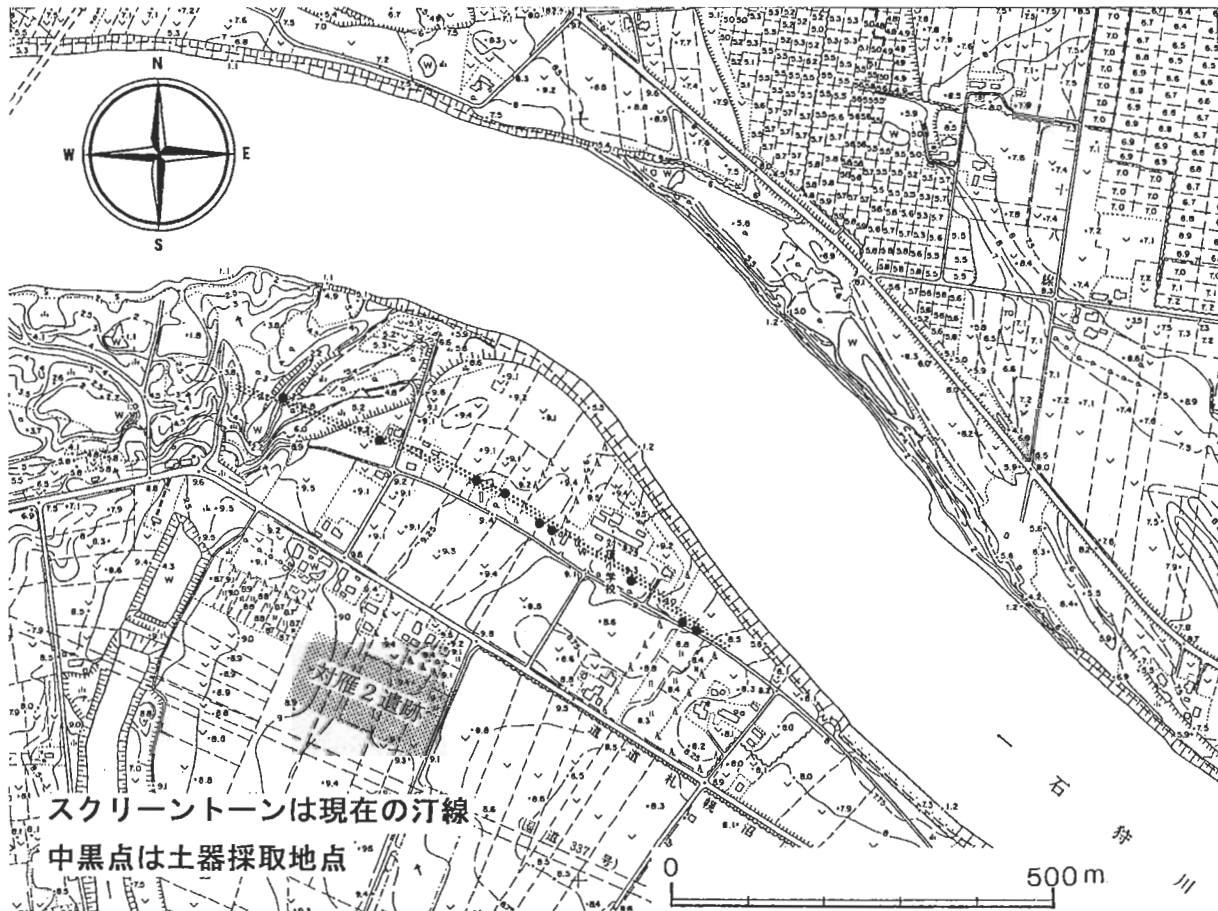
a 採集状況(図II-3-1~3)

発掘調査に並行して遺跡周辺の探索を行った。5月31日(水)午後、石狩川の汀線で縄文が施文された土器を採集した。これは縄文時代後期の特色を示しており、破片表面には流水による摩滅がほとんど認められないものである。採集した場所は目測で標高50cmほどのところであり、このとき石狩川は春の融雪増水が終了しており、水が引いたところに細い裸地が延々と続く風景であった。

その残存状況に不思議を覚え、さらに汀線の裸地に目を落として歩くと、縄文の土器のみならず、標高2m弱の地点で擦文式土器とみなされるものも確認できた。調査中の対雁2遺跡からは、縄文時代晩期後半に属する資料しか得られていないことから、直接に関連するものとは考えられない。しかし、土器としての特色は読み取れるものであり、どのような理由、過程によってここの汀線で土器が採集できるのか、それなりの解釈が必要とされる資料である。

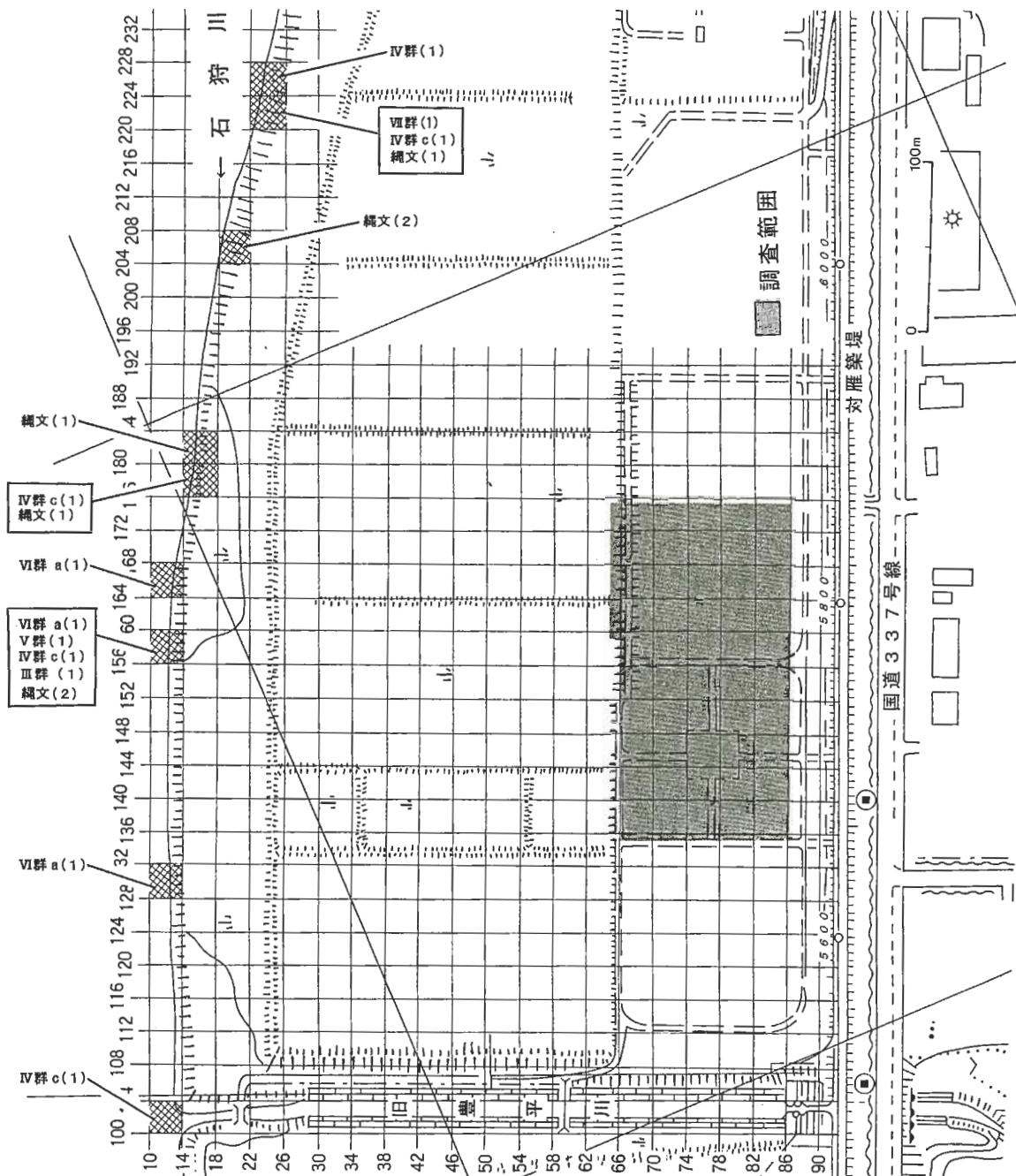
以後、増水が起こると水位が下がるのを待つようにして、10月の末まで幾たびか踏査を繰り返した。その結果5名の調査員により採集されたものが、ここに紹介する資料である。

図II-3-1は、空中写真を元にして作った地形図に、現在の汀線を重ねたものである。かつての対雁小学校の位置は、現在では本流の中になっていることがわかる。土器を採集した場所は、長さ600mもの範囲におよんでいる。土器の表面磨耗がきわめて少ないところから判断すると、良好な遺物包含層が汀線付近に残存していることが推定される。(西田)



図II-3-1 調査区と現在汀線の位置

3 周辺の遺跡



図Ⅱ-3-2 採集地点位置

表Ⅱ-3-1 掲載土器一覧

掲載番号	採取地区	分類・型式名
図Ⅱ-3-3-1	156~160-10~14	Ⅲ群、深鉢
図Ⅱ-3-3-2	地区不明	Ⅳ群c類(堂林式)、深鉢
図Ⅱ-3-3-3	220~224-22~26	Ⅳ群c類(堂林式)、深鉢
図Ⅱ-3-3-4	156~160-10~14	Ⅳ群、深鉢
図Ⅱ-3-3-5	176~180-14~18	Ⅳ群c類(堂林式)、深鉢
図Ⅱ-3-3-6	224~228-22~26	Ⅳ群、深鉢
図Ⅱ-3-3-7	156~160-10~14	V群、深鉢
図Ⅱ-3-3-8	164~168-10~14	Ⅵ群a類、深鉢
図Ⅱ-3-3-9	156~160-10~14	Ⅵ群a類(恵山式、アヨロ1類a)、深鉢
図Ⅱ-3-3-10	128~132-10~14	Ⅵ群a類(恵山式、アヨロ1類)、深鉢
図版Ⅱ-3-11	220~224-22~26	Ⅶ群、坏

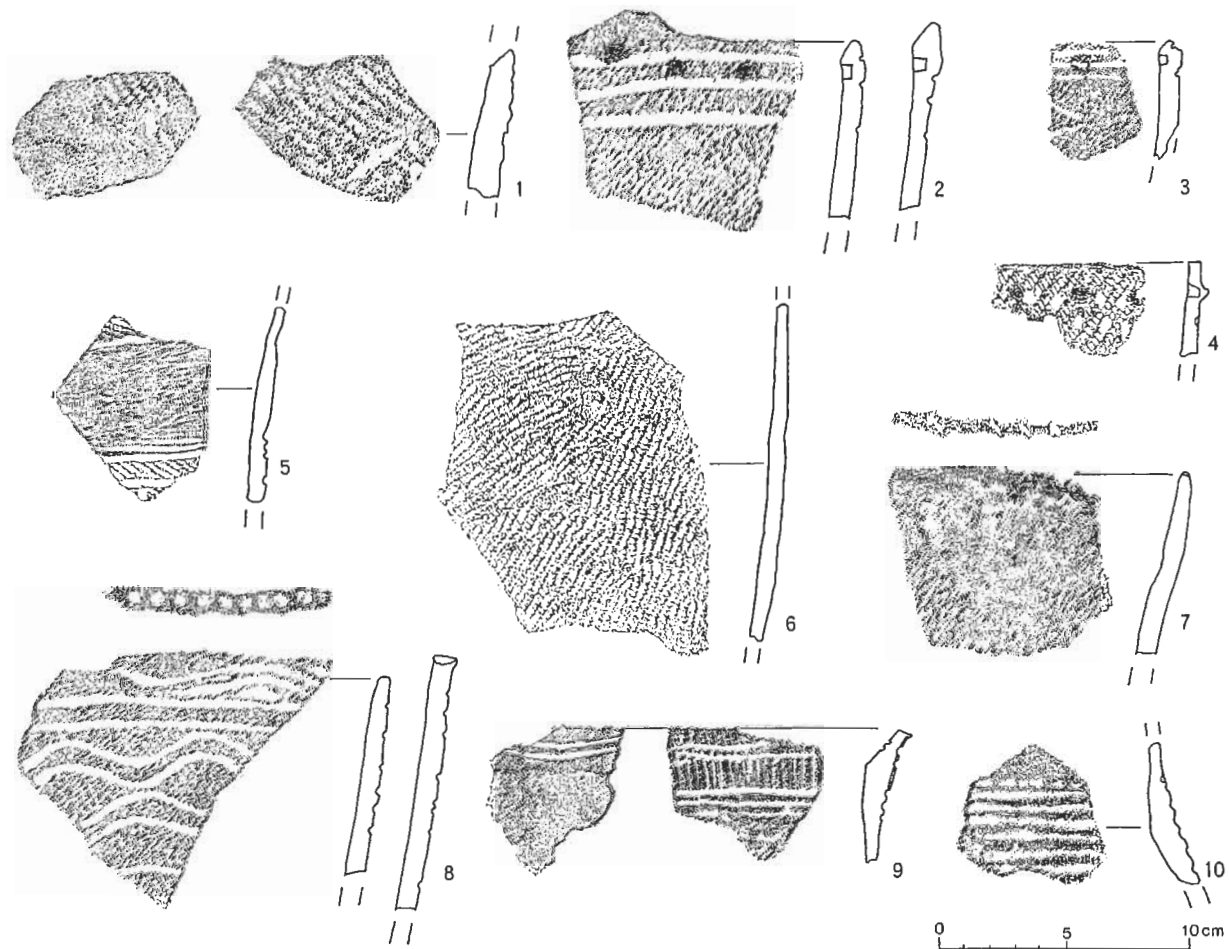
b 土器について (図II-3-2・3、表II-3-1、図版II-3)

採集された土器の内訳は、Ⅲ群1点、Ⅳ群c類5点、Ⅴ群1点、Ⅵ群a類3点、Ⅶ群3点、縄文土器9点で合計22点である(地点不明を4点含む)。分布は156~184-12~16の汀線に集中する。Ⅳ群c類・Ⅵ群a類は主にこの範囲から採集された。土器は転磨を受けたものもあるが、中には炭化物、ローム質土が付着したものもある。

1はⅢ群の深鉢胴部片、内面にRL(斜行)が施される。2は堂林式の深鉢胴部片、口縁部はやや肥厚し、口縁端面は内傾する。口縁部に3本の横位沈線文。3は堂林式の深鉢口縁部片、口縁部はやや肥厚し、口縁端面は内傾する。口縁部に3本の横位沈線文。その下位に菱形の沈線文?。4は堂林式の深鉢口縁部片、口縁部の器壁は薄く、口縁端面は水平。多裁管による刺突文。2・3より新しい時期の堂林式である。5は堂林式の深鉢胴部片。6はⅣ群の深鉢胴部片。7はⅤ群の深鉢口縁部片、器表の凹凸によってRL(斜行)が所々に施される。口唇部には筒状原体による刻み。

8はⅥ群a類の深鉢口縁部片、口縁端面は水平、RL(斜行)→連繋する菱形の沈線文、台形突起の頂部は指頭圧痕、交互の弧線文。9は恵山式(アヨロ1類a)の深鉢口縁部片、口縁部内面には2本の弧線文、口縁部外面には縦位沈線文→横位沈線文。10は恵山式(アヨロ1類)の深鉢頸部片、頸部外面には横位沈線文と横位短刻線文。11は写真のみ掲載、非ロクロ内外黒平底坯の底部片であろう。

(鈴木)



図II-3-3 採集された土器

(2) 関矢留作の遺跡調査

江別およびその近辺地域における本格的な遺跡調査は、1931年初夏から始まった。すなわち野幌丘陵の北縁での竪穴住居、墓、「古墳」の発掘である。以後十年間ほど、多様な遺物・遺構が見つかる江別の遺跡をめぐって河野広道、名取武光、高倉新一郎、須田 信、後藤寿一などの調査、報告、論文が継続し、北海道の考古学にとって基礎的な資料が蓄積されていくことになる。

このように北海道の考古学が大きく動き出すのと同じ頃、野幌の地で行われた遺跡調査は、調査者の死去により調査の全容を紹介する機会を失い、のち1947年の遺跡紹介は断片的であったことから、研究史の中においても知られることなく今日にいたっている。ここでは詳細な遺跡分布図を作成していた、関矢留作の調査について紹介しておきたい。

遺跡の分布図（図Ⅱ-3-4～6）

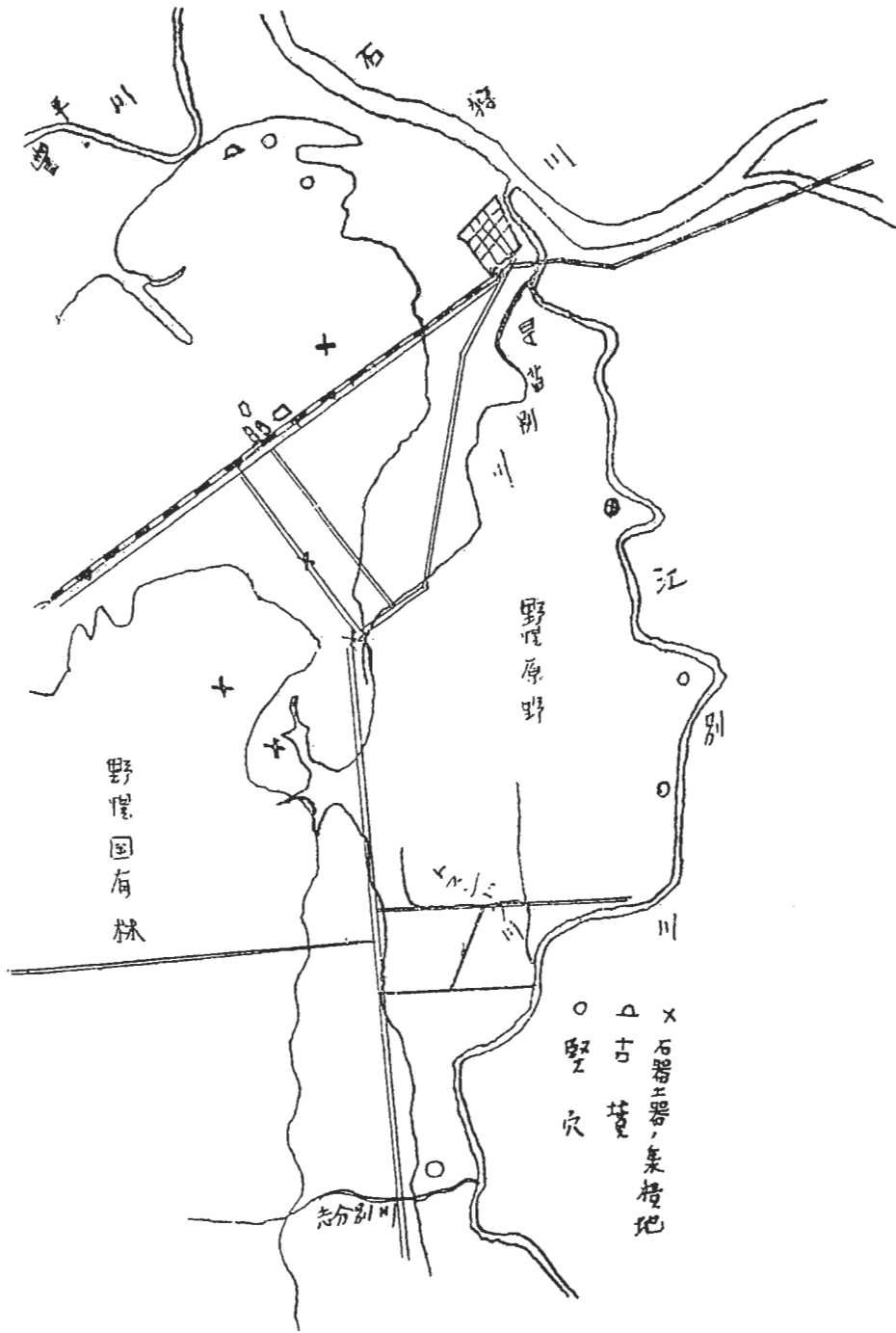
『野幌部落史』に掲載された遺跡分布図は、「野幌部落遺跡分布図」（図Ⅱ-3-4）と題されて、石狩川、豊平川、江別川で囲まれる広い区域にある遺跡を、3種に分けて示している。内訳は「石器土器ノ集積地」として6か所、「古墳」が1か所、「竪穴」が6か所である。このうちの1か所は「石器土器ノ集積地」と「竪穴」の表示を重ねている。『野幌部落史』を執筆したのは関矢マリ子だが、そのもととなったのは夫留作の構想した「野幌部落誌編纂大綱」であり、彼が調査・収集した資料である。留作が野幌の地に帰郷し、野外調査を始めるのは1933年（昭和8）夏からである。そして留作は1936年5月に死去しているので、遺跡調査の大部分は1934年、1935年の2か年になされたものとみなせる。

留作が作成した遺跡の分布図は、良好な状態で保管されており、そのほぼ全体を複写して図Ⅱ-3-5に示した。使用している地図は1930年（昭和5）5月「大日本帝国陸地測量部」発行の2.5万分の1『野幌』図幅である。この図ではあまりにも大きすぎるので、現在の5万分の1地形図『江別』に遺跡の位置を重ねて表したのが図Ⅱ-3-6である。彼が北越殖民社にかかわる耕地、原野の全域を歩いていることが読み取れ、これこそが「野幌部落遺跡分布図」というにふさわしい。ついでながらここに記しておくが、この地図には土地所有者とみなされる多くの人名が万年筆で書き込まれており、遺跡調査だけでなく、森、畑地、水田分布の追加補正など、耕作の様子の変化を把握するためにも用いていたのであった。

留作の遺跡分布図では、土器や石器などの遺物散布は×印を付してあり、「中ノ月」の江別川沿いには「竪穴」の文字が書き込んである。現在の地図には留作が×印を付した位置に●印を振り、「竪穴」の書き込みがあったところには■印を置いてみた。これによると遺物散布地は34か所を数えることができる。土器や石器などの遺物は、地表を掘り荒らしてこそ顕在化するわけだから、殖民社の農民が開いた屋敷地、畑地、切り通しの道路壁面などが遺跡として認識されたのであろう。現在酪農学園の敷地になっているところからも遺物が見つかっている。「広島街道」に沿って遺跡が多く印してあるのは、耕地としての整備が早くに進展し人の目に触れる機会の多さからして当然としても、江別川の川縁に延びる低地に遺跡が確認されていることである。この辺は標高9mよりも低い場所なのである。

後藤寿一の報告との関係（図Ⅱ-3-7）

今も留作の蔵書の棚には後藤寿一の論文「北海道の先史時代についての私見」（『考古学雑誌』24巻11号、1934年）の抜き刷りがある。この表紙には後藤の「謹呈」という文字があり、しかも後藤が「ガリ版刷り」で加筆訂正した書き込みの附箋が残存している。後藤には、翌1935年2月の「石狩国江別町の竪穴住居跡について」（『考古学雑誌』25巻2号）という遺跡の調査報告がある。この報告の副題は「江別遺跡調査報告第二報」であり、四か所の竪穴住居跡の説明がある。図Ⅱ-3-7はこの報告文に使われている遺跡の分布図である。



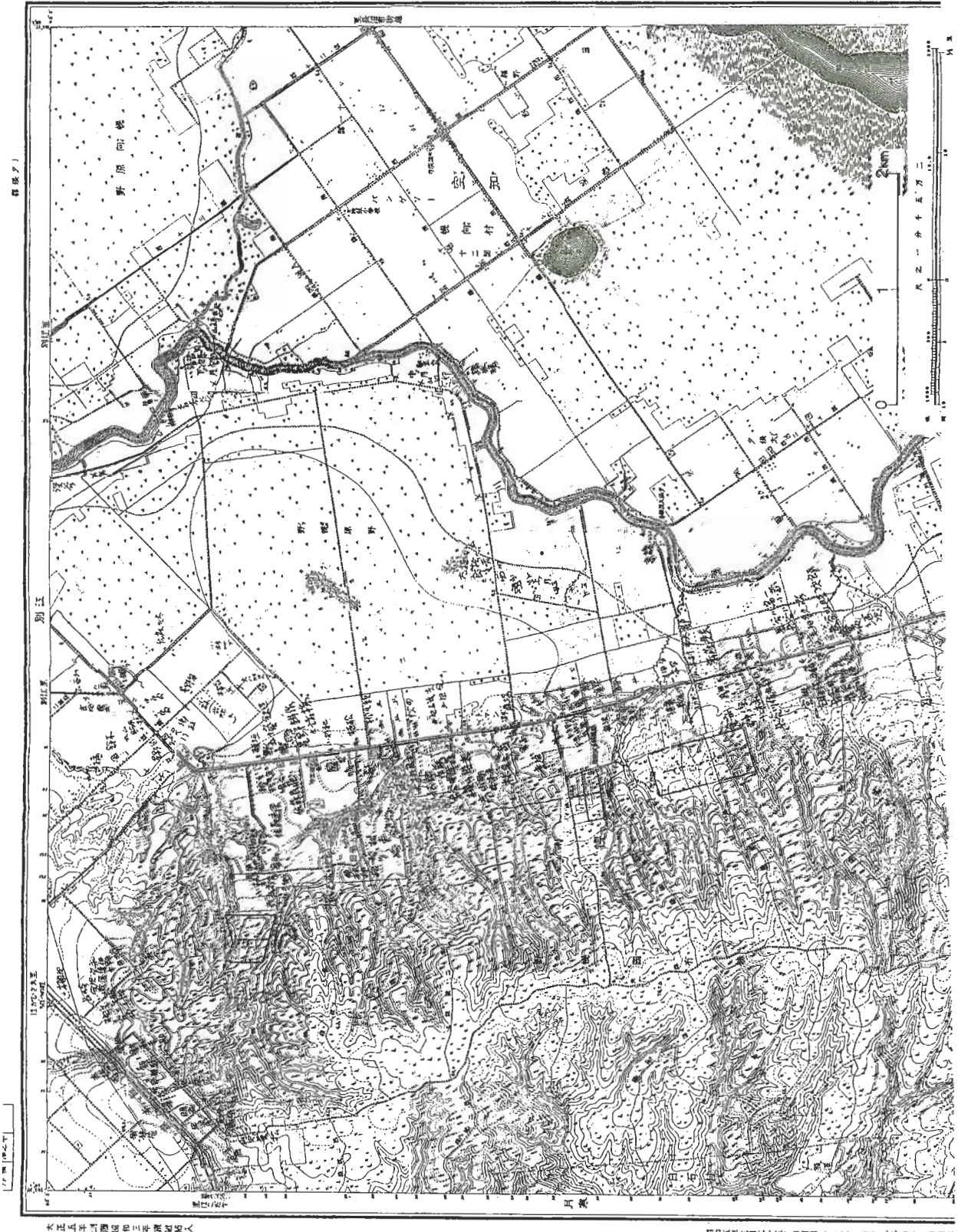
野幌部落遺跡分佈圖

図II-3-4 野幌部落の遺跡 (関矢マリ子：1947年)

3 周辺の遺跡

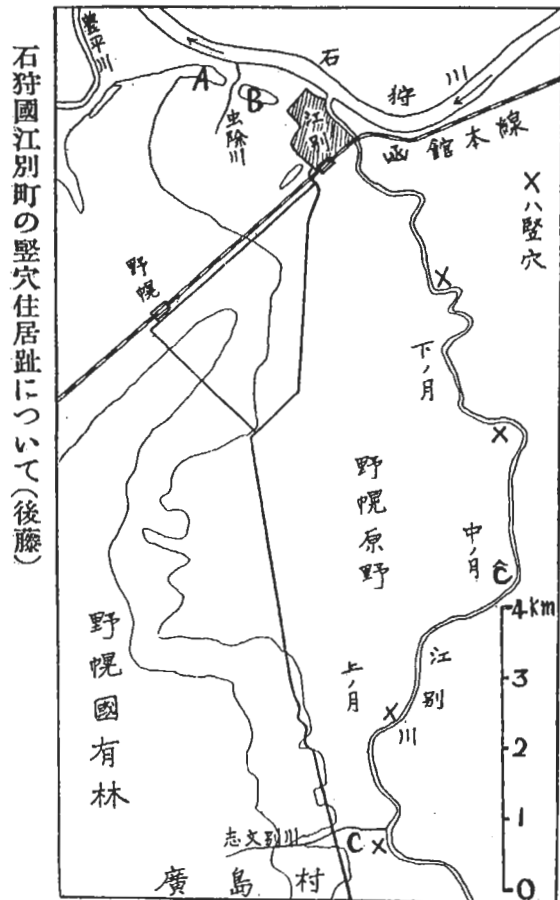
● 遺跡
○ 遺跡
△ 遺跡

日本国土地院測量部第三課(第五十四課)
測量大綱五五〇ノ四



図Ⅱ-3-5 関矢留作の遺跡などの地図 (1935年)

圖近附町別江 圖一第



図Ⅱ-3-7 遺跡の位置 (後藤寿一:1935年)

五十嵐齡七の記録 (図Ⅱ-3-8~9)

没後に刊行された五十嵐齡七の『画集 野幌開拓のころ』(1998年)の「志文別遺跡之図」(図Ⅱ-3-8)は、発掘の報告を読んだだけでは絵画にしえない情景であろう。この構図を支えているのは、発掘調査の経過を承知し、周囲の地形、風景の詳細を理解しなければ描けない、すなわち体験による熟知としかいいようがない。竪穴住居の村落は、後藤の報告を踏まえた立地であり、遠く夕張岳を左にみる広い青空に出土品の略図がはめ込まれている。この遺物の図には、「朝鮮土器、祝部土器、擦文土器、土師器、紡錘車」などの当時使われていた名称が付してある。

なお、この「志文別遺跡之図」に描かれている竪穴の場所は、志文別川の南岸なので行政的には広島村(現北広島市)になる。

また、同じ画集の「泥炭層調査」とでもいうべき場面(図Ⅱ-3-9)も、地域の様子を科学的に明らかにしていこうという齡七の体験を踏まえての情景である。「野幌実科農学校」の生徒と取り組んだ、1934年春の出来事として、後々まで伝えておきたいという気迫を感じる。この図で泥炭層の表面から6.6cm程の深さに見られると説明してある火山灰のことは、『野幌部落史』の本文に「泥炭層の表面以下二寸の下に一分乃至二分の火山灰が介在してゐる」とあるのに対応している。この3.3~6.0mmの厚さで見られる火山灰は、現在ではT a-a(樽前a降下火山灰)と呼ばれ1739年の降下物とみなされているものであろう。

『野幌部落史』にある写真のほとんどは齡七が撮影したものであり、遺跡の項では2枚が掲載されている。ひとつは「出土土器類」で、もうひとつは「出土石器類」である。この「出土土器類」は、後藤寿一の報告には見当たらない遺物であることから判断すると、留作と齡七が後藤とは別に発掘し

この四か所の竪穴住居跡のうち二つは、殖民社の区域にある遺跡である。ひとつは「第三号竪穴住居跡」と呼ばれている志文別のもの(宮内継次の耕作地)であり(C地点)、もうひとつは「第四号竪穴住居跡」と呼ばれている中ノ月のもの(Ⓒ地点)である。報告は1934年11月2日に書き終えたのである。それよりも前の発掘調査になる。この二つの遺跡調査にあたってお世話になった方々として後藤が明記しているのは、「北越殖民社専務山口多門次氏、宮内継次氏、山内氏、長谷川氏」の四名である。留作あるいは弟の五十嵐齡七の名はなく、後藤の発掘調査に加わっていたか、あるいは間近で見学していたかを明らかにする資料は見当たらない。

伝えられている『野幌部落史』の「編纂大綱」は「第一篇 自然誌」であり、その「5 先住民の遺物及び遺跡」の小項目は「採集せられたる土器・石器、遺物の散布地、シフンベツ竪穴群の調査、江別河畔の竪穴」となっていたのであった。しかし、留作が作った遺跡分布図には、シフンベツの竪穴群(宮内継次の耕作地)の表示が欠けている。

たこともあったのであろう。この推定は、妻マリ子の『関矢留作について』の追憶の記述に夫留作と齡七とが村はずれの農家の畑で竪穴の発掘を行ったことが書いてあることで裏付けられる。さきに引用した「志文別遺跡之図」で描かれた土器などは、このときの出土物と考えてよい。「朝鮮土器、祝部土器」と文字を付してあるのは、現在では「須恵器の甕、壺」と呼ばれるものである。

残された遺物

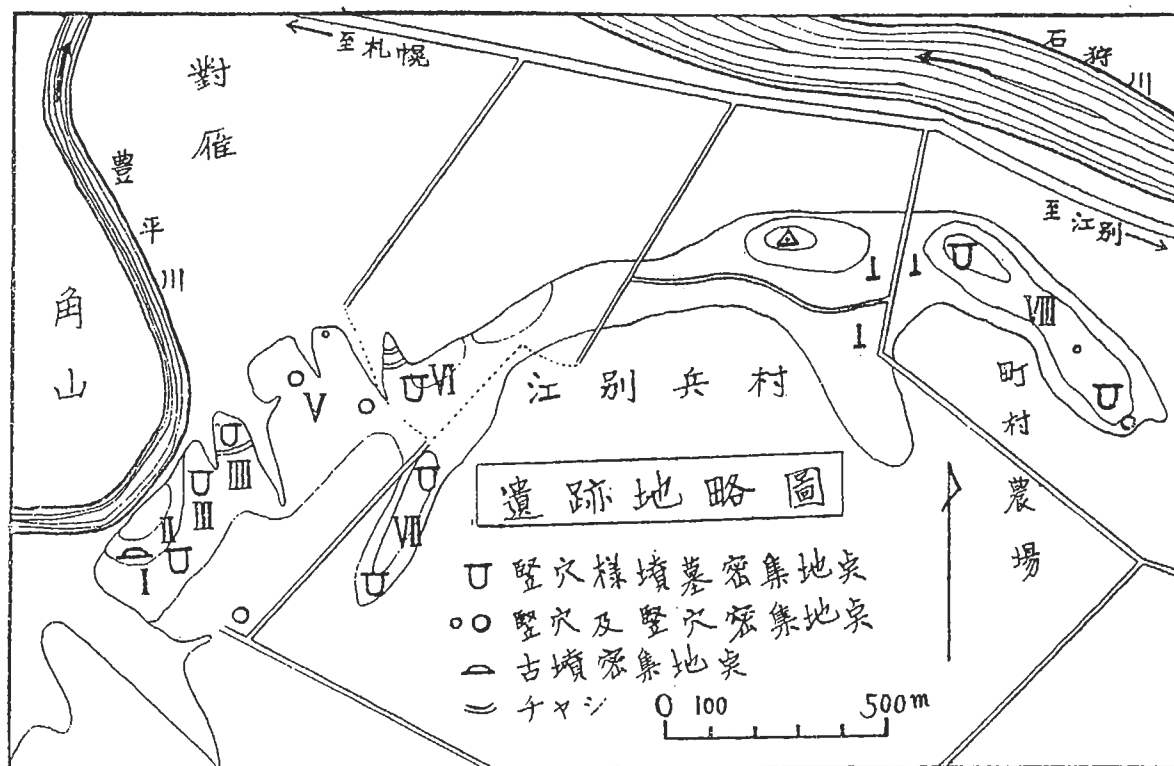
発掘を行うまでもなく春から夏、秋の耕地見回りで土器、石器などを見つけることも多い。このような様子は、『関矢留作について』には、次のように記述されている。「畑の測量にいく彼について出掛けた時など話しながらも、下ばかり注意して居りますので、不審に思っ居ますと、畑の中に落ちて居る土器の破片や矢尻を見つける為だったのです。そして満足そうに例のきたないポケットにつめこみます」。表面採集の繰り返しや発掘調査によって多くの土器、石器が集められた。

『野幌部落史』の本文では遺跡、および土器や石器などの遺物については、おおむね後藤寿一の報告に依っている。留作が作成した土器や石器の散布地の地図、採集した遺物の個別の説明が欠けたのは、『野幌部落史』が諸種の困難を乗り越えて刊行されたと伝えられているだけに惜まれる。にもかかわらず、これらの遺物は、いまなお関矢信一郎氏のもとに保管されており、考古学的な資料として重要なものであることは、いうまでもない。

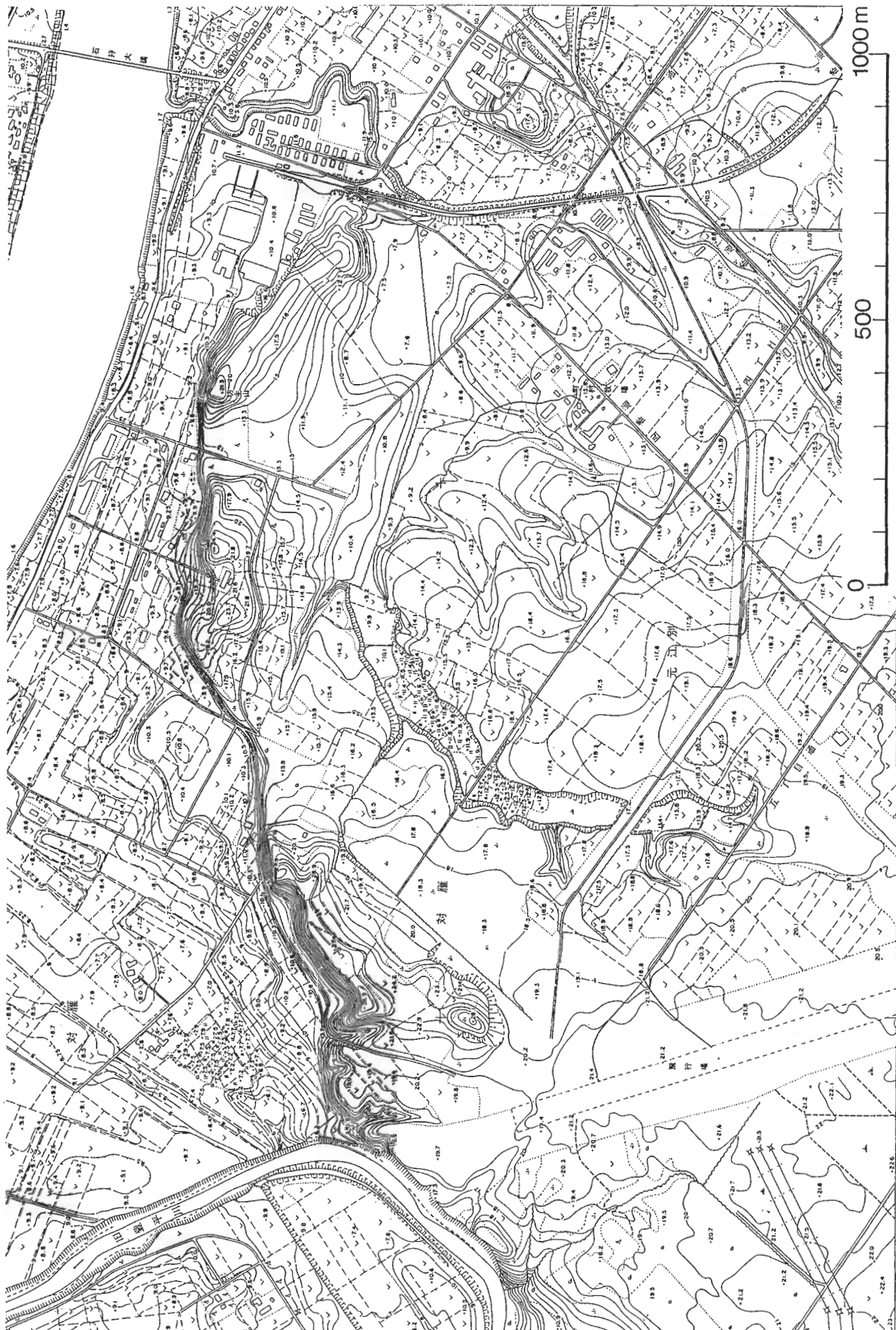
(3) 後藤寿一の遺跡図(図Ⅱ-3-10~12)

図Ⅱ-3-10は、後藤寿一の報告「石狩国江別町に於ける竪穴様墳墓について」(『考古学雑誌』25巻5号、1935年)に示されている遺跡分布図である。略図ではあるが、遺跡の立地を地形の特色の中に説明してある。遺跡の種類は「竪穴様墳墓」「竪穴」「古墳」「チャシ」の四つに分けてある。多くの遺跡の「密集地点」という表現に、後藤の踏査状況、観察量などがうかがわれる。

石狩国江別町遺跡略地



図Ⅱ-3-10 遺跡の位置略図(後藤寿一:1935年)



図Ⅱ-3-11 空中写真(1947年撮影)をもとに作成した地形図(2000年作成)

この後藤が遺跡の豊富なところとして示した地域は、発電所の建設、墓地の造成、宅地造成などにより地形が変化しており、現在では遺跡を実見出来るところは少ない。図Ⅱ-3-11は、1947年（昭和22年）撮影の空中写真をもとにして作成した地形図の一部である。自然地形が大きく改変される前の様子が良く表現されている。のちに北海道電力の発電所建設のために削平され、遺跡が消滅してしまう坊主山は、最高地点が20mを上まわるほどの高さであり、南東方向へ延びていく丘であったことが読み取れる。

次に示すのは1932年（昭和7年）5月3日（火曜日）の『北海タイムス』の記事である（図Ⅱ-3-12）。前年秋に「江別兵村」での竪穴、土器などの発掘調査が報道されたこともあって、遺跡、遺物について広い範囲で興味もたれていたことがわかる。

「珍しい掘出と意外な発見 野幌の農夫鈴木勝次、谷江壮男の両氏は自家畑中から大型の飾り玉と石皿各一個と土板様のものを一個発掘して犀川会の河野氏のもとに送り届けて来たが此の土板は写真の通りわさびおろしを円くした様なもので奥羽地方からは之まで度々発掘されているが北海道としては之が最初の発掘であり考古学上非常に重要な発見であるといふ、なほ土板は何か宗教的意味に用いられたものらしいが年代も用途も不明なものである由」。

これらの遺物は、翌年道内の各地（札幌、小樽、函館、旭川）で開催された「北海道原始文化展覧会」に出品され、大勢の人々の目に触れたのであった。写真の遺物は、現在「オロシガネ状土製品」と呼ばれており、縄文時代後期（約3500年前）に特有の遺物であることが知られている。

北大原始林中に 竪穴の大群

アイヌの部落を発見

野幌の農夫鈴木勝次、谷江壮男の両氏は自家畑中から大型の飾り玉と石皿各一個と土板様のものを一個発掘して犀川会の河野氏のもとに送り届けて来たが此の土板は写真の通りわさびおろしを円くした様なもので奥羽地方からは之まで度々発掘されているが北海道としては之が最初の発掘であり考古学上非常に重要な発見であるといふ、なほ土板は何か宗教的意味に用いられたものらしいが年代も用途も不明なものである由

【写真：土板】

珍しい掘出



意外な発見

図Ⅱ-3-12 北海タイムスの記事

「北大原始林中に豎穴の大群—アイヌの部落を発見— 札幌近郊のアイヌの遺跡は故河野常吉氏の死後設立された犀川会を中心にとどしどし発見発掘されつつあるが同会の河野、高倉両氏は一日の日曜日偶然北大工学部裏手から第二農場に至る原始林と牧草地の中から直径二間乃至三間の外観円形を為した豎穴百数十に余る大群を発見した。断面に鉄刀の破片や土器のかけら等多数転がって居るのもありその豎穴である事は確かで両氏は雀踊りして取敢えず之を農場事務所に報告した由。今はあの通りの曠野のただ中にアイヌの一大部落を想像する事は素人にも面白い事である」

以下に示すのは1933年（昭和8年）夏におこなわれた「北海道原始文化展覧会」に樺太からやって来た木村信六の参観記録である。この札幌での展覧会に、後藤寿一は発掘調査で得た道内の資料を数多く出品している。木村信六の記録によれば、発掘の諸報告をなしている後藤寿一や河野広道のみならず、江別在住で遺物を蒐集している同好の士がおり、地元で遺跡、遺物のことが良く知られていたことがうかがわれる。また帰郷間もない関矢留作も、この展覧会に強い関心を寄せていたのであった。

【北海道原始文化展覧会を観るの記】 木村 信六（句読点は西田。漢字、かな使いも一部改めてある）

今般理解ある上司の取計いに依り、極く短日ではあったが考古学研究のため、北海道考古学研究団体たる犀川会主催の下に行われた北海道原始文化展覧会の講演会、並びに座談会へ出席のため札幌へ旅行することの出来たことを、衷心から感謝して居る次第である。

今回の催しは、犀川会の諸氏と杉山寿栄男先生との超人的な努力の賜物であり、且北門アカシアの都に久しく新文化の移植者であった今井氏との握手が成り、此処に因らずもこの秘められたる遺物が一日に天下に紹介されることを得るに至ったのは、真に千載の一遇とも云うべきであり、学会へ寄与する巨大な功績はいうに及ばず先住民族の燦然たる工芸を不朽に伝え得たる恩沢を讃すべく、聊も展覧会を観るの記を誌し在島同好の士に呈したいと思う。

私は八年振りにて北海道へ旅行するのと思えば心の躍動を押えることが出来なかった。

六月二十二日、本斗（樺太西海岸の町：当時、木村信六はこの警察で巡査をしていた）出立。…

非常な濃霧に襲われ絶えず吹鳴らされる汽笛にまどろむ間もなく、翌朝、稚内着。直ちに関正君を訪れ展覧会に誘う。……（中略）……。午後三時出立……。

二十四日朝、江別に下車……。昨年来河野広道博士、後藤寿一氏等の発掘に依り一躍学界に著名となった江別式土器に対する予備智識を得るため鳥谷部干城、有元利一、内田源十氏等の蒐集せられた土器及び石器を観、且つ有元氏の案内にて親しく発掘せられた古墳の跡を調査し、若干の資料を蒐集、大体の智識を得、元気よく札幌へ向う。

車窓より眺め得られる野も山も、畑も並木も私を喜び迎えるが如くに感じられて、一入懐しく野幌の煉瓦餅の売声を後に、又幼かりし日の思出深き苗穂も、サル蟹採りし小川も過ぎ、母校なる東北小学校を車窓より眺めつつ、いよいよ札幌へ。……直ちに宿所を定め展覧会場なる今井呉服店に向う。

（中略）

昨年江別古墳より出土の土器多数陳列されており、出品者なる河野博士、後藤寿一両氏の努力の跡も偲ばれる。（中略）

殊に石器中で眼を惹いたのは江別出土の磨製大型石斧〔長さ一尺五寸にして内田源十氏出品〕及び石枕、石冠（中略）

【以下略】

（西田）

引用・参考文献

- 後藤寿一 1932 「古墳の発掘について報告—江別遺蹟調査第一報—」『蝦夷往来』第8号
- 後藤寿一 1934 「北海道の先史文化についての私見」『考古学雑誌』24巻11号
- 後藤寿一 1935 「石狩国江別町の竪穴住居跡について—江別遺蹟調査第二報—」『考古学雑誌』25巻2号
- 後藤寿一 1935 「石狩国江別町に於ける竪穴様墳墓について」『考古学雑誌』25巻5号
- 後藤寿一 1935 「北海道出土の石器の一部について」『人類学雑誌』59巻9号
- 河野広道 1932 「雑報 北海道野幌の遺跡と遺物」『人類学雑誌』47巻5号
- 河野広道 1933 「北海道江別町円形竪穴式墳墓発見の石器時代人—頭骨とその埋葬状態—」『人類学雑誌』48巻6号
- 河野広道ほか 1933 『北海道原始文化聚英』
- 河野広道 1934 「北海道江別町発見の土笛様土製品」『蝦夷往来』第13号
- 河野広道 1934 「北海道の古墳様墳墓に就て」『考古学雑誌』24巻2号
- 河野広道 1935 「北海道石器時代概要」『ドルメン』4巻6号
- 河野広道、名取武光 1938 「北海道の先史時代」『人類学・先史学講座』第6巻
- 河野広道 1942 「北海道先史時代文化」『北海道文化史考』札幌中央放送局編
- 名取武光 1933 「北海道江別兵村に於ける竪穴式墳墓の発掘報告」『考古学雑誌』23巻11号
- 喜田貞吉 1933 「北海道に於ける所謂『古墳』に就いて」『蝦夷往来』第9号
- 木村信六 1933 「北海道原始文化展覧会を観るの記」『木村郷土研究所報』第3号
- 関矢マリ子 1947 「第五章 先住民の遺物および遺跡」『野幌部落史』
- 西田 茂 1984 「樺太、警察官、考古学 木村信六についての覚書」『北海道の文化』50号
- 高倉新一郎 1984 「河野広道君と北海道研究」『河野広道博士没後二十年記念論文集』
- 五十嵐齡七 1998 『画集 野幌開拓のころ』
- 瀬川拓郎 2000 「旭川市博物館所蔵古人骨資料の来歴」『旭川市博物館研究報告』第6号

(4) 江別市内の遺跡 (図Ⅱ-3-13・14 表Ⅱ-3-2~4)

図Ⅱ-3-13・14は、江別市教育委員会作成の埋蔵文化財包蔵地カードなどをもとにして作った江別市内の遺跡分布図である。現在、埋蔵文化財包蔵地カードには137か所が遺跡として掲載されており、野幌丘陵の縁や野幌丘陵の小川の縁には、いたるところに遺跡が確認されている。

これらの遺跡のなかには明治時代から知られているものもあるが、大半は最近30年間の分布調査、発掘調査によって明らかになったものである。とりわけ1972年の踏査、1977年の分布調査によって遺跡であることが確認されたものが多い。以後も分布調査の繰り返しによって、市内では遺跡の数は増える一方である。道路工事、宅地造成、家屋建設、粘土採掘などの土地の改変に先立って、遺跡の一部を発掘調査した例が多い。発掘調査が終了すると、順次報告書が刊行されている。

発掘調査によって得られた土器・石器などの資料は、市郷土資料館などで保管されているが、その重要さゆえに国指定の文化財になっているものもある。江別太遺跡、元江別1遺跡、後藤遺跡である。

江別太(エベツト)遺跡は1978年に、高速道路の建設工事で見つかり、緊急に発掘調査がなされた。場所は馬蹄沼の近く、千歳川の流路の脇である。ここは標高3~5mほどの低いところ、低湿地の遺跡で、縄文時代晩期と続縄文時代の土器・石器などと一緒に、木製遺物が多く出土した。なかでも木製柄付き石ナイフと呼ばれるものは、良好な残存状態とともに、石器(石ナイフ)の使い方を具体的に示す資料である。1993年に「江別太遺跡出土品」として重要文化財に指定された。

元江別(モトエベツ)1遺跡は、道路建設に先立つ調査として1979年、1980年に発掘が行われた。野幌丘陵の縁、標高18mほどに立地している。続縄文時代中頃(西暦1世紀ころ)の土壙墓に多種多様な副葬品が埋まっていた。土器は道南の恵山式、道北の宇津内式等を含むものである。墓の中にあつた石器は石鏃、銛頭、ナイフ、石斧、スクレイパー、石錐、磨石、叩石、砥石などである。副葬品のうちで目を引くのは玉類である。碧玉製管玉、乳白色の石製管玉、琥珀玉、玉環、石環など青、白、赤の色彩に富む。歴史資料としての評価は、やがて江別式土器文化を生み出す基盤の一つをなしたと解釈される点にある。1995年に「元江別1遺跡土壙墓出土品」の名で重要文化財に指定された。

後藤(ゴトウ)遺跡は、道路建設に先立つ調査として1980年に発掘が行われ、かつて1931年に後藤寿一により報告された事柄が再確認された。野幌丘陵の縁、標高18mほどに立地している。墓は21基見つかっており、そのほとんどに本来的には周溝があつたと考えられている。土師器、須恵器、鉄の道具などが出土している。8世紀後半から9世紀前半の頃が推定されている。1998年に、「江別古墳群」の名称で国指定史跡となっている。

国指定の文化財ではないが、資料として重要なものがほかにも多くある。代表的なものは、高速道路でみると西インターチェンジの吉井の沢1遺跡、二番通り近くの大麻1遺跡、パーキングエリアの西野幌1遺跡、東野幌1遺跡など、野幌総合運動公園の西野幌12遺跡、大麻団地の大麻5遺跡、大麻駅の南に広がる大麻6遺跡、大麻中央公園の沢に接する大麻3遺跡などである。

さらに江別駅前前の丘にある萩ヶ丘遺跡も縄文時代以降続縄文時代、擦文文化、アイヌ文化の資料が豊富である。道央地域の縄文時代中期の土器には、この遺跡から出土したものを標識資料として萩ヶ岡1式、萩ヶ岡2式、萩ヶ岡3式、萩ヶ岡4式と呼ばれているものがある。

高砂遺跡は、古くから土器や石器が出土することが知られており、広い範囲を占めている。現状で自然地形を推定することは困難であるが、古い地形図から判断すると遺跡の立地は虫除川の上流部であり、幅広い沢地形にあつている。宅地造成の進展に伴って、1964年以降繰り返し発掘がなされて、縄文時代のすべての時期、続縄文時代、擦文文化期などの遺構、遺物が検出されている。

地図にある遺跡の時代・時期については、調査の歴史の有無も含めて表に示した。これらの遺跡の

特色について、最近20年ほどの発掘調査による知見を主にして時期区分ごとに記述すると、次のようになる。さらに、市内の遺跡から出土する土器の主要なものの特色、土器形式も示した。

なお、表の番号は遺跡の登録番号と同じにしてある。

旧石器時代 この時期のものとみなされる両面加工石器4点が、大麻13遺跡から検出されている。すべて黒曜石を素材とするもので、長さ5cmほどのものである。

縄文時代 草創期かと考えられる土器が大麻1遺跡で報告されている。早期前半から後半、および前期とみなされる住居跡・土壙墓などの遺構は少ない。土器・石器などの遺物は少量ではあるが多くの遺跡から見つかっている。中期、後期、晩期の遺構・遺物は多い。とりわけ晩期の資料は豊富である。

早期前半は、貝殻条痕文土器が坊主山遺跡、高砂遺跡から出土している。

早期後半は、東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式などの土器が出土している。大麻1遺跡、大麻6遺跡では住居跡、土壙墓なども見つかっている。

前期は、前半の時期は縄文尖底の土器である。後半は円筒下層式土器、大麻5式土器などである。吉井の沢1遺跡、大麻5遺跡では、石器などが多く埋められた土壙墓が見つかっている。

中期には住居跡、土壙墓のみならず、落とし穴と呼ばれるものもある。土器は萩ケ岡1式、萩ケ岡2式、萩ケ岡3式、萩ケ岡4式、柏木川式、北筒式などである。

後期の土器は余市式、手稲式、堂林式など。住居跡、土壙墓などの遺構は散点的に見つかっている。晩期の遺跡は、虫除川流域、七丁目沢流域において多く調査されている。晩期の遺跡の多くが次の続縄文時代に引き継がれており、土壙墓が集中して見つかる例が多い。土器は亀ケ岡式、タンネトウL式などである。本書に報告する対雁2遺跡はこの時期である。

続縄文時代 前半期、後半期ともに多量の資料がある。遺構は住居跡、土壙墓、土坑、焼土が検出されている。土壙墓には土器や石器、飾り玉などの遺物を豊富に含むものがある。元江別1遺跡で見つかった前半期の土壙墓からは、土器、石器、飾り玉など特色のあるものが検出されている。後半期の土器は江別式土器群と呼ばれるもので、その分布は北海道のみならず東北地方北部にまで及んでいる。

土器は大狩部式、恵山式、江別太式、江別A式、江別B式、江別C₁式、江別D₂式など。

擦文文化期 竪穴住居跡の検出例は少ない。後藤遺跡の墓は北海道式古墳と呼称されることがある。土器は北大式、土師器、須恵器、擦文式など。

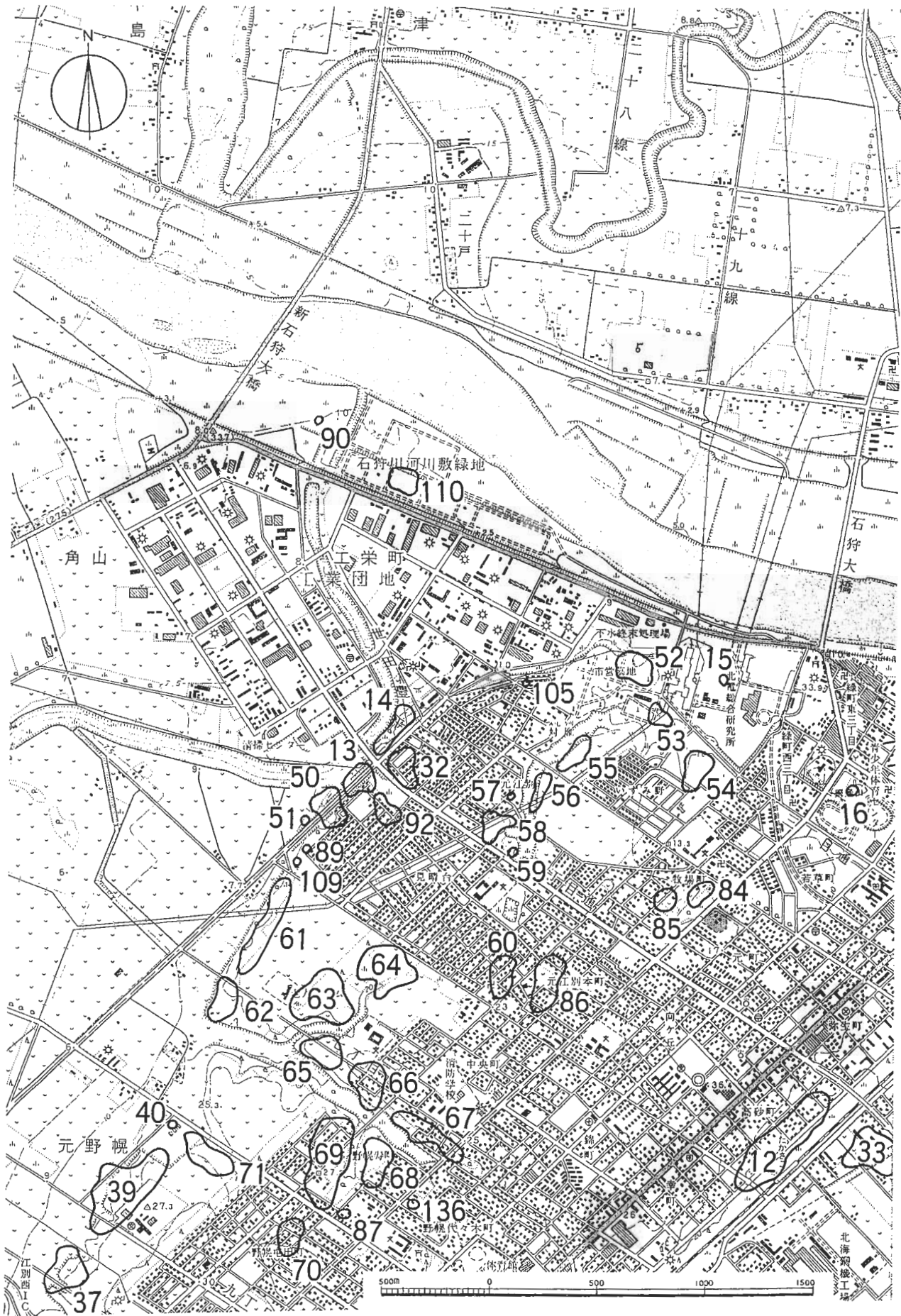
アイヌ文化期 この文化期ではチャシが代表的な遺構であるが、江別チャシが残っているのみである。元江別1遺跡では土壙墓が検出されている。

江別市内では丘陵部の遺跡が多いが、最近の札幌市域での発掘調査例を参考にすると、標高7mより低く現状が泥炭湿地であったとしても、遺跡が見つかる可能性がある。

次に示すのは、1939年（昭和14）7月14日（金）の『小樽新聞』の記事である。元江別にある遺跡を保存するための動向である。しかし、江別の遺跡が国指定史跡となるのは、後藤遺跡が「江別古墳群」と呼ばれることになる1990年代まで待たなければならなかった。

「元江別の史蹟—保存方（方は法の誤植？：西田）指定の見込み—」

江別町元江別の史蹟は考古学者の資料として先住民の生活形態を知る研究材料として知られていたが、先般博物館名取学士より文部省宮内省に史蹟保存の申請が提出される（た）。更に世の視聽を集めているが、すでに再三その後当局より係員現地に出張調査を行ひ江別町役場よりも坪松町長、木村助役、筧書記、江別高女江刺校長、横山教頭の諸氏等も同行、当然保存地として認めらるるものと見らる。（西田）



図II-3-13 江別市内の遺跡(1)

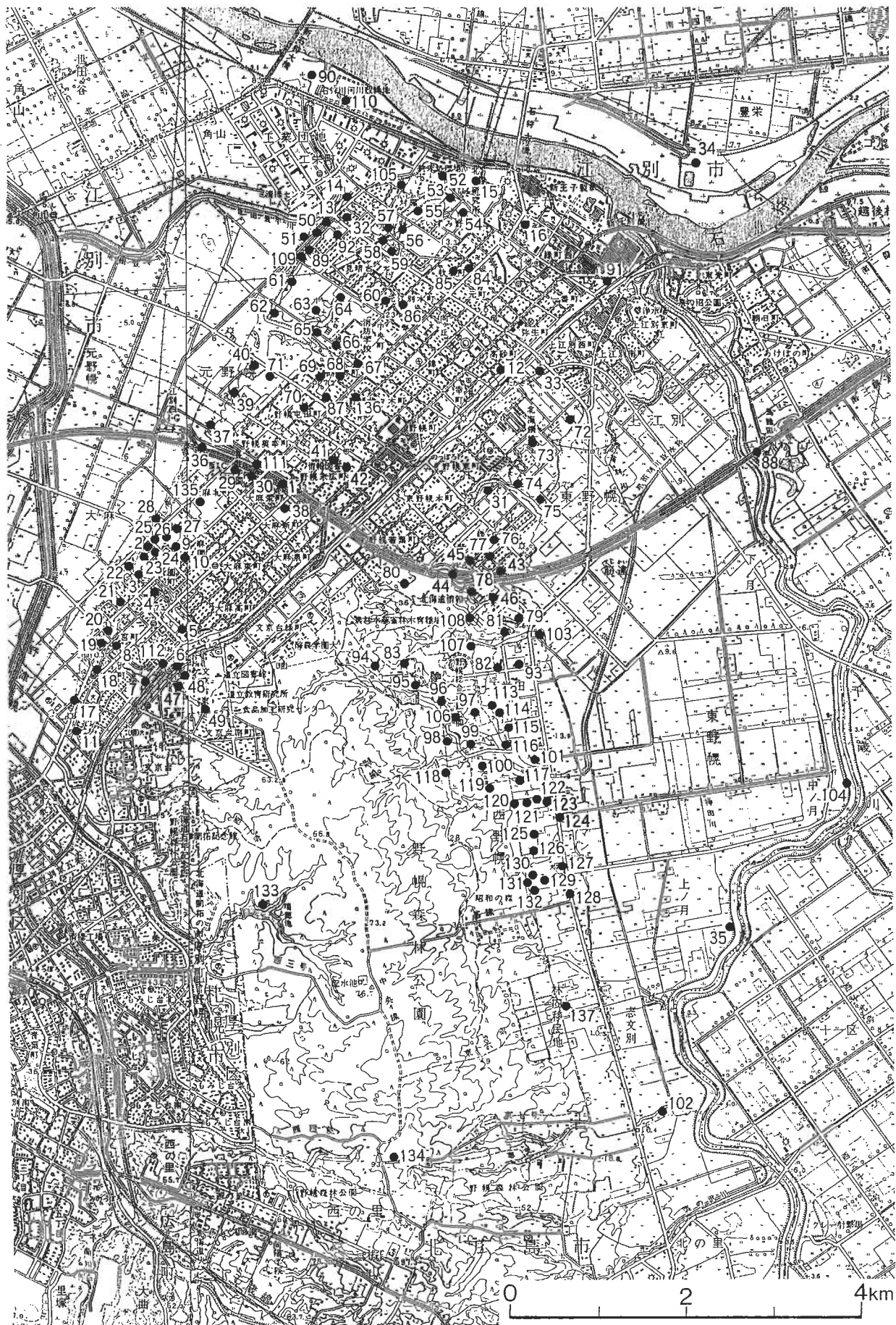


図 II - 3 - 14 江別市内の遺跡(2)

表Ⅱ-3-2 江別市内の遺跡（その1）

番号	遺跡名	種別	時期区分	発掘調査など
1	大麻1	集落跡	縄文、続縄文、擦文	1972年踏査、79、80年発掘
2	大麻2	遺物包含地	縄文	1972年踏査
3	大麻3	集落跡、墳墓	縄文、続縄文、擦文	1972年踏査、85、88、91年発掘
4	大麻4	遺物包含地	縄文	1972年踏査
5	大麻5	集落跡	縄文	1965年発掘
6	大麻6	集落跡	縄文、続縄文	1972年踏査、1981、82年発掘
7	大麻7	遺物包含地	縄文	1972年踏査
8	大麻8	遺物包含地	縄文	1972年踏査
9	大麻9	遺物包含地	続縄文	1972年踏査
10	大麻10	遺物包含地	縄文	1972年踏査
11	大麻11	遺物包含地	縄文	1982年所在確認、87年範囲確認
12	高砂	集落跡	縄文、続縄文、擦文	1964年以降繰り返し発掘
13	後藤	墳墓、集落跡	縄文、続縄文、擦文	1931年発掘、80、85、89年発掘
14	江別チャシ	チャシ	アイヌ	1979年測量調査、市指定史跡
15	坊主山	墳墓	続縄文、擦文、アイヌ	1932、60年発掘、大半は消失
16	飛鳥山	集落跡	擦文	1972年踏査、1975年発掘
17	大麻17	遺物包含地	縄文	1972年踏査
18	大麻13	遺物包含地	縄文	1972年踏査、1989年発掘
19	大麻15	集落跡	縄文	1972年踏査、85、89、90年発掘
20	大麻16	遺物包含地	縄文	1972年踏査、1990年発掘
21	大麻12	遺物包含地	縄文	1972年踏査、1988年発掘
22	大麻18	遺物包含地	縄文、擦文	1972年踏査
23	上江別	遺物包含地	縄文	1972年踏査（33番と入れ替わる？）
24	大麻14	遺物包含地	縄文	1969年発掘
25	大麻20	遺物包含地	縄文	1972年踏査
26	大麻21	墳墓	縄文、続縄文、擦文	1972年踏査、1985、86、87年発掘
27	大麻22	墳墓	縄文、続縄文	1993年発掘
28	大麻23	遺物包含地	縄文、続縄文	1972年踏査
29	大麻24	遺物包含地	縄文	1972年踏査、1981、82年発掘
30	大麻25	墳墓	縄文、続縄文	1981年発掘
31	小島の沢	遺物包含地	縄文	1974、75年試掘、1993年発掘
32	旧豊平河畔	集落跡	縄文、続縄文	1975、79、80、82、83、84年発掘
33	大麻19	遺物包含地	縄文	1990年発掘（23番と入れ替わる？）
34	美原	遺物包含地	不祥	
35	千歳川左岸河川敷	遺物包含地	不祥	
36	吉井の沢1	集落跡、墳墓	縄文、続縄文、擦文	1975年分布調査、80、81年発掘
37	吉井の沢2	遺物包含地	縄文	1975年分布調査
38	吉井の沢5	遺物包含地	縄文	1975年分布調査
39	元野幌1	遺物包含地	縄文	1975年分布調査
40	元野幌2	遺物包含地	縄文	1975年分布調査
41	元野幌3	遺物包含地	縄文	1975年分布調査
42	元野幌4	遺物包含地	縄文	1975年分布調査
43	東野幌1	遺物包含地	縄文	1975年分布調査、79年発掘
44	西野幌1	遺物包含地	縄文、続縄文	1975年分布調査、79年発掘
45	西野幌2	遺物包含地	縄文	1975年分布調査、90年発掘
46	西野幌3	遺物包含地	縄文	1979、86、88、90、91、92年発掘

3 周辺の遺跡

表Ⅱ-3-3 江別市内の遺跡（その2）

番号	遺跡名	種別	時期区分	発掘調査など
47	文京台1	遺物包含地	縄文	1976年確認、1988年発掘
48	文京台2	遺物包含地	縄文	1976年確認
49	文京台3	遺物包含地	縄文	1976年確認
50	元江別1	墳墓	縄文、続縄文、擦文	1979、80、87、88、89年発掘
51	元江別2	墳墓	縄文、続縄文	1979、88年発掘
52	対雁	遺物包含地	縄文、続縄文	1977年分布調査
53	町村農場1	墳墓	縄文、続縄文、擦文	1965、92、93、94年発掘
54	町村農場2	墳墓	続縄文	1992、93、94年発掘
55	町村農場3	遺物包含地	縄文	1977年分布調査
56	町村農場4	遺物包含地	縄文	1977年分布調査
57	元江別3	集落跡	縄文、続縄文	1980、81年発掘
58	元江別4	遺物包含地	縄文	1977年分布調査
59	元江別5	遺物包含地	縄文	1980年発掘
60	元江別6	遺物包含地	縄文	1977年分布調査
61	元野幌5	遺物包含地	縄文	1991年発掘
62	7丁目沢1	遺物包含地	縄文、続縄文	1977年分布調査
63	7丁目沢2	集落跡	縄文、続縄文	1991、92年発掘
64	7丁目沢3	遺物包含地	縄文、続縄文	1977年分布調査
65	7丁目沢4	遺物包含地	縄文、続縄文	1977年分布調査
66	7丁目沢5	遺物包含地	縄文	1983年発掘
67	7丁目沢6	墳墓	縄文	1993、94年発掘
68	湯川庭園	遺物包含地	縄文	1977年分布調査
69	7丁目沢7	遺物包含地	縄文、続縄文	1983年発掘
70	元野幌6	遺物包含地	縄文	1977年分布調査
71	元野幌7	遺物包含地	縄文	1977年分布調査
72	中原	遺物包含地	縄文	1977年分布調査
73	上江別1	遺物包含地	縄文	1977年分布調査
74	東野幌2	遺物包含地	縄文	1977年分布調査
75	東野幌3	遺物包含地	縄文	1977年分布調査
76	東野幌4	集落跡	縄文、続縄文	1977年分布調査、1980年発掘
77	東野幌5	遺物包含地	縄文	1977年分布調査
78	西野幌7	遺物包含地	縄文	1977年分布調査、1990年発掘
79	西野幌9	遺物包含地		1977年分布調査
80	西野幌8	遺物包含地	縄文	1977年分布調査、1990年発掘
81	西野幌10	遺物包含地	縄文	1977年分布調査
82	西野幌11	集落跡	縄文、続縄文	1977年分布、83、84、85、92年発掘
83	下学田	遺物包含地	縄文	1977年分布調査、1984年発掘
84	元江別7	遺物包含地	縄文、続縄文	1977年の分布調
85	元江別8	遺物包含地	縄文	1977年分布調査
86	元江別9	遺物包含地	縄文	1977年分布調査、1990年発掘
87	元野幌8	遺物包含地	縄文	1977年分布調査
88	江別太	生産跡	縄文、続縄文	1978年発掘、遺物は重要文化財
89	元江別11	集落跡	縄文、続縄文	1979年発掘
90	対雁番屋跡	番屋跡	近世	河川改修により消失
91	萩ヶ岡	墳墓	縄文、続縄文、擦文	1981、82年発掘
92	元江別10	墳墓	縄文、続縄文	1980、88、89年発掘

表Ⅱ-3-4 江別市内の遺跡（その3）

番号	遺跡名	種別	時期区分	発掘調査など
93	下学田2	遺物包含地	不詳	
94	下学田3	遺物包含地	不詳	
95	西野幌14	遺物包含地	縄文、続縄文	1984、87年発掘
96	西野幌17	集落跡	縄文	1984年発掘
97	西野幌15	遺物包含地	縄文	1982年確認
98	下学田7	遺物包含地	縄文	
99	西野幌16	遺物包含地	縄文	1982年確認
100	下学田9	遺物包含地	縄文	
101	下学田10	遺物包含地	縄文	
102	志文別	集落跡	擦文	
103	千古園	集落跡	縄文、擦文	
104	中ノ月	遺物包含地	擦文	
105	江別第2チャシ	チャシ跡	アイヌ	地形消失
106	西野幌12	集落跡	縄文、続縄文	1982、83、84、85、86、87、88年発掘
107	西野幌13	集落跡	縄文、続縄文	1983年発掘
108	西野幌4	遺物包含地	縄文	1988年発掘
109	元江別12	遺物包含地	縄文	
110	対雁2	集落跡	縄文、続縄文	1999、2000年発掘、本書
111	吉井の沢6	遺物包含地		
112	大麻26	遺物包含地	縄文、続縄文	1994年確認
113	西野幌18	遺物包含地		1994年分布調査
114	西野幌19	遺物包含地		1994年分布調査
115	西野幌20	遺物包含地		1994年分布調査
116	下学田11	遺物包含地		1994年分布調査
117	下学田12	遺物包含地		1994年分布調査
118	下学田13	遺物包含地		1994年分布調査
119	下学田14	遺物包含地		1994年分布調査
120	萩野沢1	遺物包含地		1994年分布調査
121	萩野沢2	遺物包含地		1994年分布調査
122	萩野沢3	遺物包含地		1994年分布調査
123	萩野沢4	遺物包含地		1994年分布調査
124	トマン別1	遺物包含地		1994年分布調査
125	トマン別2	遺物包含地		1994年分布調査
126	トマン別3	遺物包含地		1994年分布調査
127	トマン別4	遺物包含地		1994年分布調査
128	トマン別5	遺物包含地		1994年分布調査
129	トマン別6	遺物包含地		1994年分布調査
130	トマン別7	遺物包含地		1994年分布調査
131	トマン別8	遺物包含地		1994年分布調査
132	トマン別9	遺物包含地		1994年分布調査
133	瑞穂池北岸	遺物包含地	縄文	1994年分布調査
134	トド山1	遺物包含地	縄文	1994年分布調査
135	大麻27	遺物包含地	縄文	1996年試掘
136	7丁目沢8	遺物包含地	縄文	1997年範囲確認
137	志文別2	遺物包含地	縄文	1997年所在確認

Ⅲ 調査の方法、遺物の分類

1 調査の方法

発掘区の設定（図Ⅲ-1-1・2）

現地調査の基本図は、北海道開発局石狩川開発建設部の「石狩川浚渫計画平面図」5,000分の1を使用した。委託を受けた調査区域は、工事計画と確認調査による遺跡範囲から東西200m×南北100mの長方形とされていたので、発掘区の設定は以下のように行った。

まず、この区域に5mの方眼を組み、東西・南北ラインを設定しそれぞれに数字を与えた。将来的に全方向に調査範囲が拡大する可能性も考慮し、北辺を66ライン、南辺を86ライン、西辺を135ライン、東辺を175ラインとした。5m発掘区（グリッド）の呼称は、方眼の北西角を読み、区域の北西角であれば66-135区となる。さらにこの5m方眼を2.5m四方に分割して、反時計回りに北西角からa、b、c、dと呼ぶ小発掘区（小グリッド）を設置し、調査の便を図った。

なお、20mごとの基本杭設置は㈱シン技術コンサルに委託した。そのため基準点として、調査区南側に造られ、調査区と平行に走る「対雁築堤」の基準ライン上のポイントを使用することとし、点間200mの5800・5600ポイントを選定した。5800ポイントからN-23°-Wに31.5mで調査範囲南辺、ここから南辺を1m東行した点を86-166の交点とし、同様に5600ポイントから振り出した点を確認修正点とした。これを基本杭として20m方眼と範囲四隅に基準杭の打設を発注し、座標値と標高を得た。調査に必要な5m杭は、その都度自ら打設した。

この方眼の平面直角座標は、第Ⅶ系で、
66-135：X=-96658.037、Y=-59338.484
86-175：X=-96828.373、Y=-59193.614 である。

杭標高は、66-132で8.447m、86-176で8.855mである。

調査計画・発掘調査の進行と手順

今年度の調査は、当初計画では全調査区の北東側、北辺66ライン、南辺70ライン、西辺159ライン、東辺175ラインの2,000㎡を調査対象とした。調査の進行により北辺で包含層の広がりを確認できたため、北辺の対象を65ラインまで広げ、最終的に2,400㎡を調査範囲とした。

昨年の特レンチ調査により遺構・遺物が多く検出されると予測された159・160ラインは全面発掘とし、161～175ラインには25%調査を行い、遺構・遺物の検出の濃淡を確認した。その結果、159～163-65・66・67/162-68・69・70ラインをⅡ層の全面手掘りによる調査とし、その他を重機と併用して確認調査を行うこととした。

手掘り発掘区は主に移植ゴテで調査を行った。状況に応じてスコップを併用した。手掘りでの調査は困難を極めた。これはⅡ層が河川堆積物粘質土層であるため、水分が多いと透水しづらく粘りが強くなり、乾燥すると固化して非常に硬くなりクラックが走り崩落するなど調査を行いづらい面があったためである。そのような状況下においても土層の細分データを意識しながら移植ゴテや竹べらなどを使用し、特に詳細な記録を残すように努めた。

重機併用区では遺構・遺物の確認とともに、昨年の特レンチ調査では壁面崩落などの危険性から行えなかったⅢ層の部分について調査をした。1回目の25%調査の後、重機により1mほどを除去、2回目の25%調査を行った。2回目ではグリッドを移植やスコップで1mほど調査した後、そこに深さ1mほどの特レンチを入れた。3回目も同様に行い標高4.5～3.5m付近で多量の自然木を検出した(Ⅵ

1 調査の方法

章参照)。Ⅲ層は砂と粘質土の互層であったため非常に崩れやすく、また雨水の流入により壁面が崩落するなどした。そのため周囲に溝を掘りグリット内に水が流れ込まないようにした。

昨年検出されて調査途中で埋め戻した土器集中1と土器集中3についても調査を行い、調査を終了している。

埋め戻し

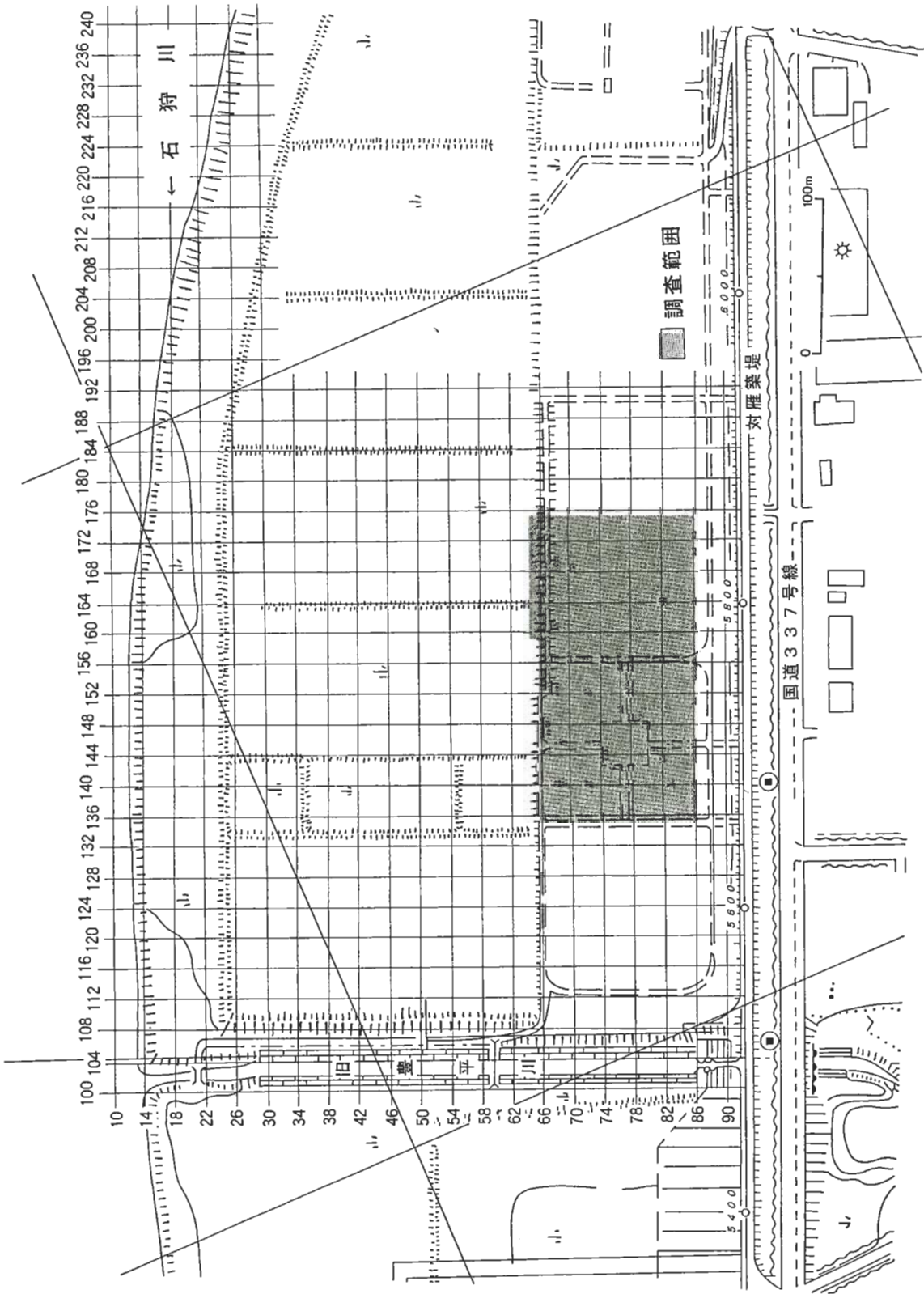
次年度以降の調査のため、壁面崩落防止などの安全対策として調査を行った部分について埋め戻し作業を行った。遺構・遺物の多く検出された、158ラインの壁面および71ラインの159～160ラインまではブルーシートをかけた後、径・高1mほどの大型土嚢を重機により壁際に当て入れ、隙間を小土嚢で埋めた。その上から再度ブルーシートで被覆して万全の体制を取った。160～163ラインの壁際はブルーシートで被覆し、小土嚢によって押さえた。164～175ラインは重機により埋め戻した。埋め戻しは石狩川に向かってなだらかなスロープ状になるように行った。

遺物の取り上げ・整理の方法

土器・石器等の遺物は、出土状況の詳細な記録化を行った。取り上げは基本的に小グリッドごとに取り上げているが、土器の口縁部や底部・石器に関しては点取りを行った。集中的に出土した土器破片については破損の状況を十分に検討して接合・復元作業を考慮した取り上げに努めた。微細遺物の密集部分や焼土は土壌ごとに取り上げたところもある。出土した遺物は、野外作業と平行して現地で水洗・注記作業を行った。小片あるいは微細なものを除いて、大多数の遺物には遺跡名・発掘区・出土層・取り上げ番号を注記した。現地では遺物収集台帳の作成・点検・補正（遺物台帳作成）、大まかな遺物の分類までを行った。

冬期の室内整理作業では、土器の接合・復元作業、土器・石器等の実測・製図、集計およびその他の記録類の整理を行った。昨年の調査で出土したものとの接合作業も行った。また、来年度以降の調査によりさらに接合・復元できることが予測される。そのため、来年度以降に接合・復元の可能性のあるものに関しては接合するにとどめている。

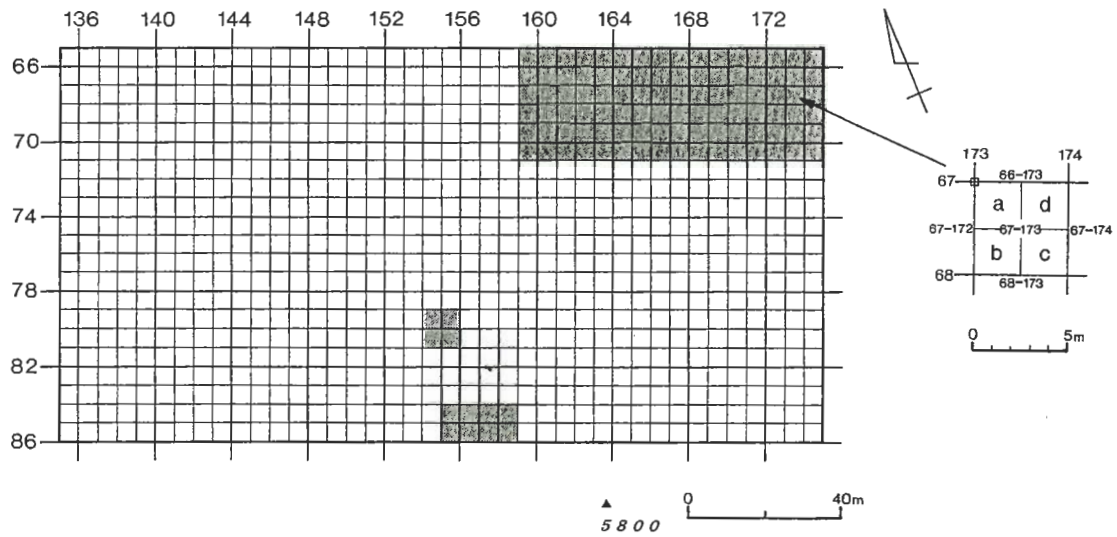
(酒井)



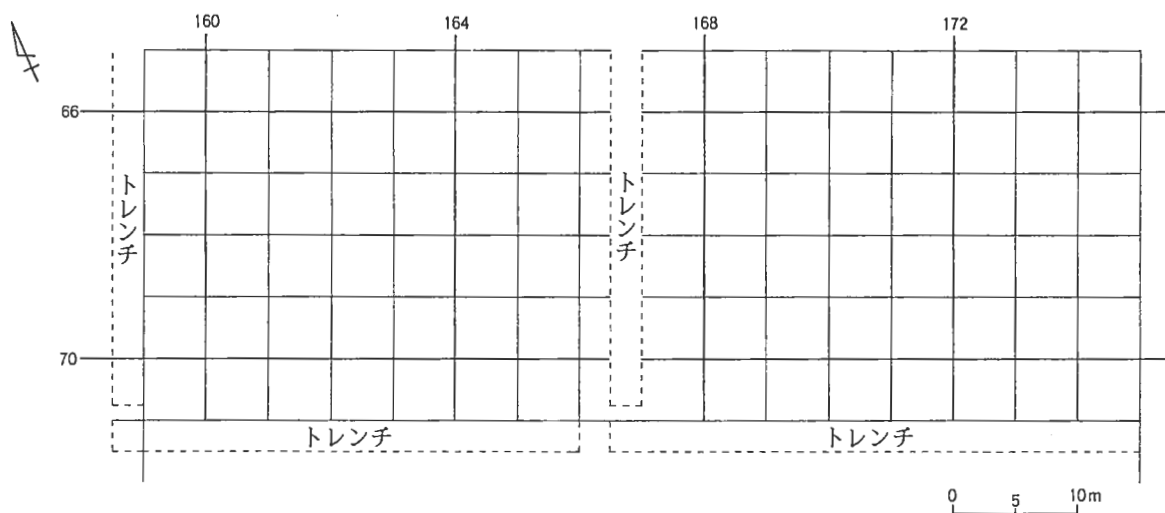
図Ⅲ-1-1 調査区設定図

1 調査の方法

平成 12 年度調査範囲図



平成 12 年度調査グリット図



図Ⅲ-1-2 調査範囲図

2 土層の区分

調査にあたっての基本的な土層の区分は、昨年のトレンチ調査によって得られた層位を使用した。ここでは遺構・遺物の多く検出された159・160・161ラインの東西方向セクションを示す。Ⅲ層以下の部分については崩落の危険性からセクション図を取ることができなかつたので、写真(図版Ⅵ-1)と文章での報告とする。

基本的にⅡ層までは東西方向、南北方向ともにほぼ水平に近い堆積状況をしている。Ⅲ層は西方向に向けて落ち込んで行く土層を示している。Ⅱ層とⅢ層の層界は不整合面となっている。

以下、土層図の説明をしたのち、各層の説明をすることとする。

図Ⅲ-2-1 土層図(1)

東西方向67ラインのセクション図である。遺構・遺物の多く検出された159・160のグリットの南壁土層断面図を掲載する。

P-24、F-44が重複して検出している様子がわかる。

Ⅱ層まではほぼ水平に堆積している状況が確認できる。Ⅲ層は粘質土と砂の互層となって西に向かって落ち込んでいく様子が確認できる。

Ⅱ-2-中層は160グリットの中ほど過ぎまでは5層を確認できるが、それ以东は確認できない。

図Ⅲ-2-2 土層図(2)(口絵-2、図版Ⅲ-1・2)

東西方向69ラインのセクションである。遺構・遺物の多く検出された159・160・161のグリット南壁土層断面図を掲載する。

Ⅱ層まではほぼ水平に堆積している状況が確認できる。Ⅲ層は粘質土と砂の互層となって西に向かって落ち込んでいく様子が確認できる。

Ⅱ-2-中層は159グリットまでは5または6層に分層することができるが160グリット以东は分層することができなかつた。調査範囲の西端でやや落ち込んでいる。

セクション図の中央部分は小流路があつたと考えられ、レンズ状の堆積を確認できる。小流路のあつた時期はⅡ-2-下層のころと考えられる。

161グリットで確認できる墳砂では約5～10cmの断層を検出した。

以下、細分した層の説明を記す。全体的に灰茶褐色～暗茶褐色の包含層であり、土色からの分層は困難であつた。わずかな土質・土色の違いや炭化物などの包含物から分層を行っている。

全体的な土色の傾向に関しては口絵-2を参照のこと。

- I 層 : 石狩川河川敷緑地造成時の盛土層。
- Ⅱ-1層 : 灰茶褐色粘土層。かたくしまる。乾燥などによりひび割れを起こしやすい土質である。範囲の全体にわたって堆積しているが、河川敷緑地造成時に削平を受けている部分も多い。遺構・遺物が多く検出される。縄文時代晩期末から統縄文時代初頭の包含層である。
- Ⅱ-2-上層 : 暗灰茶褐色シルト質粘土層。かたくしまる。調査範囲の全体に堆積している。遺構・遺物が多く検出される。縄文時代晩期末の包含層である。

2 土層の区分

Ⅱ-2-中層：暗茶褐色シルト質土層。しまる。調査範囲全体に堆積している。遺構・遺物が多量に検出される。縄文時代晩期末の包含層である。159ラインまでは焼土や遺物・炭化物などの検出状況から6層に分層が可能である。このことから下記のような分層を行っている。分層できない地点の遺構・遺物はⅡ-2-中層として報告している。以下で分層された6層について説明を行う。基本的に土色はほとんど変化せず、下層になるほど粒子が粗くなる。

Ⅱ-2-中1層：Ⅱ-2-上層に近い土質を示す。しまる。

Ⅱ-2-中2層：Ⅱ-2-上層に近い土質を示す。しまる。

Ⅱ-2-中3層：しまる。

Ⅱ-2-中4層：しまる。Ⅱ-2-中3層よりも砂質分が多くなる。

Ⅱ-2-中5層：しまりややあり。

Ⅱ-2-中6層：しまりややあり。Ⅱ-2-中5層よりも土色がやや明るい。層として確認できる場所は少ない。

Ⅱ-2-下層：暗茶褐色シルト質砂。しまりややあり。土色はⅡ-2-中層よりも若干明るい。ぼそぼそ感のある土質である。調査範囲の全体に広がっている。縄文時代晩期末の包含層である。

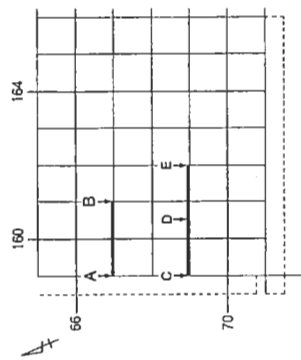
Ⅱ-3層：暗茶褐色砂。しまりなし。Ⅲ層とは不整合面を形成する。遺構・遺物がごく少量検出される。縄文時代晩期末の包含層である。

Ⅲ層：暗オリーブ～暗黒茶褐色砂とオリーブ粘土・青灰色粘土の互層となる。基本的には西に向かって落ち込む層位を示す。今年度おこなったⅢ層の調査では標高4m付近まではこのような層が続いていることがわかった。遺跡東側のⅢ層調査では標高4.7～3.5m付近で約3,000年前の自然木を多数検出した。(Ⅵ章・Ⅶ章-2参照)

攪乱：暗渠・B調査跡・草木などにより層を乱された部分。

墳砂：暗灰色砂。遺跡の南北方向に走る。遺跡のあちこちで確認することができる。墳砂に起因すると考えられる断層も検出されている。今年度のⅢ層調査で標高約3.5mまで掘り下げたが、ここよりも深いところから発していることが確認された。

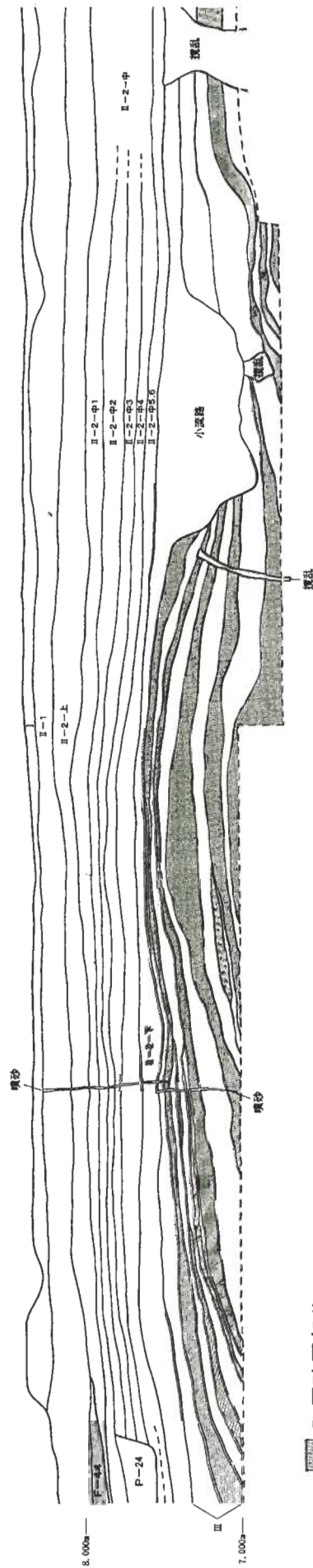
(酒井)



A
67-159-a
9.000a

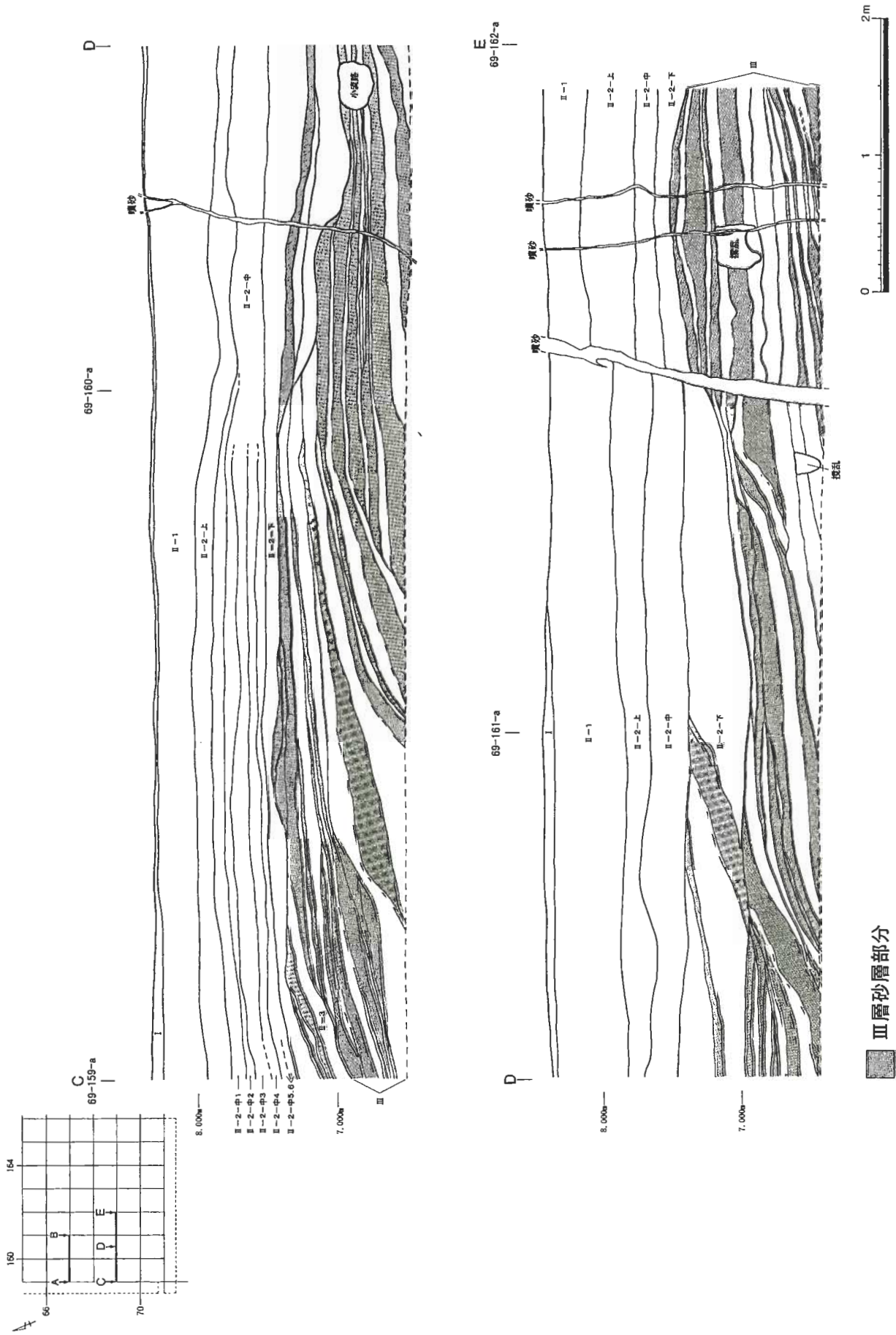
67-160-a

B



図Ⅲ-2-1 土層図(1)

2 土層の区分



図Ⅲ-2-2 土層図(2)

3 遺物の分類

(1) 土器

a 基本的な土器分類

基本的な分類は、『美沢川流域の遺跡群Ⅰ』（北海道教育委員会1977年）に準拠し、Ⅵ群以降の細分については『ユカンボシC15(3)』（北海道埋蔵文化財センター2000年）に準拠している。今回はⅡ-Ⅰ層の土器集中の報告がないためⅥ群a類初頭の土器とⅤ群c類末の分別の困難は生じなかった。

発掘調査においては、Ⅴ群c類とⅥ群c類が出土した。石狩川左岸汀線採集土器の中にⅢ群、Ⅳ群c類（堂林式）、Ⅴ群、Ⅵ群a類、Ⅵ群a類（アヨロ1類）、Ⅶ群がある。Ⅱ章3節(1)参照。

Ⅰ群 縄文時代早期に属する土器群を本群とする。今回は出土していない。

a類：貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群

b類：縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文のある土器群

b1類：東釧路ⅡⅢ式に相当する。 b2類：中茶路式に相当する。

b3類：コッタロ式に相当する。 b4類：東釧路Ⅳ式に相当する。

Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群を本群とする。今回は出土していない。

a類：胎土に繊維を含み厚手で縄文が施された丸底・尖底の土器群

a1類：網文、組紐回転文、羽状縄文が施された土器群 a2類：静内中野式に相当する

b類：円筒土器下層式、大麻Ⅴ式に相当する。

Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群を本群とする。今回は出土していない。

a類：円筒土器上層式、萩ヶ岡1式、萩ヶ岡2式に相当する。

b類：萩ヶ岡2式より後出の土器

b1類：天神山式に相当する。

b2類：北筒式(トコロ6類)、ノダップⅡ式、

b3類：柏木川式に相当する。

煉瓦台式に相当する。

Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群を本群とする。今回は出土していない。

a類：余市式～入江式に相当する。

c類：堂林式～御殿山式に相当する。

b類：船泊上層式～エリモB式に相当する。

Ⅴ群 縄文時代晩期に属する土器群を本群とする。c類が出土している。

a類：大洞B式、大洞BC式に相当する。 c類：大洞A式、大洞A'式に相当する。

b類：大洞C₁式、大洞C₂式に相当する。

Ⅵ群 続縄文時代に属する土器群を本群とする。 c類が2点出土している。

a類：大狩部式、江別太中層・下層・最下層の土器群、後北式に並行しない恵山式（南川Ⅲ群・アヨロ1・2類）に相当する。

b類：後北A式、後北B式、後北C₁式、後北式に並行する恵山式（南川Ⅳ群・アヨロ3類）に相当する。

c類：後北C₂・D式、北大Ⅰ式に相当する。

d類：北大Ⅱ式、北大Ⅲ式に相当する。十勝茂寄式もこの範疇である。

Ⅶ群 擦文文化期に属する土器群を本群とする。今回は出土していない。

a類：千歳市美々8遺跡における佐藤和雄分類（『美沢川流域の遺跡群XⅢ』北海道埋蔵文化財センター1989年）のⅡ・Ⅲに相当する。

b類：佐藤和雄分類のⅣ・Ⅴ・Ⅵに相当する。

c類：佐藤和雄分類のⅦ・Ⅷに相当する。

d類：佐藤和雄分類のⅨ・Ⅹに相当する。

b V群c類の記述について(表Ⅲ-3-1)

深鉢・浅鉢の口縁部～胴部に施される施文と底部の形態とについて説明を行う際に、記号の連繋を用いて土器の解説を行うことにした。以下に記号の意味を示す。

表Ⅲ-3-1 在地系深鉢・浅鉢の口縁部～胴部の施文記号一覧






下地調整	背景文様	上描き文様
A：縄文の後にナデ	a：櫛目（櫛状原体による密集した沈線文）	1：縄線文（2段撚り）
B：縄文のまま	b：沈線文	2：縄線文（1段撚り）
C：磨耗等による不明	c：縄線文（2段撚り）	3：沈線文
	d：背景文様がない	4：上描き文様がない
	e：縄線文（1段撚り）	5：不詳

下地調整とは施文以前の器表の状態である。背景文様と上描き文様とは、文様に重複がある場合のための呼称である。背景文様とは、施文工程の初めに口縁部を圍繞する様に施されるため、上描き文様の下敷きになる。上描き文様とは、施文工程の仕上げ段階に描かれる。

例えば、「Ac3」であれば、縄文の後にナデ→2段撚りの縄線文→沈線文という施文工程が進行したということである。

(鈴木)

表Ⅲ-3-1 深鉢・浅鉢の底部形態の記号一覧

形態	断面図
A：凸底	
B：凸底で立ち上がり部分が肥厚	
C：凸底で外底面周縁が凹む	
D：平底	
E：揚げ底	
F：不明	

(2) 土製品

今年度の調査では焼成粘土塊が出土している。

(3) 石器・石製品

器種別の大分類にとどめ、記号などによる細分は行っていない。掲載遺物に関しては文章中で説明している。今回の調査で出土した石器で使用した分類は以下のとおりである。

剥片石器には、石鏃、石錐、スクレイパー類、二次加工痕のある剥片（Rフレイク）、刃毀れ状の使用痕のある剥片（Uフレイク）がある。

礫石器には、石斧、たたき石、台石、砥石、加工痕のある礫がある。

その他には、石核、原石、軽石、石炭、礫、フレイクがある。

石製品には、勾玉がある。

なお、分類の中で「片」としたものは石器の明確な部位の残存していないものや接合の可能性のあるものである。

(酒井)

IV 遺構と遺物

1 土坑と出土遺物

(1) 概要

今年度の調査では昨年検出されたものの続きを含め、17基が確認された。土坑は覆土と包含層の土質がほぼ同一なため、検出は困難を極めた。焼土との切り合いや、遺物の出土状況、わずかな土質の違いなどから確認を行った。このような状況のため土坑の上面は調査中に削平してしまったものが多いと考えられる。

土坑は今年度調査区の西側、159・160ラインで確認されている。坑底面もしくはその直上において多量の炭化物を検出するものが多く見受けられた。その炭化物と一緒に遺物が出土している。

土坑の性格としては今年度調査されたもので土壙墓と見られるものは確認できなかった。

P-12 (図IV-1-2、表IV-10・11、図版IV-1)

位置 67-159-c / 68-159-d 長軸方向 N-55°-W

規模 1.04 / 0.98 × 0.42 / 0.40 × 0.18m

調査 II-2-上層調査中に炭化物が円形に巡る場所を検出したのでトレンチを入れたところ落ち込む土層を確認したので土坑とした。

覆土 2層に炭化物が微量含まれるが、II-2-上層とはほぼ同一である。

形態 平面形は楕円形、坑底は皿状になっている。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 検出された層位と遺構周辺から出土する遺物から縄文時代晩期末と考えられる。

P-16 (図IV-1-2、表IV-10・11、図版IV-2)

位置 68-159-c 長軸方向 N-34°-E

規模 0.82 / 0.70 × 0.68 / 0.54 × 0.14m

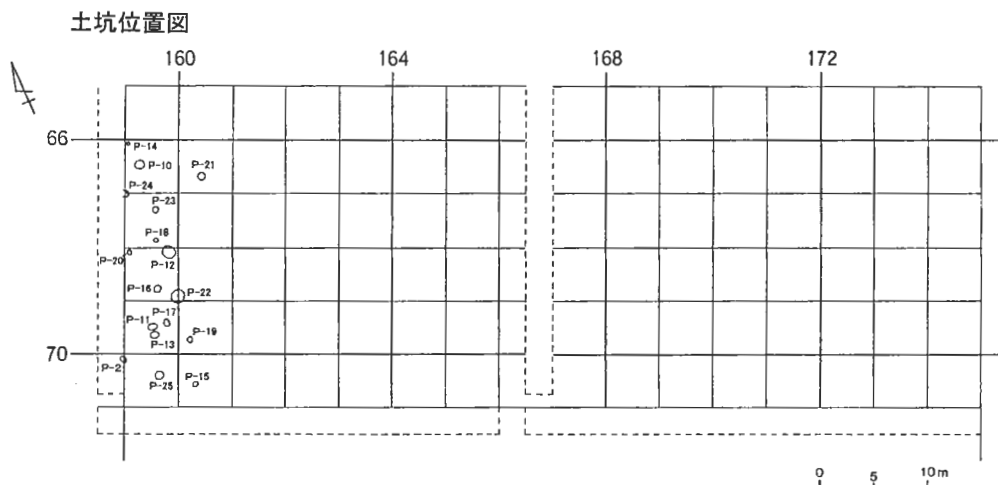
調査 II-2-上層調査中、土器片が縦になって出土していることから、トレンチをいれて確認したところ土坑であることがわかった。

覆土 埋め戻しかどうかは不明であるが、炭化物を微量含む均一な覆土である。

形態 平面形は楕円形、底面は平坦である。

遺物出土状況 覆土1層から縄文時代晩期末の土器片が17点出土した。

時期 出土した土器片から縄文時代晩期末と考えられる。



図IV-1-1 土坑位置図

1 土坑と出土遺物

P-17 (図Ⅳ-1-2、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-3)

- 位置 69-159-c/d 長軸方向 N-5°-E
規模 0.86/0.72×0.56/0.50×0.19m
調査 II-2-上層調査中、遺物が落ち込むように検出されたことからトレンチをいれて確認したところ土坑であることがわかった。
覆土 炭化物を多く含む。流れ込んだものと考えられる。
形態 平面形は不定形な楕円形、坑底は皿状になっている。
遺物出土状況 遺物は覆土中に流れ込んだような状態で出土している。縄文時代晩期末の土器片65点、石核1点、フレイク11点、礫片2点が出土した。
時期 出土した土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

P-22 (図Ⅳ-1-2、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-1)

- 位置 68-159-c/68-160-b 長軸方向 N-31°-E
68-159-a/69-160-a
規模 0.90/0.80×0.52/0.50×0.19m
調査 68ラインメインセクション北壁に断面で確認された。底面では炭化物が多く検出され、それに伴い遺物が出土した。
覆土 坑底部に炭化物を多く含む。流れ込んだものと考えられる。
形態 平面形はほぼ円形、坑底は皿状になっている。
遺物出土状況 坑底の炭化物と一緒に縄文時代晩期末の土器片50点、Rフレイク1点、Uフレイク1点、フレイク7点、軽石7点、礫片4点が出土した。
時期 出土した土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

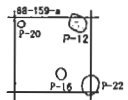
P-19 (図Ⅳ-1-2、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-2)

- 位置 69-160-b 長軸方向 不明
規模 (0.50) / (0.44) × - / - × (0.20) m
調査 II-2-上層調査中に土器片が縦に検出されたことからトレンチをいれて確認したところ土坑であることがわかった。その際に土坑の南東側は消失してしまった。
覆土 1層は土坑とは関係のないII-1層の焼土F-206の影響により被熱している。覆土は炭化物を含み、埋め戻されたものと思われる。
形態 トレンチにより消失してしまったため、南東部の形状が不明であるが、ほぼ円形から楕円形の形状をしていたものと思われる。
遺物出土状況 土器片が縦に立つように出土している。覆土中から縄文時代晩期末の土器片13点、フレイク1点、礫1点が出土した。
時期 出土した土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

P-21 (図Ⅳ-1-2、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-2)

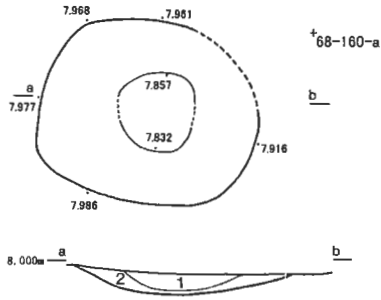
- 位置 66-160-b/c 長軸方向 N-7°-E
規模 0.66/0.64×0.34/0.34×0.35m
調査 II-2-上層を調査中一括土器が検出されたため、トレンチを入れたところ土坑であることが確認された。調査から検出面はII-2-上層であるが、構築面はもっと上であることが確認された。
覆土 1層は遺物を含み、2層は炭化物を含む。埋め戻されたものと考えられる。

II-2-上層検出の土坑

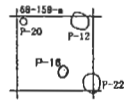


P-12

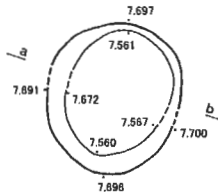
+68-159-c



土層注記
 1: 灰茶褐色土: かたくしまる 粘性あり
 II-2-上層とほぼ同じである
 2: 灰茶褐色土:
 2~10mm程度の炭化物を微量含む



P-16

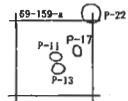


+69-159-d



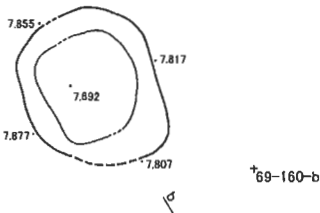
土層注記
 1: 暗茶褐色土: しまる 粘性あり
 5mmほどの炭化物が微量含まれる

+69-160-a



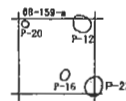
P-17

+69-159-c



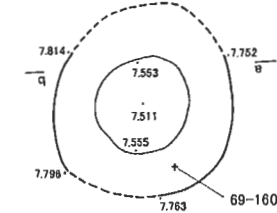
土層注記
 1: 灰黄茶褐色土: しまり弱い 粘性あり
 5~10mmほどの炭化物含む

+69-160-b

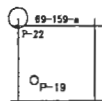
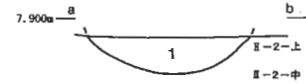


P-22

+69-159-d

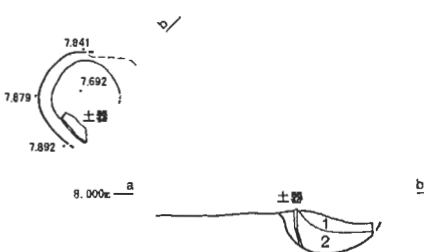


土層注記
 1: 黄灰褐色土: かたくしまる 粘性あり
 坑底に3~10mm程度の炭化物が多く検出される



P-19

+69-160-b



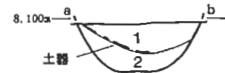
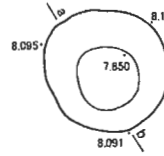
土層注記
 1: 暗赤褐色焼土: ややしまる 粘性あり
 F-206の影響により被熱したもの
 2: にぶいオリープ色シルト質粘土: ややしまる 粘性あり
 10~30mm程度の炭化物含む

+70-160-a



P-21

+66-160-c



土層注記
 1: 暗灰黄色粘質土: しまる
 一括土器など遺物を含む
 2: 暗灰黄色粘質土: しまる
 10~20mmの炭化物を多く含む

+67-160-d

図IV-1-2 P-12・16・17・22・19・21

1 土坑と出土遺物

形態 平面形はほぼ円形で底面は平坦である。

遺物出土状況 1層の下面に一括土器が検出された。縄文時代晩期末の土器片91点、礫片4点が出土している。

時期 出土した土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

P-15 (図Ⅳ-1-3、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-3)

位置 70-160-b **長軸方向** N-71°-W

規模 0.54/0.50×0.36/0.30×0.09m

調査 II-2-中層調査中に炭化物が集中している場所を検出したので、トレンチをいれて確認したところ、土坑であることがわかった。

覆土 炭化物や骨片が含まれ、埋め戻されたような痕跡が見られた。

形態 平面形はほぼ円形、底面は平坦である。

遺物出土状況 覆土4層より縄文時代晩期末の土器片が16点出土している。

時期 出土した土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

P-10 (図Ⅳ-1-3、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-4)

位置 66-159-a/b **長軸方向** N-64°-W

規模 1.08/0.88×0.82/0.64×0.32m

調査 II-2-中1層の調査中、楕円形に遺物の出土の見られない場所があり、そこにトレンチを入れた結果、土坑であると確認された。

覆土 1・2層は埋め戻しのような状況を示すが、3層以下は流れ込みの堆積状況を示す。遺物・炭化物を多く含む。

形態 平面形は楕円形、坑底面は平坦である。

遺物出土状況 3層以下の流れ込みの層から出土している。縄文時代晩期末の土器片85点、石鏃1点、たたき石2点、加工痕のある礫1点、フレイク6点、軽石27点、礫片1点が出土している。

時期 出土した土器から縄文時代晩期末と考えられる。

P-11 (図Ⅳ-1-3、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-5)

位置 69-159-a/b/c/d **長軸方向** N-73°-W

規模 0.96/0.88×0.58/0.46×0.12m

調査 II-2-中1層の調査中、楕円形に遺物の出土の見られない場所があり、そこにトレンチを入れた結果、土坑であると確認された。

覆土 覆土は流れ込んだもの。2層には炭化物が多く含まれている。

形態 平面形は楕円形、坑底面は皿状である。

遺物出土状況 2層から流れ込んだように出土している。縄文時代晩期末の土器片78点、フレイク15点、軽石6点が出土している。

時期 出土した土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

P-13 (図Ⅳ-1-3、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-6)

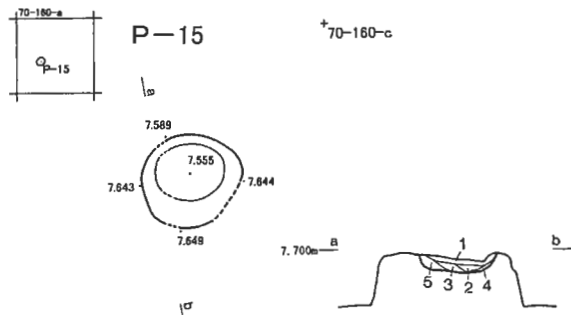
位置 69-159-b/c **長軸方向** N-82°-W

規模 0.90/0.80×0.77/0.66×0.19m

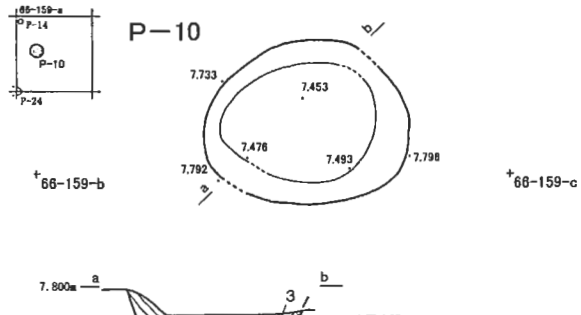
調査 II-2-中1層の調査中、楕円形に遺物の出土の見られない場所があり、そこにトレンチを入れた結果、土坑であると確認された。

II-2-中層検出の土坑

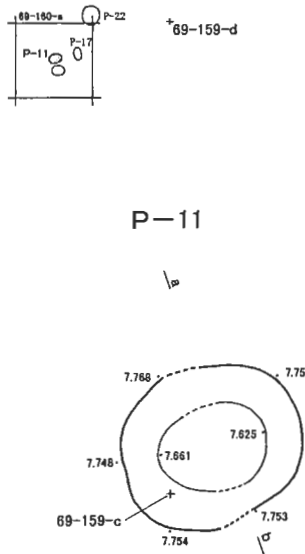
II-2-中1層検出の土坑



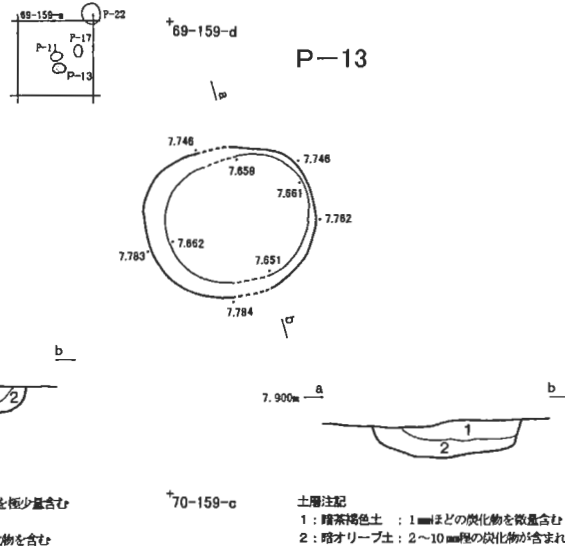
- 土層注記
 1: 暗茶褐色土: しまる 粘性あり
 II-2-中層とほぼ同じ土質
 2: 暗茶褐色土: しまる 粘性あり
 5mmほどの炭化物、微細な骨片が含まれる
 3: 暗茶褐色土: しまる 粘性あり
 骨片が微量含まれる
 4: 暗茶褐色土: しまる 粘性あり
 2~3mmの炭化物が少量含まれる
 5: 暗茶褐色土: しまる 粘性あり
 1mmほどの炭化物が微量含まれる



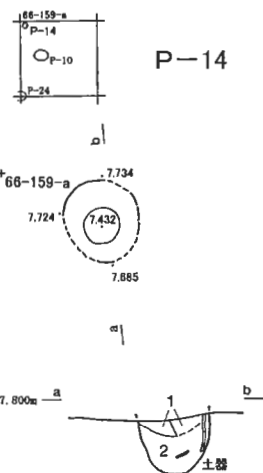
- 土層注記
 1: 暗茶褐色土: かたくしまる 粘性あり
 炭化物を極少量含む
 2: 暗茶褐色土: かたくしまる 粘性あり
 1層よりもやや明るい
 炭化物が混入する
 3: 暗茶褐色土: しまる 粘性あり
 炭化物が少量混入する
 4: 暗茶褐色土: しまる 粘性あり
 炭化物が多量に混入する
 5: 暗茶褐色土: しまる 粘性あり
 炭化物が少量混入する
 6: 暗茶褐色土: しまる 粘性あり
 5層よりも炭化物多い



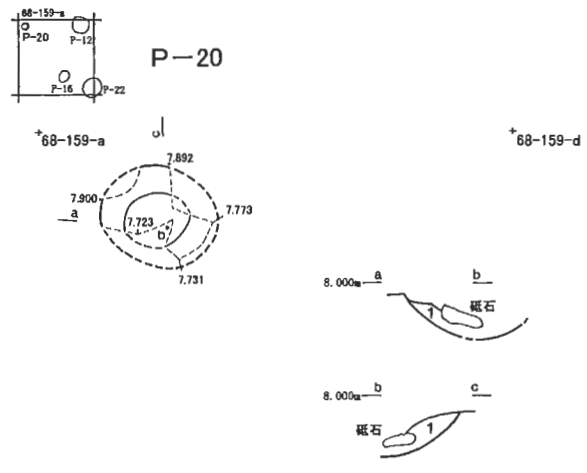
- 土層注記
 1: 暗茶褐色土 : 1mmほどの炭化物を極少量含む
 2: 暗オリーブ土: しまる
 10~20mm程度の炭化物を含む



- 土層注記
 1: 暗茶褐色土 : 1mmほどの炭化物を微量含む
 2: 暗オリーブ土: 2~10mm程度の炭化物が含まれる。



- 土層注記
 1: 暗茶褐色土: かたくしまる
 炭化物含む
 2: 暗茶褐色土: かたくしまる
 炭化物含み、1層よりもやや明るい



- 土層注記
 1: 暗黄茶褐色土: かたくしまる 粘性ややあり
 灰褐色土ブロックを多く含む
 炭化物含む

<遺物出土状況図>



図IV-1-3 P-15・10・11・13・14・20

1 土坑と出土遺物

覆土 覆土は流れ込んだもの。2層には炭化物が多く含まれている。

形態 平面形は楕円形、坑底面は平坦である。

遺物出土状況 2層から流れ込んだように出土している。縄文時代晩期末の土器片206点、Rフレイク2点、フレイク32点、軽石4点、礫片2点が出土した。

時期 出土した土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

P-14 (図Ⅳ-1-3、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-4)

位置 66-159-a **長軸方向** N-8°-E

規模 (0.46) / (0.38) × 0.19 / 0.19 × 0.30m

調査 土器が縦に検出されたことからトレンチを入れたところ、掘り込みを確認した。

覆土 ほぼ均一な覆土のため、埋め戻されたと考えられる。

形態 平面形はほぼ円形を示す。

遺物出土状況 土器片が土坑の壁面に沿うような状態で出土している。縄文時代晩期末の土器片が47点、フレイクが3点出土している。

時期 出土した土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

P-20 (図Ⅳ-1-3、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-3)

位置 68-159-a **長軸方向** 不明

規模 -/- × -/- × 0.19m

調査 II-2-中1層調査中、5の砥石が検出されたことから、トレンチをいれて土層確認を行ったところ土坑であることがわかった。

覆土 炭化物を含んだ埋め戻し土と考えられる。

形態 削平してしまいはっきりとした形状はわからないが、ほぼ円形であると考えられる。底面は皿状になっている。

遺物出土状況 覆土中から縄文時代晩期末の土器片28点、焼成粘土塊1点、たたき石1点、砥石1点、珪岩原石1点、フレイク3点、礫片1点が出土している。砥石はほぼ底面に近い位置にあったと考えられる。

時期 出土した土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

P-24 (図Ⅳ-1-4、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-6)

位置 66-159-b / 67-159-a **長軸方向** 不明

規模 -/- × -/- × (0.26) m

調査 昨年のトレンチ調査の壁面にセクションを確認して検出した。昨年の調査では確認されおらず、西側を削平している。F-44およびF-91を切って構築されている。

覆土 炭化物が多く混入する。埋め戻されたものと考えられる。

形態 西半部を昨年の調査時に削平したため、平面形は不明。坑底は平坦である。

遺物出土状況 覆土中から縄文時代晩期末の土器片10点、軽石4点、礫片1点が出土している。

時期 出土した土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

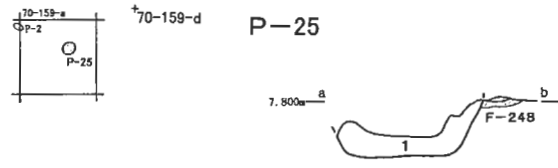
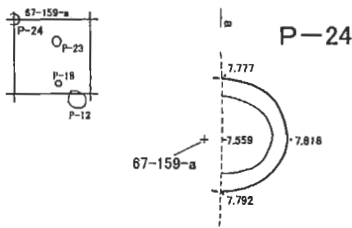
P-25 (図Ⅳ-1-4、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-6・7)

位置 70-159-d **長軸方向** 不明

規模 -/- × -/- × (0.30) m

調査 F-248を切る線が見えたことからトレンチをいれて確認したところ掘り込みを検出し

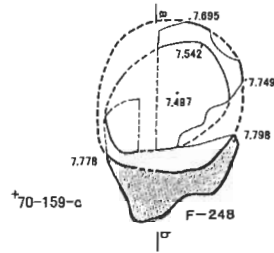
II-2-中2層検出の土坑



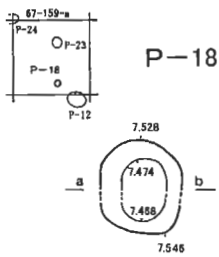
土層注記
1: 暗茶褐色土: しまる 粘性あり
F-248 のものと見られる焼土粒と炭化物が混入する



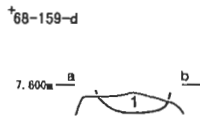
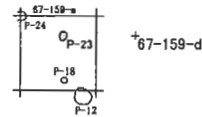
土層注記
1: 暗茶褐色土: ややしまる 粘性あり
炭化物が多く混入する



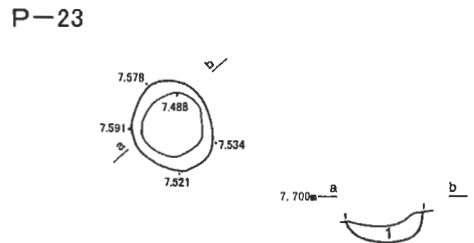
II-2-中4層検出の土坑



II-2-中5層検出の土坑

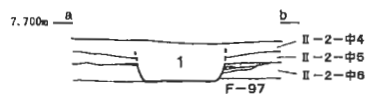
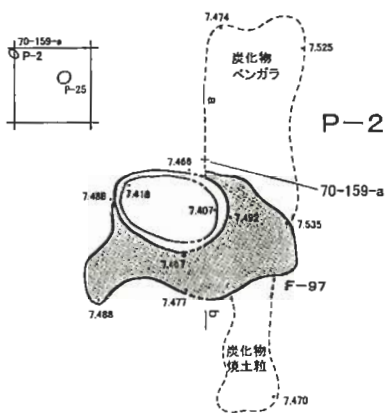


土層注記
1: 暗茶褐色土: しまる 粘性なし
5~20mm程度の炭化物を含む



土層注記
1: 明灰黄褐色土: しまる 粘性ややあり
5mmほどの炭化物が混入する

II-2-中6層検出の土坑



土層注記
1: 黄褐色土: しまる 粘性ややあり
炭化物を少量含む

図IV-1-4 P-24・25・18・23・2

1 土坑と出土遺物

た。F-248を切っていることからⅡ-2-中2層よりも新しいものである。

覆土 F-248のものと思われる焼土粒と炭化物が混入する。埋め戻されたものと思われる。

形態 検出された状況から、平面形はほぼ円形になると考えられる。坑底は平坦である。

遺物出土状況 覆土中から縄文時代晩期末の土器片37点、焼成粘土塊1点、フレイク1点が出土している。

時期 出土した土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

P-18 (図Ⅳ-1-4、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-7)

位置 67-159-c 長軸方向 N-23°-E

規模 0.70/0.44×0.33/0.24×0.08m

調査 Ⅱ-2-中4層を調査中周囲と土色の異なる部分を検出したため、トレンチを入れて確認したところ土坑であることがわかった。構築面はもっと上層であると思われる。

覆土 炭化物を含む埋め戻し土と考えられる。

形態 平面形は楕円形、底面は皿状になっている。上部は削平したものと思われる。

遺物出土状況 覆土中から縄文時代晩期末の土器片3点が出土している。

時期 出土した土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

P-23 (図Ⅳ-1-4、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-7・8)

位置 67-159-d 長軸方向 N-3°-W

規模 0.50/0.42×0.34/0.32×0.11m

調査 Ⅱ-2-中5層調査中、炭化物が周るように検出されたため半裁したところ、土坑であることが確認された。

覆土 底面に炭化物が多く検出される。覆土は包含層とほぼ同じで炭化物が混入する。流れ込んだものと考えられる。

形態 平面形はほぼ円形、底面は皿状になっている。

遺物出土状況 底面の炭化物と一緒に縄文晩期末の土器片11点、軽石1点が出土した。

時期 出土した土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

P-2 (図Ⅳ-1-4、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-8)

位置 70-158-b/70-159-a 長軸方向 N-48°-W

規模 0.62/0.44×0.52/0.34×0.07m

調査 昨年からの継続調査である。Ⅱ-2-中6層を調査中、F-97を切る状態で検出された。トレンチ壁面の観察からはⅡ-2-中4層から構築されたと考えられる。

覆土 炭化物を含む、埋め戻された覆土と考えられる。

形態 平面形は楕円形、坑底は平坦でⅡ-3層上面に達している。

遺物出土状況 覆土中から縄文時代晩期末の土器片が3点出土している。

時期 出土した土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

(酒井)

(2) 土坑出土の土器について (図Ⅳ-1-5~7、表Ⅳ-1、図版Ⅳ-8~11)

P-10の土器 (図Ⅳ-1-7-5~10)

5は深鉢口縁部片、口縁端面が水平、RL(縦走)→B d 3(横位)。6は浅鉢口縁部片、口縁端は丸みを帯びる。A d 4、口縁端面には棒の側面圧痕。7は浅鉢口縁部片、口縁端面が水平で口縁端は外側へ肥厚、RL(斜走)→B d 4。台形突起がある。8は浅鉢口縁部片、口縁端面が水平で口縁端は外側へ肥厚、RL(縦走)→B d 4。9は鉢の底部で形態はB、RL(斜走)→?。10は鉢の底部で形態はB、RL(斜走)、外底部縁には先端が尖る棒の刺突文。

P-11の土器 (図Ⅳ-1-5-1、図Ⅳ-6-11)

1は深鉢の口縁部~胴部、P-22出土破片と接合関係を持つ。内傾する口縁端面、RL(縦走)→A b(横位)3(5本単位の連続山形文)、外側口縁端には棒の側面圧痕。11は浅鉢口縁部片、やや内傾する口縁端面、RL(斜走)→B d 4。

P-13の土器 (図Ⅳ-1-7-12~17)

12は深鉢口縁部片、口縁端は丸みを帯びる。?→A d 3(横位)、R縄線文が口縁部に施される。13は深鉢口縁部片、やや内傾する口縁端面、?→A d 3(横位)、R縄線文が口縁部に施される。12と13は同一個体である。14は深鉢口縁部片、内傾する口縁端面、RL(縦走)→A d 3(横位)。15は浅鉢口縁部片、やや内傾する口縁端、RL(斜走)→B d 4。16は鉢口縁部片、口縁端面が水平、A d 3(横位)、外側口縁端には棒の側面圧痕。17は16の底部にあたる。貼り付け高台。16と17の胎土は砂粒を多く含む粗い。

P-14の土器 (図Ⅳ-1-5-2、図Ⅳ-1-6-18・19)

2は深鉢、F-186出土破片と接合関係を持つ。やや内傾する口縁端面で口縁端は外側に肥厚、RL(斜走)→B d 3(横位)、底部はB。18は深鉢口縁部片、内傾する口縁端面、RL(縦走)→A d 3(横位・連続山形文)+円形の刺突、外側口縁端には棒の側面圧痕。19は口縁端面が水平、?→A d 1(横位RL)、口縁端面には棒の側面圧痕。

P-15の土器 (図Ⅳ-1-7-20)

20は浅鉢突起片、突起頂部には渦巻状のL縄線文+円形の刺突文、突起の脇にはL縄線文がある。

P-17の土器 (図Ⅳ-1-7-21)

21は小型の深鉢口縁部片、口縁端は丸い、丸みを帯びた小突起が付く、RL(縦走)→A d 3(横位)。

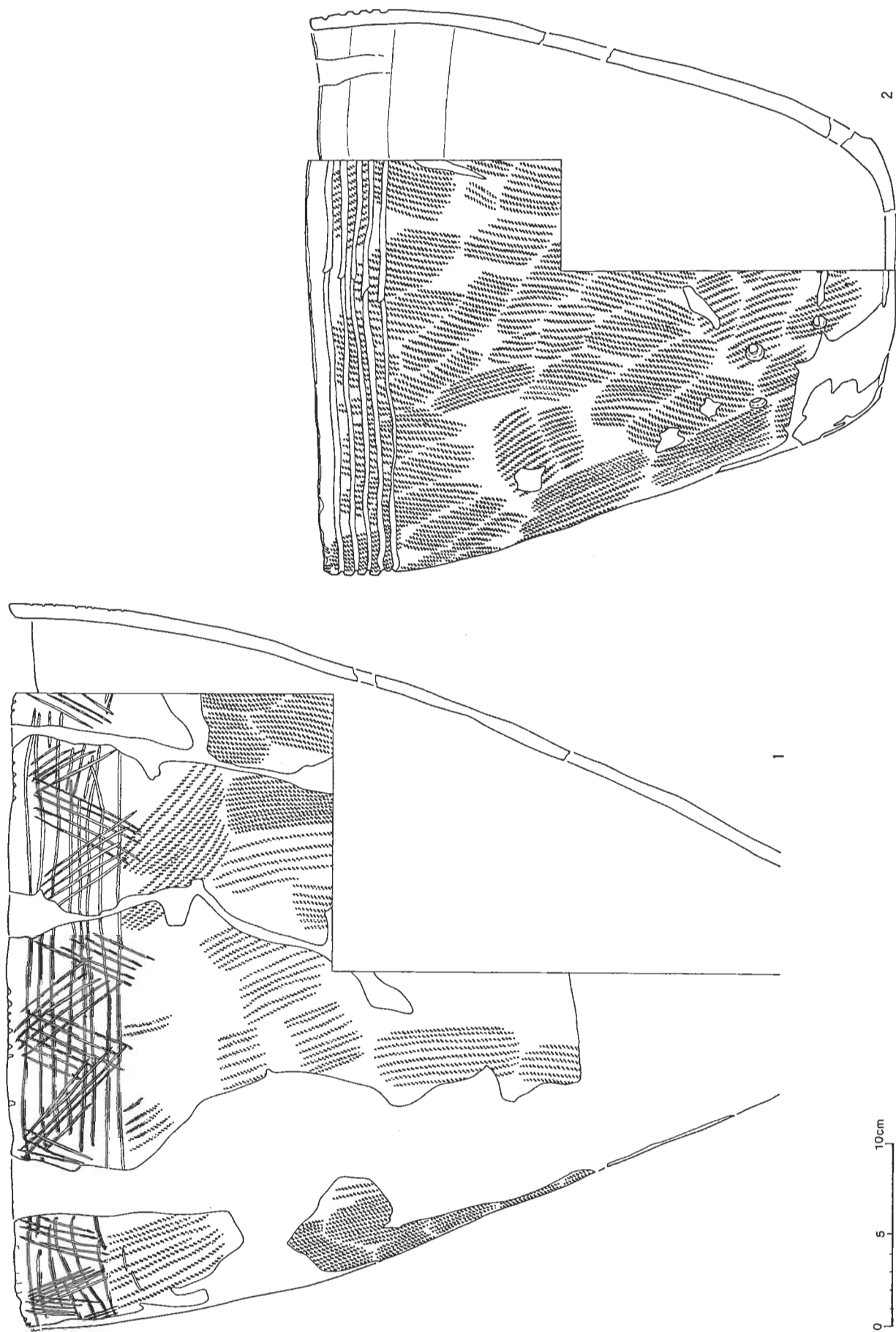
P-20の土器 (図Ⅳ-1-6-3)

3は台付き浅鉢の体部~口縁部、低い双峰突起があり、内面には対応するように双峰の凹線文がある。外面上半部には短い押し引き文があり、下半には縄文施文の工字文がある。高橋龍三郎の大洞C₂式末段階~A式古段階(『大洞C₂式土器細分のための諸課題』『先史考古学研究4』1993年)、福田正宏の聖山II a群:大洞A₁式古段階(『北部亀ヶ岡式土器としての聖山式土器』『古代108』2000年)にあたる。胎土は精良で焼成良好。

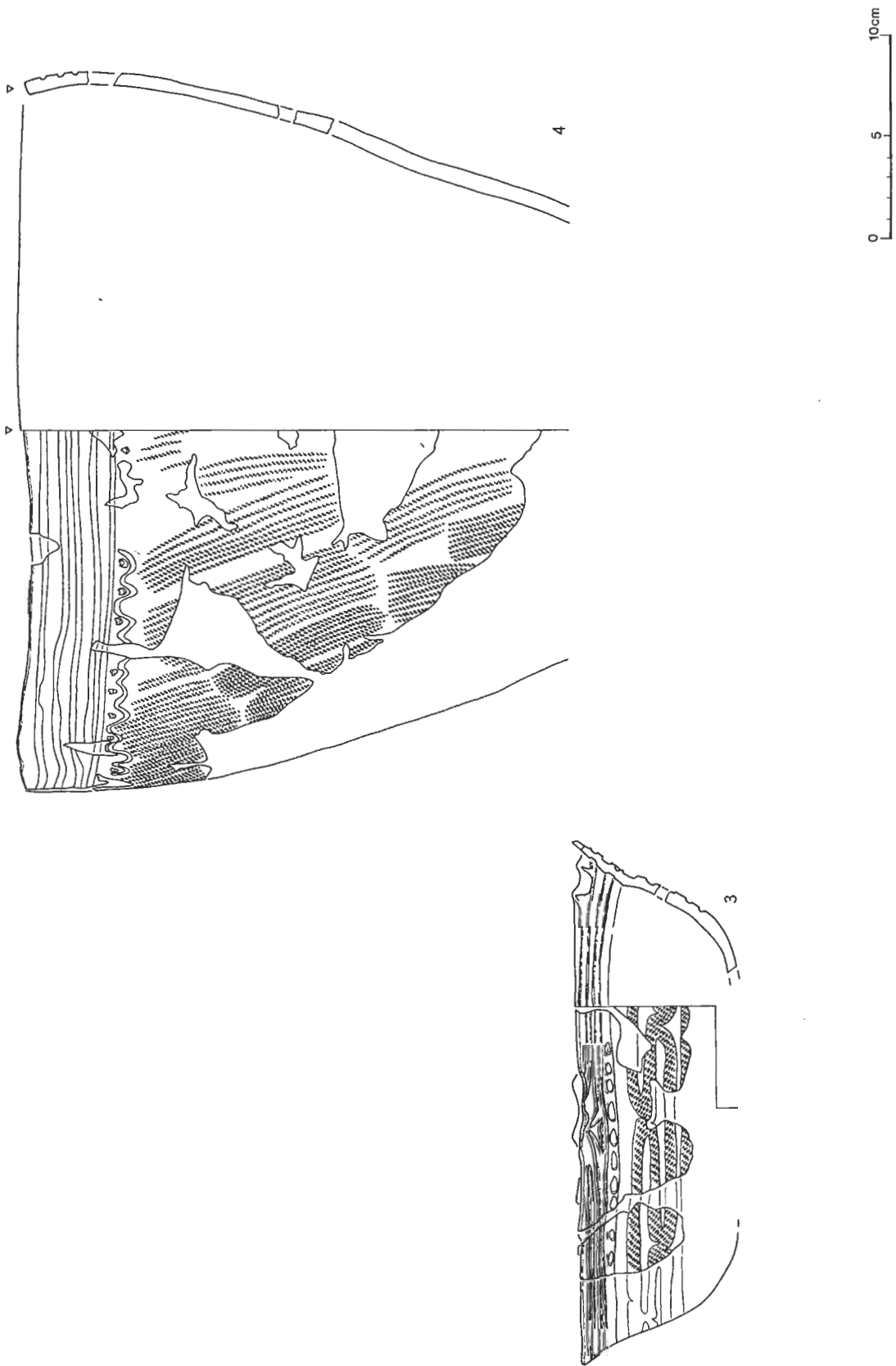
P-21の土器 (図Ⅳ-1-6-4)

4は深鉢の胴部~口縁部、内傾する口縁端面、RL(縦走)→A d 3(横位・連繫山形文)+刺突文、連繫山形文は一筆書きで描かれる。

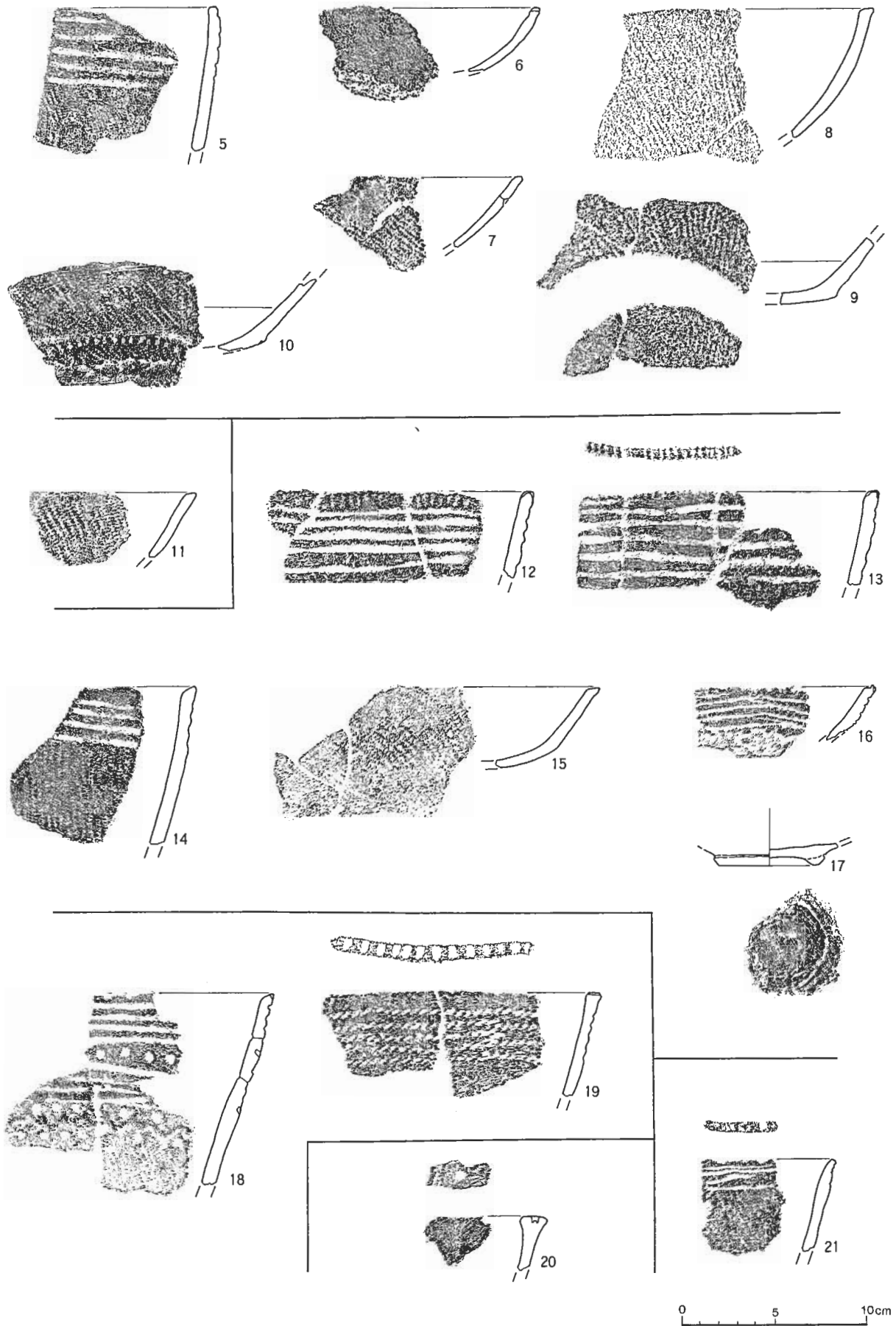
(鈴木)



図Ⅳ-1-5 土坑出土の土器(1)



図N-1-6 土坑出土の土器(2)



図IV-1-7 土坑出土の土器(3)

(3) 土坑出土の石器等について (図Ⅳ-1-8)

土坑からは156点の石器等が出土している。フレイク・軽石・礫で145点を占める。土坑から出土する石器には特に包含層出土のものと変わるものは見受けられない。P-20出土の砥石は今年度の調査では最も大きく、重い石器であった。

P-10の石器 (図Ⅳ-1-8-1~3)

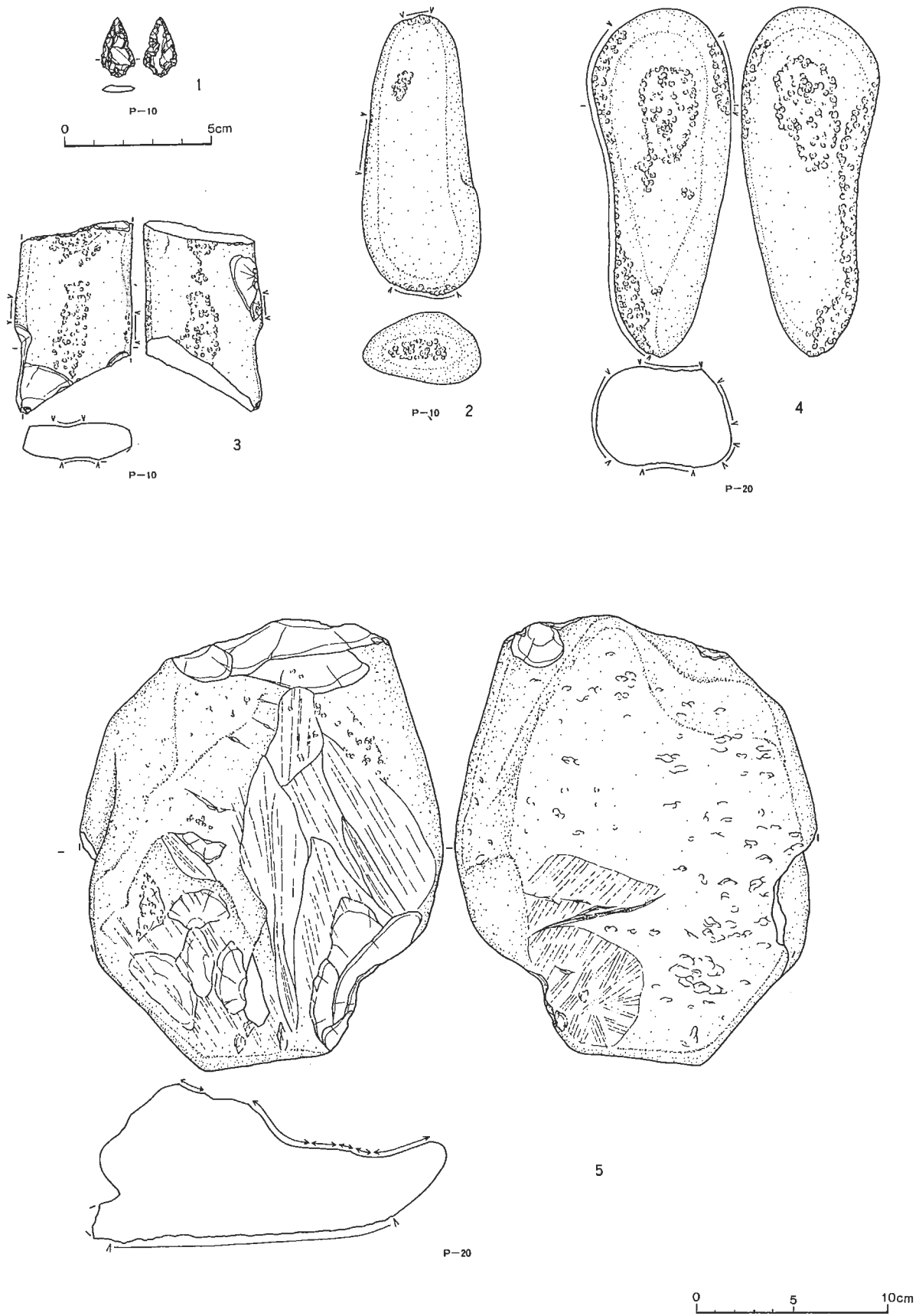
1は有茎の石鏃。石質は黒曜石。2はたたき石片。両端部は欠損しているため不明であるが、扁平な礫の腹背部に顕著な敲打痕がある。石質は泥岩。3はたたき石。扁平な礫の両端部に敲打痕がある。石質は砂岩。

P-20の石器 (図Ⅳ-1-8-4・5)

4はたたき石。扁平な棒状礫の腹背部と周縁部に敲打痕がある。5は溝状の研磨面のある砥石。前面を敲打によって調整した後使用している。石質は砂岩。

(酒井)

1 土坑と出土遺物



図IV-1-8 土坑出土の石器

2 焼土と出土遺物

(1) 概要 (図Ⅳ-2-1~18、表Ⅳ-6・7、図版Ⅳ-13~19)

今年度の調査では、昨年調査を行った続きも含めて104ヶ所を検出した。遺物は包含層のものと区別をつけ辛かったが、焼土の範囲内にあるもの、もしくは伴うと判断したものを焼土の遺物とした。各焼土の詳細に関しては土層注記と表で記述している。報告は各層位ごとに行うものとし、遺物は土器・石器等に分けて報告する。

焼土の検出された場所は遺跡の西側、159・160・161・162ラインである。遺跡の西側の方が焼土は増える傾向にある。Ⅱ-1層からⅡ-2下層まで検出されている。位置図から見るとより上層にあたる部分で広い範囲に焼土が構築されていることがわかる。また、時代が新しくなるほど焼土の数が多くなることもわかる。焼土の構築時期は周囲から出土する土器や層順から縄文時代晩期末のものと考えられる。

焼土出土の遺物は合計2,898点である。内訳は縄文時代晩期末の土器片1,514点、焼成粘土塊45点、石器等1,339点である。

焼土は土層観察などにより現地で焼成されたと考えられるもの(現地)と他の場所で焼成された焼土が廃棄されたと考えられるもの(廃棄)に大きく分類した。その中でさらに焼獣骨片や焼魚骨片が混じるもの、ベンガラが混じるものを分けている。現地と見られるもの66ヶ所、うち骨片の含まれるもの29ヶ所、廃棄と見られるもの38ヶ所、うち骨片の含まれるもの8ヶ所である。

Ⅱ-1層の焼土：20ヶ所検出した。159~162ラインに分布する。現地で焼成され、よく焼かれているものが多い。現地と見られるもの15ヶ所、うち骨片を含むもの4ヶ所、ベンガラを含むもの1ヶ所。廃棄と見られるもの5ヶ所、うち骨片を含むもの1ヶ所。

Ⅱ-2上層の焼土：22ヶ所検出した。159~162ラインに分布する。現地と見られるもの10ヶ所、うち骨片を含むもの2ヶ所。廃棄と見られるもの12ヶ所、うち骨片を含むもの3ヶ所。

Ⅱ-2中層の焼土：Ⅱ-2中層で細かく分層できない部分をこの層とした。7ヶ所検出した。現地と見られるもの2ヶ所。廃棄と見られるもの5ヶ所、うち骨片を含むもの1ヶ所。

Ⅱ-2中1層の焼土：14ヶ所検出した。159・160ラインで検出される。現地と見られるもの10ヶ所、うち骨片を含むもの5ヶ所。廃棄と見られるもの4ヶ所、うち骨片を含むもの2ヶ所。

Ⅱ-2中2層の焼土：20ヶ所検出した。159・160ラインで検出される。現地と見られるもの17ヶ所、うち骨片を含むもの10ヶ所、ベンガラを含むもの1ヶ所。廃棄と見られるもの12ヶ所、うち骨片を含むもの3ヶ所。

Ⅱ-2中3層の焼土：6ヶ所検出した。159ラインで検出される。現地と見られるもの4ヶ所、うち骨片を含むもの2ヶ所、骨片とベンガラを含むもの1ヶ所。廃棄と見られるもの2ヶ所。

Ⅱ-2中4層の焼土：6ヶ所検出した。159・160ラインで検出される。現地と見られるもの3ヶ所、うち骨片を含むもの2ヶ所。廃棄と見られるもの3ヶ所、うちベンガラを含むもの1ヶ所。

Ⅱ-2中5層の焼土：4ヶ所検出した。159・160ラインで検出される。現地と見られるもの2ヶ所、うち骨片を含むもの2ヶ所。廃棄と見られるもの2ヶ所、うちベンガラを含むもの1ヶ所。

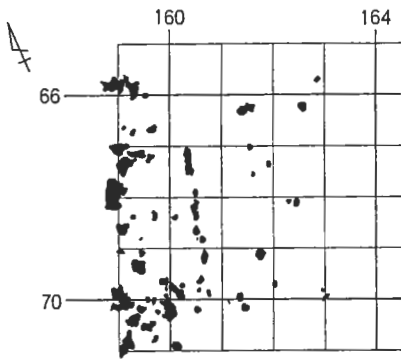
Ⅱ-2中6層の焼土：1ヶ所検出した。159ラインで検出される。現地と見られるもの1ヶ所、うち骨片とベンガラを含むもの1ヶ所。

Ⅱ-2下層の焼土：4ヶ所検出した。159・160ラインで検出される。現地と見られるもの2ヶ所。廃棄と見られるもの2ヶ所。

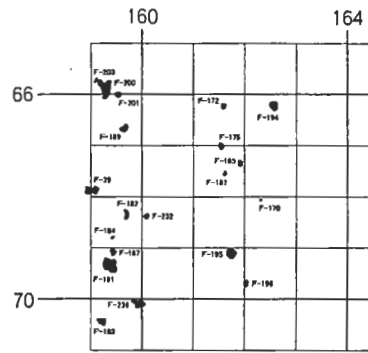
(酒井)

2 焼土と出土遺物

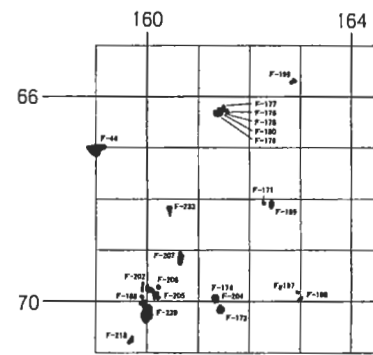
焼土位置図



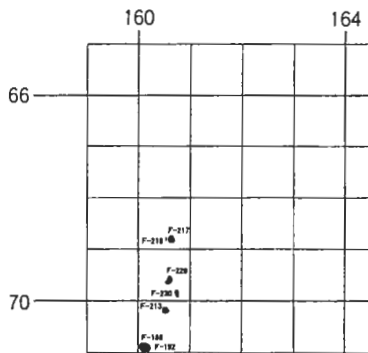
II-1層



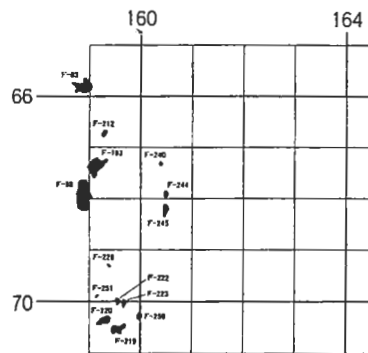
II-2-上層



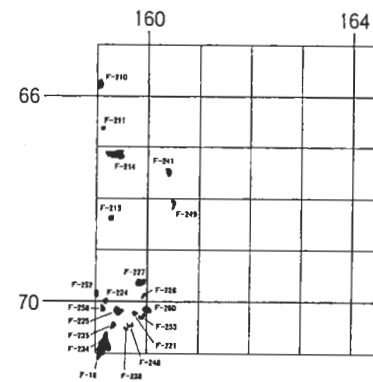
II-2-中層



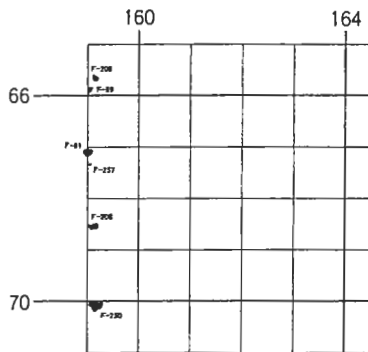
II-2-中1層



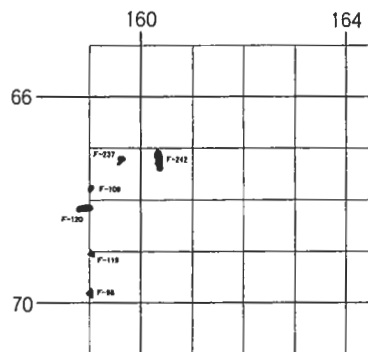
II-2-中2層



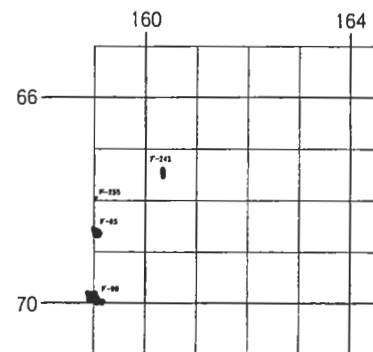
II-2-中3層



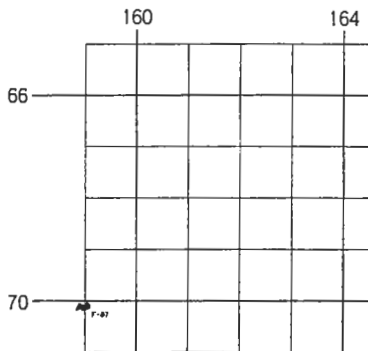
II-2-中4層



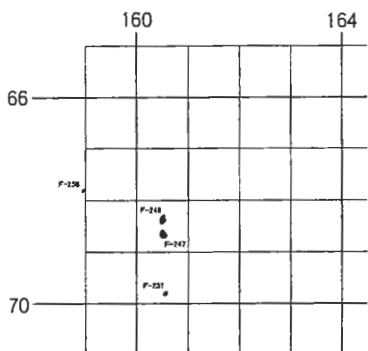
II-2-中5層



II-2-中6層



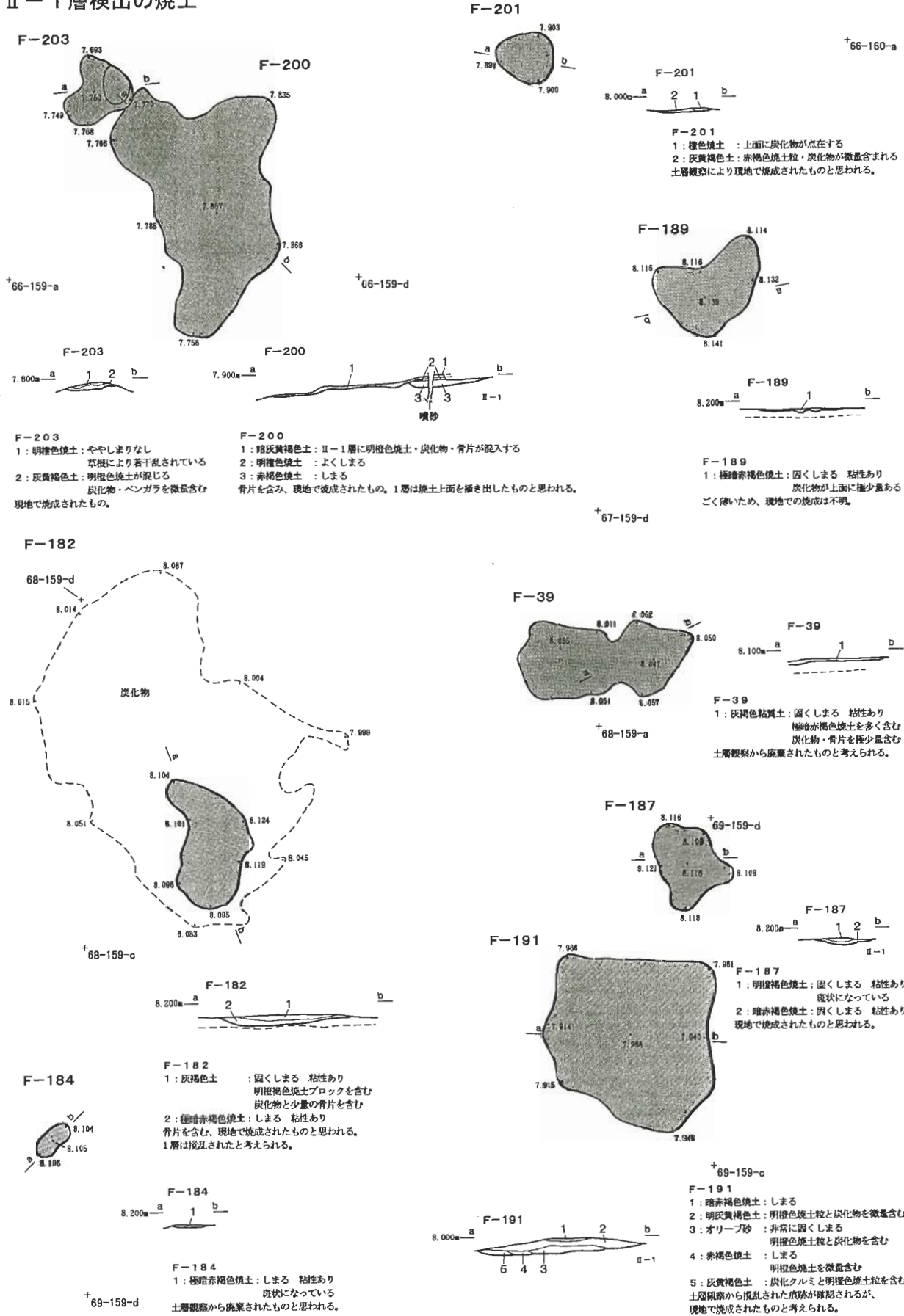
II-2-下層



0 5 10m

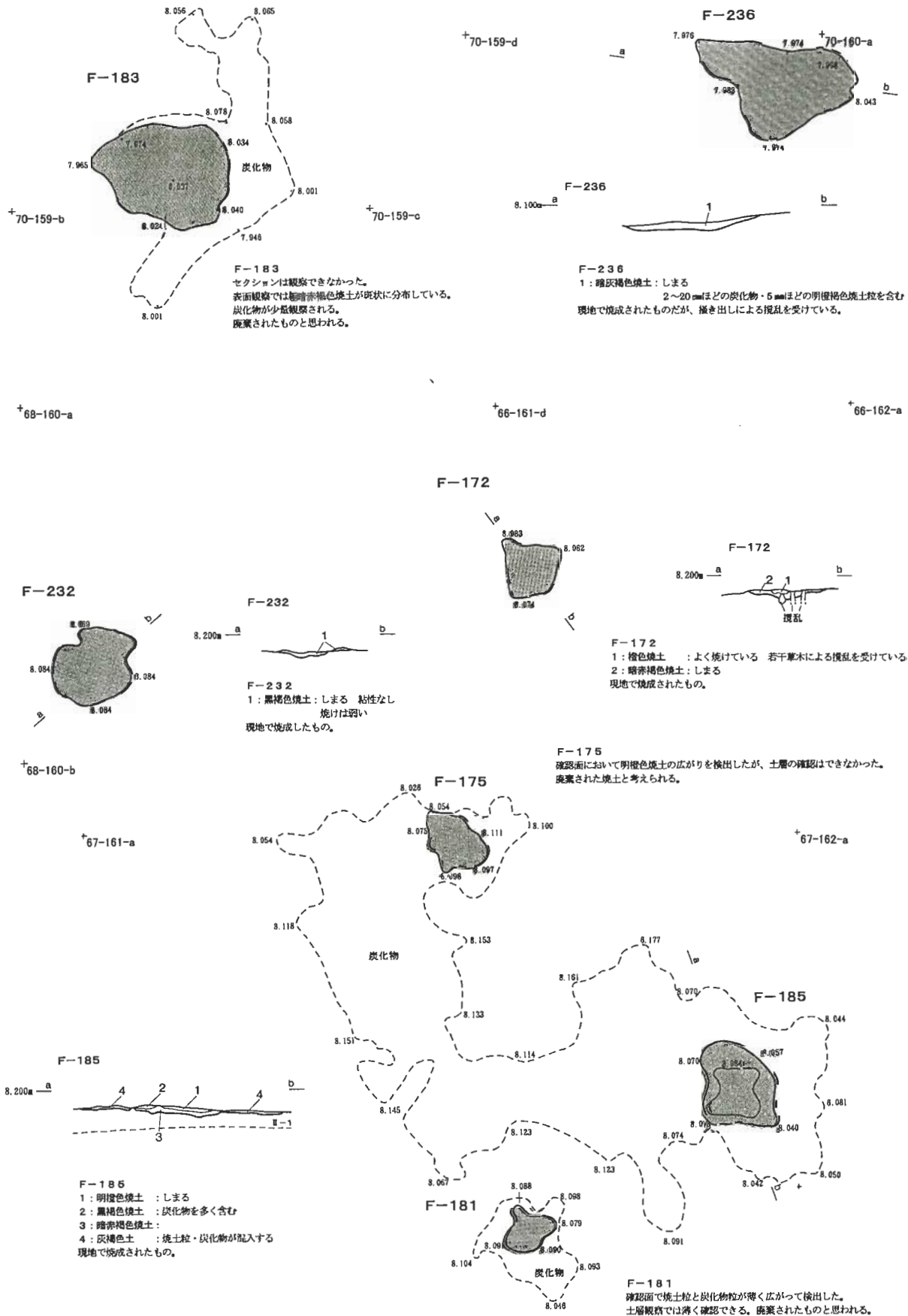
図IV-2-1 焼土位置図

II - 1層検出の焼土

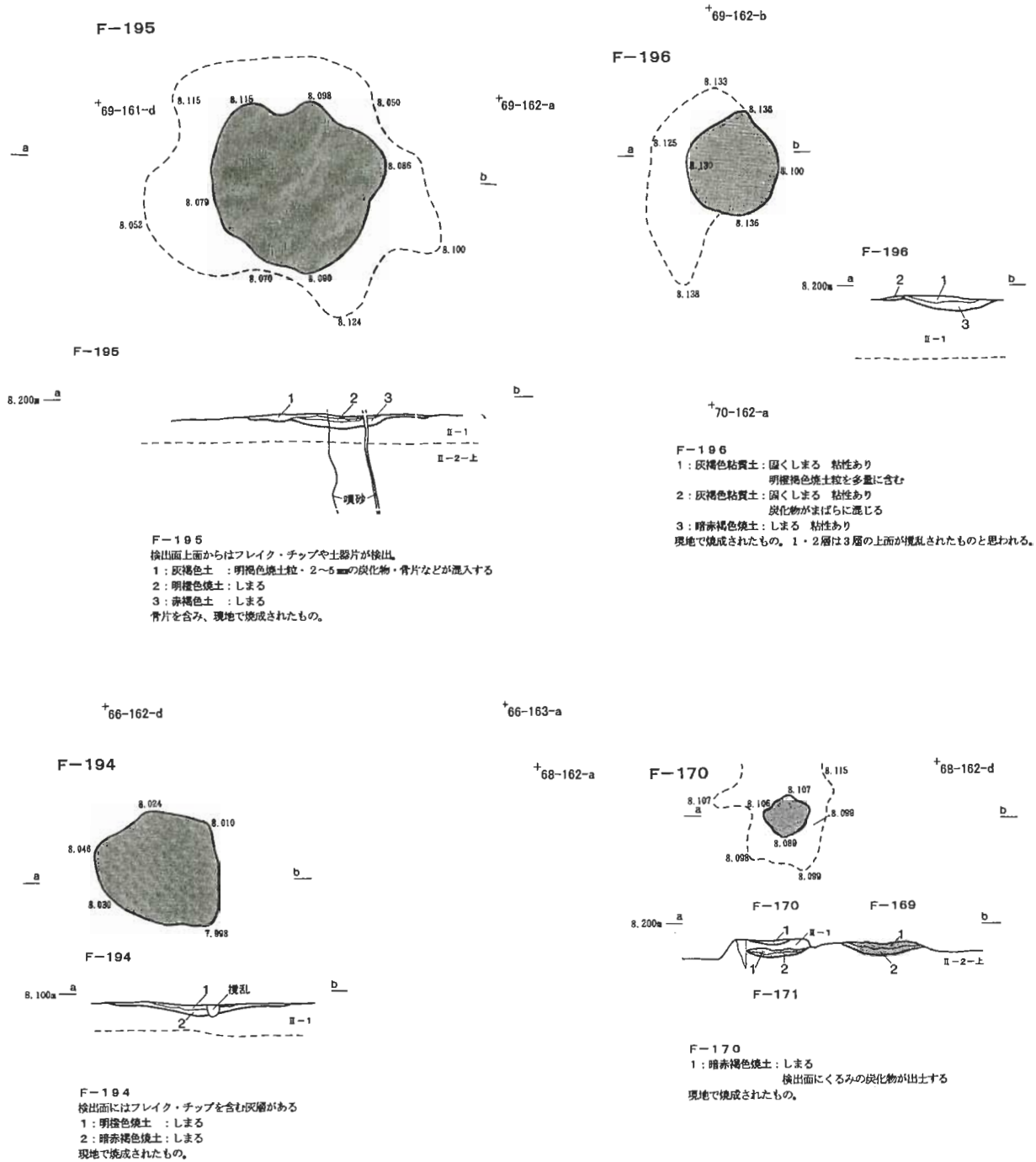


図IV-2-2 II-1層の焼土(1)

2 焼土と出土遺物

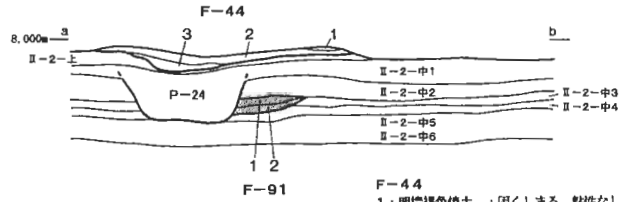
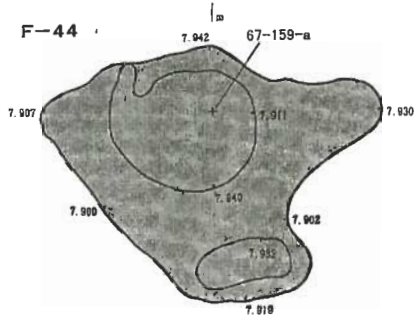


図IV-2-3 II-1層の焼土(2)



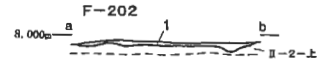
図IV-2-4 II-1層の焼土(3)

II-2-上層検出の焼土



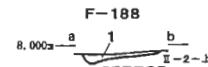
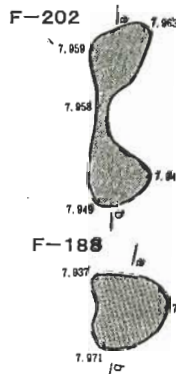
- F-44**
- 1: 明橙褐色焼土 : 固くしまる 粘性なし 骨片を含む
 - 2: 極暗赤褐色焼土 : 固くしまる 粘性あり 炭化物・骨片含む
 - 3: 極暗赤褐色焼土 : 固くしまる 粘性あり 炭化物・骨片を含まない 骨片を含み、現地で焼成されたもの。

+69-160-b



- F-202**
- 1: 灰褐色シルト質土 : 固くしまる 粘性あり 明橙褐色焼土粒が混入する 炭化物と極少量の骨片を含む 土層観察から廃棄されたものと思われる。

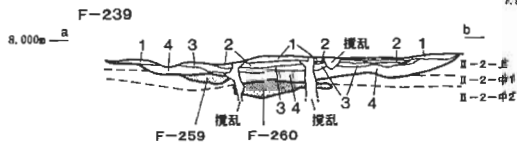
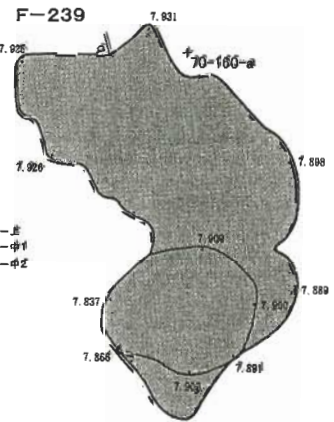
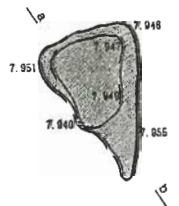
+67-159-b



- F-188**
- 1: 灰褐色シルト質土 : 固くしまる 粘性あり 明橙褐色焼土ブロックを斑状に多く含む 骨片を含む 土層観察から廃棄されたものと思われる。

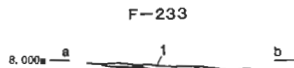
+68-160-d

F-233



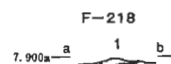
- F-239**
- 1: 明灰白褐色土 : 骨片・炭化物が微量含まれる 明橙褐色焼土粒が点在する
 - 2: 灰褐色土 : 骨片を多く含む 1mmほどの炭化物と明橙褐色焼土粒が少量混じる
 - 3: 明橙褐色土 : しまる 骨片が混ざる
 - 4: 赤褐色焼土 : しまる 骨片が極少量含まれる
- 骨片を含み、現地で焼成されたもの。

+68-160-c



- F-233**
- 1: 暗赤褐色焼土 : 明赤褐色焼土と 5mmほどの炭化物が混じる 土層観察から廃棄されたものと思われる。

+70-180-b

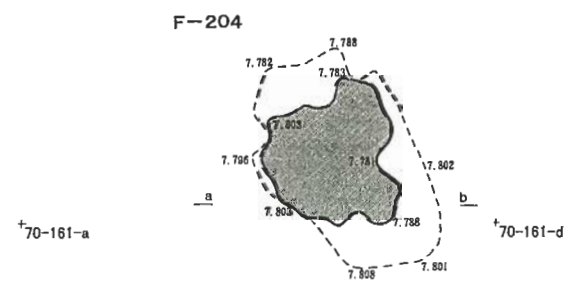
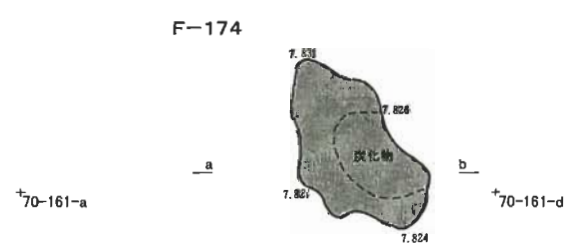
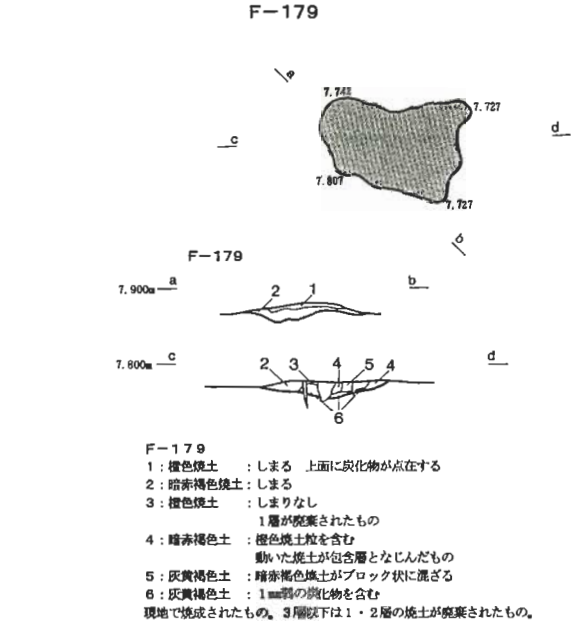
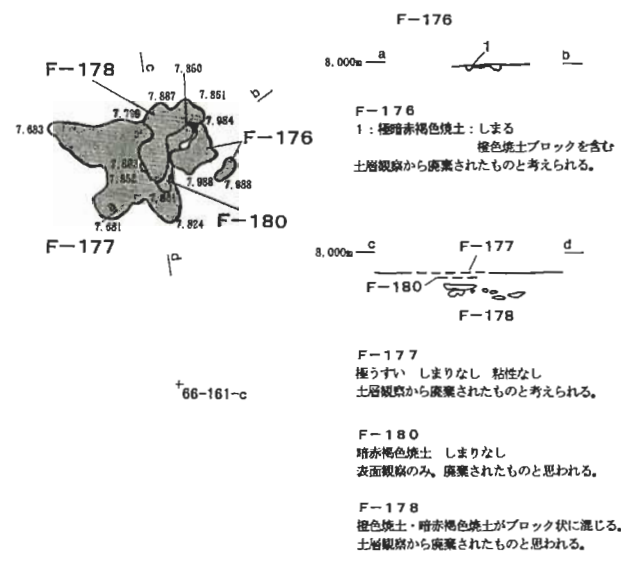
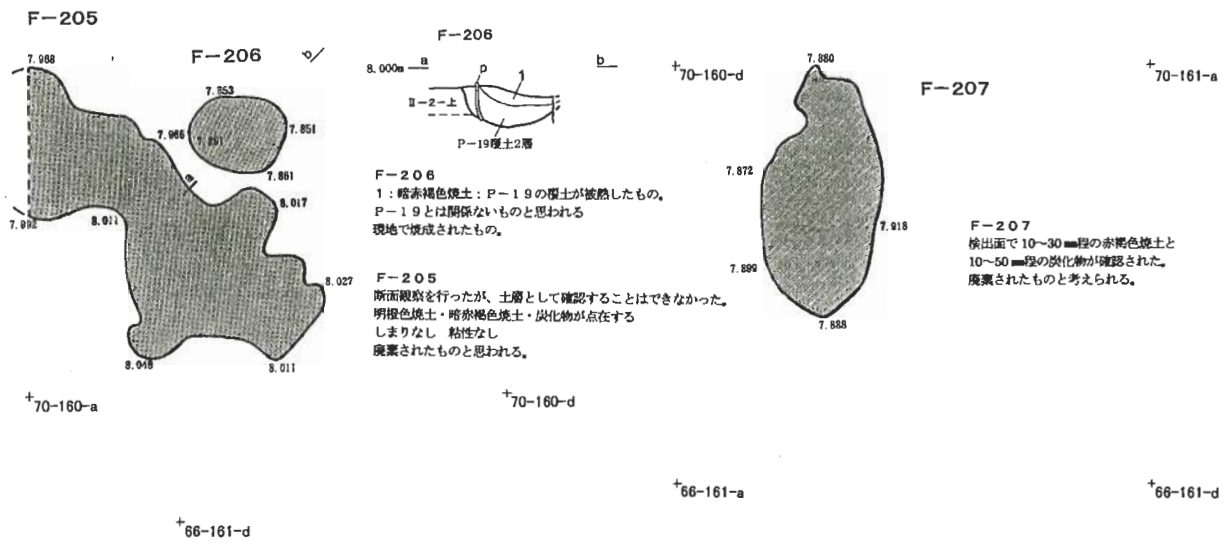


F-218



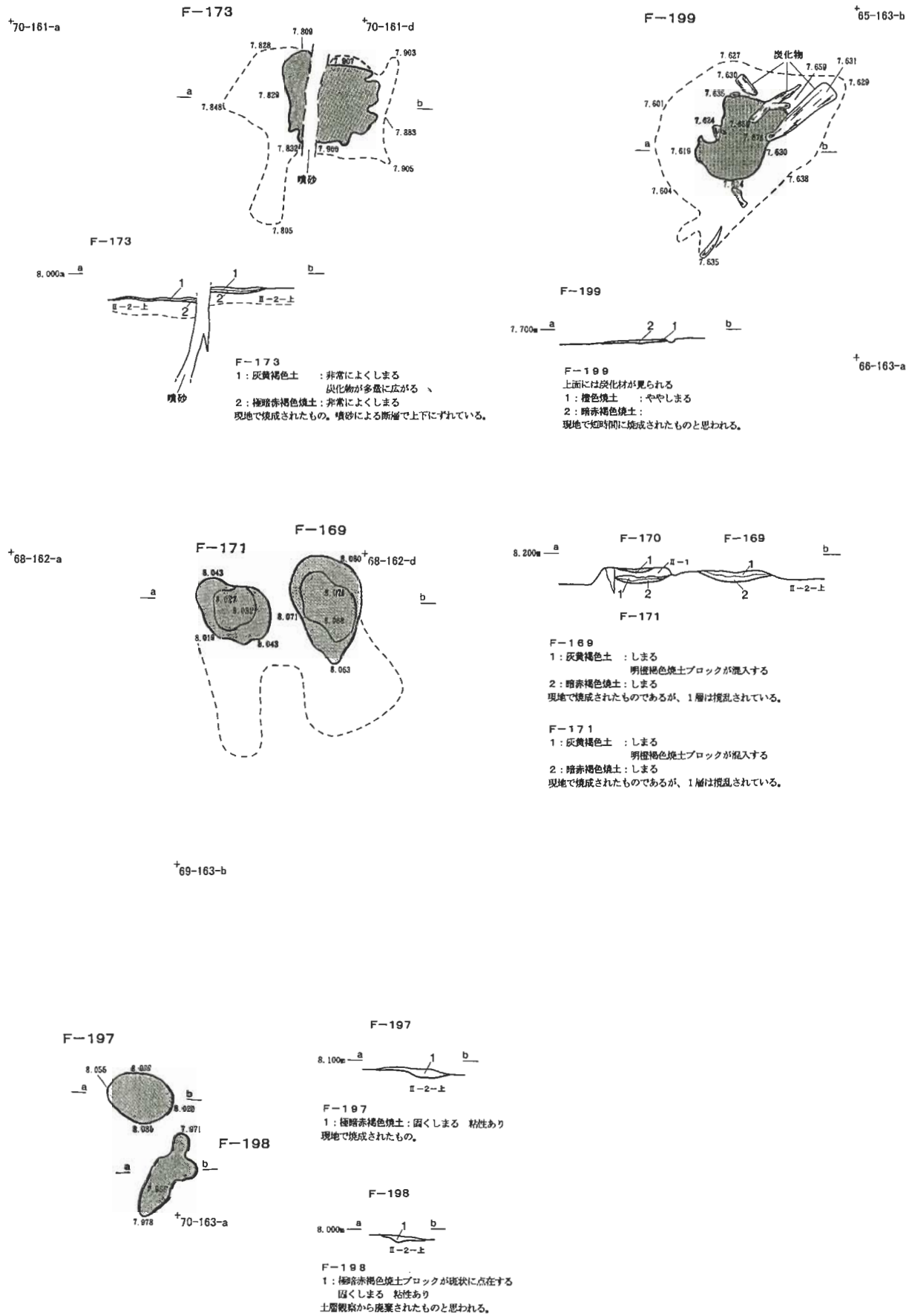
- F-218**
- 1: 極暗赤褐色焼土と明橙褐色焼土が斑状に混入する 固くしまる 粘性あり 炭化物と骨片が極少量混入する 土層観察から廃棄されたものと思われる。

図IV-2-5 II-2-上層の焼土(1)



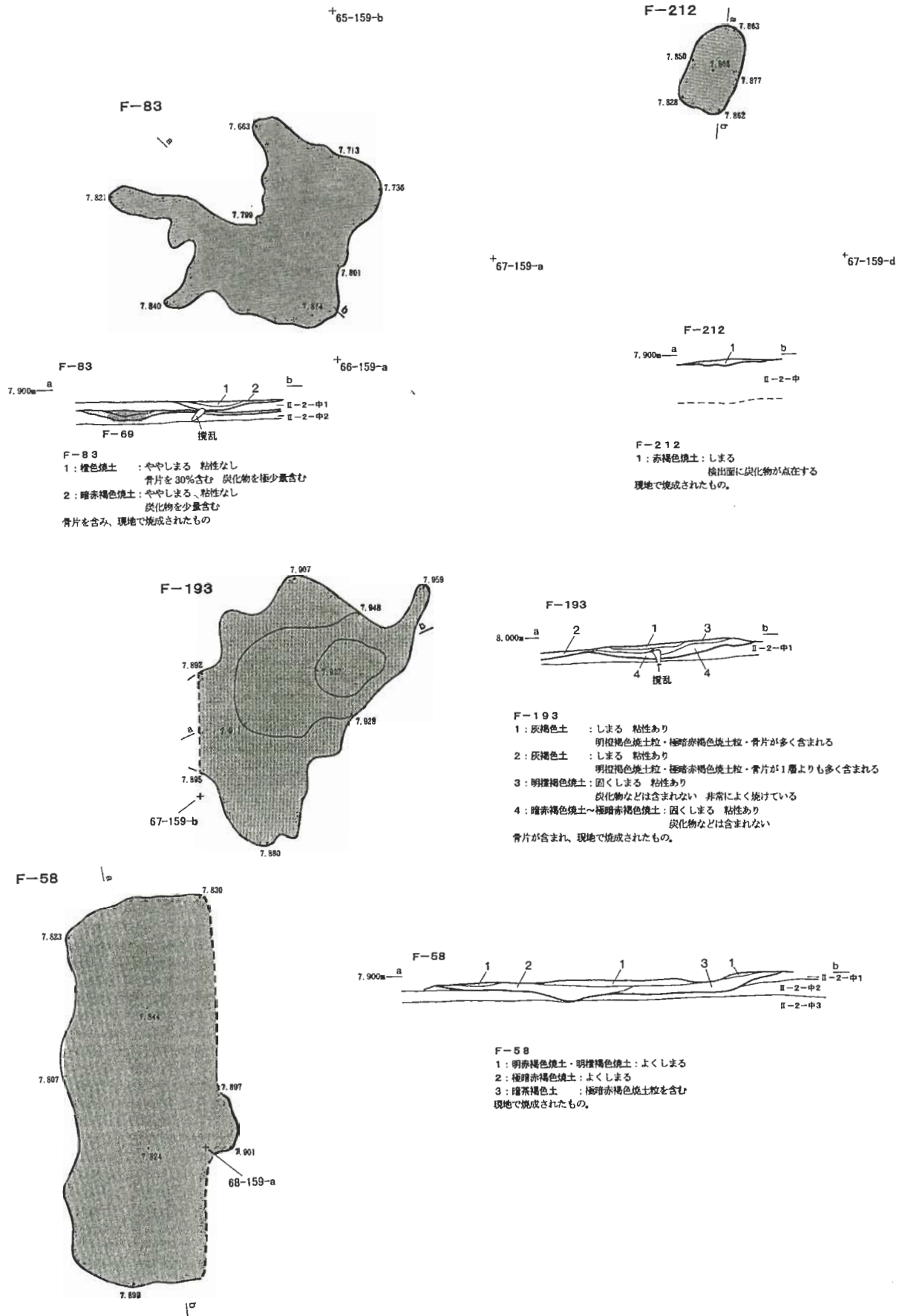
図IV-2-6 II-2-上層の焼土(2)

2 焼土と出土遺物

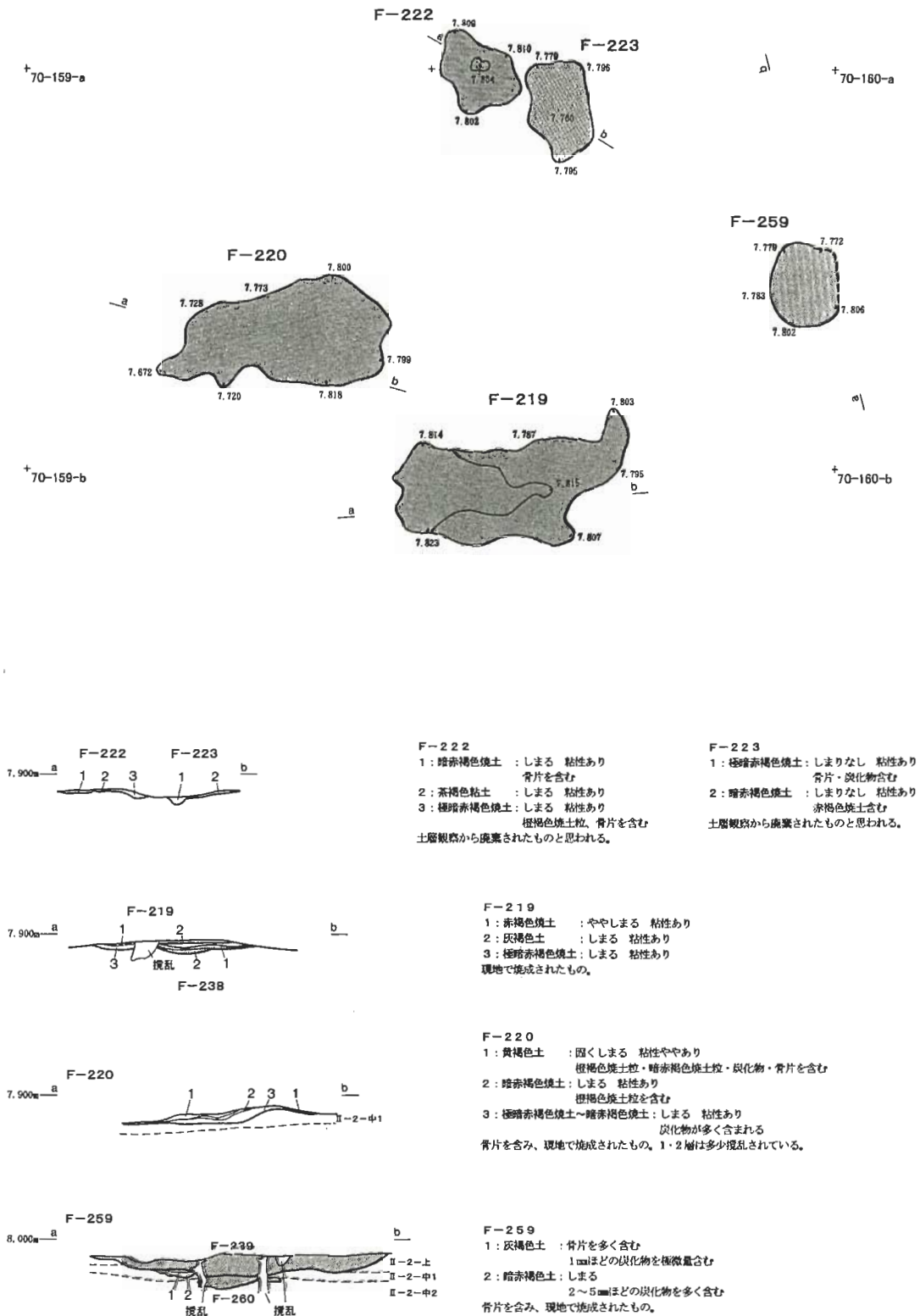


図IV-2-7 II-2-上層の焼土(3)

II-2-中1層検出の焼土

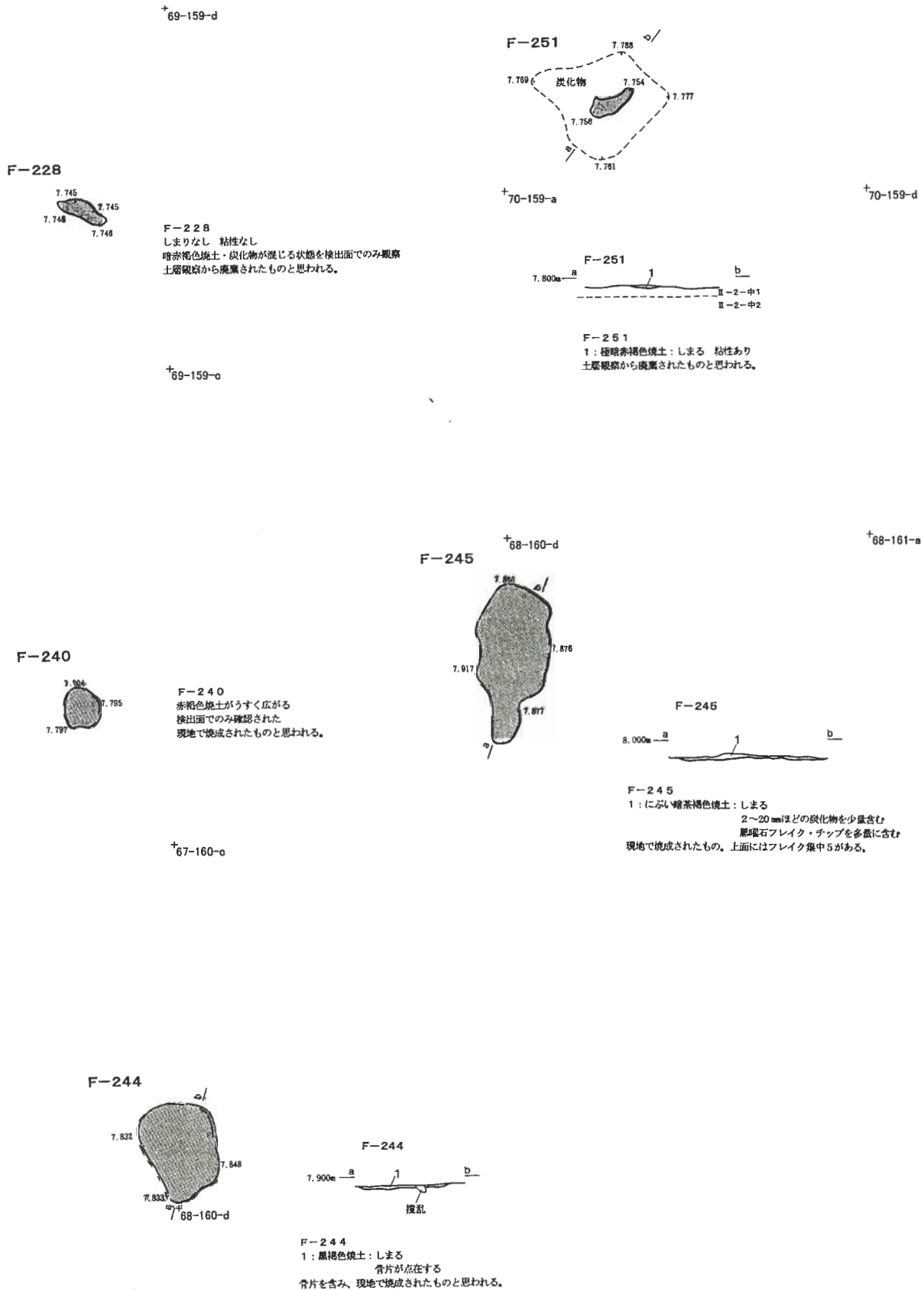


図IV-2-9 II-2-中1層の焼土(1)



図IV-2-10 II-2-中1層の焼土(2)

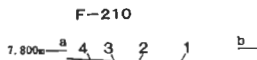
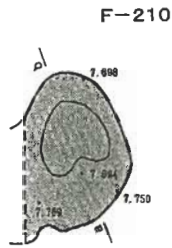
2 焼土と出土遺物



図IV-2-11 II-2-中1層の焼土(3)

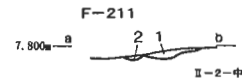
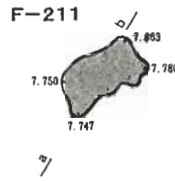
II-2-中2層検出の焼土

+65-159-b



F-210
 1: 赤褐色焼土 : 獣骨片と炭化物を多く含む
 2: 暗赤褐色焼土 : 炭化物を含む
 3: 赤褐色焼土 : 獣骨片と炭化物を多く含む
 4: 暗赤褐色焼土 : 炭化物を含む
 現地で焼成されたもの。焼成面を1・3層で確認できる。

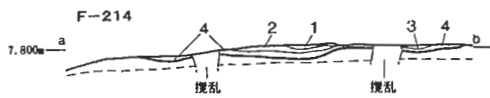
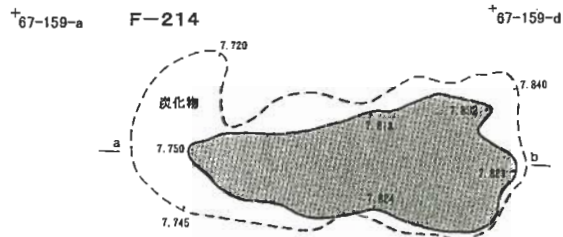
+66-159-b



F-211
 1: 赤褐色焼土 : しまる
 2: 暗灰黄褐色 : 炭化物が混入する
 現地で焼成されたもの。

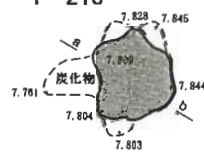
+67-159-a

+66-159-a



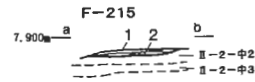
F-214
 1: 灰褐色土 : しまる 粘性あり
 橙褐色焼土粒・赤褐色焼土粒・炭化物が混入する
 骨片が少量混入する
 2: 橙褐色焼土 : しまる 粘性あり
 骨片が混入する
 3: 赤褐色焼土 : しまる 粘性あり
 4: 暗赤褐色焼土~極暗赤褐色焼土 : しまる 粘性あり
 骨片を含み、現地で焼成されたもの。

F-215



+68-159-b

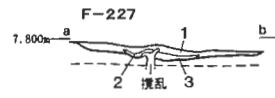
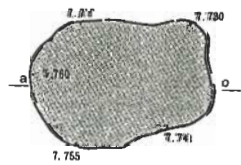
+68-159-c



F-215
 上面に炭化物が薄く広がる
 1: 明橙褐色焼土 : しまる 粘性ややあり
 ベンガラを極少量含む
 2: 極暗赤褐色焼土 : しまる 粘性ややあり
 現地で焼成されたもの。

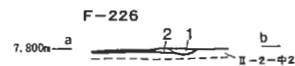
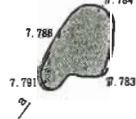
+69-160-b

F-227



F-227
 1: 暗灰黄褐色土 : 明橙褐色焼土・赤褐色焼土
 5mmほどの炭化物が混入する
 2: 暗黒褐色焼土 : しまる
 3: 暗赤褐色焼土 : ややしまる 粘性なし
 現地で焼成されたもの。
 1・2層は焼土の極き出しと見られる攪乱を受けている。

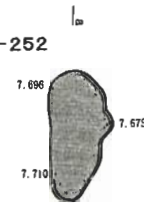
F-226



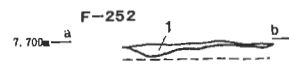
F-226
 1: 暗灰黄褐色土 : 炭化物と暗赤褐色焼土粒が混入する
 2: 暗赤褐色焼土 : しまりややあり 粘性なし
 現地で焼成されたもの。

+70-160-a

F-252



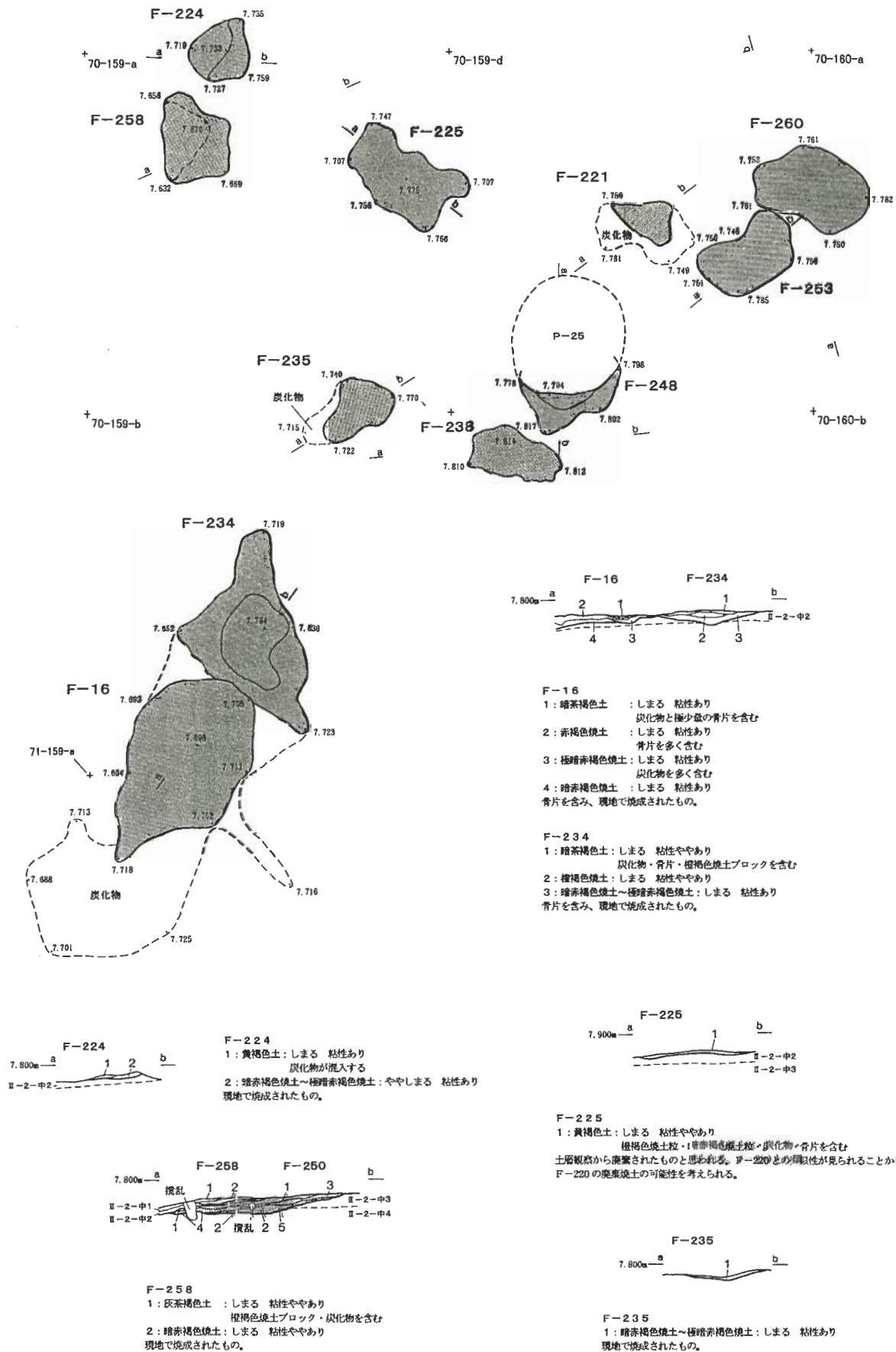
+70-159-a



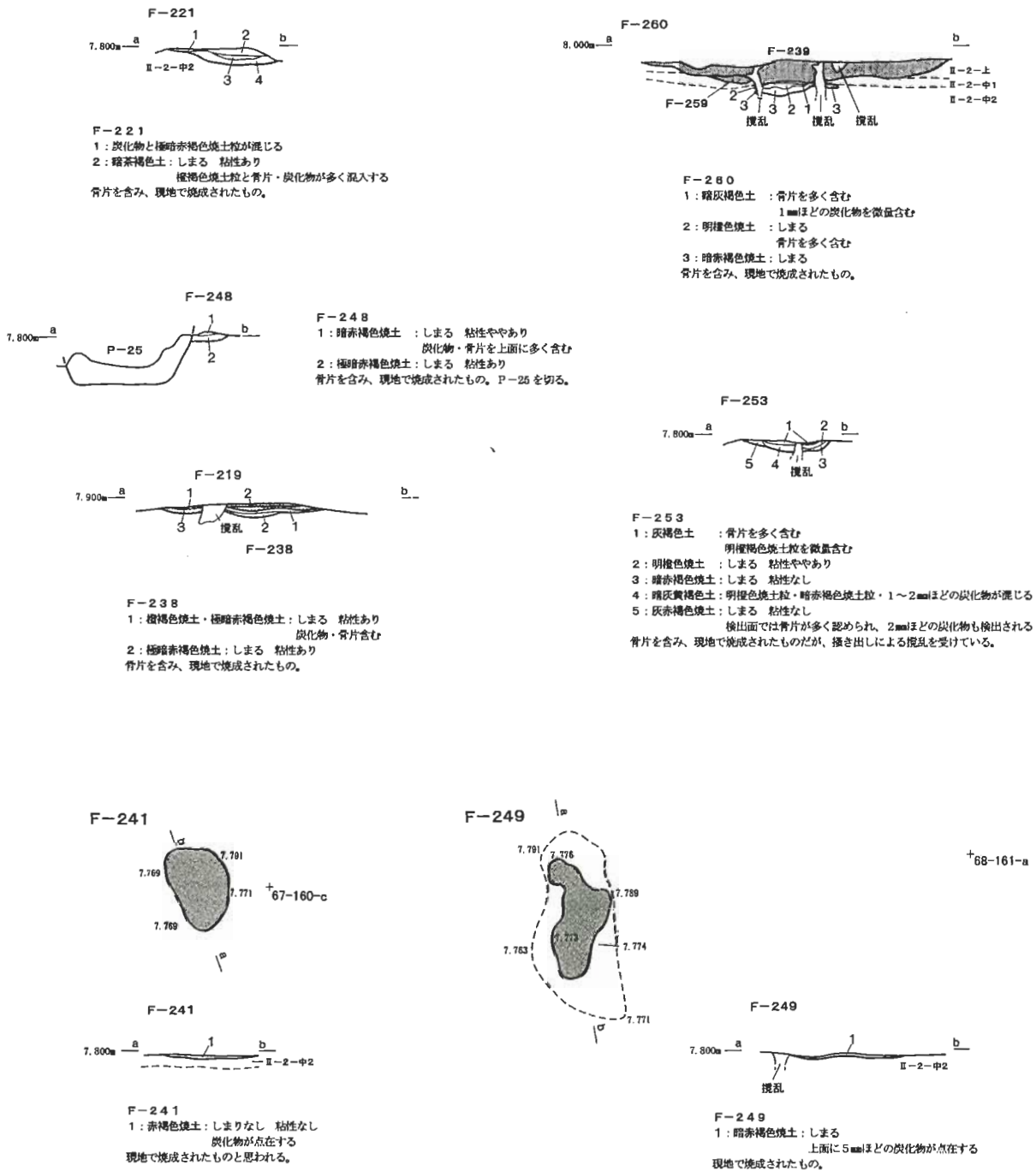
F-252
 1: 黄茶褐色土 : しまる 粘性あり
 暗赤褐色焼土ブロックを含む 骨片が混入する
 土層観察から構築されたものと思われる。

図IV-2-12 II-2-中2層の焼土(1)

2 焼土と出土遺物

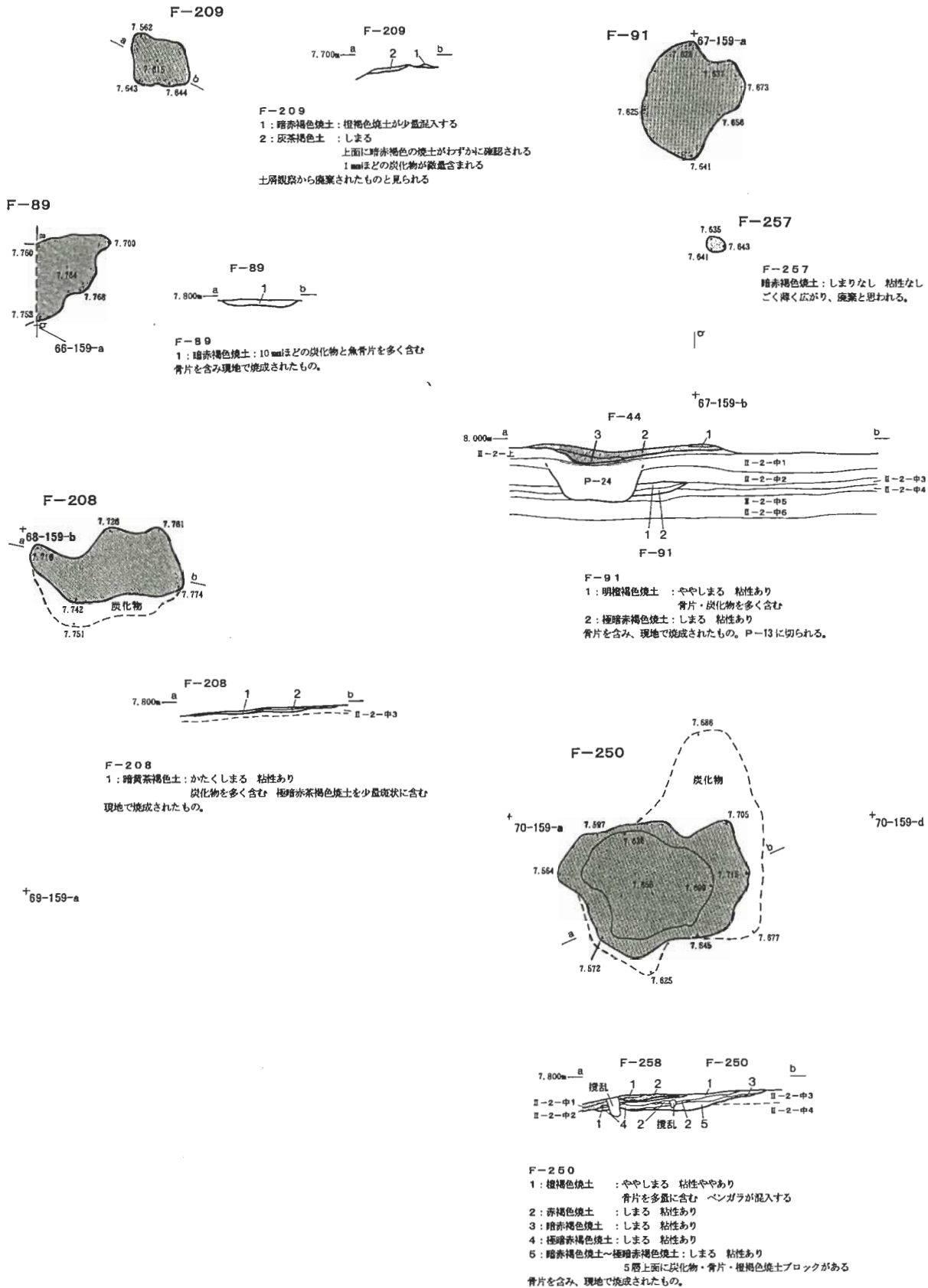


図IV-2-13 II-2-中2層の焼土(2)



図IV-2-14 II-2-中2層の焼土(3)

II-2-中3層検出の焼土

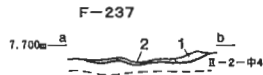
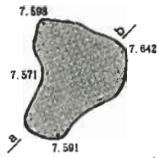


図IV-2-15 II-2-中3層の焼土

II-2-中4層検出の焼土

+67-159-d

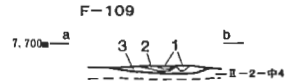
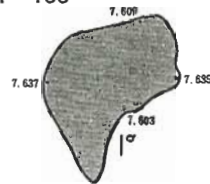
F-237



F-237
 1: 極暗赤褐色焼土: ややしまる 粘性あり
 2: 灰褐色土: ややしまる 粘性あり
 極暗赤褐色焼土粒・炭化物を含む
 土層観察から廃棄された焼土と思われる。

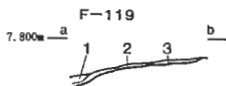
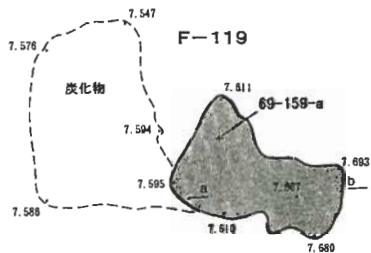
+67-159-b

F-109



F-109
 1: 灰褐色土: ややしまる 粘性あり
 骨片・炭化物が少量混入する
 2: 赤褐色焼土: ややしまる 粘性あり
 3: 極暗赤褐色焼土: ややしまる 粘性あり
 骨片を含み、現地で焼成されたもの。

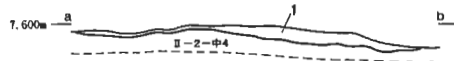
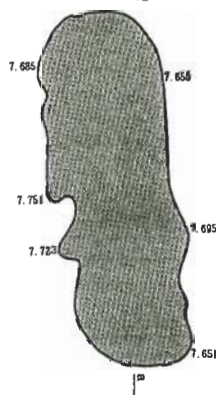
+68-159-a



F-119
 1: 明灰黄褐色土: 2mmほどの炭化物を含む
 2: 暗赤褐色焼土: しまりややなし 粘性なし
 上面には明極褐色焼土が薄く点在する
 3: 黒褐色土: 炭化物が多量に含まれる 焼土粒が少量混入する
 土層観察から廃棄されたものと思われる。

+67-160-a

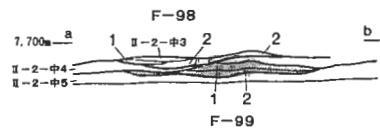
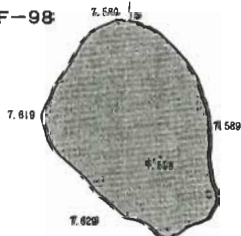
F-242



F-242
 1: うすい暗赤褐色焼土: しまる
 暗赤褐色焼土粒がII-2-中4層に含まれる
 土層観察から廃棄されたものと思われる。

+69-159-b

F-98

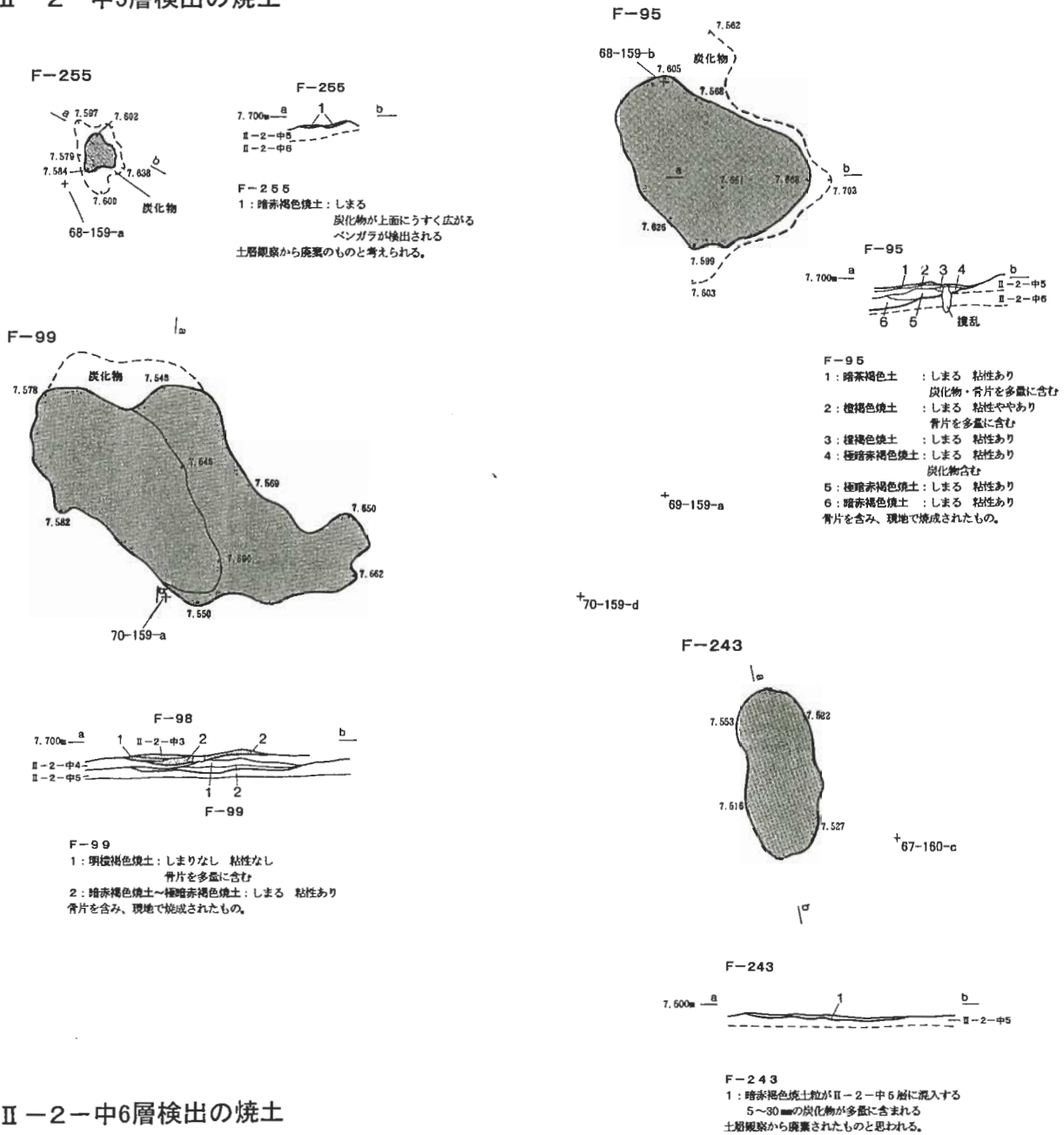


F-98
 1: 灰黄褐色土: ややしまる 粘性なし
 焼土粒・炭化物・骨片を含む
 2: 赤褐色焼土~極暗赤褐色焼土: しまる 粘性ややあり
 骨片を含み、現地で焼成されたもの。

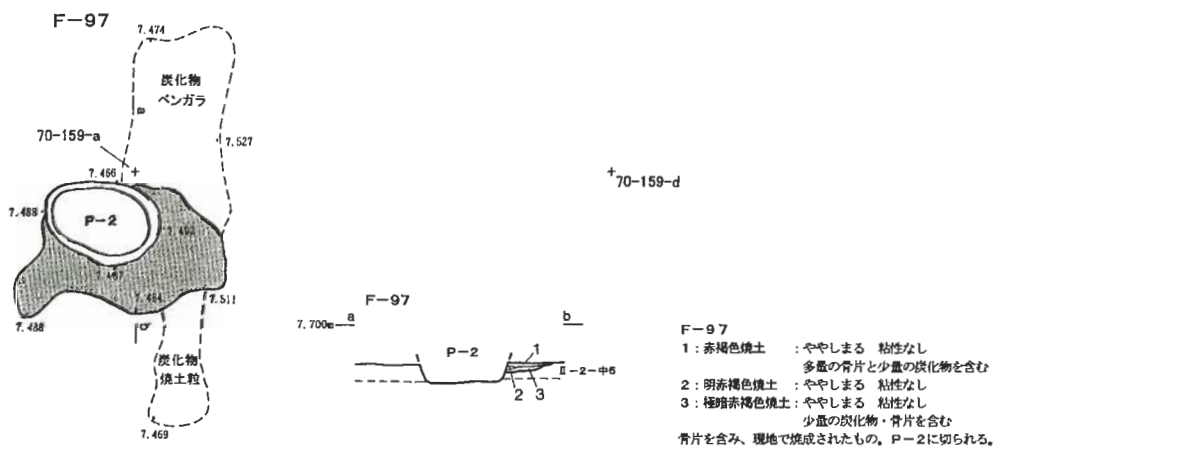
+70-159-a

図IV-2-16 II-2-中4層の焼土

II-2-中5層検出の焼土

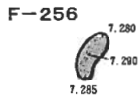


II-2-中6層検出の焼土



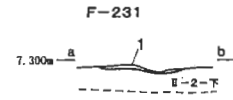
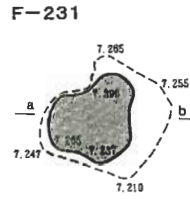
図IV-2-17 II-2-中5層の焼土

II-2-下層検出の焼土



F-256
極暗赤褐色焼土がうすく広がる
廃棄されたものであると思われる。

+68-159-a

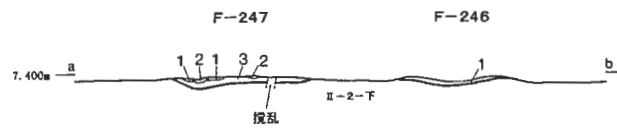
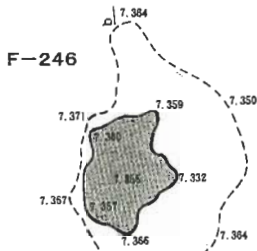


F-231
1: 暗赤褐色焼土: しまりなし 粘性なし
上面に炭化物が置ける
土層観察から廃棄されたものと思われる。

+70-160-d

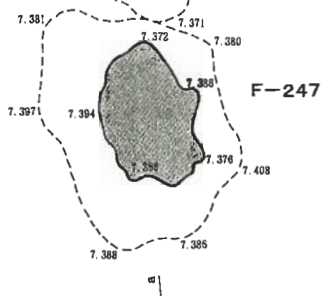
+70-161-a

+68-160-d



F-247
1: 暗黄灰褐色土 : しまりあり 粘性ややあり
2: 明橙褐色焼土 : しまりなし 粘性なし
3: 暗赤茶褐色焼土 : しまりあり 粘性ややあり
5mmほどの炭化物をやや多く含む
現地で焼成されたもの。

F-246
1: 暗赤茶褐色焼土: しまりあり 粘性あり
炭化物をやや多く含む
明橙褐色焼土粒を極少量含む
現地で焼成されたもの。



+68-160-c

図IV-2-18 II-2-下層の焼土

(2) 焼土出土の土器について (図Ⅳ-2-19・20、表Ⅳ-1・2、図版Ⅳ-20~23)

Ⅱ-2 上層の遺構の土器 (図Ⅳ-2-20-27・28)

27は浅鉢口縁部片、水平な口縁端面、R L (斜走)→B d 4、口縁端面に指頭圧痕文。28は浅鉢口縁部片、水平な口縁端面、A d 4、内外面は丁寧なナデ。

Ⅱ-2 中1層の遺構の土器 (図Ⅳ-2-19-22~24、図Ⅳ-2-20-29・30)

22は台付き浅鉢の体部~口縁部、F-109出土破片と接合関係を持つ。上半には狭小化した眼鏡隆起、眼鏡部の結接点にB突起がつく、聖山Ⅱa群：大洞A₁式古段階、胎土は精良で焼成良好。23は鉢、水平な口縁端面、R L (縦走)→B d 4、底部はD、小さい双峰突起が4ヶ所付く。24は深鉢の胴部~口縁部、内傾する口縁端面、R L (縦走)→A d 3 (横位)、口縁端面には棒の側面圧痕。29は浅鉢口縁部片、やや内傾する口縁端面で口縁端は外側に肥厚、R L (横走)→B d 4。30は壺の胴部片、L R (斜走)→入り組み文 (福田の入組文B 3 a類)、聖山Ⅱa群：大洞A₁式古段階、内面の磨きは丁寧、胎土は精良で焼成良好。

Ⅱ-2 中2層の遺構の土器 (図Ⅳ-2-20-31~35)

31は深鉢口縁部片、口縁端は丸みを帯びる。R L (斜走)→B d 4、口縁端面には棒の側面圧痕。32は深鉢口縁部片、水平な口縁端面、R L (縦走)→B d 4。33は浅鉢口縁部片、水平な口縁端面で口縁端は外側に肥厚、L R (縦走)→B d 4。34は浅鉢口縁部片、水平な口縁端、R L (縦走)→B d 4。35は浅鉢口縁部片、水平な口縁端で外側に肥厚、R L (縦走)→A d 4、双峰突起の頂部には渦巻状のL縄線文+円形の刺突がある。突起の脇には棒の側面圧痕。

Ⅱ-2 中3層の遺構の土器 (図Ⅳ-2-19-25、図Ⅳ-2-18-36~40)

25は深鉢の胴部~口縁部、口縁部は内屈する。やや内傾する口縁端面、R L (縦走)→A d 2 (横位L縄線文)。36は鉢口縁部片、水平な口縁端面、口縁端面は強いナデで凹む、R L (縦走)→B d 4。37は浅鉢口縁部片、水平な口縁端面で口縁端は外側に肥厚、R L (縦走)→B d 4。38は浅鉢口縁部片、水平な口縁端面で口縁端は外側に肥厚、R L (縦走)→B d 4、口縁端面には2本のL縄線文が施される。39は浅鉢口縁部片、R L (縦走)→B d 4、台形突起の頂部にはR L縄線文、内外口縁端にはR L縄線圧痕文が施される。40は浅鉢口縁部片、口縁端は丸みを帯びる。L R (縦走)→B d 4、外側口縁端にL R縄線文、口縁端面には指頭圧痕文、口縁部内面から貫通孔。

Ⅱ-2 中4層の遺構の土器 (図Ⅳ-2-20-41・42)

41は浅鉢口縁部片、口縁端はR L縄線文の施文によって内外側に肥厚し外傾する、R L (縦走)→B d 4、口縁端面にはR L縄線文、内外口縁端にはR L縄線文が施される。42は深鉢の胴部~口縁部片、内傾する口縁端面、R L (縦走)→B d 2 (横位L縄線文)、外側口縁端には角棒の側面圧痕。

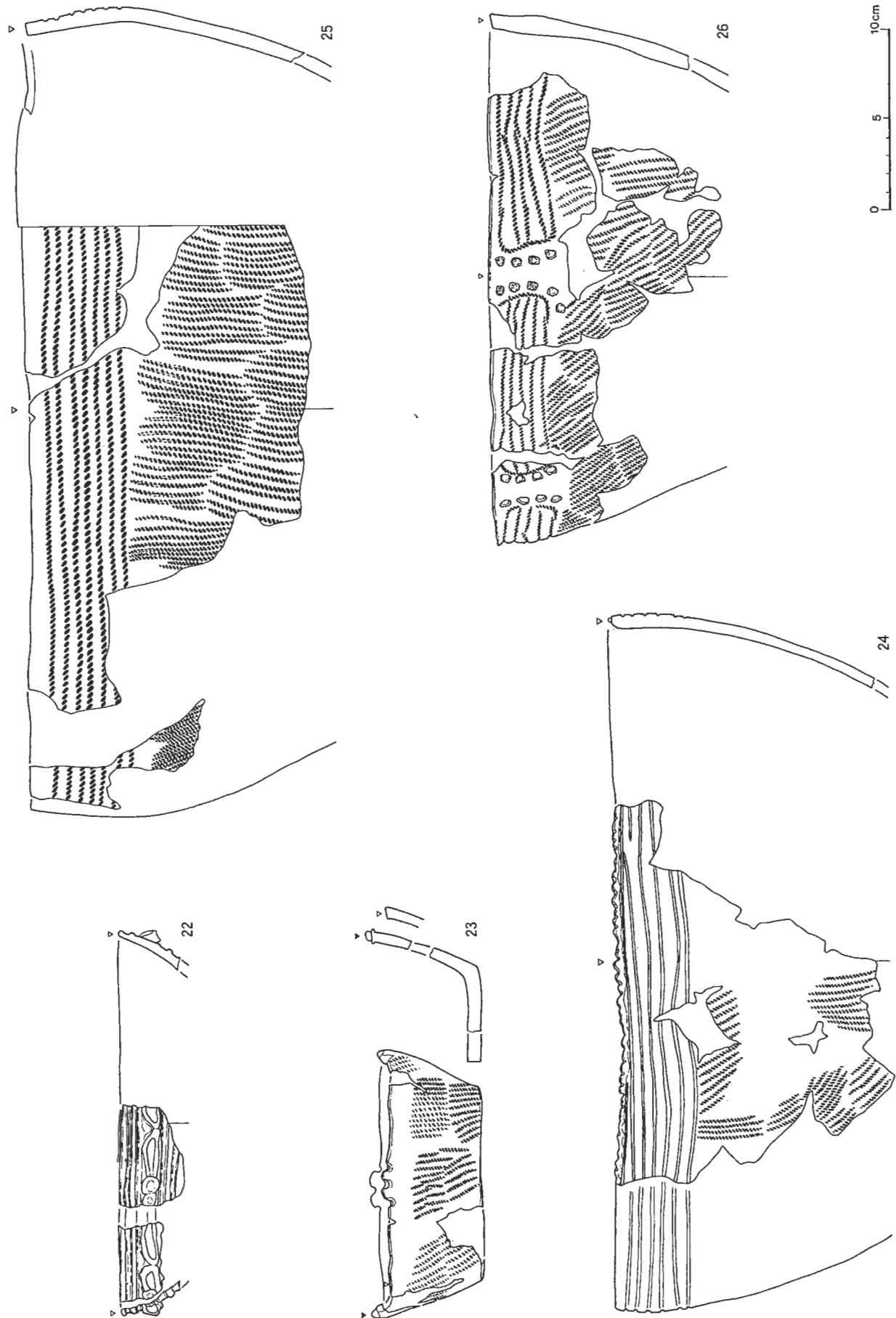
Ⅱ-2 中5層の遺構の土器 (図Ⅳ-2-19-26、図Ⅳ-2-20-43~44)

26は深鉢の胴部~口縁部片、内傾する口縁端面で口縁端は外側に肥厚し、R L (縦走)→B d 2 (L縄線による方格圏線文)+円形の刺突文。43は浅鉢口縁部片、口縁端は水平で口縁端は外側に肥厚、L R (縦走)→B d 4。44は浅鉢口縁部片、R L (縦走)→B d 4、台形突起の頂部には縄線文、内外口縁端には縄線圧痕文が施される。

Ⅱ-3 層の遺構の土器 (図Ⅳ-2-20-45)

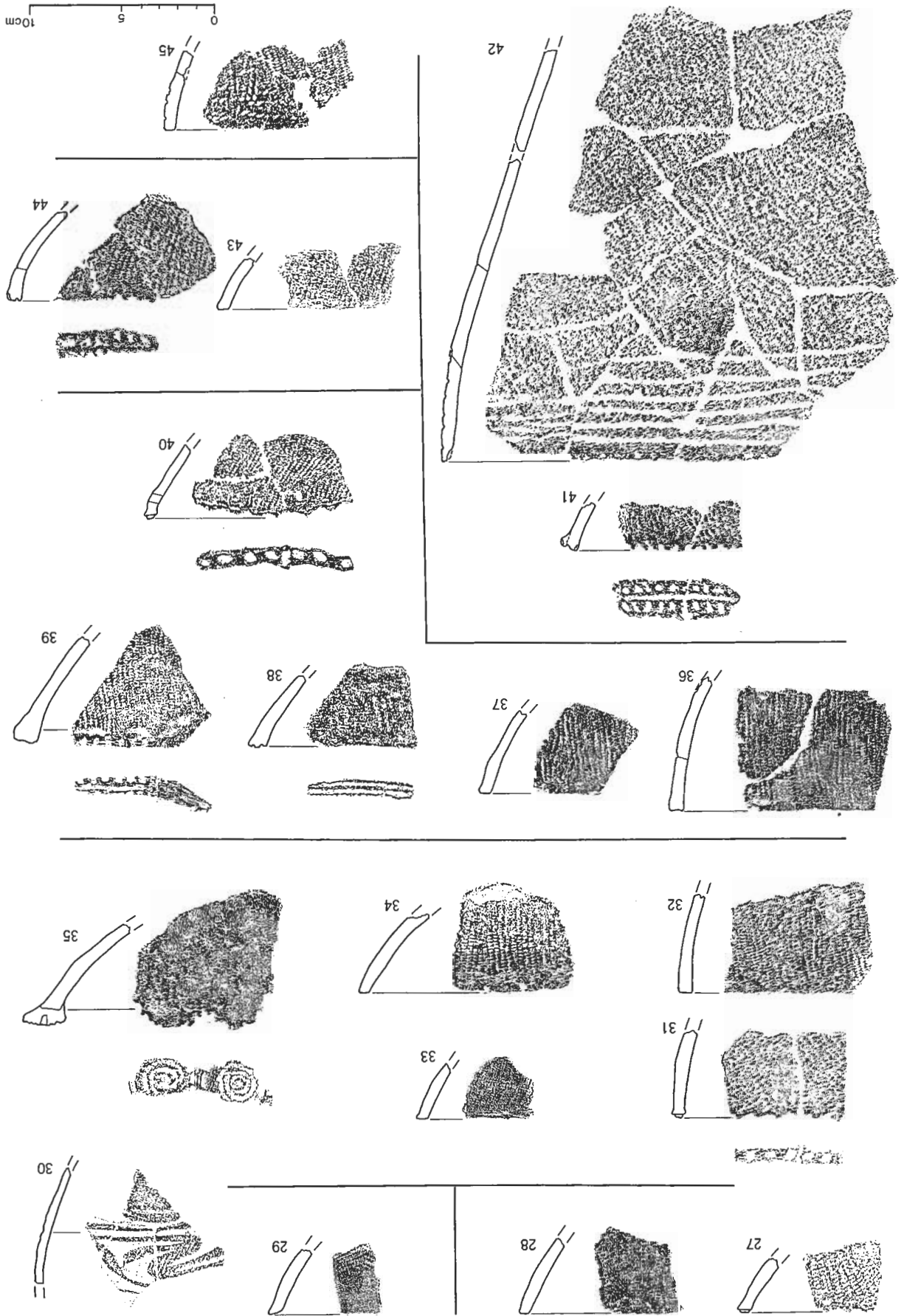
45は深鉢の口縁部片、口縁端は水平、R L (縦走)→B d 1 (横位R L→縦位R L) である。

(鈴木)



図IV-2-19 焼土出土の土器(1)

図IV-2-20 焼土出土の土器(2)



(3) 焼土出土の石器等について (図Ⅳ-2-3-6~26、表Ⅳ-6~9、図版Ⅳ-13~24)

焼土出土の石器等は1,339点である。内訳は石鏃10点、石錐1点、スクレイパー19点、石斧1点、たたき石1点、砥石2点、Rフレイク9点、Uフレイク9点、石核3点、黒曜石フレイク1,041点、その他のフレイク185点、その他58点である。

Ⅱ-1層の焼土の石器

6はF-185、7はF-200、8はF-236。

6は有茎の石鏃。表面は被熱により白く曇っている。7・8はフレイクの形状を活かして刃部を作出したスクレイパー。石質は6・7が黒曜石、8は安山岩。

Ⅱ-2-上層の焼土の石器

9はF-204、10はF-205、11~15はF-239。

11・12は有茎の石鏃。9・10・13~15はスクレイパー。9・15は側縁に刃部を作出したもの。10・13・14は円弧状の刃部があるもの。石質は10が安山岩、その他は黒曜石。11は白く濁った黒曜石を使用している。

Ⅱ-2-中層の焼土の石器

16はF-186。

16は有茎の石鏃未製品。石材は黒曜石。

Ⅱ-2-中1層の焼土の石器

17~19はF-193、20はF-234、21・22はF-245。

17・18・20・21は有茎の石鏃。18は表面が被熱により白く曇っている。22は機能部を作り出した石錐。19は短冊形の石斧。両面ともかなり剥離している。側面は打ち欠き調整の後、研磨整形されている。石質は19が片岩、その他が黒曜石。

Ⅱ-2-中2層の焼土の石器

23はF-16、24はF-210。

23・24はスクレイパー。23は円弧状の刃部のあるもの。24は側縁に刃部のあるもの。石質は23が安山岩、24が黒曜石。

Ⅱ-2-中5層の焼土の石器

25はF-95、26はF-99。

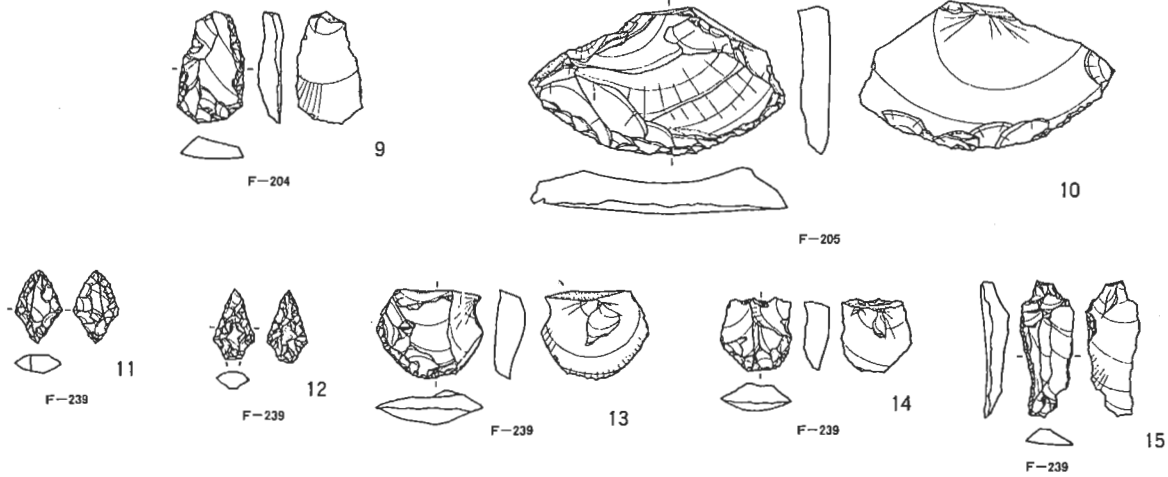
25は側縁に刃部のあるスクレイパー。26は有茎の石鏃。石質は黒曜石。

(酒井)

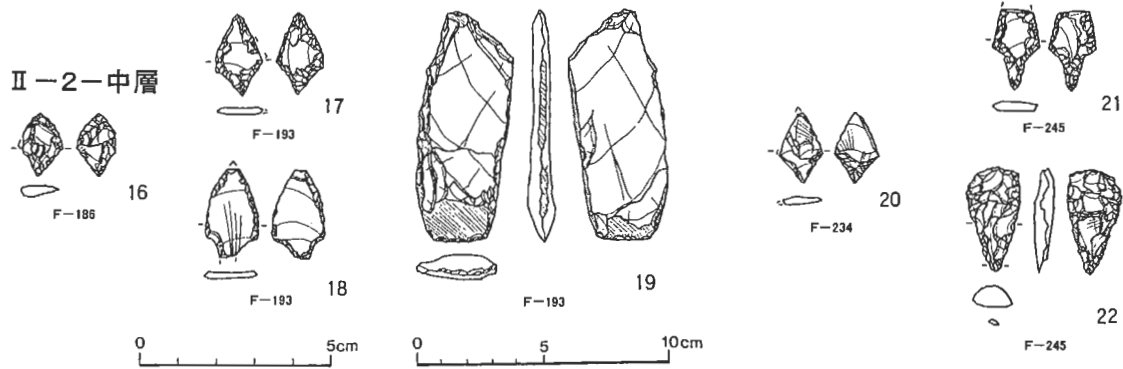
II-1層



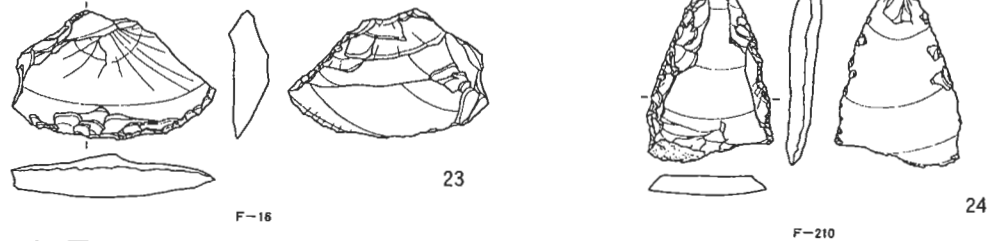
II-2-上層



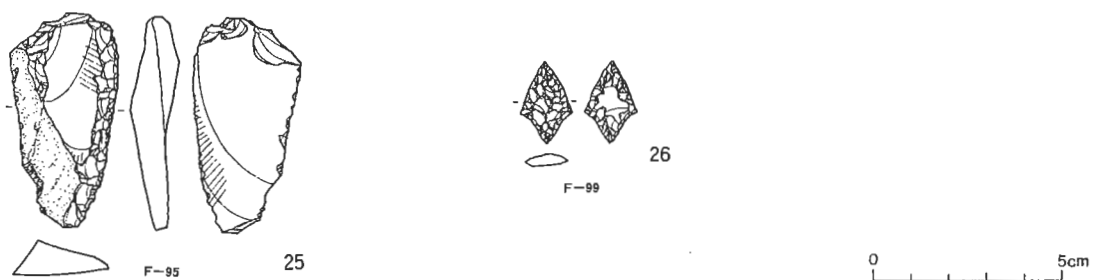
II-2-中1層



II-2-中2層



II-2-中5層



図IV-2-21 焼土出土の石器

3 集石と出土遺物

(1) 概要

今年度の調査では7ヵ所を確認した。3～8個の礫・礫石器がかたまつて検出されている。昨年検出されたような軽石が多く集まった集石は今回検出しなかった。集石では掘り込みなどを確認することはできなかつた。各遺構において出土した遺物のうち掲載したものについては集石の最後でまとめて報告する。

II-1 層検出

S-8 (図IV-3-2、表IV-10・11、図版IV-27)

位置 68-159-a

検出層位 II-1層

検出レベル 7.959m

調査 II-1層を調査中、礫・礫石器がごく狭い範囲内に集まった状態で検出された。周囲の精査などを行ったが掘り込みなどは確認されなかつた。遺物はほぼ同一の高さで検出されている。

遺物出土状況 5点出土した。たたき石2点、加工痕のある礫1点、棒状礫1点、礫片1点である。たたき石2点を掲載した。石質は安山岩2点、砂岩1点、珪岩1点、緑色泥岩1点である。総重量は1,845.7gであり、1点の重さは約250～600gである。

時期 遺物から判定することはできないが、検出された層位や周囲から出土している土器から縄文時代晩期末から続縄文時代初頭のものと考えられる。

S-10 (図IV-3-2、表IV-10・11、図版IV-28)

位置 66-159-a

検出層位 II-1層

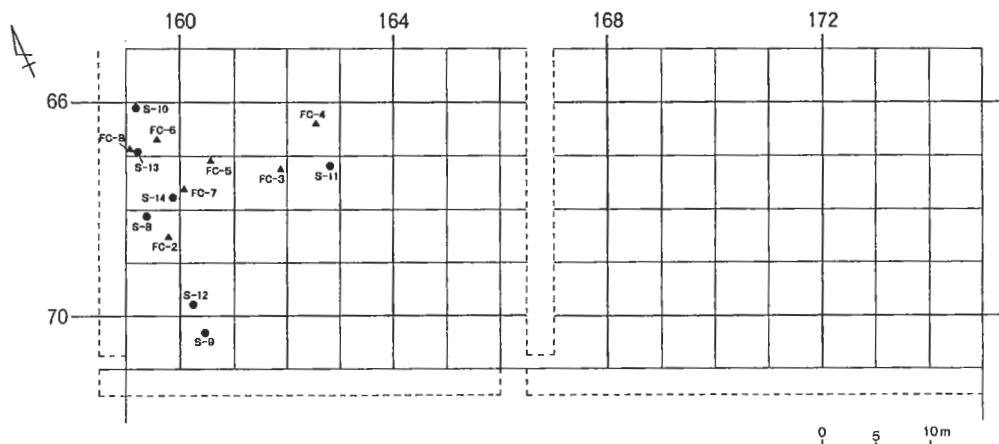
検出レベル 8.069m

調査 II-1層を調査中、礫・礫石器がごく狭い範囲内に集まった状態で検出された。周囲の精査などを行ったが掘り込みなどは確認できなかつた。遺物はほぼ同一の高さから検出されている。

遺物出土状況 3点出土した。たたき石2点、扁平な棒状礫1点である。たたき石2点を図示した。その他のものは写真のみ掲載する。石質は珪岩1点、安山岩1点、角閃岩1点である。総重量は1,453.5gであり、1点の重さは約360～720gである。

時期 遺物から判定することはできないが、検出された層位や周囲から出土している土器から縄文時代晩期末から続縄文時代初頭のものと考えられる。

集石・フレイク集中位置図



図IV-3・4-1 集石・フレイク集中位置図

S-11 (図Ⅳ-3-2、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-28)

位 置 67-162-d

検出層位 II-1層

検出レベル 8.173m

調 査 II-1層を調査中、礫が集まった状態で検出された。周囲の精査などを行ったが掘り込みなどを確認することはできなかった。礫が1カ所に重なるような状態であった。

遺物出土状況 3点出土している。たたき石片1点、礫1点、礫片1点である。図示はせず、写真のみを掲載する。たたき石片は扁平な棒状礫の周縁部と腹背部を使用している。石質は砂岩1点、安山岩2点である。総重量は1,244.2gであり、1点の重さは約340~500gである。

時 期 遺物から判定することはできないが、検出された層位や周囲から出土している土器から縄文時代晩期末から続縄文時代初頭のものと考えられる。

II-2-上層検出

S-9 (図Ⅳ-3-2、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-29)

位 置 70-160-a/d

検出層位 II-2-上層

検出レベル 7.808m

調 査 II-2-上層を調査中礫・礫石器がごく狭い範囲に集まった状態で検出された。周囲の精査などを行ったが掘り込みなどは確認できなかった。

遺物出土状況 3点出土している。たたき石2点、礫1点である。たたき石2点を掲載した。その他は写真を掲載している。珪岩1点、片岩1点、砂岩1点である。総重量は1,570.4gであり、1点の重さは約350~720gである。すべての遺物はほぼ同一の高さから検出されている。

時 期 遺物から判定することはできないが、検出された層位や周囲から出土している土器から縄文時代晩期末のものと考えられる。

S-12 (図Ⅳ-3-2、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-30)

位 置 69-160-b

検出層位 II-2-上層

検出レベル 7.920m

調 査 II-2-上層を調査中にやや広がった範囲に礫・礫石器が検出された。周囲の精査などを行ったが、掘り込みなどは確認されなかった。遺物はほぼ同一のレベルから出土し、横に寝た状態で検出されている。

遺物出土状況 8点出土している。たたき石2点、たたき石片3点、扁平な棒状礫2点、扁平な垂円礫1点である。たたき石片は扁平な棒状礫を使用し、端部と腹背部を使用しているもの2点、腹背部を使用しているもの1点である。たたき石2点を図示し、その他は写真のみを掲載している。石質は安山岩5点、砂岩3点。総重量は3,163.9gであり、1点の重さは約220~960gである。

時 期 遺物から判定することはできないが、検出された層位や周囲から出土している土器から縄文時代晩期末のものと考えられる。

II-2-中2層検出

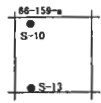
S-13 (図Ⅳ-3-2、表Ⅳ-10・11、図版Ⅳ-31)

位 置 66-159-b

検出層位 II-2-中2層

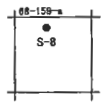
検出レベル 7.877m

II-1層検出の集石



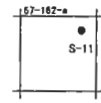
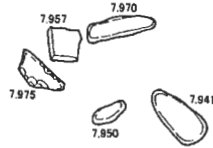
S-10

+1m
66-159-a



S-8

+1m
68-159-d

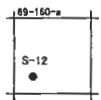


S-11



+1m
67-162-c

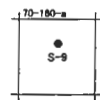
II-2-上層検出の集石



S-12



+1m
70-160-a

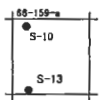


S-9

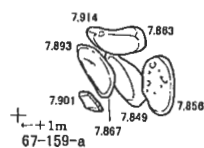
+1m
70-160-d



II-2-中2層検出の集石

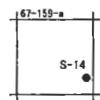


S-13

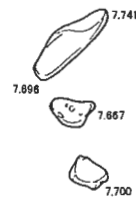


+1m
67-159-a

II-2-中層検出の集石



S-14



+1m
67-160-b



図N-3-2 S-8~14

3 集石と出土遺物

調 査 II-2-中2層調査中、礫が固まるような状態で検出された。周囲の精査などを行ったが、掘り込みなどは確認されなかった。検出されたレベルはほぼ変わらないが、1ヵ所に集められたようになっている。

遺物出土状況 6点出土している。扁平な棒状礫4点、礫片2点である。図示はせず、写真を掲載する。石質は安山岩4点、珩岩1点、砂岩1点。総重量は3,214.6gであり、1点の重さは約120～950gである。

時 期 遺物から判定することはできないが、検出された層位や周囲から出土している土器から縄文時代晩期末のものと考えられる。

II-2-中層検出

S-14 (図IV-3-2、表IV-10・11、図版IV-29)

位 置 67-159-c

検出層位 II-2-中層

検出レベル 7.701m

調 査 II-2-中層を調査中に3点の礫・礫石器が集まるような状態で出土した。周囲の精査などを行ったが掘り込みなどは確認されなかった。II-2-中層のどの位置にあたるかは確認できなかった。遺物はほぼ同一のレベルから出土している。

遺物出土状況 3点出土している。たたき石1点、台石片1点、棒状礫1点。たたき石1点を図示し、その他は写真を掲載する。石質は安山岩2点、砂岩1点である。総重量は3,277.6gであり、1点の重さは約460～2,280gである。

時 期 遺物から判定することはできないが、検出された層位や周囲から出土している土器から縄文時代晩期末のものと考えられる。

(2) 集石出土の石器等について (図IV-3・4-3、図版IV-27～31)

集石からは31点の遺物が出土している。内訳はたたき石12点、加工痕のある礫1点、礫・礫片18点である。石材は安山岩、片岩、珩岩、砂岩である。全ての遺物について写真を掲載した。

27・28はS-8出土。27は棒状礫の両端部を使用したもの。珩岩。28は扁平な礫の腹背部を使用したもの。安山岩。29・30はS-10出土。29は棒状礫の両端部を使用したもの。珩岩。30は扁平な棒状礫の両端部と腹背部を使用したもの。安山岩。31・32はS-9出土。31は扁平な棒状礫の両端部と腹背部を使用したもの。砂岩。32は扁平な棒状礫の腹背部を使用したもの。片岩。石材の周縁や両端部に石斧を製作しようとした剥離整形痕や敲打痕が見られることから、石斧製作過程で破損したものをたたき石に転用したものと考えられる。33・34はS-12出土。33は棒状礫の端部と腹背部を使用しているもの。砂岩。34は扁平な垂円礫の腹背部と周縁部を使用しているもの。安山岩。35はS-14出土。35は扁平な礫の腹背部を使用したたたき石。安山岩。掲載していないが、出土した棒状礫は今回の調査の中で出土した遺物の中でも2番目の大きさのものである。

(酒井)

4 フレイク集中と出土遺物

(1) 概要

今年度の調査では7ヶ所が検出された。フレイク集中8以外はほとんどが黒曜石のフレイク・チップである。フレイク集中8は頁岩のUフレイク、フレイクが集まっていたものである。接合してほぼ完形の亜円礫となる。

遺物は全部で9,127点出土している。うち黒曜石のフレイク・チップは9,081点である。

フレイク集中2 (図Ⅳ-4-2、表Ⅳ-12・13、図版Ⅳ-33・34)

位置 68-159-c

検出層位 II-1層

検出レベル 8.010m

調査 II-1層を調査中、黒曜石フレイク・チップがごく狭い範囲内に集まった状態で検出された。周囲の精査などを行ったが掘り込みなどは確認されなかった。

遺物出土状況 340点出土した。黒曜石フレイク・チップ339点、礫片1点である。遺物は土壤水洗により検出した。

時期 検出された層位や周辺より出土する土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

フレイク集中3 (図Ⅳ-4-2、表Ⅳ-12・13、図版Ⅳ-33・34)

位置 67-161-d

検出層位 II-1層

検出レベル 8.068m

調査 II-1層を調査中、黒曜石フレイク・チップがごく狭い範囲内に集まった状態で検出された。周囲の精査などを行ったが掘り込みなどは確認されなかった。

遺物出土状況 55点出土した。スクレイパー3点、Rフレイク2点、Uフレイク2点、黒曜石フレイク・チップ43点、その他のフレイク5点である。範囲を実測した後、土ごと取り上げ、水洗して遺物を検出した。スクレイパー3点を掲載した。

時期 検出された層位や周辺より出土する土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

フレイク集中4 (図Ⅳ-4-2、表Ⅳ-12・13、図版Ⅳ-33・34)

位置 67-161-d

検出層位 II-1層

検出レベル 8.068m

調査 II-1層を調査中、黒曜石フレイク・チップがごく狭い範囲内に集まった状態で検出された。周囲の精査などを行ったが掘り込みなどは確認されなかった。

遺物出土状況 55点出土した。スクレイパー3点、Rフレイク2点、Uフレイク2点、黒曜石フレイク・チップ43点、その他のフレイク5点である。範囲を実測した後、土ごと取り上げ、水洗して遺物を検出した。

時期 検出された層位や周辺より出土する土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

フレイク集中5 (図Ⅳ-4-2、表Ⅳ-12・13、図版Ⅳ-33・34)

位置 68-160-a/d/67-160-c

検出層位 II-2-上層

検出レベル 7.957m

調査 II-2-上層を調査中、黒曜石フレイク・チップがやや広い範囲内に集まった状態で検

4 フレイク集中と出土遺物

出された。周囲の精査などを行ったが掘り込みなどは確認されなかった。範囲を実測した後、土ごと取り上げ、水洗して遺物を検出した。

遺物出土状況 遺物は包含層に混入するような状態で検出された。8,449点出土した。石鏃片2点、黒曜石フレイク・チップ8,444点、その他のフレイク3点である。

時期 検出された層位や周辺より出土する土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

フレイク集中6 (図Ⅳ-4-2、表Ⅳ-12・13、図版Ⅳ-33・34)

位置 66-159-c

検出層位 Ⅱ-1層

検出レベル 8.048m

調査 Ⅱ-1層を調査中、黒曜石フレイク・チップがごく狭い範囲内に集まった状態で検出された。周囲の精査などを行ったが掘り込みなどは確認されなかった。範囲を実測した後、土ごと取り上げ、水洗して遺物を検出した。

遺物出土状況 遺物は包含層に混入するような状態で検出された。黒曜石フレイク・チップ43点が出土している。

時期 検出された層位や周辺より出土する土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

フレイク集中7 (図Ⅳ-4-2、表Ⅳ-12・13、図版Ⅳ-33・34)

位置 67-160-b

検出層位 Ⅱ-2-上層

検出レベル - m

調査 Ⅱ-2-上層を調査中、黒曜石フレイク・チップがごく狭い範囲内に集まった状態で検出された。周囲の精査などを行ったが掘り込みなどは確認されなかった。範囲を実測した後、土ごと取り上げ、水洗して遺物を検出した。検出レベルについては計測できなかった。

遺物出土状況 遺物は包含層に混入するような状態で検出された。黒曜石フレイク・チップ121点が出土している。

時期 検出された層位や周辺より出土する土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

フレイク集中8 (図Ⅳ-4-2、表Ⅳ-12・13、図版Ⅳ-33・34)

位置 66-159-b

検出層位 Ⅱ-2-中3層

検出レベル 7.578m

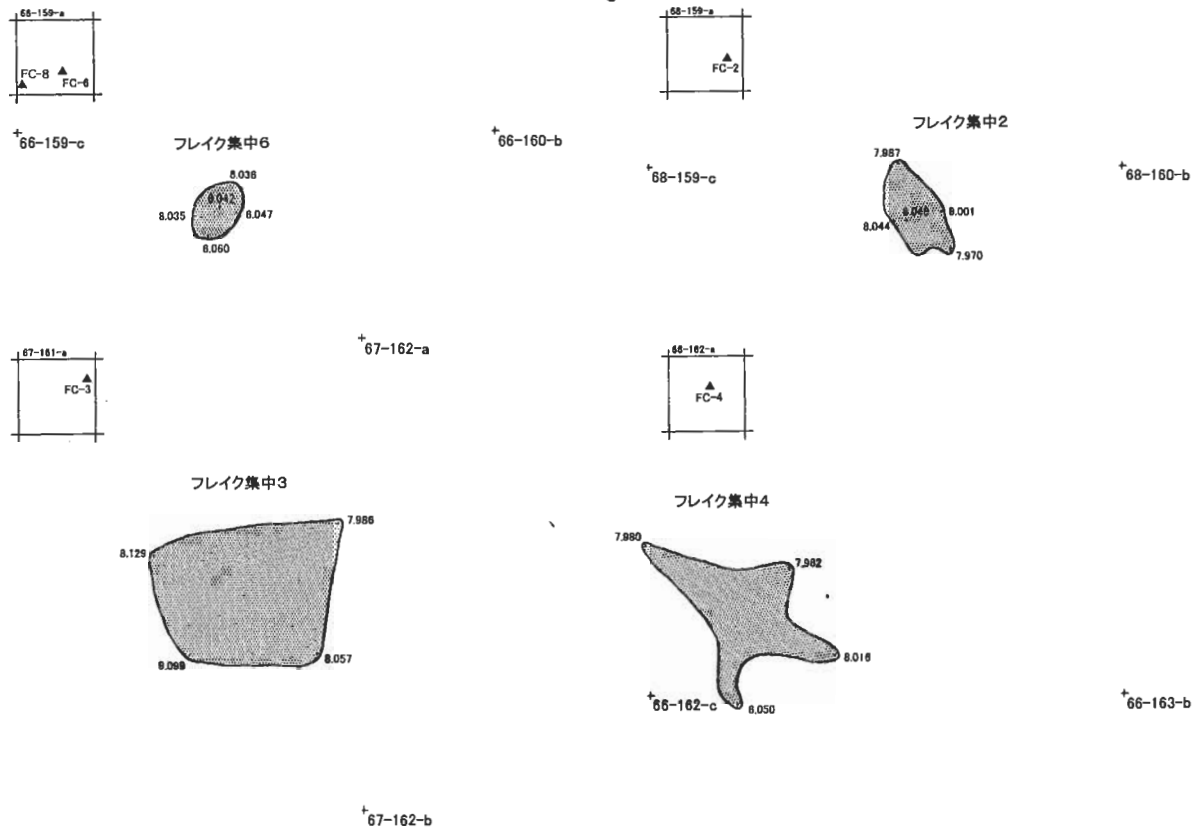
調査 67ラインのメインセクションベルトを調査中にⅡ-2-中3層から1ヶ所に集まった状態で検出された。周囲の精査などを行ったが掘り込みなどは確認されなかった。すぐ脇にP-24があるが検出層位も異なることから直接の関係はないものと考えられる。

遺物出土状況 あたかも袋に入れられていたかのようにまとまって30点の剥片が検出された。整理作業での検討の結果、Uフレイク11点、フレイク19点であった。石材は全て頁岩で、同一母岩である。周囲の焼土や包含層から出土したものが接合している。

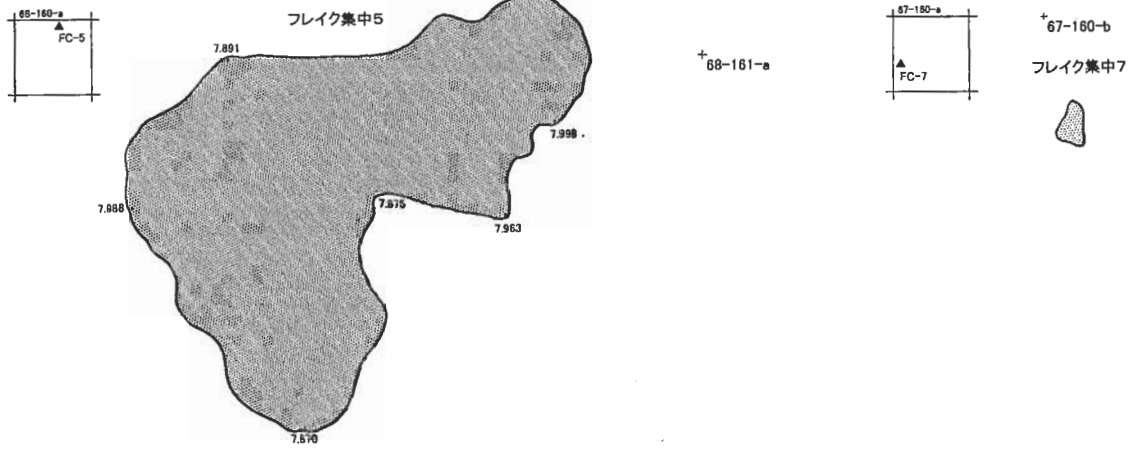
時期 検出された層位や周辺より出土する土器片から縄文時代晩期末と考えられる。

(酒井)

II-1 層検出のフレイク集中



II-2-1 上層検出のフレイク集中



II-2-2 中3層検出のフレイク集中



図IV-4-2 フレイク集中2~8

(2) フレイク集中出土の石器等について

フレイク集中からは9,129点の遺物が出土している。内訳は石鏃片2点、スクレイパー3点、Rフレイク2点、Uフレイク13点、黒曜石フレイク・チップ9,081点、頁岩フレイク19点、その他のフレイク8点である。

36～38はフレイク集中3、39はフレイク集中8出土のもの。

36～38はフレイクの形状を保ったままのスクレイパー。39は接合図。

(酒井)

フレイク集中8の接合資料(図Ⅳ-4-4-39)

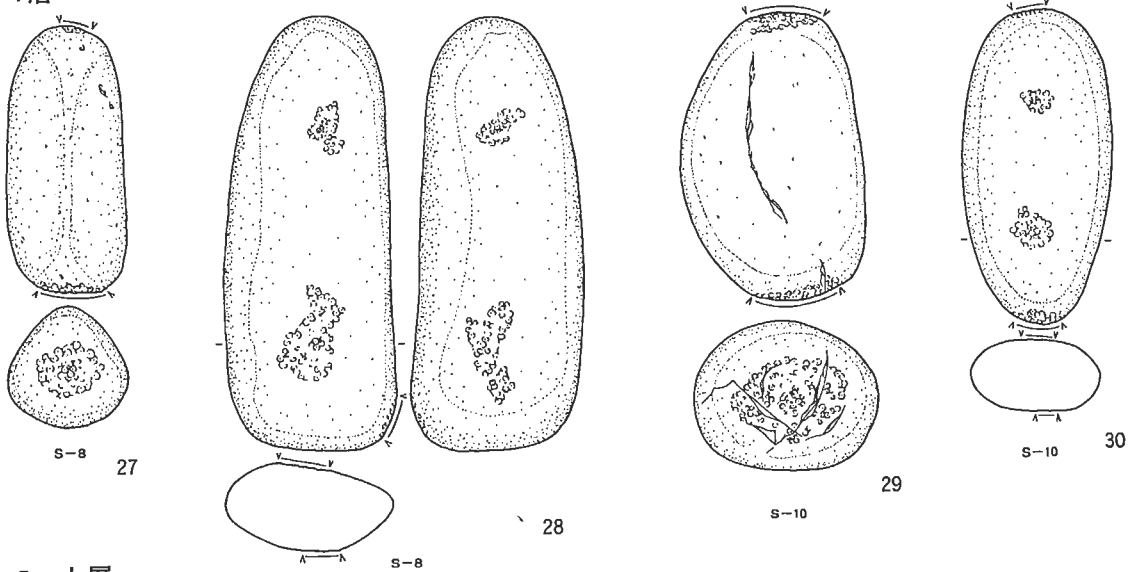
まとまって検出された剥片30点に接合を行った。さらに周辺から出土しているもの9点(66-159-a・b/69-159-a)、前年度に出土していたもの10点(F-92/66-158-c・d)など石質を手がかりにして接合を試みた。その結果、長さ23cm、幅8.5cm、厚さ5.5cm、重さ1.1kgの一個体を作ることができた。

これらの剥片類が出来上がっていくのは、概略次のような過程である。素材は細長い亜角礫であり、明瞭な礫表皮から推測すると、これは川原の転石が持ち込まれたのであろう。これの一端(先端)に打撃による剥片剥離がなされる。9枚の剥片が落ちた後、打面は転移している。都合6回の打面転移を認めることができる。時間的な先後はa→b→c→d→e→fとなる。fよりも後の部分は、今回の発掘では得られていない。a～fのそれぞれのうちでは、番号順とみなせる。

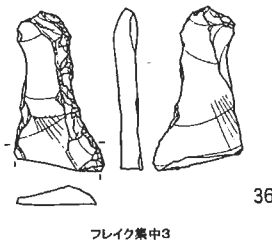
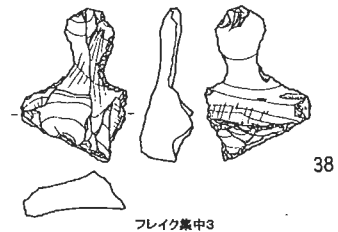
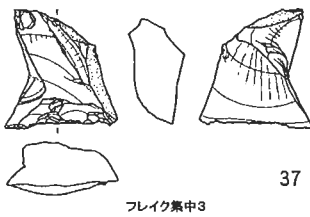
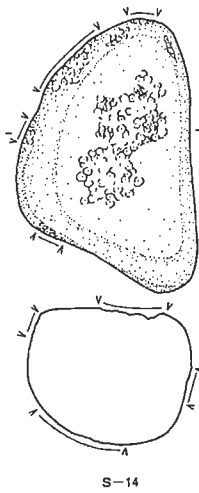
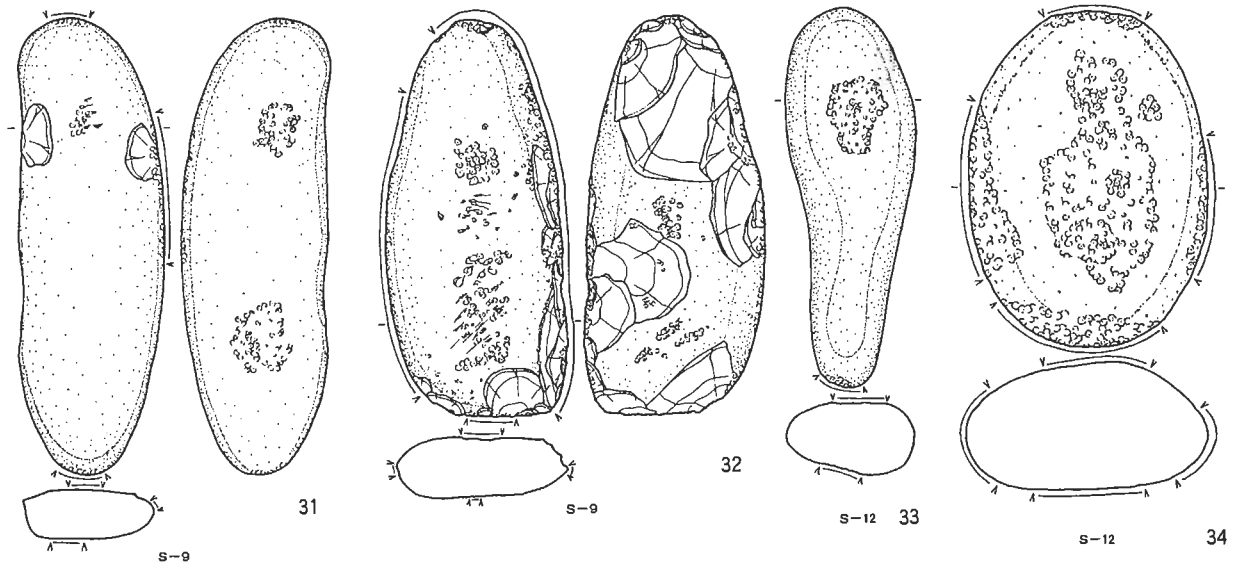
この接合資料はすべて剥片(40点ほど)からなっており、石核と呼べるものはない。また、縦長の剥片あるいは横長の剥片を「目的」に作り出した様子も認められない。さらに、今回、前回の発掘調査で得られた資料のうちには、これと同じ母岩でできた石器は見当たらない。

(西田)

II-1層



II-2-上層

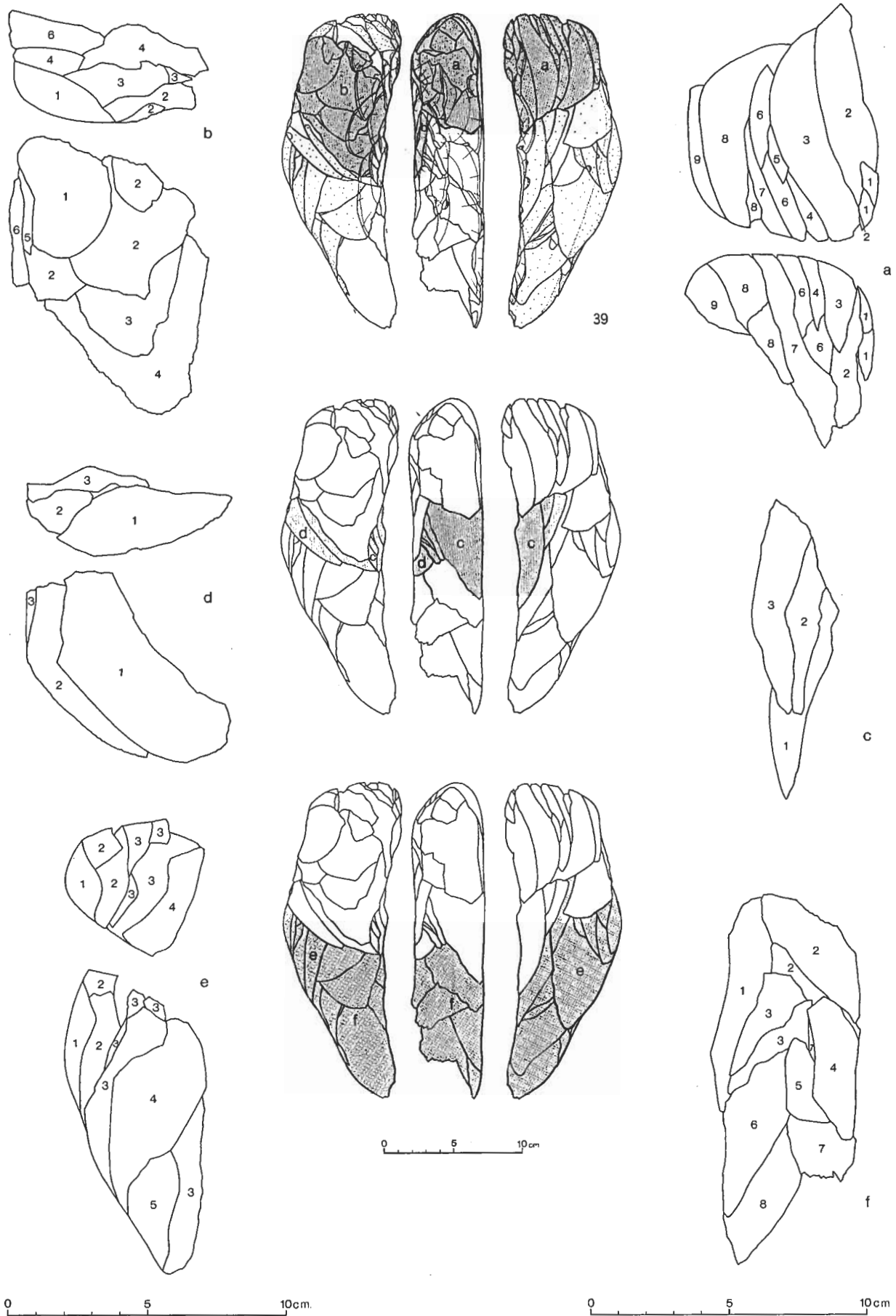


0 5 10cm

0 5cm

図IV-3・4-3 集石・フリク集中出土の石器等

4 フレイク集中と出土遺物



図IV-4-4 フレイク集中8出土の遺物接合図

5 遺物集中と出土遺物

(1) 概要

II-2-上層を調査中に同一層位内において、遺物が極めて集まって出土している範囲を遺物集中とした。今年度は1ヶ所が検出されている。遺物集中からは1,289点の遺物が出土している。

遺物は包含層出土のものと特に変わりはない。

遺物集中1 (図IV-5-1、表IV-14・15、図版IV-35)

位置 70-159-a/b/70-160-a/b/d

検出層位 II-2-上層

検出レベル 7.859m

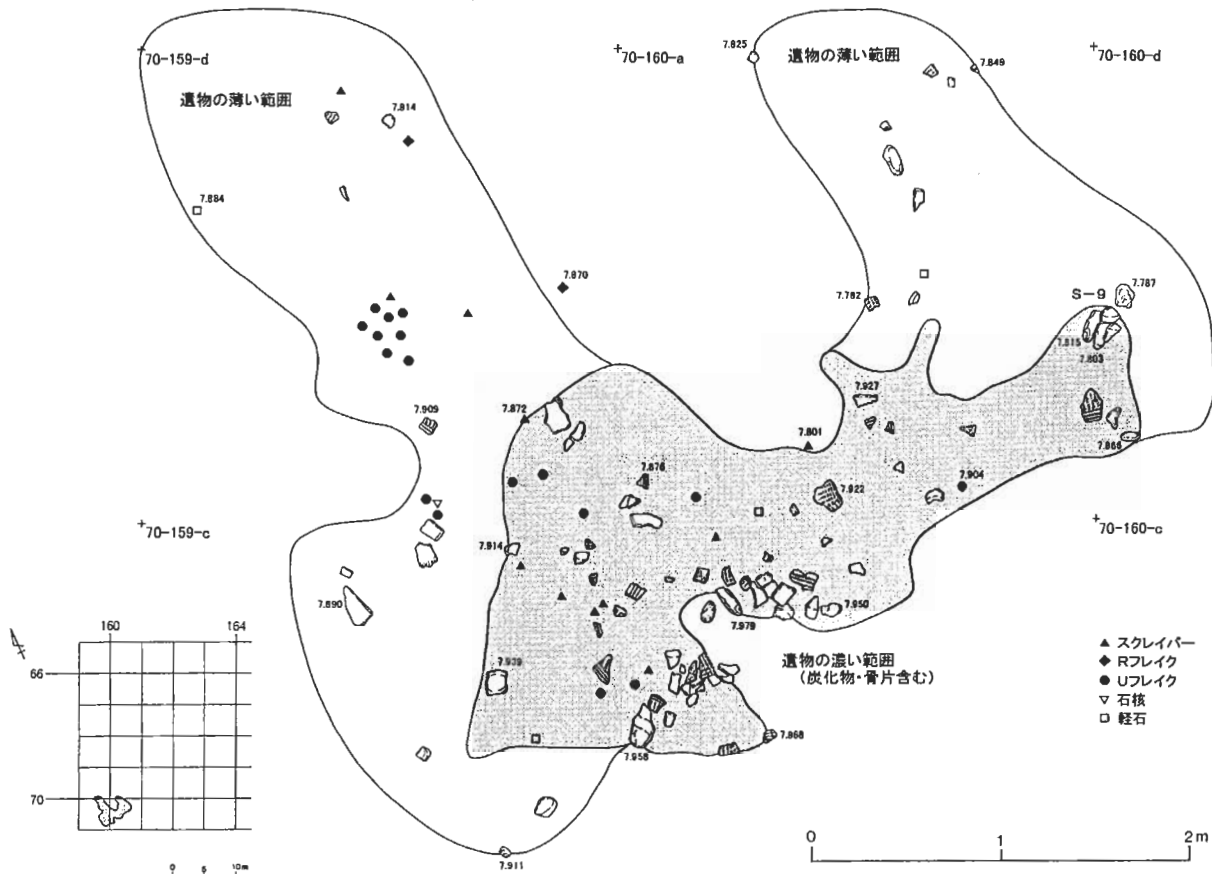
調査 II-2-上層を調査中に周囲よりも遺物出土密度の濃い場所を検出した。この範囲を遺物集中1として調査を行った。多量の遺物とともに、多量の炭化物や骨片なども検出されている。

遺物出土状況 遺物集中1の範囲において周囲に比べて遺物が集まっているような状況であった。特に何かを意図されたような痕跡はなく、遺物が散らばっているような状況である。出土した遺物は縄文時代晩期末の土器片が1,104点、石器等が185点の計1,289点である。石器等はフレイク・礫などが147点のほか、スクレイパー、たたき石、石核、Rフレイク、Uフレイクが出土している。その他、遺物集中1の範囲には骨片・炭化クルミ・ベンガラも検出されている。

時期 検出された層位や出土する土器片から縄文時代晩期末のものと考えられる。

(酒井)

遺物集中1



図IV-5-1 遺物集中1

(2) 遺物集中1出土の土器について (図Ⅳ-5-2・3、表Ⅳ-2、図版Ⅳ-36~38)

46は深鉢、内傾する口縁端面、RL(縦走)→Ad3(横位)、底部形態はB。47は壺の胴部、RL(縦走)→Ad3(横位)。48は鉢の底部~口縁部、口縁端面はほぼ水平、RL(縦走)、台形突起の頂部には渦巻状のR縄線文+円形の刺突がある。口縁端面にはR縄線文。底部はB。

49-aは鉢の口縁部、やや内傾する口縁端面、RL(縦走)→Bd4、口縁端には縄線文。49-bは鉢の底部、形態はD、体部下半はRL(縦走)→ナデ。外底面にはRL。50は浅鉢口縁部片、口縁端は水平、口縁端はRL縄線文の施文によって外側に肥厚、RL(縦走)→Bd4、単峰小突起の頂部にはRL縄線文。外側口縁端にはRL縄線文が施される。51は浅鉢口縁部片、口縁端は口縁端は水平で外側に肥厚、RL(縦走)→Bd4。52は浅鉢口縁部片、口縁端は水平、RL(縦走)→Bd4。53は浅鉢口縁部片、水平な口縁端、RL(縦走)→Bd4、三峰突起の頂部には渦巻状のL縄線文+円形の刺突がある。突起の間と脇にはL縄線文、口縁端外面には棒の側面圧痕。54は浅鉢口縁部片、口縁端は水平な口縁端、LR(縦走)→Bd4、台形峰突起の頂部にはL縄線文。

55は深鉢口縁部片、水平な口縁端面、?→Ad3(横位→縦位)。口縁端面には棒の側面圧痕。56は深鉢口縁部片、口縁端は丸い、RL(縦走)→Bd3(横位)。57は深鉢口縁部片、内傾する口縁端面、RL(縦走)→Ad3(横位)。口縁端面には棒の側面圧痕。58は深鉢口縁部片、内傾する口縁端面、RL(斜走)→Ad1(RL横位)。

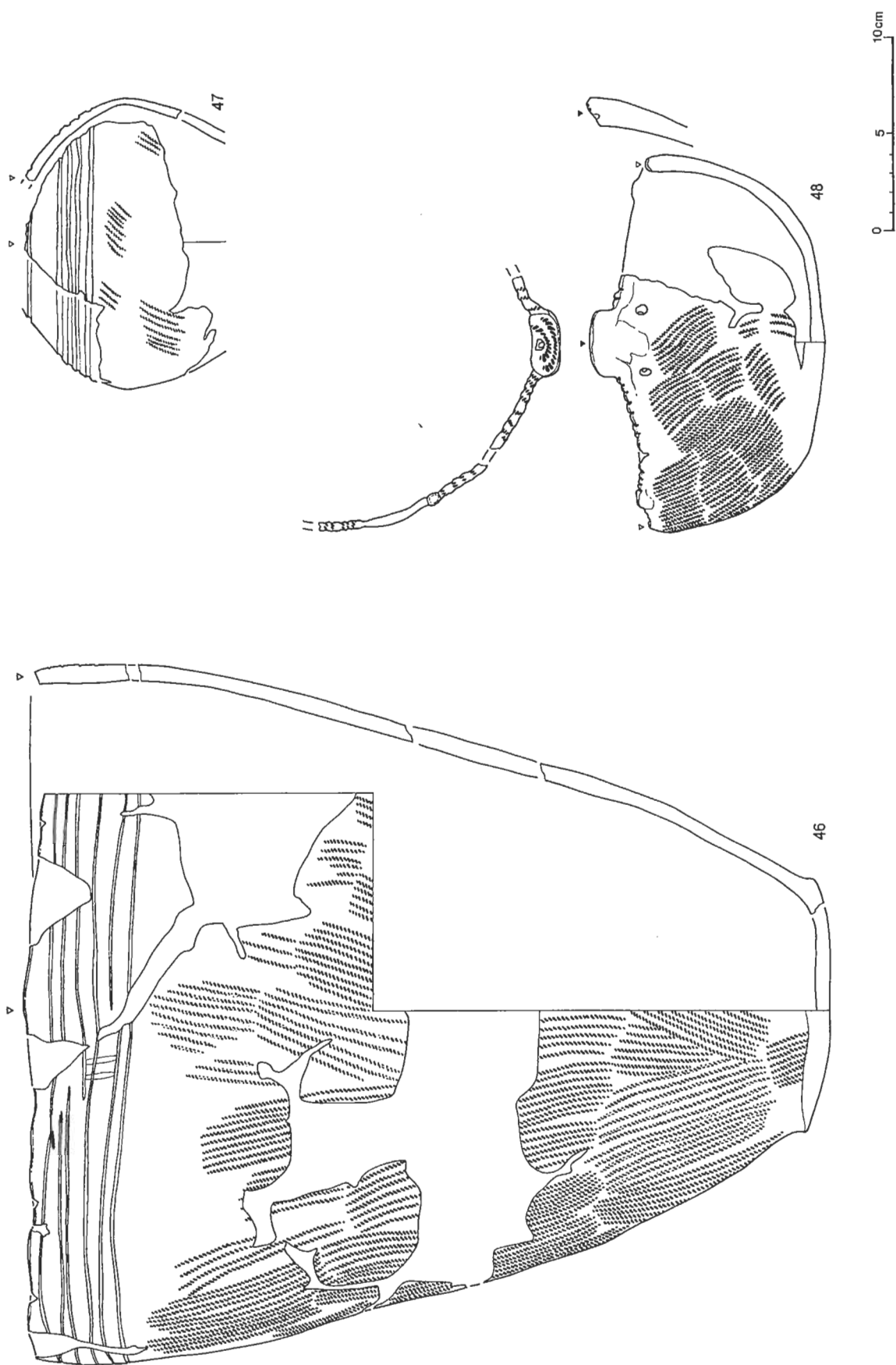
(鈴木)

(3) 遺物集中1出土の石器等について (図Ⅳ-5-3、表Ⅳ-14・15、図版Ⅳ-39)

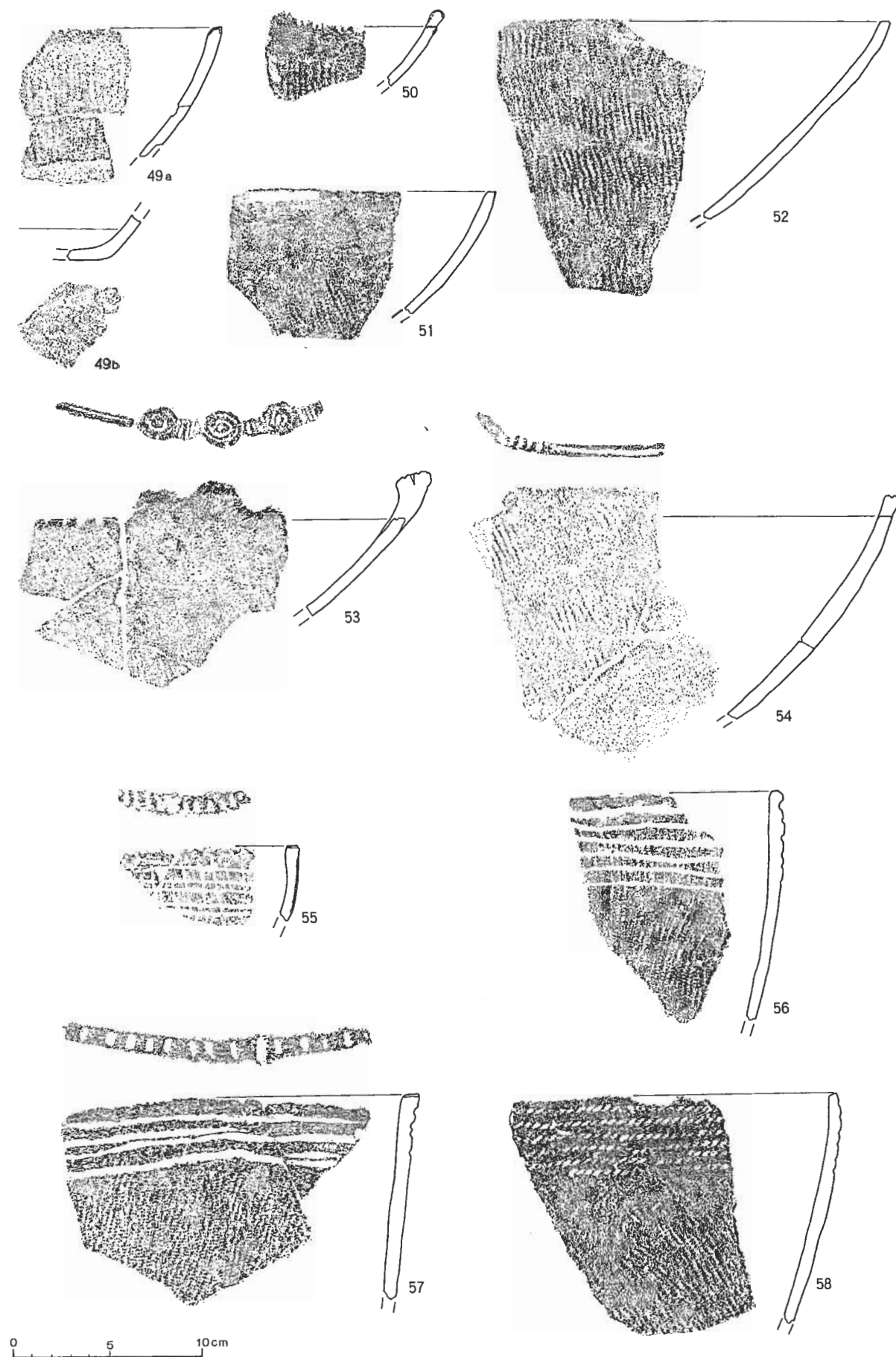
石器等は185点出土した。スクレイパー12点、たたき石3点、Rフレイク3点、Uフレイク19点、石核1点、黒曜石フレイク120点、その他のフレイク12点、礫ほか15点が出土している。

40~50はスクレイパー。40は両側縁に刃部を作出しているもの。41~43は円弧状の刃部があるもの。44~50は剥片の形状を活かして刃部を作出したもの。44・45は抉り込みのような刃部がある。51~53はたたき石。51・52は扁平な棒状礫の腹背部を使用しているもの。2点とも石材の周縁や両端部に石斧を製作しようとした剥離整形痕や敲打痕が見られることから、石斧製作過程で破損したものをたたき石に転用したものと考えられる。53は扁平な礫の腹背部と周縁部を使用しているもの。石質は40~49が黒曜石、50が安山岩、51・52が片岩、53が安山岩である。

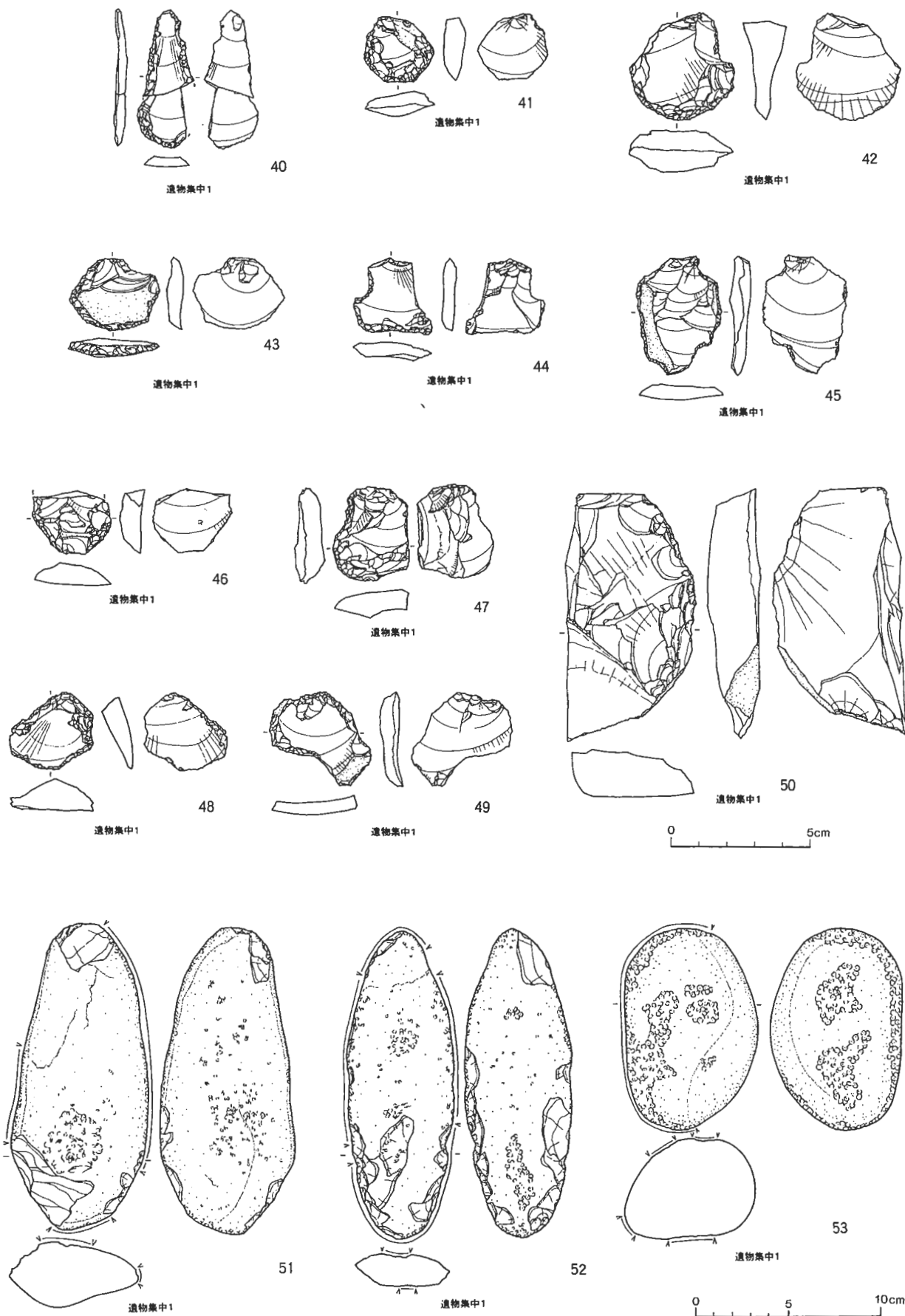
(酒井)



図IV-5-2 遺物集中1出土の土器(1)



図N-5-3 遺物集中1出土の土器(2)



図IV-5-4 遺物集中1出土の石器

表Ⅳ-1 遺構出土掲載土器一覽(1)

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類	遺物番号	備考
Ⅳ-1-5-1	66-159-abcd	P-1 1	覆土2層	Vc	4.9.16	
"	68-159-c.68-160-b	P-2 2	覆土1層	Vc	1.10	
"	70-159-cd/70-160-abd	遺物集中1	Ⅱ-2-上	Vc	119/7.34.36.38.41.106. 126.131	
"	69-159-c/69-160-abcd/70-160-b	包含層	Ⅱ-2-上	Vc	50/6.19.23.37.51.70.72/ 29	
"	70-160-a	"	Ⅱ-2-中(1)	Vc	52	
Ⅳ-1-5-2	66-159-a	P-1 4	覆土2層墳底	Vc	29	
"	65-159-b/66-159-a	包含層	Ⅱ-1	Vc	12.15/46.52	
"	66-159-a	"	Ⅱ-2-中(1)	Vc	92/141	
"	66-159-a	"	Ⅱ-2-中(3)	Vc	120	
"	65-161-a	"	Ⅱ-2-下	Vc	3	
Ⅳ-1-6-3	68-159-a	P-2 0	覆土1層	Vc	1	
"	67-159-a/68-159-a	包含層	Ⅱ-1	Vc	18.31/23.28.41.46.55	
"	67-158-d/67-159-b/68-159-ab	"	Ⅱ-2-上	Vc	22/40.53/56.77	
"	68-159-a	"	Ⅱ-2-中(1)	Vc	93	
Ⅳ-1-6-4	66-160-bc	P-2 1	覆土1層	Vc	8.9.11	
Ⅳ-1-7-5	66-159-ab	P-1 0	覆土3層	Vc	54	
Ⅳ-1-7-6	66-159-ab	P-1 0	覆土2層	Vc	24	
Ⅳ-1-7-7	66-159-ab	P-1 0	覆土4層	Vc	67.70	
Ⅳ-1-7-8	66-159-ab	P-1 0	覆土4.5層	Vc	73.81	
Ⅳ-1-7-9	66-159-ab	P-1 0	覆土6層	Vc	87	
"	66-159-b	包含層	Ⅱ-2-中(2)	Vc	118	
"	66-160-c	"	I	Vc	3	
Ⅳ-1-7-10	66-159-ab	P-1 0	覆土6層	Vc	82	
Ⅳ-1-7-11	69-159-abcd	P-1 1	覆土4層	Vc	1	
Ⅳ-1-7-12	69-159-c	包含層	Ⅱ-1	Vc	35	P-1 3出土遺物と 接合個体
"	70-160-a	"	Ⅱ-2-上	Vc	26	
Ⅳ-1-7-13	69-159-bc	P-1 3	覆土2層	Vc	19.20	
"	69-159-c	包含層	Ⅱ-1	Vc	35	
"	69-159-d	"	Ⅱ-2-中(1)	Vc	167	
Ⅳ-1-7-14	69-159-bc	P-1 3	覆土2層	Vc	21	
Ⅳ-1-7-15	69-159-bc	P-1 3	覆土2層	Vc	33	
Ⅳ-1-7-16	69-159-c	包含層	Ⅱ-2-中(1)	Vc	148	P-1 3出土遺物と 接合個体
Ⅳ-1-7-17	69-159-bc	P-1 3	覆土2層	Vc	32	
Ⅳ-1-7-18	66-159-a	包含層	Ⅱ-1	Vc	101	P-1 4出土の遺物 と接合個体
"	66-159-a	"	Ⅱ-2-中(1)	Vc	89.90	
Ⅳ-1-7-19	66-159-a	P-1 4	覆土1層	Vc	5	
"	66-159-a	包含層	Ⅱ-2-中(1)	Vc	93	
Ⅳ-1-7-20	70-160-b	P-1 5	覆土4層	Vc	10	
Ⅳ-1-7-21	69-159-cd	P-1 7	覆土1層	Vc	14	
Ⅳ-2-19-22	67-158-c.67-159-b.68-158-d.68-159-a	F-5 8	Ⅱ-2-中(1)	Vc	9	
"	67-158-c.67-159-b	F-1 0 9	Ⅱ-2-中(4)	Vc	1	
"	67-159-ab	包含層	Ⅱ-1	Vc	19.24.36	
"	67-159-a	"	Ⅱ-2-中	Vc	38	
"	67-159-b/68-159-a	"	Ⅱ-2-中(1)	Vc	94/91	
Ⅳ-2-19-23	67-159-ab	F-1 9 3	Ⅱ-2-中(1)	Vc	22	
"	67-159-a	包含層	Ⅱ-1	Vc	13.14	
"	67-158-d	"	Ⅱ-2-上	Vc	33.39.51	
Ⅳ-2-19-24	70-159-a	F-2 2 0	Ⅱ-2-中(1)	Vc	1.2	
"	70-159-d	包含層	Ⅱ-1	Vc	21	
"	70-159-a	"	Ⅱ-2-上	Vc	31.37.43	
"	70-159-a	"	Ⅱ-2-中(4)	Vc	107	
Ⅳ-2-19-25	67-158-c	F-8 8	Ⅱ-2-中(3)	Vc	1.3	対雁2遺跡(1)に V-7-48で掲載
"	67-160-c/68-159-ad	包含層	Ⅱ-2-上	Vc	3/56.68.81.90	
"	67-160-c	"	Ⅱ-2-中	Vc	14	
"	67-159-b/68-159-ad	"	Ⅱ-2-中(2)	Vc	72.103/96.104	
"	68-159-a	"	Ⅱ-2-中(5)	Vc	133	
"	67-159-c	"	Ⅱ-2-中(6)	Vc	92	
"	67-159-c	"	Ⅱ-2-下	Vc	124	

表IV-2 遺構出土掲載土器一覧(2)

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類	遺物番号	備考
IV-2-19-26	69-158-c.69-159-b.70-159-a	F-99	II-2-中(5)	Vc	30	
"	69-159-d.70-159-a	F-250	II-2-中(3)	Vc	24	
"	70-159-d	F-253	II-2-中(2)	Vc	45	
"	70-159-cd/70-160-abd	遺物集中1	II-2-上	Vc	8.31	
"	70-160-ad	包含層	II-2-中	Vc	38.47.50.53	
"	70-160-a	"	II-2-中(1)	Vc	52	
"	70-159-ac/70-160-a	"	II-2-中(2)	Vc	77.78.82.141/49	
"	69-159-b	"	II-2-中(5)	Vc	218	
IV-2-20-27	69-161-b.70-161-a	F-204	II-2-上	Vc	5	
IV-2-20-28	69-159-c.70-159-d.70-160-a	F-239	II-2-上	Vc	84	
IV-2-20-29	67-159-ab	F-193	II-2-中(1)	Vc	22	
IV-2-20-30	67-158-c.67-159-b.68-158-d.68-159-a	F-58	II-2-中(1)	Vc	6.9	
"	67-159-a	包含層	II-1	Vc	35	
IV-2-20-31	67-159-ad	F-214	II-2-中(2)	Vc	15	
"	67-159-b	包含層	II-2-中(2)	Vc	115	
IV-2-20-32	70-159-a	F-258	II-2-中(2)	Vc	4	
IV-2-20-33	70-159-d	F-221	II-2-中(2)	Vc	8	
IV-2-20-34	67-159-ad	F-214	II-2-中(2)	Vc	17	
IV-2-20-35	70-159-d	F-253	II-2-中(2)	Vc	25	
IV-2-20-36	69-159-d.70-159-a	F-250	II-2-中(3)	Vc	42	
IV-2-20-37	69-159-d.70-159-a	F-250	II-2-中(3)	Vc	42	
IV-2-20-38	69-159-d.70-159-a	F-250	II-2-中(3)	Vc	3	
IV-2-20-39	69-159-d.70-159-a	F-250	II-2-中(3)	Vc	42	
IV-2-20-40	69-159-b	包含層	II-2-中(4)	Vc	218	F-250出土遺物 と接合個体
"	69-159-b	"	II-2-中(5)	Vc	187	
IV-2-20-41	70-159-a	包含層	II-2-中(3)	Vc	93	F-79出土の遺物 と接合個体
"	70-159-a	"	II-2-中(4)	Vc	98	
IV-2-20-42	67-160-a	F-242	II-2-中(4)	Vc	1	
IV-2-20-43	69-158-c.69-159-b.70-159-a	F-99	II-2-中(5)	Vc	30.32	
IV-2-20-44	69-158-c.69-159-b.70-159-a	F-99	II-2-中(5)	Vc	14	
IV-2-20-45	68-160-bc	F-247	II-2-下	Vc	1.2	
IV-5-2-46	70-159-cd.70-160-abd	遺物集中1	II-2-上	Vc	24~ 27.42.111.119.126.131	
"	69-159-c/70-160-ab	包含層	II-2-上	Vc	50/18.29	
"	70-160-a	"	II-2-中(1)	Vc	52	
"	70-160-b	"	II-2-下	Vc	82	
IV-5-2-47	70-159-cd.70-160-abd	遺物集中1	II-2-上	Vc	10.11.124	
IV-5-2-48	70-159-cd.70-160-abd	遺物集中1	II-2-上	Vc	77.78	
"	66-158-d	包含層	II-2-中(1)	Vc	189	
"	67-158-c	"	II-2-中(2)	Vc	174	
IV-5-3-49a	70-159-cd.70-160-abd	遺物集中1	II-2-上	Vc	86	
"	70-159-d	包含層	II-2-中(2)	Vc	144	
IV-5-3-49b	70-159-cd.70-160-abd	遺物集中1	II-2-上	Vc	88	
IV-5-3-50	70-159-cd.70-160-abd	遺物集中1	II-2-上	Vc	2	
IV-5-3-51	70-159-d	包含層	II-1	Vc	7	遺物集中1出土遺物 と接合個体
IV-5-3-52	70-159-cd.70-160-abd	遺物集中1	II-2-上	Vc	131	
IV-5-3-53	70-159-cd.70-160-abd	遺物集中1	II-2-上	Vc	70.83	
"	70-159-d	包含層	II-1	Vc	8	
IV-5-3-54	70-159-cd.70-160-abd	遺物集中1	II-2-上	Vc	131	
IV-5-3-55	67-160-c	包含層	II-1	Vc	1	
"	69-160-b	"	II-2-上	Vc	46	
IV-5-3-56	70-159-cd.70-160-abd	遺物集中1	II-2-上	Vc	52	
IV-5-3-57	70-159-d	包含層	II-2-中(2)	Vc	139	遺物集中1出土遺物 と接合個体
"	70-160-a	"	II-2-下	Vc	84	
IV-5-3-58	70-159-cd.70-160-abd	遺物集中1	II-2-上	Vc	23	

表Ⅳ-3 遺構出土掲載石器等一覧

図番号	遺構番号	名称	遺物番号	検出層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
Ⅳ-1-3-1	P-10	石鏃	28	覆土3	2.1	1.1	0.2	0.5	obs	Ⅳ-12	
Ⅳ-1-3-2	P-10	たたき石	7	覆土3	14.5	6.1	3.7	406.4	安山岩	Ⅳ-12	
Ⅳ-1-3-3	P-10	たたき石	85	覆土6	9.9	6.1	1.9	137.0	泥岩	Ⅳ-12	
Ⅳ-1-3-4	P-20	たたき石	3	覆土1	18.0	7.1	5.2	943.7	安山岩	Ⅳ-12	
Ⅳ-1-3-5	P-20	砥石	2	覆土1	23.4	18.6	8.2	2,400.0	砂岩	Ⅳ-12	
Ⅳ-2-3-6	F-185	石鏃	1	Ⅱ-1	1.8	1.3	0.5	0.9	obs	Ⅳ-24	有茎
Ⅳ-2-3-7	F-200	スクレイパー	2	Ⅱ-1	2.5	2.5	0.5	3.1	obs	Ⅳ-24	
Ⅳ-2-3-8	F-236	スクレイパー	10	Ⅱ-1	3.1	4.7	0.9	9.0	安山岩	Ⅳ-24	
Ⅳ-2-3-9	F-204	スクレイパー	19	Ⅱ-2-上	3.0	1.2	0.6	2.5	obs	Ⅳ-24	
Ⅳ-2-3-10	F-205	スクレイパー	5	Ⅱ-2-上	4.0	6.7	1.2	24.3	安山岩	Ⅳ-24	
Ⅳ-2-3-11	F-239	石鏃	129	Ⅱ-2-上	2.0	1.2	0.5	0.7	obs	Ⅳ-24	有茎
Ⅳ-2-3-12	F-239	石鏃	153	Ⅱ-2-上	(1.9)	1.1	0.5	(0.6)	obs	Ⅳ-24	有茎
Ⅳ-2-3-13	F-239	スクレイパー	20	Ⅱ-2-上	2.4	2.8	0.9	4.2	obs	Ⅳ-24	
Ⅳ-2-3-14	F-239	スクレイパー	148	Ⅱ-2-上	2.0	1.9	0.7	2.1	obs	Ⅳ-24	
Ⅳ-2-3-15	F-239	スクレイパー	12	Ⅱ-2-上	3.6	1.4	0.7	2.0	obs	Ⅳ-24	
Ⅳ-2-3-16	F-186	石鏃未製品	2	Ⅱ-2-中	1.6	(1.0)	0.3	(0.4)	obs	Ⅳ-24	有茎
Ⅳ-2-3-17	F-193	石鏃	1	Ⅱ-2-中1	2.1	(1.2)	0.2	(0.5)	obs	Ⅳ-24	有茎
Ⅳ-2-3-18	F-193	石鏃	9	Ⅱ-2-中1	(2.3)	1.4	0.2	(0.6)	obs	Ⅳ-24	有茎
Ⅳ-2-3-19	F-193	石斧	10	Ⅱ-2-中1	9.1	3.8	1.1	38.1	片岩	Ⅳ-24	
Ⅳ-2-3-20	F-234	石鏃	9	Ⅱ-2-中1	(1.9)	(1.1)	0.2	(0.4)	obs	Ⅳ-24	有茎
Ⅳ-2-3-21	F-245	石鏃	3	Ⅱ-2-中1	(2.1)	1.2	0.3	(0.6)	obs	Ⅳ-24	有茎
Ⅳ-2-3-22	F-245	石鏃	5	Ⅱ-2-中1	2.8	1.4	0.5	1.7	obs	Ⅳ-24	
Ⅳ-2-3-23	F-16	スクレイパー	33	Ⅱ-2-中2	3.4	5.3	1.1	15.3	安山岩	Ⅳ-24	
Ⅳ-2-3-24	F-210	スクレイパー	1	Ⅱ-2-中2	4.7	3.3	0.9	9.0	obs	Ⅳ-24	
Ⅳ-2-3-25	F-95	スクレイパー	2	Ⅱ-2-中5	5.6	2.8	1.2	11.9	obs	Ⅳ-24	
Ⅳ-2-3-26	F-99	石鏃	16	Ⅱ-2-中5	2.1	1.3	0.3	0.6	obs	Ⅳ-24	有茎
Ⅳ-3-2-27	S-8	たたき石	4	Ⅱ-1	10.6	4.7	4.7	316.2	珪岩	Ⅳ-27	
Ⅳ-3-2-28	S-8	たたき石	5	Ⅱ-1	17.2	6.8	3.5	619.3	安山岩	Ⅳ-27	
Ⅳ-3-2-29	S-10	たたき石	1	Ⅱ-1	11.5	7.2	5.8	722.8	珪岩	Ⅳ-28	
Ⅳ-3-2-30	S-10	たたき石	3	Ⅱ-1	12.6	5.9	2.8	360.1	安山岩	Ⅳ-28	
Ⅳ-3-2-31	S-9	たたき石	2	Ⅱ-2-上	15.8	7.1	3.4	498.5	片岩	Ⅳ-29	
Ⅳ-3-2-32	S-9	たたき石	3	Ⅱ-2-上	18.0	5.8	1.9	354.1	砂岩	Ⅳ-29	
Ⅳ-3-2-33	S-12	たたき石	3	Ⅱ-2-上	15.0	5.2	2.9	322.0	砂岩	Ⅳ-30	
Ⅳ-3-2-34	S-12	たたき石	4	Ⅱ-2-上	13.3	9.5	5.1	962.8	安山岩	Ⅳ-30	
Ⅳ-3-2-35	S-14	たたき石	2	Ⅱ-2-中	10.8	6.7	5.5	537.5	安山岩	Ⅳ-29	
Ⅳ-4-2-36	FC-3	スクレイパー	3	Ⅱ-1	4.2	2.4	0.7	4.2	obs	Ⅳ-34	
Ⅳ-4-2-37	FC-3	スクレイパー	4	Ⅱ-1	3.1	2.9	1.4	8.5	obs	Ⅳ-34	
Ⅳ-4-2-38	FC-3	スクレイパー	8	Ⅱ-1	4.1	2.8	1.4	6.2	obs	Ⅳ-34	
Ⅳ-4-2-39	FC-8他	接合資料	1~30	Ⅱ-2-中3	23.0	8.5	5.3	1,100.0	頁岩	Ⅳ-34	接合資料
Ⅳ-5-3-40	遺物集中1	スクレイパー	90	Ⅱ-2-上	4.9	(1.9)	0.5	(3.3)	obs	Ⅳ-39	
Ⅳ-5-3-41	遺物集中1	スクレイパー	76	Ⅱ-2-上	2.4	2.5	0.8	4.0	obs	Ⅳ-39	
Ⅳ-5-3-42	遺物集中1	スクレイパー	95	Ⅱ-2-上	3.9	3.7	1.5	14.1	obs	Ⅳ-39	
Ⅳ-5-3-43	遺物集中1	スクレイパー	22	Ⅱ-2-上	2.6	3.2	0.7	4.3	obs	Ⅳ-39	
Ⅳ-5-3-44	遺物集中1	スクレイパー	130	Ⅱ-2-上	2.7	2.8	0.6	3.2	obs	Ⅳ-39	
Ⅳ-5-3-45	遺物集中1	スクレイパー	63	Ⅱ-2-上	4.3	3.0	0.8	6.8	obs	Ⅳ-39	
Ⅳ-5-3-46	遺物集中1	スクレイパー	82	Ⅱ-2-上	(2.3)	2.8	0.9	(4.6)	obs	Ⅳ-39	
Ⅳ-5-3-47	遺物集中1	スクレイパー	50	Ⅱ-2-上	3.4	2.7	1.0	7.5	obs	Ⅳ-39	
Ⅳ-5-3-48	遺物集中1	スクレイパー	60	Ⅱ-2-上	2.8	2.9	1.1	4.6	obs	Ⅳ-39	
Ⅳ-5-3-49	遺物集中1	スクレイパー	61	Ⅱ-2-上	3.4	3.6	0.8	5.2	obs	Ⅳ-39	
Ⅳ-5-3-50	遺物集中1	スクレイパー	85	Ⅱ-2-上	8.9	4.7	2.0	89.3	安山岩	Ⅳ-39	
Ⅳ-5-3-51	遺物集中1	たたき石	6	Ⅱ-2-上	16.4	7.2	3.6	496.1	片岩	Ⅳ-39	
Ⅳ-5-3-52	遺物集中1	たたき石	31	Ⅱ-2-上	16.5	5.7	1.8	218.1	片岩	Ⅳ-39	
Ⅳ-5-3-53	遺物集中1	たたき石	32	Ⅱ-2-上	10.8	7.1	5.3	582.9	安山岩	Ⅳ-39	

表IV-4 土坑一覽

図番号	遺構名	位置	検出層位	上端(長さ×幅)/下端(長さ×幅)/深さ(m)	長軸方向	図版番号	備考
IV-1-2	P-12	68-159-d/67-159-c	II-2-上	1.04 × 0.98 / 0.42×0.40/ 0.18	N-55°-W	IV-1	
IV-1-2	P-16	68-159-c	II-2-上	0.82 × 0.70 / 0.68×0.54/ 0.14	N-34°-E	IV-2	
IV-1-2	P-17	69-159-c/d	II-2-上	0.86 × 0.72 / 0.56×0.50/ 0.19	N-5°-E	IV-3	
IV-1-2	P-22	68-159-c/68-160-b 69-159-d/69-160-a	II-2-上	(1.06) × (0.94) / 0.52×0.50/ 0.30	N-31°-E	IV-1	
IV-1-2	P-19	69-160-b	II-2-上	(0.50) × (0.44) / -×-/ (0.20)	不明	IV-2	
IV-1-2	P-21	66-160-b/c	II-2-上	0.66 × 0.64 / 0.34×0.34/ 0.35	N-7°-E	IV-2	
IV-1-3	P-15	70-160-b	II-2-中	0.54 × 0.50 / 0.36×0.30/ 0.09	N-71°-W	IV-3	
IV-1-3	P-10	66-159-a/b	II-2-中1	1.08 × 0.88 / 0.82×0.64/ 0.32	N-64°-W	IV-4	
IV-1-3	P-11	69-159-a/b/c/d	II-2-中1	0.96 × 0.88 / 0.58×0.46/ 0.12	N-73°-W	IV-5	
IV-1-3	P-13	69-159-b/c	II-2-中1	0.90 × 0.80 / 0.77×0.66/ 0.19	N-82°-W	IV-6	
IV-1-3	P-14	66-159-a	II-2-中1	(0.46) × (0.38) / 0.19×0.19/ 0.30	N-8°-E	IV-4	
IV-1-3	P-20	68-159-a	II-2-中1	-×-/ -×-/ 0.19	不明	IV-3	
IV-1-4	P-24	66-159-b/67-159-a	II-2-中2	(0.30) × (0.34) / -×-/ (0.26)	不明	IV-6	
IV-1-4	P-25	70-159-d	II-2-中2	(0.86) × - / -×-/ (0.30)	不明	IV-6・7	F-248を切る
IV-1-4	P-18	67-159-c	II-2-中4	0.70 × 0.44 / 0.33×0.24/ 0.08	N-23°-E	IV-7	
IV-1-4	P-23	67-159-d	II-2-中5	0.50 × 0.42 / 0.34×0.32/ 0.11	N-3°-W	IV-7・8	
IV-1-4	P-2	70-159-a/70-158-d	II-2-中6	0.62 × 0.44 / 0.52×0.34/ 0.07	N-48°-W	IV-8	F-97を切る

表IV-5 土坑出土遺物一覽

分類	土 器 等					石 器 等													遺物合計									
	V群c類	IV群a類	土製品	焼成粘土塊	土器合計	石鏃	石錐	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	石斧	たたき石	台石	砥石	石核	加工痕ある礫	黒曜石	頁岩		その他	黒曜石	その他	軽石	石炭	礫・礫片	石製品	石器合計	
遺構名																												
P-2	3				3																						0	3
P-10	85				85	1						2				1	2	4					27		1		38	123
P-11	78				78												6	7	2			6					21	99
P-13	206			1	207												24	8				4		2		40	247	
P-14	47				47												3										3	50
P-15	16				16																						0	16
P-16	17				17																						0	17
P-17	65				65										1	8	2	1							2		14	79
P-18	3				3																						0	3
P-19	13				13												1								1		2	15
P-20	28			1	29							1	1			3					1				1		7	36
P-21	91				91																			4		4	4	95
P-22	50				50				1	1						5	2					7		4		20	70	
P-23	11				11																	1				1	12	
P-24	10				10																	4		1		5	15	
P-25	37			1	38											1										1	39	
合計	760			3	763	1			3	1		3	1	1	1	53	23	3		1	49		16		156	919		

表Ⅳ-6 焼土一覽(1)

図番号	遺構名	位 置	検出層位	長さ×幅×厚さ(m)	分類	備 考
Ⅳ-2-2	F-200	65-159-b/66-159-a	Ⅱ-1	1.58×1.19×0.08	現地	骨片
	F-201	65-159-b/66-159-a/d	Ⅱ-1	0.42×0.38×0.02	現地	
	F-203	65-159-b	Ⅱ-1	0.50×0.24×0.05	現地	ベンガラ
	F-189	66-159-c	Ⅱ-1	0.80×0.70×0.03	現地	
	F-39	67-158-c/67-159-b	Ⅱ-1	1.20×0.56×0.03	廃棄	骨片
	F-182	67-159-c/68-159-a/d	Ⅱ-1	0.94×0.62×0.07	現地	骨片
	F-184	68-159-b	Ⅱ-1	0.30×0.14×0.02	廃棄	
	F-187	69-159-a/d	Ⅱ-1	0.63×0.48×0.05	現地	
	F-191	69-159-a/d	Ⅱ-1	1.48×1.38×0.10	現地	炭化クルミ
	Ⅳ-2-3	F-183	70-159-a/b	Ⅱ-1	0.96×0.76×—	廃棄
F-236		70-159-d/70-160-a	Ⅱ-1	1.16×0.64×0.06	現地	
F-232		68-160-a	Ⅱ-1	0.56×0.56×0.03	現地	
F-172		66-161-d	Ⅱ-1	0.49×0.48×0.10	現地	
F-175		66-161-b/c 67-161-a/c/d	Ⅱ-1	0.52×0.34×—	廃棄	
F-181		67-161-c	Ⅱ-1	0.38×0.34×—	廃棄	
F-185		67-161-d/67-162-a	Ⅱ-1	0.73×0.56×0.06	現地	骨片、炭化クルミ
Ⅳ-2-4		F-195	68-161-c/69-161-d	Ⅱ-1	1.14×1.08×0.08	現地
	F-196	69-161-c/69-162-b	Ⅱ-1	0.65×0.57×0.08	現地	
	F-194	66-162-a/d	Ⅱ-1	0.86×0.72×0.07	現地	灰層あり
	F-170	68-162-a	Ⅱ-1	0.29×0.24×0.02	現地	炭化クルミ
Ⅳ-2-5	F-44	66-158-c/66-159-b 67-158-d/67-159-a	Ⅱ-2-上	1.78×1.35×0.10	現地	骨片
	F-188	69-159-c	Ⅱ-2-上	0.44×0.43×0.05	廃棄	骨片
	F-202	69-159-c	Ⅱ-2-上	0.90×0.32×0.05	廃棄	骨片
	F-239	69-159-c/70-159-d 70-160-a	Ⅱ-2-上	0.82×0.68×0.13	現地	骨片
	F-218	70-159-c	Ⅱ-2-上	0.56×0.23×0.04	廃棄	骨片
	F-233	68-160-a/d	Ⅱ-2-上	0.80×0.52×0.03	廃棄	
Ⅳ-2-6	F-205	69-160-b	Ⅱ-2-上	1.78×1.08×—	廃棄	
	F-206	69-160-b	Ⅱ-2-上	0.48×0.44×0.21	現地	
	F-207	69-160-d	Ⅱ-2-上	1.32×0.63×—	廃棄	
	F-176	66-161-a/d	Ⅱ-2-上	0.28×0.24×0.03	廃棄	
	F-177	66-161-a/d	Ⅱ-2-上	0.40×0.16×—	廃棄	
	F-178	66-161-a/d	Ⅱ-2-上	0.82×0.70×0.02	廃棄	
	F-179	66-161-a	Ⅱ-2-上	0.66×0.63×0.08	現地	
	F-180	66-161-a/d	Ⅱ-2-上	0.34×0.20×0.08	廃棄	
	F-174	69-161-b/70-161-a	Ⅱ-2-上	1.04×0.53×0.02	廃棄	
	F-204	69-161-b/70-161-a	Ⅱ-2-上	0.78×0.77×0.03	現地	炭化クルミ
Ⅳ-2-7	F-173	70-161-a/d	Ⅱ-2-上	0.70×0.64×0.04	現地	炭化クルミ
	F-199	65-162-c	Ⅱ-2-上	0.72×0.55×0.03	現地	
	F-169	68-162-a/d	Ⅱ-2-上	0.78×0.50×0.07	現地	
	F-171	68-162-a/d	Ⅱ-2-上	0.60×0.44×0.05	現地	
	F-197	69-162-c	Ⅱ-2-上	0.47×0.35×0.06	現地	
	F-198	69-162-c/69-163-b 70-162-d	Ⅱ-2-上	0.65×0.29×0.05	廃棄	
	Ⅳ-2-8	F-216	68-160-c	Ⅱ-2-中	0.23×0.15×0.02	廃棄
F-217		68-160-c	Ⅱ-2-中	0.76×0.66×0.06	廃棄	骨片、炭化クルミ
F-229		69-160-c/d	Ⅱ-2-中	0.62×0.48×0.02	廃棄	
F-230		69-160-c	Ⅱ-2-中	0.58×0.27×0.03	廃棄	
F-213		70-160-a/d	Ⅱ-2-中	0.72×0.56×0.03	現地	炭化クルミ
F-186		65-161-b/66-161-a	Ⅱ-2-中	1.08×0.98×—	廃棄	
F-192		65-161-b	Ⅱ-2-中	0.22×0.10×0.04	現地	
Ⅳ-2-9	F-83	65-158-c/65-159-b	Ⅱ-2-中1	1.90×1.47×0.06	現地	骨片
	F-212	66-159-b	Ⅱ-2-中1	0.64×0.37×0.04	現地	

表IV-7 焼土一覽(2)

図番号	遺構名	位置	検出層位	長さ×幅×厚さ(m)	分類	備考
IV-2-9	F-58	67-158-c/68-158-d 67-159-b/68-159-a	II-2-中1	2.76 × 1.12 × 0.14	現地	
	F-193	67-159-a/b	II-2-中1	2.20 × 1.18 × 0.11	現地	骨片
IV-2-10	F-222	69-159-c/70-159-d	II-2-中1	0.58 × 0.44 × 0.04	廃棄	骨片
	F-223	69-159-c/70-159-d	II-2-中1	0.62 × 0.39 × 0.05	廃棄	骨片
IV-2-11	F-228	69-159-a	II-2-中1	0.36 × 0.12 × -	廃棄	
	F-251	69-159-b	II-2-中1	0.32 × 0.13 × 0.02	廃棄	
IV-2-10	F-219	70-159-a/b/c/d	II-2-中1	1.50 × 0.66 × 0.05	現地	
	F-220	70-159-a	II-2-中1	1.48 × 0.69 × 0.08	現地	骨片
	F-259	70-159-d/70-160-a	II-2-中1	0.54 × 0.48 × 0.05	現地	炭化クルミ
IV-2-11	F-240	67-160-a	II-2-中1	0.30 × 0.26 × -	現地	
	F-244	67-160-b/c	II-2-中1	0.68 × 0.52 × 0.03	現地	骨片
	F-245	68-160-a/d	II-2-中1	1.08 × 0.50 × 0.04	現地	直上にFC-5
IV-2-12	F-210	65-159-b	II-2-中2	0.84 × (0.56) × 0.08	現地	骨片、焼成面2枚
	F-211	66-159-b	II-2-中2	0.44 × 0.30 × 0.05	現地	
	F-214	67-159-a/d	II-2-中2	1.72 × 0.72 × 0.08	現地	骨片
	F-215	68-159-a	II-2-中2	0.50 × 0.42 × 0.03	現地	ベンガラ
IV-2-13	F-224	69-159-b/70-159-a	II-2-中2	0.48 × 0.40 × 0.03	現地	
IV-2-12	F-226	69-159-c	II-2-中2	0.52 × 0.31 × 0.03	現地	
	F-227	69-159-c	II-2-中2	0.97 × 0.71 × 0.08	廃棄	
	F-252	69-158-c/69-159-b	II-2-中2	0.68 × 0.33 × 0.07	廃棄	
IV-2-13	F-16	71-159-a/70-159-b	II-2-中2	1.44 × 0.82 × 0.06	現地	骨片
IV-2-12・13	F-221	70-159-d	II-2-中2	0.69 × 0.40 × 0.09	現地	骨片
IV-2-13	F-225	70-159-a/d	II-2-中2	0.84 × 0.52 × 0.03	廃棄	骨片
	F-234	70-159-b	II-2-中2	1.44 × 0.76 × 0.10	現地	骨片
	F-235	70-159-a/b	II-2-中2	0.54 × 0.35 × 0.03	現地	
IV-2-12・13	F-238	70-159-c	II-2-中2	0.64 × 0.34 × 0.08	現地	骨片
	F-248	70-159-c/d	II-2-中2	(0.28) × 0.70 × 0.06	現地	骨片、P-25を切る
	F-253	70-159-d	II-2-中2	0.70 × 0.44 × 0.07	現地	骨片、炭化クルミ
IV-2-12	F-258	70-159-a	II-2-中2	0.68 × 0.59 × 0.11	現地	骨片
IV-2-12・13	F-260	70-159-d/70-160-a	II-2-中2	0.83 × 0.48 × 0.09	現地	骨片、炭化クルミ
IV-2-14	F-241	67-160-a/b	II-2-中2	0.54 × 0.36 × 0.02	現地	
	F-249	67-160-b/c/68-160-a/d	II-2-中2	0.74 × 0.40 × 0.02	現地	
IV-2-15	F-89	65-159-b/65-158-c	II-2-中3	(0.64) × 0.44 × 0.05	現地	骨片、P-4に切られる
	F-209	65-159-b	II-2-中3	0.48 × 0.40 × 0.03	廃棄	
	F-91	67-158-d/67-159-a	II-2-中3	0.82 × 0.67 × 0.08	現地	骨片、P-13に切られる
	F-257	67-159-a	II-2-中3	0.11 × 0.10 × -	廃棄	
	F-208	68-159-b	II-2-中3	1.06 × 0.50 × 0.02	現地	
	F-250	69-159-d/70-159-a	II-2-中3	1.32 × 0.94 × 0.11	現地	骨片、ベンガラ
IV-2-16	F-237	67-159-d	II-2-中4	0.64 × 0.44 × 0.04	廃棄	ベンガラ
	F-109	67-158-c/67-159-b	II-2-中4	0.80 × 0.72 × 0.04	現地	骨片
	F-119	68-159-b/69-158-d 69-159-a	II-2-中4	0.90 × 0.62 × 0.05	廃棄	
	F-98	69-158-c/69-159-b	II-2-中4	1.16 × 0.84 × 0.06	現地	骨片
	F-242	67-160-a	II-2-中4	1.88 × 0.68 × 0.07	廃棄	
IV-2-17	F-255	67-159-b/68-159-a	II-2-中5	0.24 × 0.22 × 0.01	廃棄	ベンガラ
	F-95	68-158-c/d/68-159-b	II-2-中5	1.20 × 0.98 × 0.12	現地	骨片
	F-99	69-158-c/69-159-b 70-159-a	II-2-中5	2.20 × 1.10 × 0.08	現地	骨片
	F-243	67-160-a/b	II-2-中5	1.04 × 0.48 × 0.03	廃棄	
	F-97	69-159-b/70-158-d 70-159-a	II-2-中6	1.12 × 0.68 × 0.05	現地	骨片、ベンガラ、炭化クルミ P-2に切られる
IV-2-18	F-256	67-158-c	II-2-下	0.26 × 0.20 × -	廃棄	
	F-246	68-160-a/c/d	II-2-下	0.70 × 0.50 × 0.03	現地	
	F-247	68-160-b/c	II-2-下	0.78 × 0.54 × 0.05	現地	
	F-231	69-160-c	II-2-下	0.43 × 0.42 × 0.02	廃棄	

表Ⅳ-8 焼土出土遺物一覧(1)

分類	土 器 等					石 器 等														遺物 合計							
	V群 c類	VI群 a類	土製品	焼成粘土塊	土器等合計	石鏃	石錐	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	石斧	たたき石	台石	砥石	石核	加工痕ある礫	黒曜石	頁岩	その他		原黒曜石	石その他	軽石	石炭	礫・礫片	石製品	石器等合計
遺構名																											
F-16	19			2	21			1											1			3		1		6	27
F-36	1				1																					0	1
F-44	16			1	17												7		1			1		1		10	27
F-58	49				49												14	1	3					6		24	73
F-83	4				4																					0	4
F-91	5				5																					0	5
F-95	11			6	17			1																1		2	19
F-99	118			5	123	1											17	1				3		6		28	151
F-109	3				3																					0	3
F-167	27				27			1									26							1		28	55
F-168					0												39									39	39
F-169	1				1																					0	1
F-173	22				22																					0	22
F-175	10				10																					0	10
F-178	23				23				1								37									38	61
F-179	23			6	29												20									20	49
F-180					0												1									1	1
F-182	8				8																			1		1	9
F-185	28				28	1		1									104		5							111	139
F-186	12				12	1				2							8	2								13	25
F-191	4				4												1									1	5
F-193	41				41	2		1		2							6		1					2		14	55
F-194	44				44										1		57									58	102
F-195	92			6	98												96		34					1		131	229
F-196	1				1												5									5	6
F-200	13				13			1	1																	2	15
F-201	2				2												9									9	11
F-203	4				4																					0	4
F-204	19				19			1		1																2	21
F-205	24				24			1									3									4	28
F-206	1				1																					0	1
F-208	9				9																					0	9
F-210	15			1	16			1																		1	17
F-213	14				14																		2			2	16
F-214	25				25					1							4	1								6	31
F-215	14				14																					0	14
F-216	1				1												3						1			4	5
F-219	8				8													1								1	9
F-220	7				7														1					1		2	9
F-221	18				18			2									4		1			4				11	29
F-222	1				1																					0	1
F-225	12				12																					0	12
F-227	8				8													1								1	9
F-232	5				5																					0	5
F-233					0												8									8	8
F-234	15				15	1				1							4						1			7	22
F-236	45			2	47			2	1					2	1		35	6	11							58	105
F-237	1				1														1				1			2	3

表IV-9 焼土出土遺物一覧(2)

分類 遺構名	土 器 等					石 器 等															遺物 合計							
	V群 c類	VI群 a類	土製品	焼成粘土塊	土器等合計	石鏃	石錐	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	石斧	たたき石	台石	砥石	石核	加工痕ある礫	黒曜石	頁岩	その他	黒曜石		その他	軽石	石炭	礫・礫片	石製品	石器等合計	
F-238	4				4																						0	4
F-239	177				177	2		4	5	1					1		420	63	36				3		2		537	714
F-242	82				82																						0	82
F-245					0	1	1	1		1							79										83	83
F-247	5				5																						0	5
F-248	3				3																		4		1		5	8
F-249					0					1							20										21	21
F-250	185			11	196	1		1		1							3	7							2	15	211	
F-252	7				7																				1	1	8	
F-253	151			4	155												1		1				4		1	7	162	
F-254	16				16																					0	16	
F-257	1				1																					0	1	
F-258	8				8																					0	8	
F-259	20			1	21												2	1								3	24	
F-260	32				32							1					8	5					1		2	17	49	
合計	1514			45	1559	10	1	19	9	9	1	1	0	2	3	0	1041	89	96	0	0	28	0	30	0	1339	2898	

表IV-10 集石一覧

図番号	遺構名	位置	検出層位	長さ×幅(m)	標高(m)	図版番号	備考
IV-3-2	S-10	66-159-a	II-1	0.29×0.16	8.069	IV-28	
IV-3-2	S-8	68-159-a	II-1	0.48×0.37	7.959	IV-27	
IV-3-2	S-11	67-162-d	II-1	0.16×0.16	8.173	IV-28	
IV-3-2	S-12	69-160-b	II-2-上	1.50×0.47	7.921	IV-30	
IV-3-2	S-9	70-160-a/d	II-2-上	0.38×0.15	7.808	IV-29	
IV-3-2	S-13	66-159-b	II-2-中2	0.56×0.31	7.877	IV-31	
IV-3-2	S-14	67-159-c	II-2-中	0.48×0.20	7.701	IV-29	

表IV-11 集石出土遺物一覧

分類 遺構名	土 器 等					石 器 等															遺物 合計						
	V群 c類	VI群 a類	土製品	焼成粘土塊	土器等合計	石鏃	石錐	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	石斧	たたき石	台石	砥石	石核	加工痕ある礫	黒曜石	頁岩	その他	黒曜石		その他	軽石	石炭	礫・礫片	石製品	石器等合計
S-8					0						2					1									2	5	5
S-9					0						2														1	3	3
S-10					0						2														1	3	3
S-11					0						1														2	3	3
S-12					0						5														3	8	8
S-13					0																				6	6	6
S-14					0						1	1													1	3	3
合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	16	0	31	31

5 遺物集中と出土遺物

表IV-12 フレイク集中一覧

図番号	遺構名	位置	検出層位	長さ×幅(m)	標高(m)	図版番号	備考
IV-4-2	FC-6	66-159-c	II-1	0.36×0.24	8.045	IV-32	顆粒のある黒曜石
IV-4-2	FC-2	68-159-c	II-1	0.57×0.27	8.010	IV-32	
IV-4-2	FC-3	67-161-d	II-1	1.10×1.06	8.068	IV-32	
IV-4-2	FC-4	66-162-a/c/d	II-1	1.20×0.82	8.007	IV-33	
IV-4-2	FC-5	67-160-c 68-160-a/d	II-2-上	2.68×1.98	7.948	IV-33	
IV-4-2	FC-7	67-160-b	II-2-上	0.24×0.16			
IV-4-2	FC-8	66-159-b	II-2-中3	0.33×0.28	7.578	IV-33	全て頁岩、接合

表IV-13 フレイク集中出土遺物一覧

分類	土 器 等					石 器 等															遺物合計							
	V群c類	VI群a類	土製品	焼成粘土塊	土器等合計	石鏃	石錐	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	石斧	たたき石	台石	砥石	石核	加工痕ある礫	黒曜石	頁岩	その他	黒曜石		その他	軽石	石炭	礫・礫片	石製品	石器等合計	
遺構名																												
FC-2					0													339								1	340	340
FC-3					0			3	2	2								43		5							55	55
FC-4					0													91									91	91
FC-5					0	2												8444		3							8449	8449
FC-6					0													43									43	43
FC-7					0													121									121	121
FC-8					0					11									19								30	30
合計	0	0	0	0	0	2	0	3	2	13	0	0	0	0	0	0	9081	19	8	0	0	0	0	0	1	0	9129	9129

表IV-14 遺物集中一覧

図番号	遺構名	位置	検出層位	長さ×幅(m)	標高(m)	図版番号	備考
IV-5-1	遺物集中1	70-159-c/d 70-160-a/b/d	II-2-上	5.10×4.80	7.859	IV-35	骨片・炭化クルミ・ベンガラ検出

表IV-15 遺物集中出土遺物一覧

分類	土 器 等					石 器 等															遺物合計							
	V群c類	VI群a類	土製品	焼成粘土塊	土器等合計	石鏃	石錐	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	石斧	たたき石	台石	砥石	石核	加工痕ある礫	黒曜石	頁岩	その他	黒曜石		その他	軽石	石炭	礫・礫片	石製品	石器等合計	
遺構名																												
遺物集中1	1104	0	0	0	1104	0	0	12	3	19	0	3	0	0	1	0	120	6	6	0	2	9	0	4	0	185	1289	

表IV-16 遺構出土遺物一覧

分類	土 器 等					石 器 等															遺物合計						
	V群c類	VI群a類	土製品	焼成粘土塊	土器等合計	石鏃	石錐	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	石斧	たたき石	台石	砥石	石核	加工痕ある礫	黒曜石	頁岩	その他	黒曜石		その他	軽石	石炭	礫・礫片	石製品	石器等合計
土 坑	760			3	763	1			3	1	3	1	1	1		53	23	3		1	49		16		156	919	
焼 土	1514			45	1559	10	1	19	9	9	1	1	2	3		1041	89	96			28		30		1339	2898	
集 石	0			0	0							13	1		1									16		31	31
フレイク集中	0			0	0	2		3	2	13						9081			27					1		9129	9129
遺物集中	1104			0	1104			12	3	19	3			1		120	6	6		2	9		4		185	1289	
合 計	3378			48	3426	13	1	34	17	42	1	20	1	3	5	2	10295	118	132		3	86		67		10840	14266

V 包含層出土の遺物

1 土器 (図V-1-1~22、表V-1-1・2、図版V-15~28)

(1) 復元資料：深鉢 (図V-1-1~4、図版V-15~18)

1は内傾する口縁端面、RL(縦走)→上段：Ac(横位RL)3(縦位櫛目→括弧文+縦位)→半截管刺突文、下段：Ab(横位)3(縦位)→半截管刺突文、口縁端面にL縄線文、口縁端外側は棒側面圧痕文である。4ヶ所に双峰突起があり、その間に単峰突起がある。双峰突起の頂部・内面にはL縄線文、底部はB。

2は口縁部～胴部、内屈する口縁部、水平な口縁端面、RL(斜走)→Bb(横位)3(上段：連繫山形沈線文、下段：横位沈線文→刺突文)、6ヶ所?に単峰突起がある。突起の頂部には棒側面圧痕文、口縁端面は棒側面圧痕文である。

3は胴部下半～底部、補修孔が2ヶ所にあり、補修孔の位置が六角形の角を形成する配置になっている。全体に劣化している。形態はB。

4は内傾する口縁端面、RL(縦走)→Bb(横位)3(縦位)→半截管刺突文、口縁端面は棒側面圧痕文、口縁端外側は棒側面圧痕文、底部はB。

5は口縁部～胴部、水平な口縁端面、RL(上半：縦走、下部：横走)→Bc(横位LR)1(横位LR)→ナデ→管刺突文、口縁端面は棒側面圧痕文、台形の3峰突起があり、中央の台形突起端面には棒側面圧痕文→管刺突文、両脇の小突起には管刺突文。

6は内傾する口縁端面、RL(縦走)→Bd1(横位RL)、口縁端面は指頭圧痕文、底部はB。

7は口縁部～胴部、内傾する口縁端面、RL(縦走)→Bd1(横位RL)。

8は口縁部～胴部、水平な口縁端面、RL(縦走)→Bd4。

9は内傾する口縁端面、内外口縁端はナデにより丸められている。RL(縦走)→Bd4、底部はB。

(2) 破片資料：深鉢 (図V-1-11~13上段、図版V-23~26)

28は口縁部がやや内屈する。内傾する口縁端面、RL(斜走)→Aa3(括弧文+縦位)→半截管刺突文、口縁端外側は棒側面圧痕文である。

30は口縁端部が丸みを帯びる。?→Ab(横位)3(括弧文+縦位)→先端切出し状の棒の刺突文、口縁部外側は先端切り出し状の棒による刻みである。双峰突起の外面に縦方向の櫛目が付く。砂粒が多く脆い。29は内傾する口縁端面、RL(縦走)→Ab(横位)3(括弧文+縦位)である。単峰突起が付く。

31は口縁端面が水平である。LR→Ab(横位)3(垂下屈曲文+横位)→尖る棒の刺突文、外側口縁端は尖る棒の刻みである。

32は口縁端面が水平、RL(縦走)→Ab(横位)3(斜位)、双峰小突起、砂粒を多く含む。33は内傾する口縁端面、?(縦走)→Ab(横位)3(4本一組の斜位)、器表の摩滅が著しい。

34は口縁部が内屈して外反、内傾する口縁端面、?→Ab(横位)3(連続山形文)、口縁端にRL側面圧痕文がある。35は内傾する口縁端面、?(縦走)→Ab(横位)3(連続山形)、器表の摩滅が著しい。

36は口縁端部が丸みを帯びる。RL(縦走)→貼付帯→Ad1(横位RL)→釘状貼付+渦巻状縄線文→半截管刺突文、口縁端面に指頭圧痕文が施される。37は口縁端面が水平、強いナデにより端部が内外方向に肥厚する。?→Ad1(横位RL)→円筒状原体の刺突文、砂粒が多く脆い。38は口縁端面が水平で、強いナデにより端部が内外方向に肥厚する。RL→Ad1(RLを方格圏線文に近似する様に施す)。39は口縁端面が水平、RL→Ad1(横位RL)である。40は内傾する口縁端面、RL(縦走)→Ad1(横位RL)→半截管刺突文である。単峰突起下は隆起し半截管刺突文が付く。

41は内傾する口縁端面、RL(縦走)→Ad2(横位L縄線文)→半截管刺突文、口縁端面に指頭圧痕文が施される。42は内傾する口縁端面、RL(縦走)→Ad2(横位L縄線文)。

43は内傾する口縁端面、?→Ae(横位L縄線文)1(横位RL)である。

44は内傾する口縁端面、RL(縦走)→Ad3(横位)。45は内傾する口縁端面、RL(縦走)→Ad3(横位)。46は口縁端面が水平である。RL(縦走)→Ad3(横位)、口縁端面には円筒状原体の刺突文が施される。47は施文部分が屈曲する。内傾する口縁端面、RL(縦走)→Ad3(横位)。48は内傾する口縁端面、RL(斜走)→Ad3(横位)→尖る棒の刺突文、外側口縁端には棒の側面圧痕文。

49は口縁端面が水平で低い双峰突起がある。タテミガキ→A(ヨコミガキ)d3(横位)→双峰の突起を貼り付ける。胎土に角礫・海綿骨針を含み粗い。

50は外反する口縁部、口縁端面が水平、RL(斜走)→Ad4である。

51は内傾する口縁端面、RL(縦走)→Bd3(横位)である。口縁端には棒の側面圧痕文が施される。

52は内傾する口縁端面で、口縁端は強いナデにより内外方向に肥厚、RL(縦走)→Bd3(横位)。

53は内傾する口縁端面で強いナデにより外方向に肥厚する。RL(縦走)→Bd3(横位)。

54は口縁端面が水平で強いナデにより端面が凹む。RL(縦走)→Bd3(横位)。

55は内傾する口縁端面、幅の広い台形突起の頂部はL縄線が施されたことにより内外方向に肥厚する。?(縦走)→Bb(横位)3→半截管刺突文、突起の端面はL縄線、突起下は隆起し指頭圧痕文が施される。全体に摩滅・剥落が著しい。

(3) 復元資料：鉢・浅鉢・皿(図V-1-5~8、図版V-19~21)

10は鉢、内傾する口縁端面、俯瞰形状は楕円形、長軸側の2ヶ所に三峰山形突起がある。RL(縦走)→Ad3(交互弧線文)→半截管刺突文、突起端面は円形の刺突、峰と峰の境には縄線文、底部には弧線文と円圏線文と半截管刺突文、底部はA。

11は鉢、やや内傾する口縁端面、俯瞰形状は隅丸三角円形、隅3ヶ所に双峰突起2ヶ所、単峰突起1ヶ所がある。RL(斜走)→Ad3(横位)、突起端面にはL縄線、主要双峰突起には2個の貫通孔がある。底部はB。

12は鉢、屈曲して立ち上がる体部、水平な口縁端面、俯瞰形状は卵形、長軸側の2ヶ所に3峰山形突起がある。RL(縦走)→Bd1又は2(横位RL又はL縄線文)→半截管刺突文、突起端面は円形の刺突、峰と峰の境にはRL又はL縄線文、突起下には峰と対応するように縦位の貼付帯がある。底部と体部の境にはRL又はL縄線文、底部はB。

14は鉢、やや内傾する口縁端面、俯瞰形状は円形、2ヶ所に低い単峰突起がある。RL(斜走)→Bd4、突起下には2個一組の貫通孔、突起端面にはL縄線文、底部はB。全体に磨滅が著しい。

15は鉢、水平な口縁端面、俯瞰形状は円形、調整・施文は不明、底部はB。

16は鉢、体部は内湾して立ち上がる。内傾する口縁端面、俯瞰形は円形、RL(斜走)→Bd4、底部はDに近いB。

13は浅鉢、内傾する口縁端面、俯瞰形状は円に近い卵形、5ヶ所に単峰突起がある。大きな3個は方形、小さな2個は三角形、RL(斜走)→Bd4、口縁端面・突起頂部にはL縄線文、底部はB。

17は皿、水平な口縁端面、俯瞰形状は隅丸菱形、2ヶ所に台形単峰突起がある。RL(斜走)→Bd4、突起端面とその脇にはRL縄線文、底部はB。

18は浅鉢、水平な口縁端面、俯瞰形状は楕円形、長軸側の2ヶ所に三峰突起があり、短軸側に低い台形双峰突起がある。長軸側1ヶ所の三峰突起下には2個一組の貫通孔、RL(縦走)→Bd4、突起頂部・端面とその脇にはRL縄線文、底部はA。

19は皿、内傾する口縁端面、俯瞰形状は円形、1ヶ所に小さな双峰突起がある。RL(斜走)→Ad 4、外側口縁端には棒の側面圧痕文、底部はA。

20は浅鉢、水平な口縁端面、俯瞰形状は卵形、長軸側の1ヶ所に台形状単峰突起があり、短軸上には小さな三角形単峰突起がある。RL(斜走)→Bd 4、突起頂部に半円・渦巻状の縄線文、底部はA。

21は浅鉢、内傾する口縁端面、俯瞰形状は円形、1ヶ所に台形状単峰突起がある。RL(斜走)→Bd 4、突起付近の外側口縁端には縄端圧痕文、突起頂部には2個の半円形のL縄線文、底部はA。

(4) 破片資料：鉢・浅鉢(図V-1-13下段~14、図版V-27)

56は口縁端面が水平、体部は屈曲して上方に立ち上がる。?→Ad 3(横位)→尖る棒の刺突文、口縁端面にはL縄線文が施される。57は口縁端面が水平、体部は屈曲して上方に立ち上がる。RL(縦走)→Ad 3(横位)→尖る棒の刺突文、底部はD。58は口縁端面が水平、RL(斜走)→Ad 3(方格圏線文に近似する文様)、外側口縁端には棒の側面圧痕文が施される。

59は口縁端面が水平、口縁端は強いナデにより内外方向に肥厚、RL(斜走)→Bd 3(弧線文)、外側口縁端には棒の側面圧痕文、口縁端面にはL縄線文、双峰突起の頂部には渦巻状L縄線文+円形の刺突が付き、突起下には2個の貫通孔。60は口縁端面が水平、?→Bd 3(2段の方格圏線文)、外側口縁端には棒の側面圧痕文、口縁端面はL縄線文。61は口縁端面が水平、RL(縦走)→Bd 3(交互の弧線文か)。62は外傾する口縁端面、RL(縦走)→Bd 3(横位)、砂粒を多く含む。

63は内傾する口縁端面、体部は屈曲して上方に立ち上がる。?(縦走)→Cd 3(方格圏線文)、砂粒を多く含む粗い。64は内傾する口縁端面、体部は屈曲して上方に立ち上がる。?(縦走)→Cd 3(横位)、底部はA、砂粒を多く含む粗い。63・64は同一個体。

65は口縁端面が水平、体部は屈曲して上方に立ち上がる。RL(縦走)→Ad 4、外側に突出する双峰の小突起、底部はB。66は口縁端面が水平、ヨコナデ→Ad 4。67は口縁端面が水平、RL(縦走)→Ad 4、外側に突出する単峰突起、突起の頂部にはRL縄線文+円形の刺突。68は内傾する口縁端面、RL(斜走)→Ad 4、方形の単峰突起が付き、その間には三角小突起が付く。右突起の頂部にはL縄線文+円形の刺突、側面にはL縄線文。左突起の頂部には沈線文+円形の刺突、側面には縦位線文。69は口縁端面が水平、RL(斜走)→Ad 4、単峰小突起の頂部にはL縄線文、頂部端面にはL縄線文が施される。口縁端面にはL縄線文→外側口縁端には棒の側面圧痕文。70は口縁端面が水平、RL(横走)→Ad 4、単峰の小突起の頂部にはL縄線文が施され、口縁端面はL縄線文。

71は口縁端面が水平、RL(斜走)→Bd 4、口縁端面は指頭圧痕文が施される。72は口縁端面が水平、RL(縦走)→Bd 4、外側口縁端には角棒の側面圧痕文が施される。73は口縁端面が水平でL縄線が施されたことにより内外方向に肥厚する。RL(縦走)→Bd 4、口縁端面はL縄線文→刺突、外側口縁端には指頭圧痕文が施される。

(5) 復元資料：壺・注口等(図V-1-10、図版V-22)

22は片口付き浅鉢、内傾する口縁端面、俯瞰形状は円形、1ヶ所に突起状の片口がある。RL(斜走)→Bd 4、片口端面・口縁端面にはL縄線文、外側口縁端には縄端圧痕文、底部はB。

23は注口付き鉢、水平な口縁端面、俯瞰形状は歪な隅丸四角形、低い単峰突起が4ヶ所付き、注口側の2ヶ所の突起頂部には刺突がある。注口の上部は片口にもなっている。?→Ab(横位)3(渦巻き沈線)、胎土は砂粒を多く含む粗い。底部はA。

24は壺、胴部~底部、RL(斜走)、頸部には横位沈線→刺突文、底部はB。25は鉢のミニチュア、内外面はナデ、底部はA。26は鉢のミニチュア、水平な口縁端面、外面はナデ→縦位沈線、底部はA。27は鉢のミニチュア、外傾する口縁端面、俯瞰形状は円形、突起頂部には刺突がある。底部はB。

(6) 破片資料：壺・注口等 (図V-1-15、図版V-28)

74は壺の頸部～口縁部、口縁部肥厚帯外面には2本の沈線文、口縁部内面には1本の沈線文、頸部と体部の境には4本沈線文、波状口縁下にはB突起が垂下する。胎土に角礫を含み粗く脆い。

75は壺の頸部～口縁部、垂直に立ち上がる口縁部の内側に貼り付けによる受け部が作出される。口縁部外面には2本の沈線文→形骸化した眼鏡状突起、大洞A₂式並行。76は壺の頸部～口縁部、内傾して立ち上がる口縁部の内側に貼り付けによる受け部が作出される。口縁部外面には2本の沈線文がある。77は壺の頸部～肩部、LR(斜走)→B突起が付く。78は壺の胴部、LR(斜走)→入り組み文。79は壺の胴部、LR(斜走)→入り組み文?。80は壺の胴部、LR(斜走)→入り組み文?。78～80は同一個体である。81は壺の肩部で、沈線文が付く。82は口の窄まらない壺、内傾する口縁端面、段を持つ胴部、胴部下半RL(縦走)+胴部上半RL(斜走)→Bd3。

83は浅鉢の注口部、注口の口縁がラッパの様に開く。注口の口縁端面には3ヶ所に円形の刺突がある。84は浅鉢の注口部、台状突起の頂部にはR縄線文+2ヶ所に円形の刺突があり、注口の内側口縁にはR縄線文がある。

85は後北式C₂・D式の深鉢口縁部片、LR帯縄文、口縁部外側に微隆起線文に刻み、口唇に刻みがある。

(7) 土器の細分別分布について (図V-1-16～22)

この分布図の数は破片数を示している。集計には復元個体の破片数を加算していない。集計単位の層はⅡ-1層、Ⅱ-2-上層、Ⅱ-2-下層、Ⅱ-3層、Ⅱ-2-中層については、Ⅱ-2-中1層～6層のように細分されているが、今回はまとめてⅡ-2-中層とし合計した。

深鉢口縁部について、A(縄文→ナデ) b(沈線) 3(沈線)はⅡ-1層・Ⅱ-2-上層から多く出土する。A(縄文→ナデ) d(なし) 1(2段撚り縄線)はⅡ-2-上層・Ⅱ-2-中層から多く出土する。A(縄文→ナデ) d(なし) 2(1段撚り縄線)はⅡ-1層・Ⅱ-2-中層から多く出土する。A(縄文→ナデ) d(なし) 3(沈線)はⅡ-2-上層・Ⅱ-2-中層から多く出土する。B(縄文) d(なし) 1(2段撚り縄線)はⅡ-2-中層から多く出土する。B(縄文) d(なし) 3(沈線)はⅡ-1層から多く出土する。

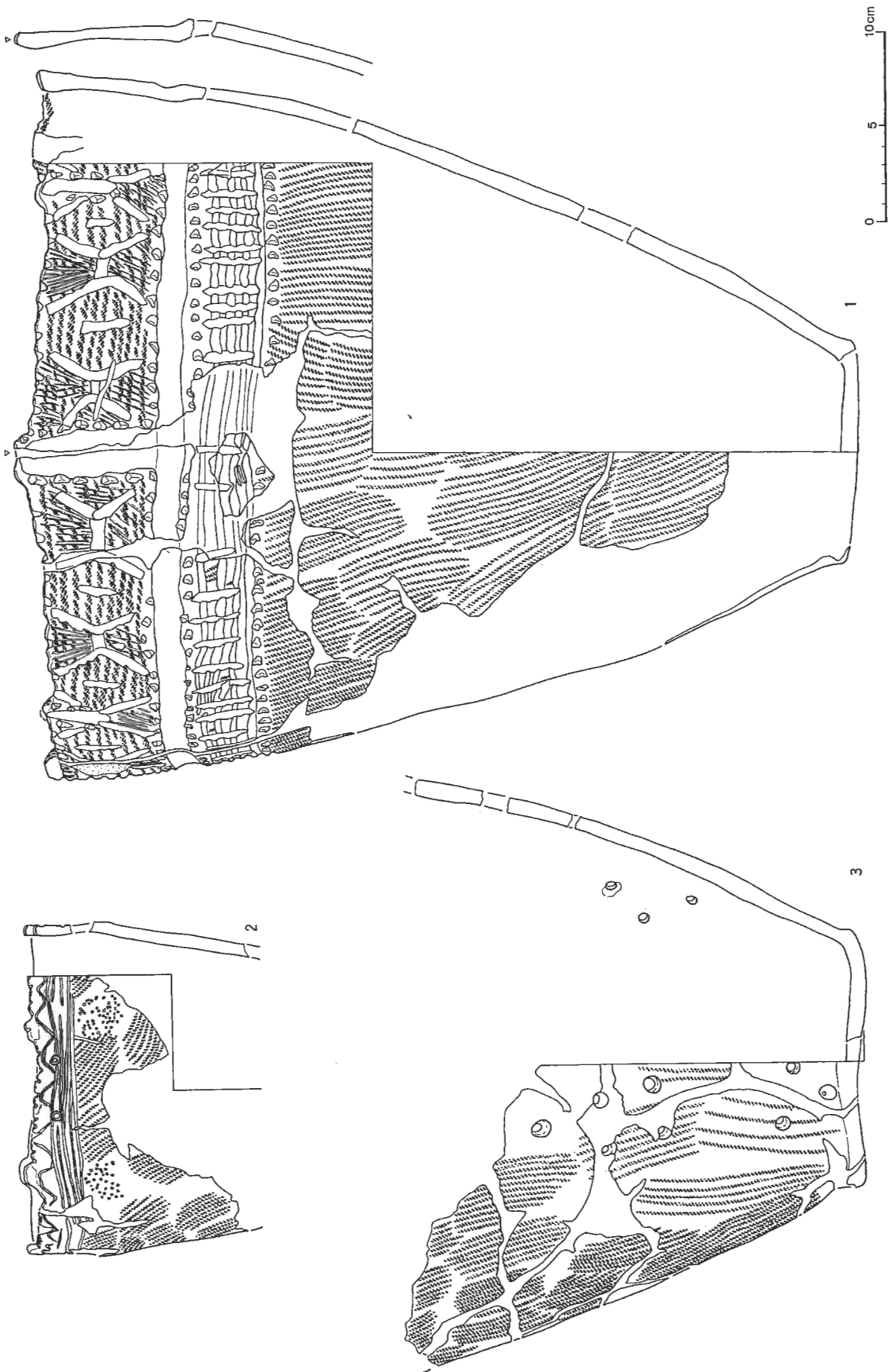
深鉢底部について、BはⅡ-1層・Ⅱ-2-上層から、C(深鉢固有の形態)はⅡ-2上層から、DはⅡ-1層から、E(深鉢固有の形態)はⅡ-1層から多く出土する。

以上より、深鉢破片の出土傾向は、Ⅱ-1層では口縁部Ab3・Ad2・Bd3、底部D・Eが多く出土する。Ⅱ-2-中層では口縁部Ad1・Bd1・Ad3が多く出土する。Ⅱ-2層上部では口縁部文様の上描き文様に沈線・1段撚り縄線を多用し、Ⅱ-2層下部では2段撚り縄線を多用する。

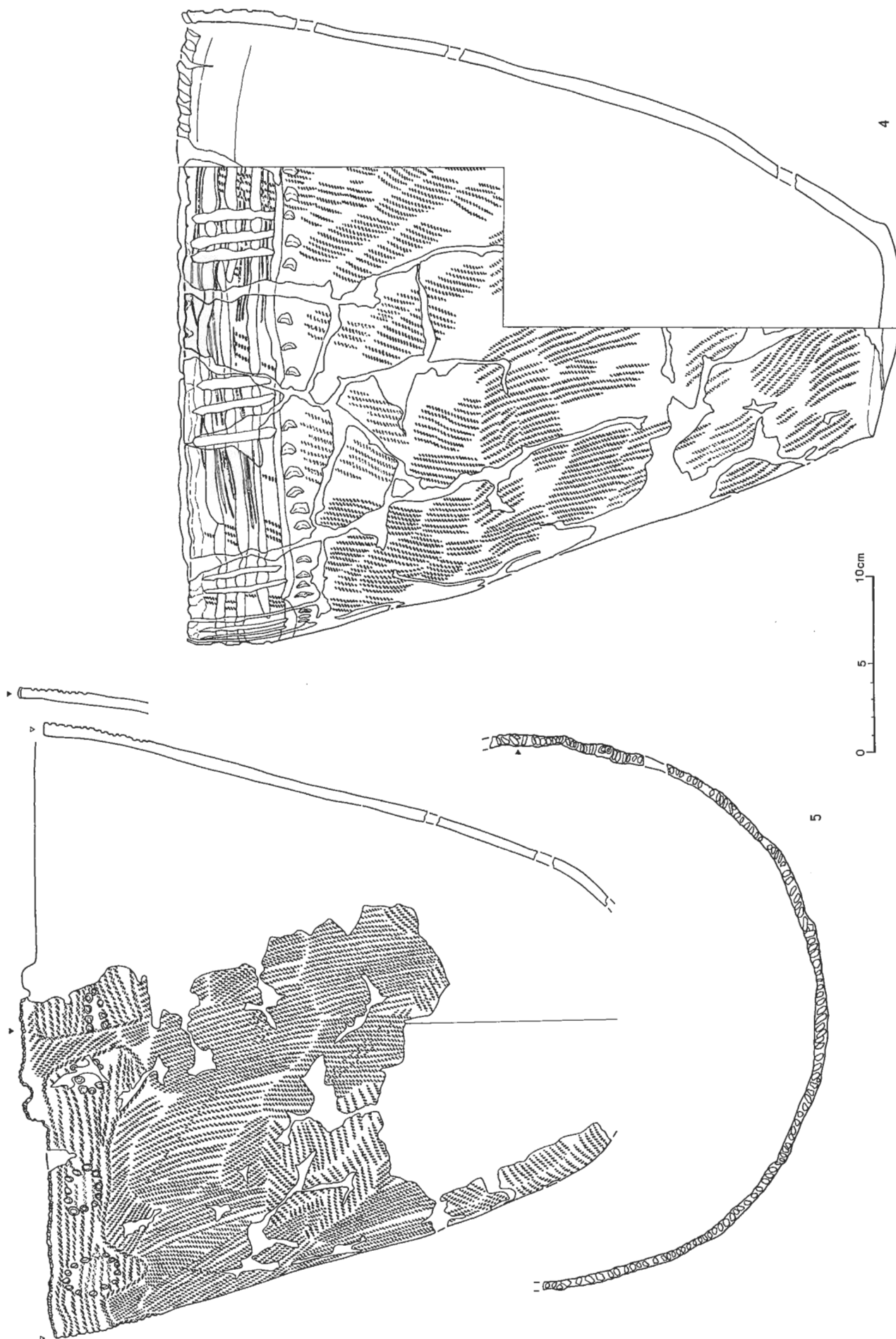
浅鉢口縁部について、Ab3はⅡ-1層から多く出土する。Ad3はⅡ-2-上層から多く出土する。A(縄文→ナデ) d(なし) 4(なし)はⅡ-2-中層から多く出土する。Bd3はⅡ-1層から多く出土する。B(縄文) d(なし) 4(なし)はⅡ-2-中層から多く出土する。

浅鉢底部について、A(浅鉢固有の形態)はⅡ-2-上層から、BはⅡ-2-上層から、DはⅡ-2-中層から多く出土する。

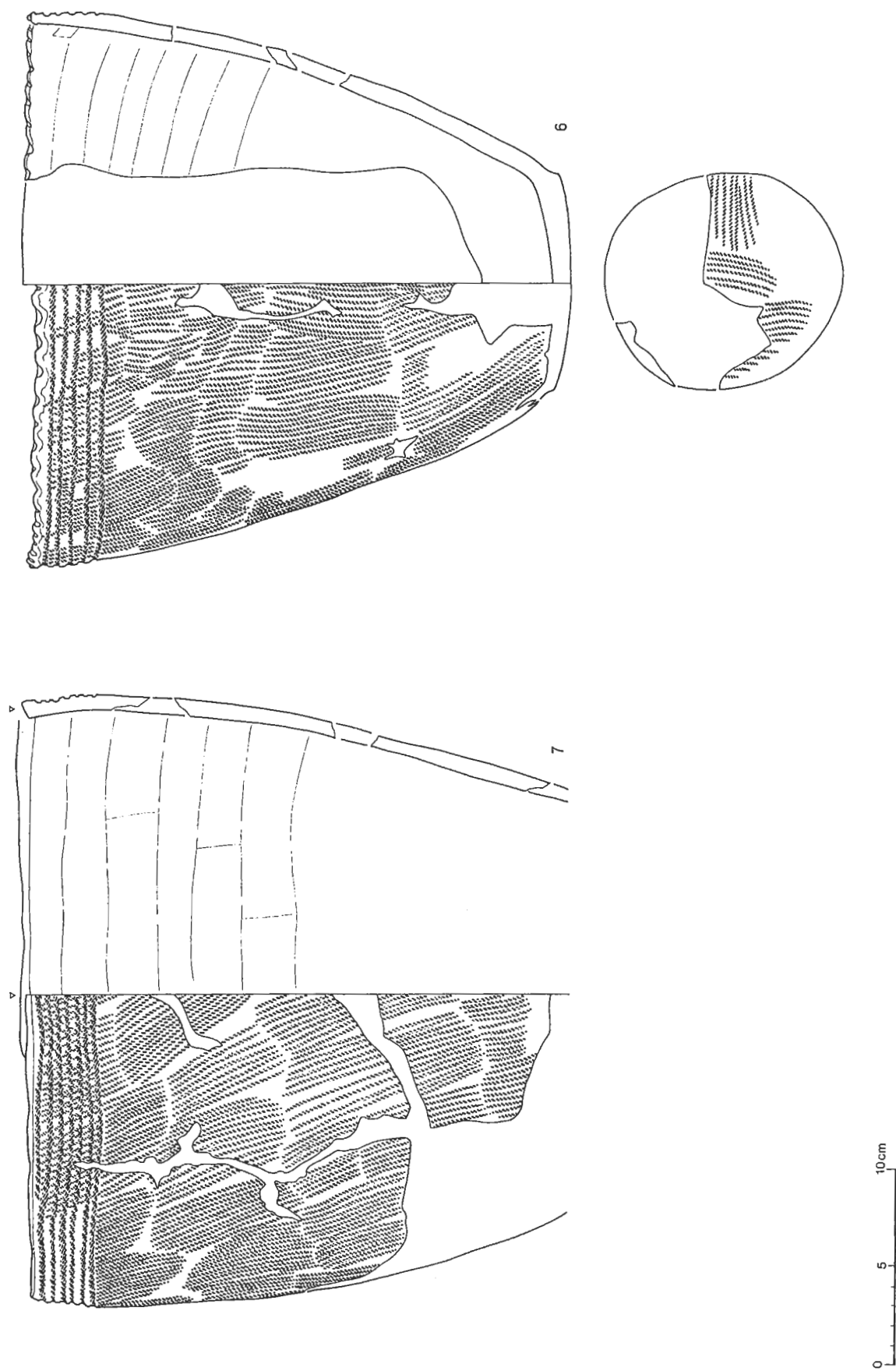
以上より、浅鉢破片の出土傾向は、Ⅱ-1層では口縁部Ab3・Bd3が多く出土する。Ⅱ-2-中層では口縁部Ad4・Bd4が多く出土する。Ⅱ-2層上部では口縁部文様の上描き文様に沈線を多用し、Ⅱ-2層下部では無文が多い。(鈴木)



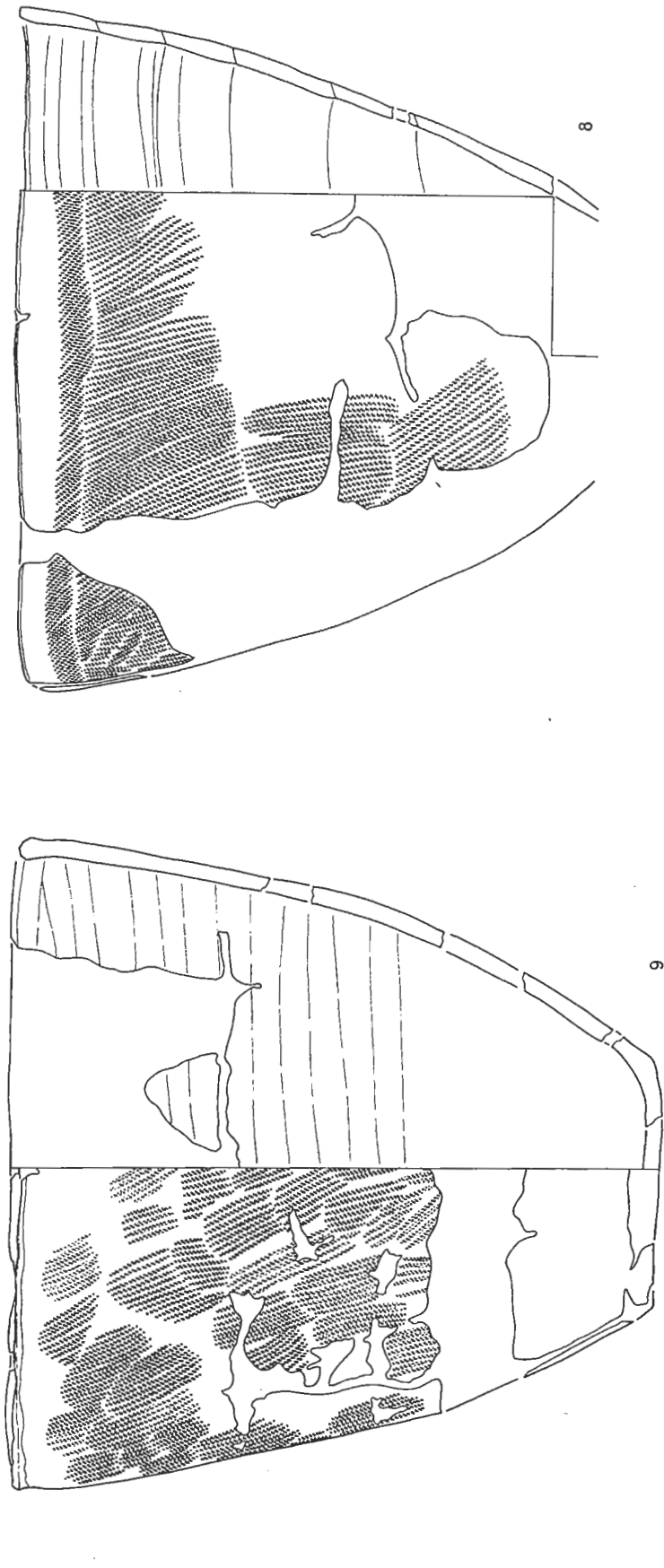
図V-1-1 復元資料(1)



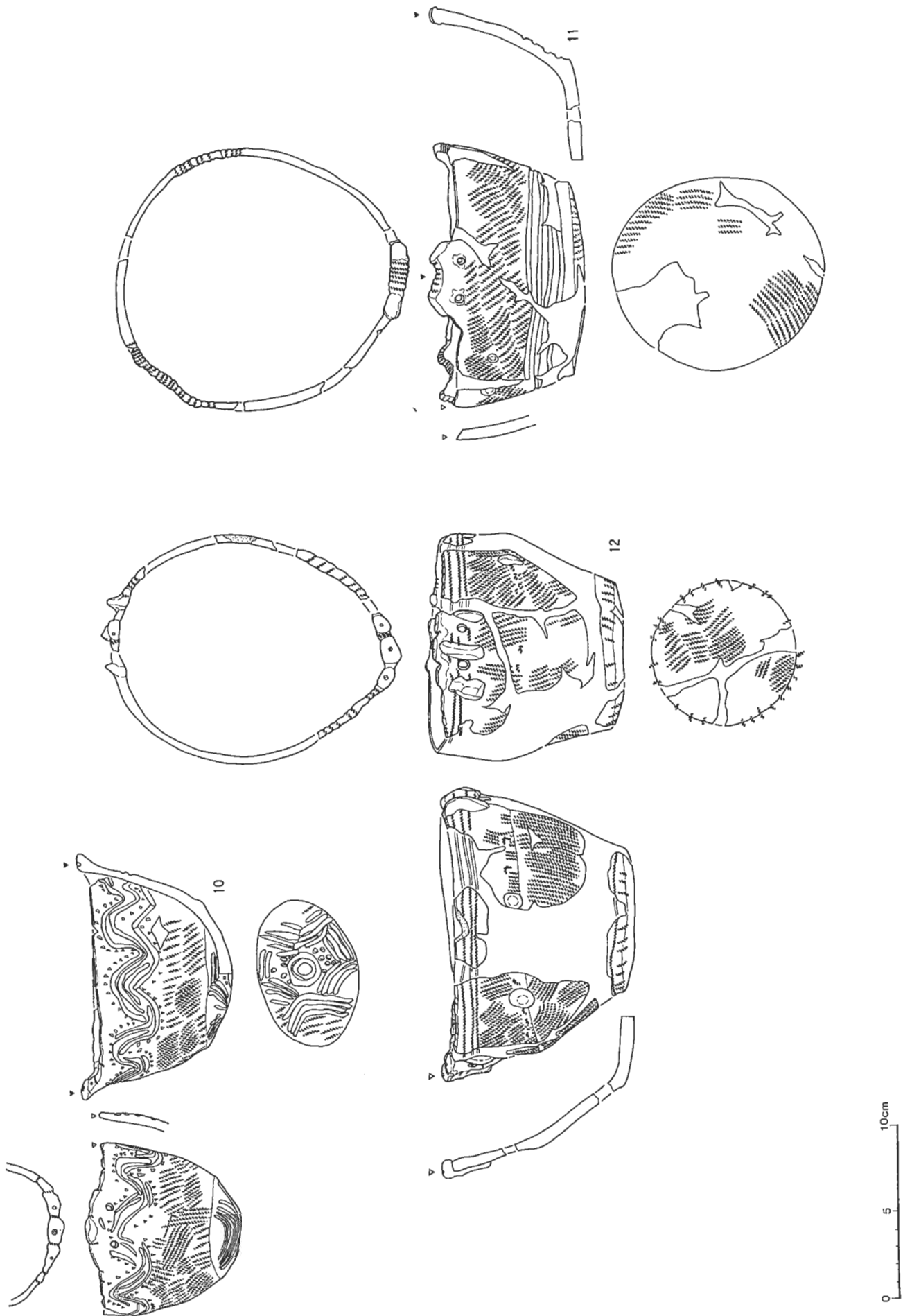
図V-1-2 復元資料(2)



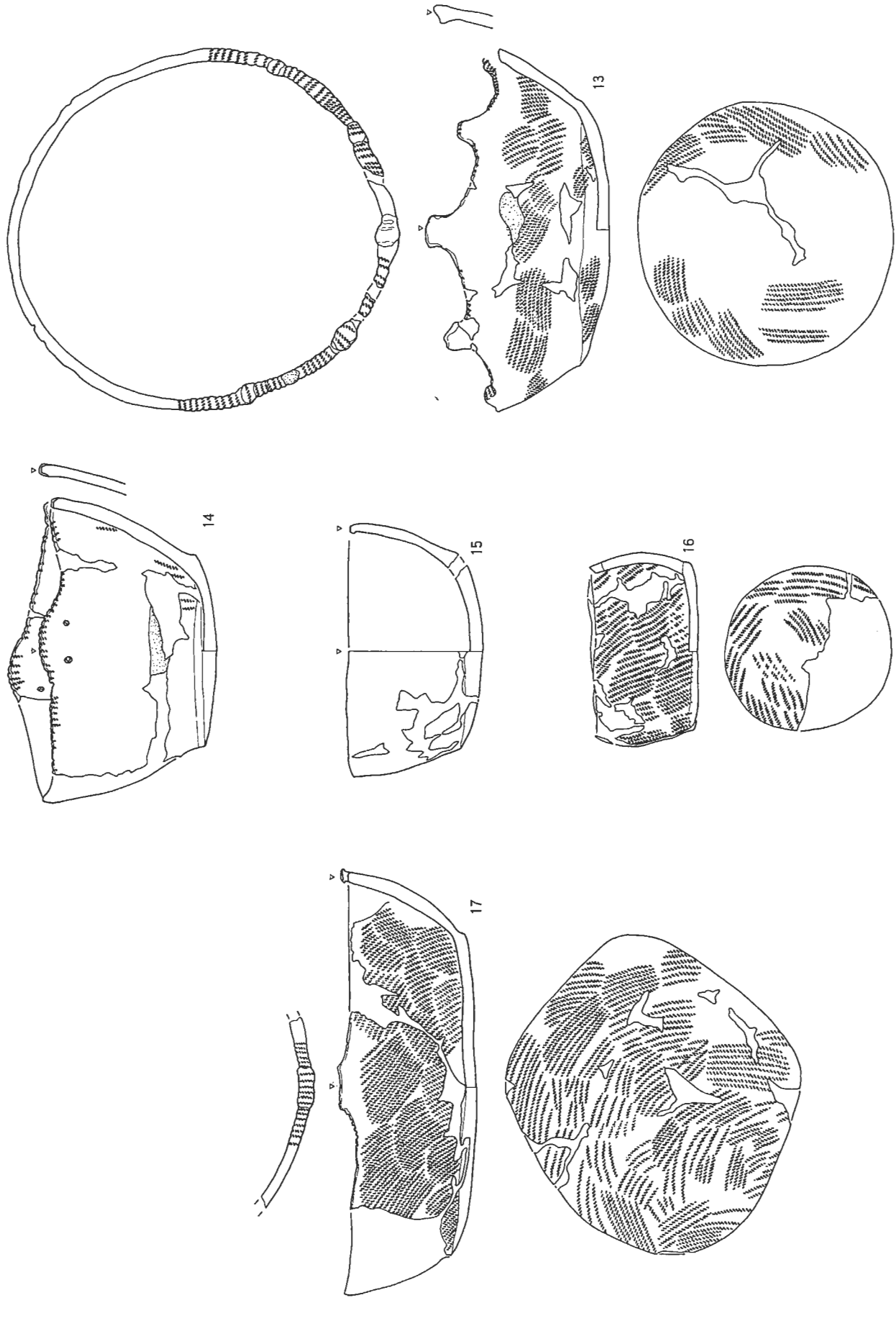
図V-1-3 復元資料(3)



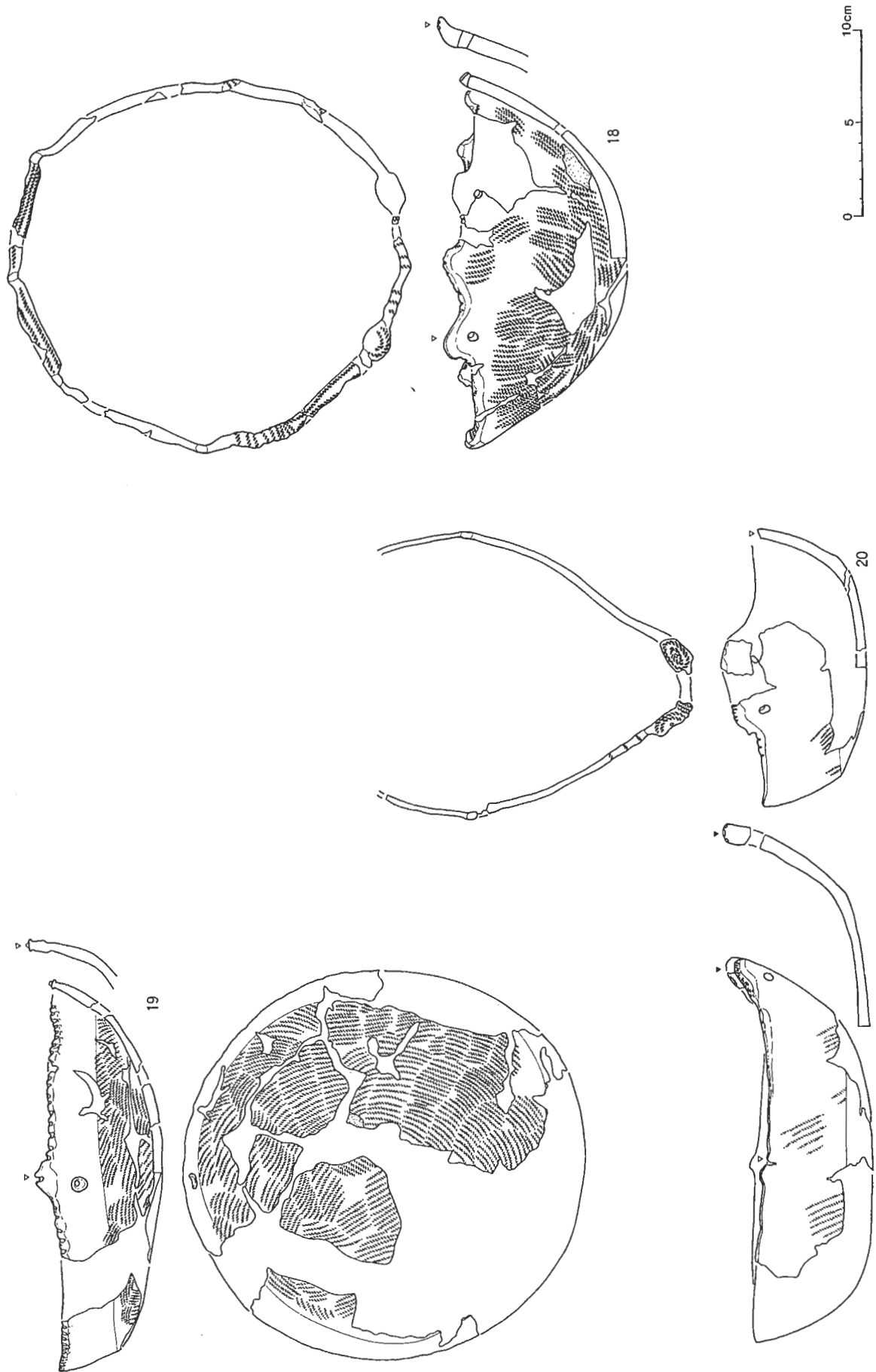
图V-1-4 復元資料(4)



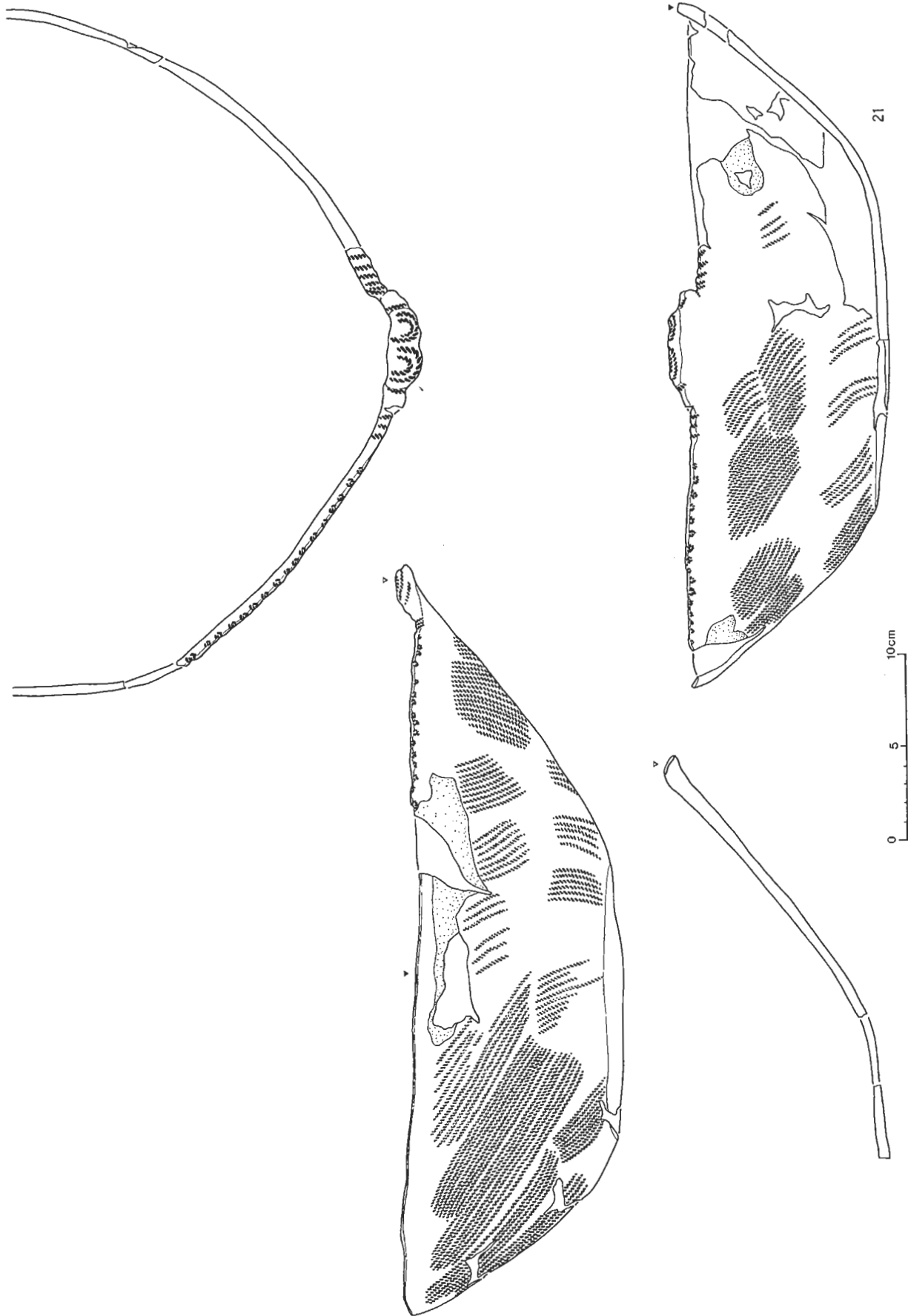
図V-1-5 復元資料(5)



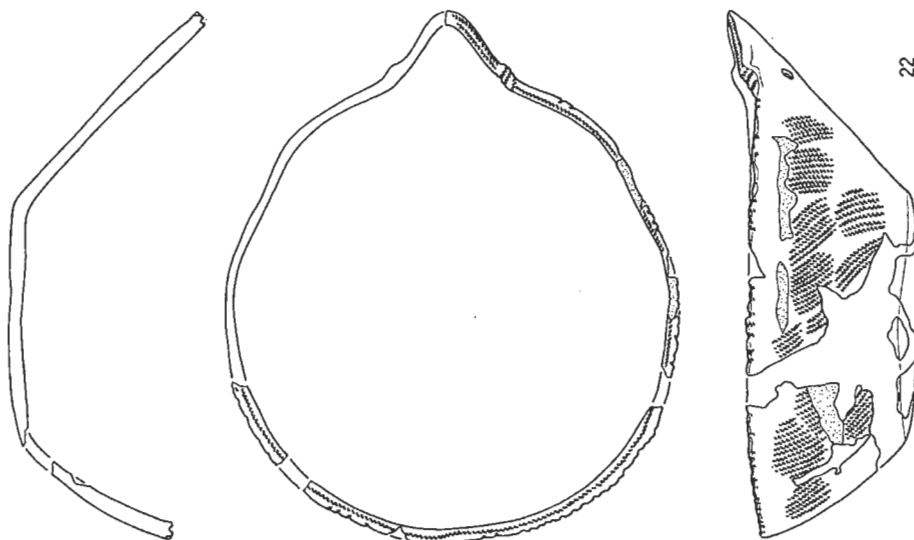
图V-1-6 復元資料(6)



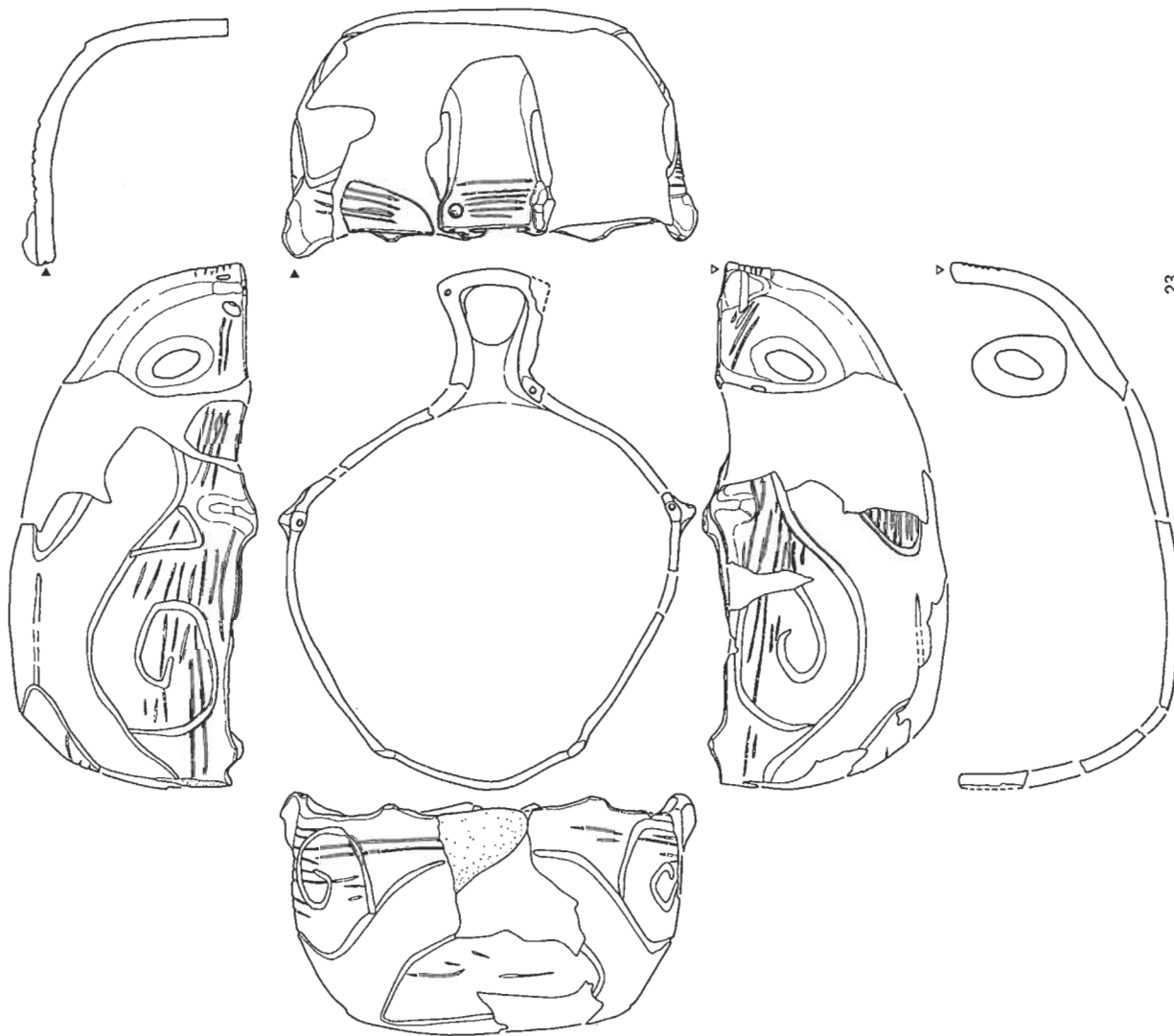
図V-1-7 復元資料(7)



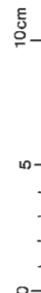
图V-1-8 復元資料(8)



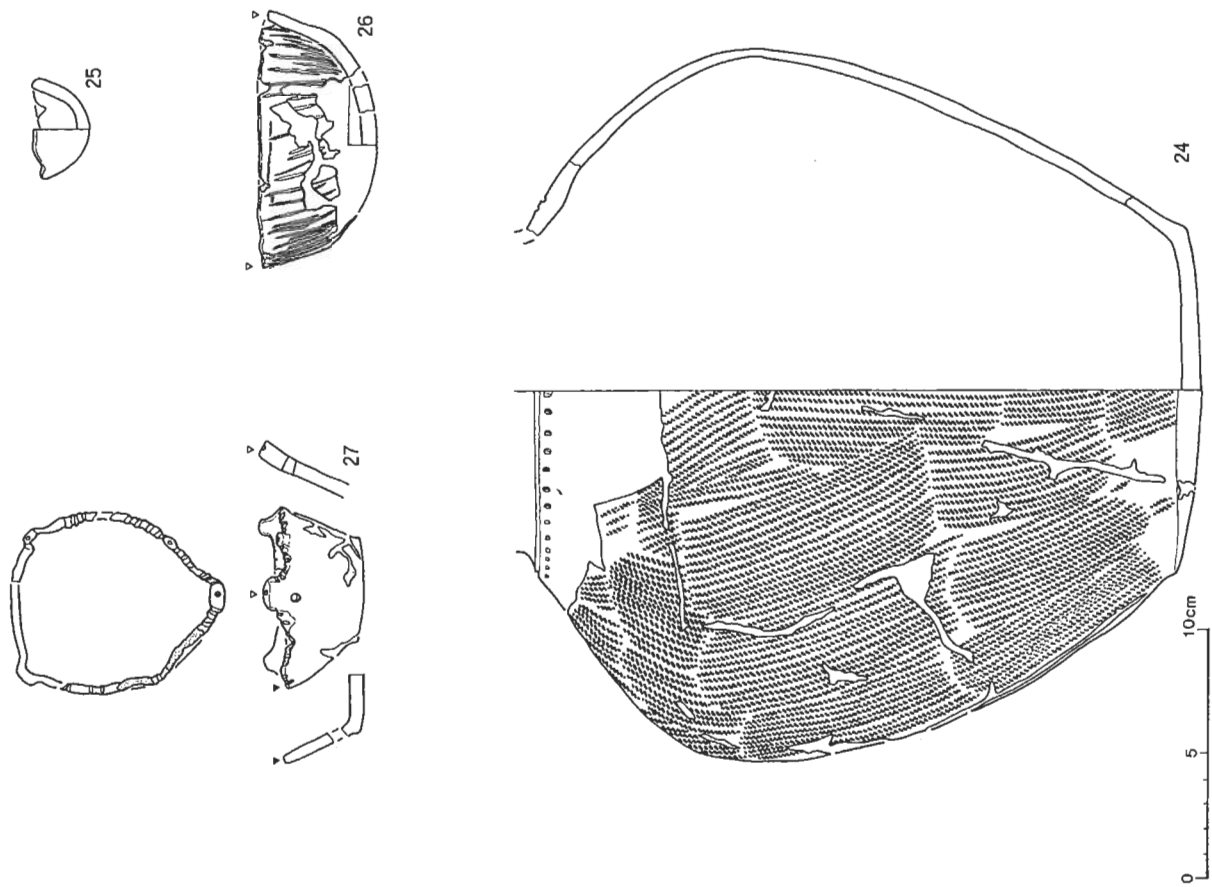
22



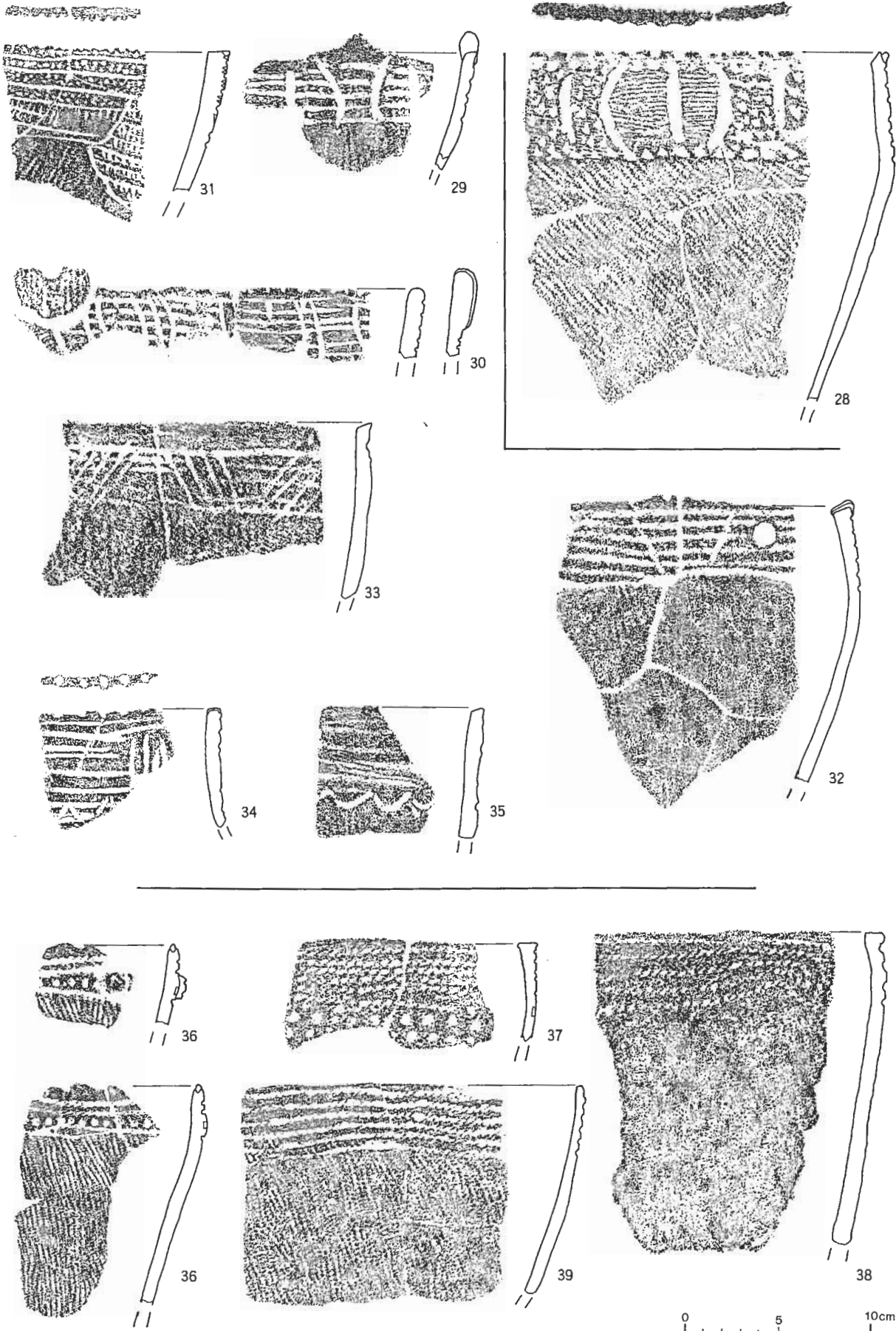
23



図V-1-9 復元資料(9)



図V-1-10 復元資料(10)



図V-1-11 破片資料(1)

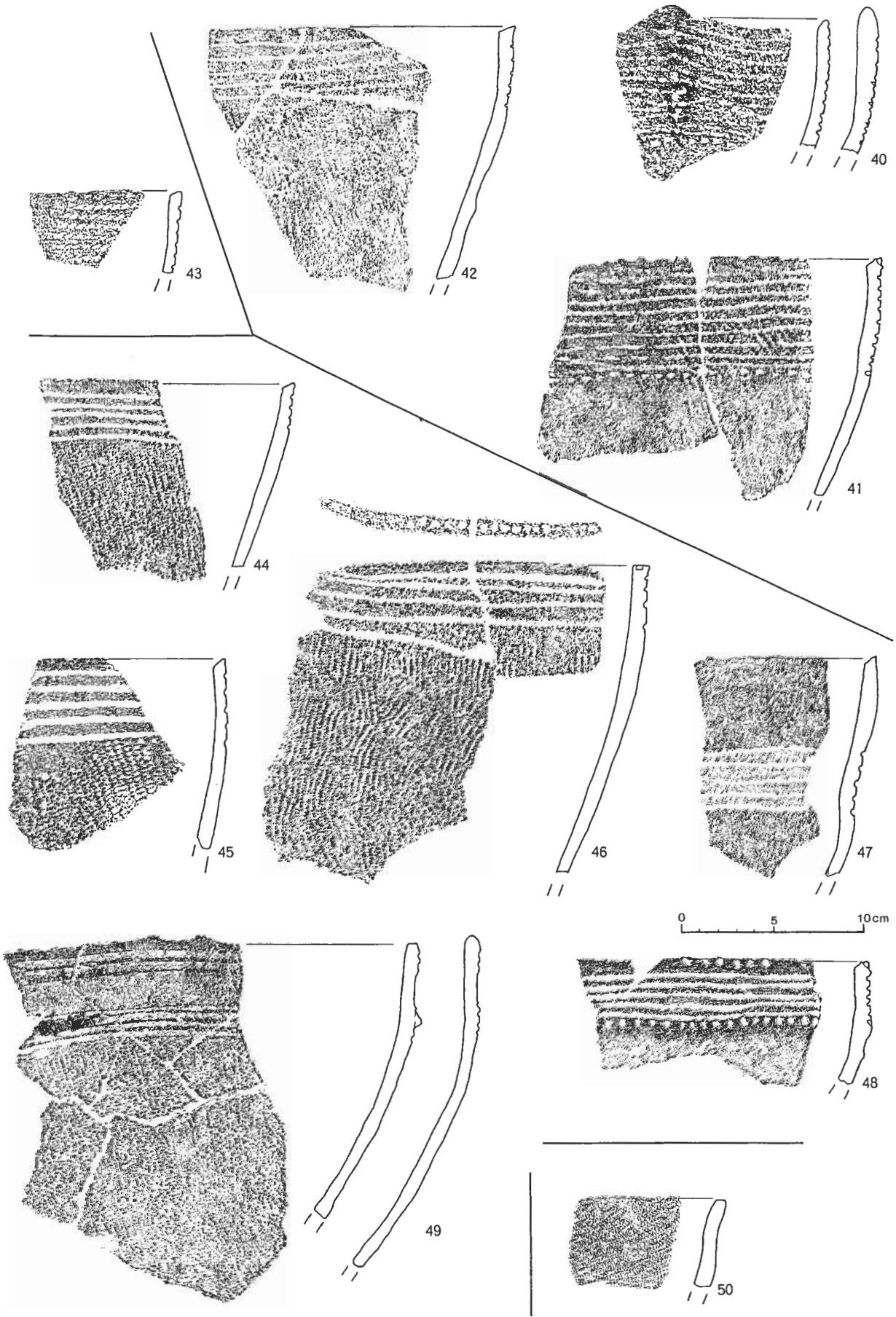
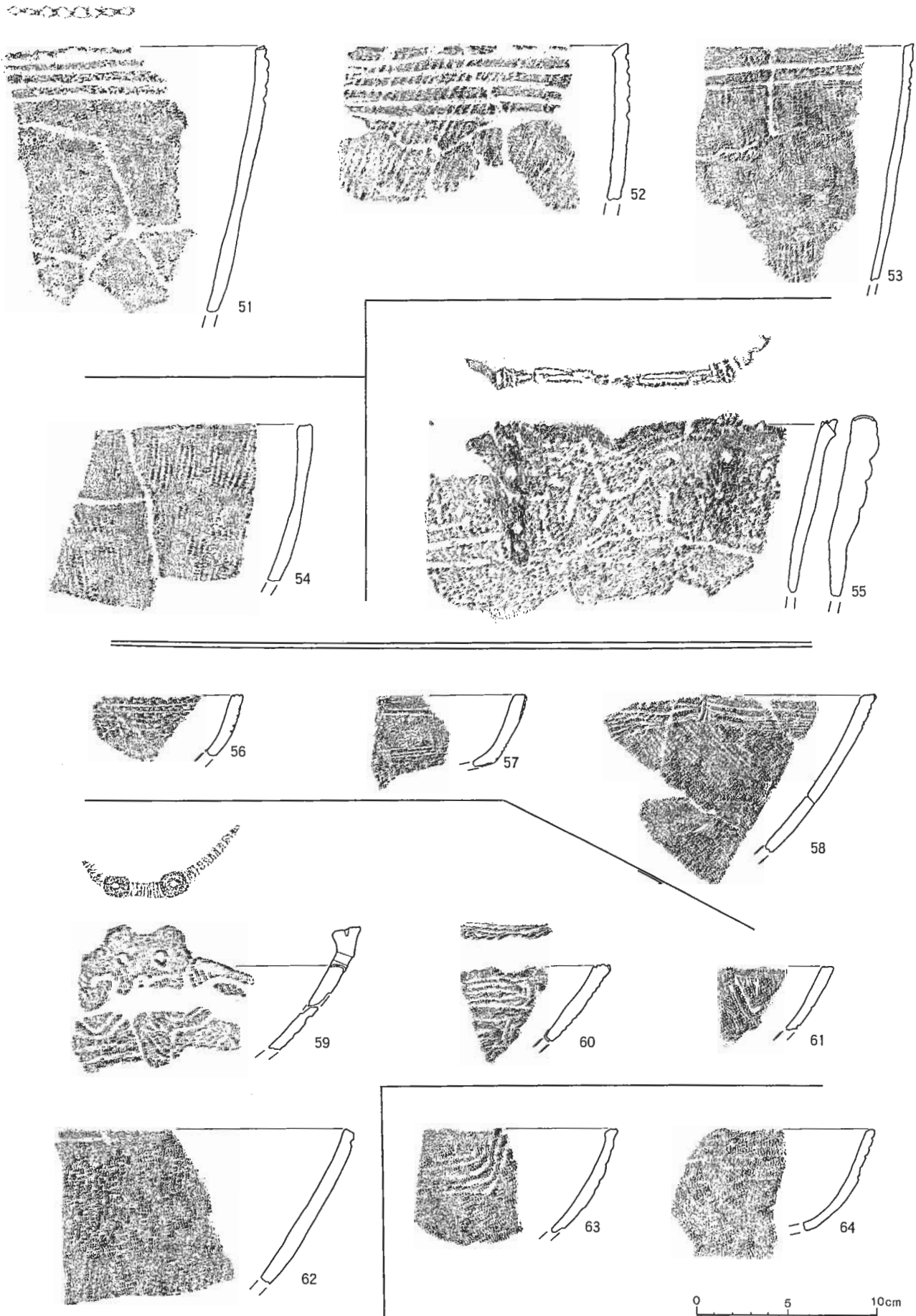
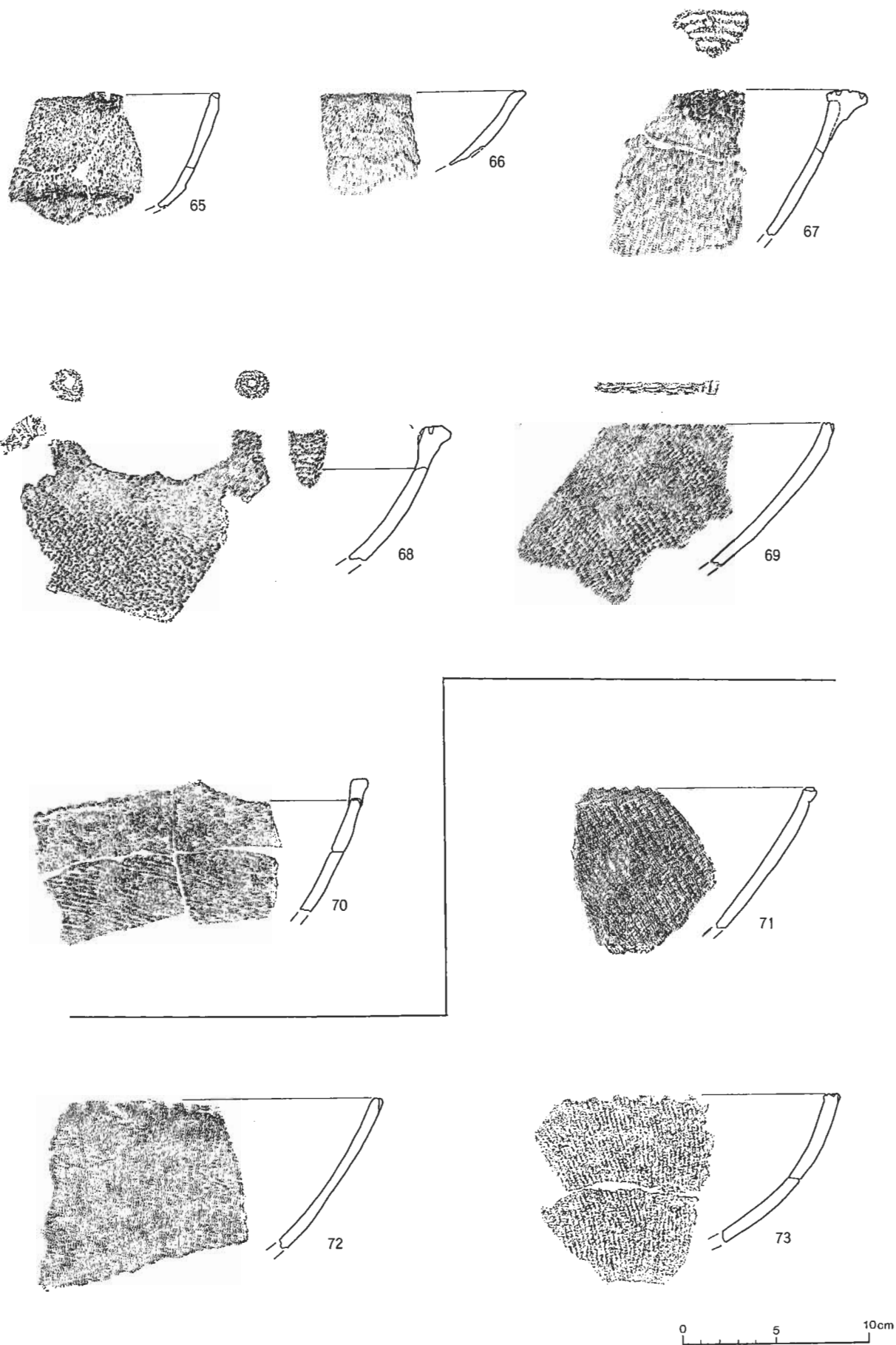


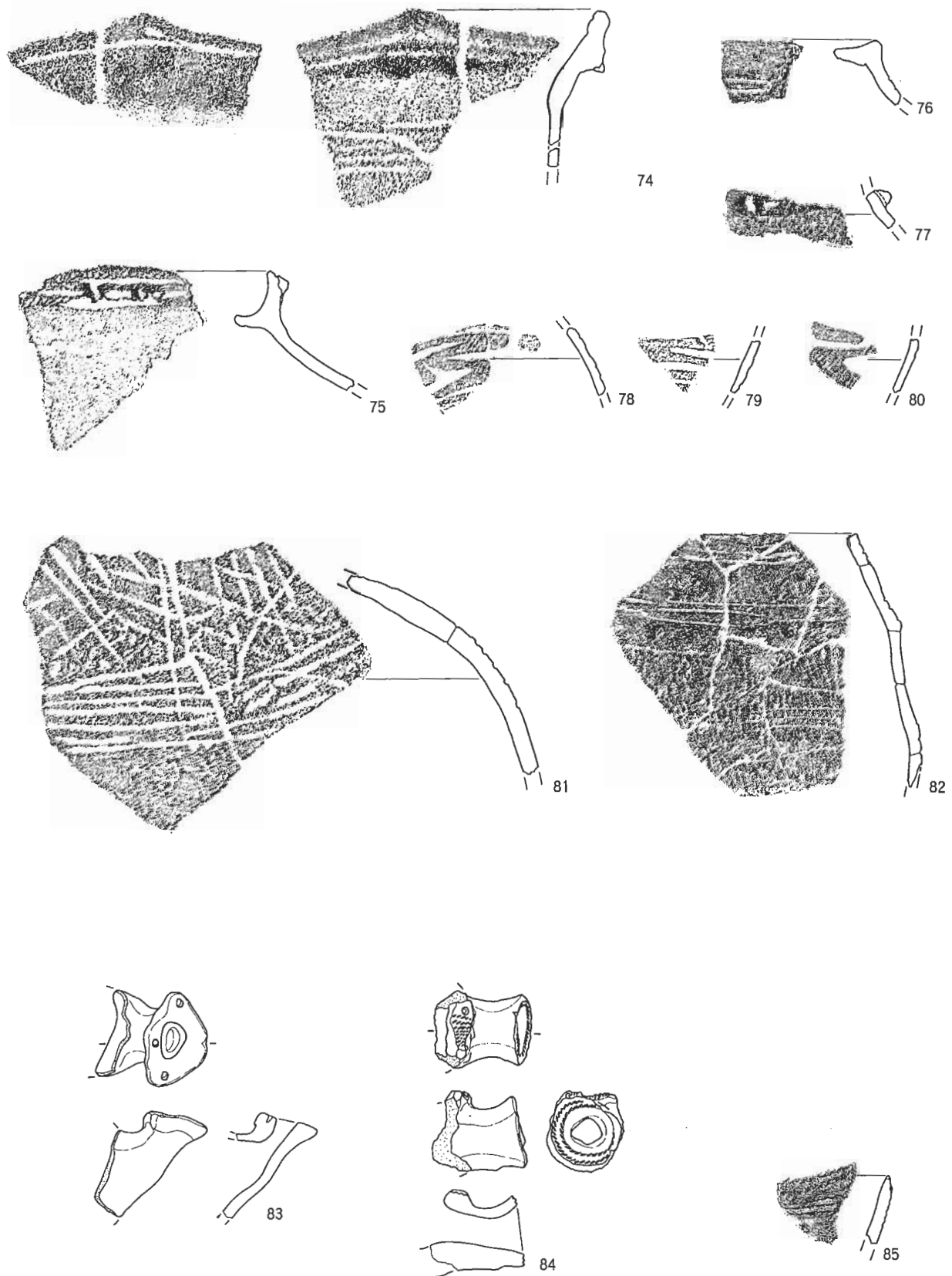
图 V-1-12 破片资料(2)



図V-1-13 破片資料(3)



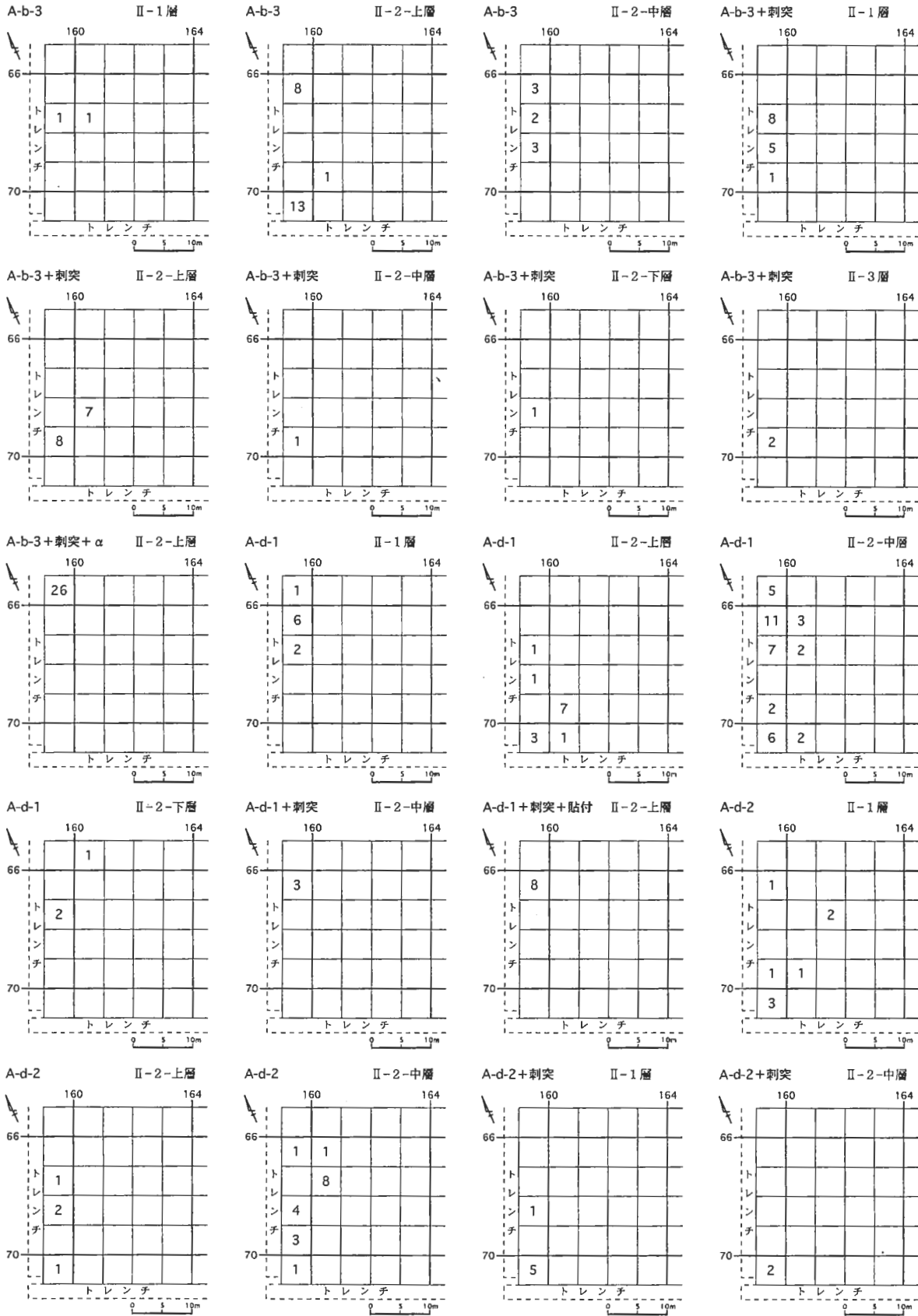
图V-1-14 破片资料(4)



図V-1-15 破片資料(5)

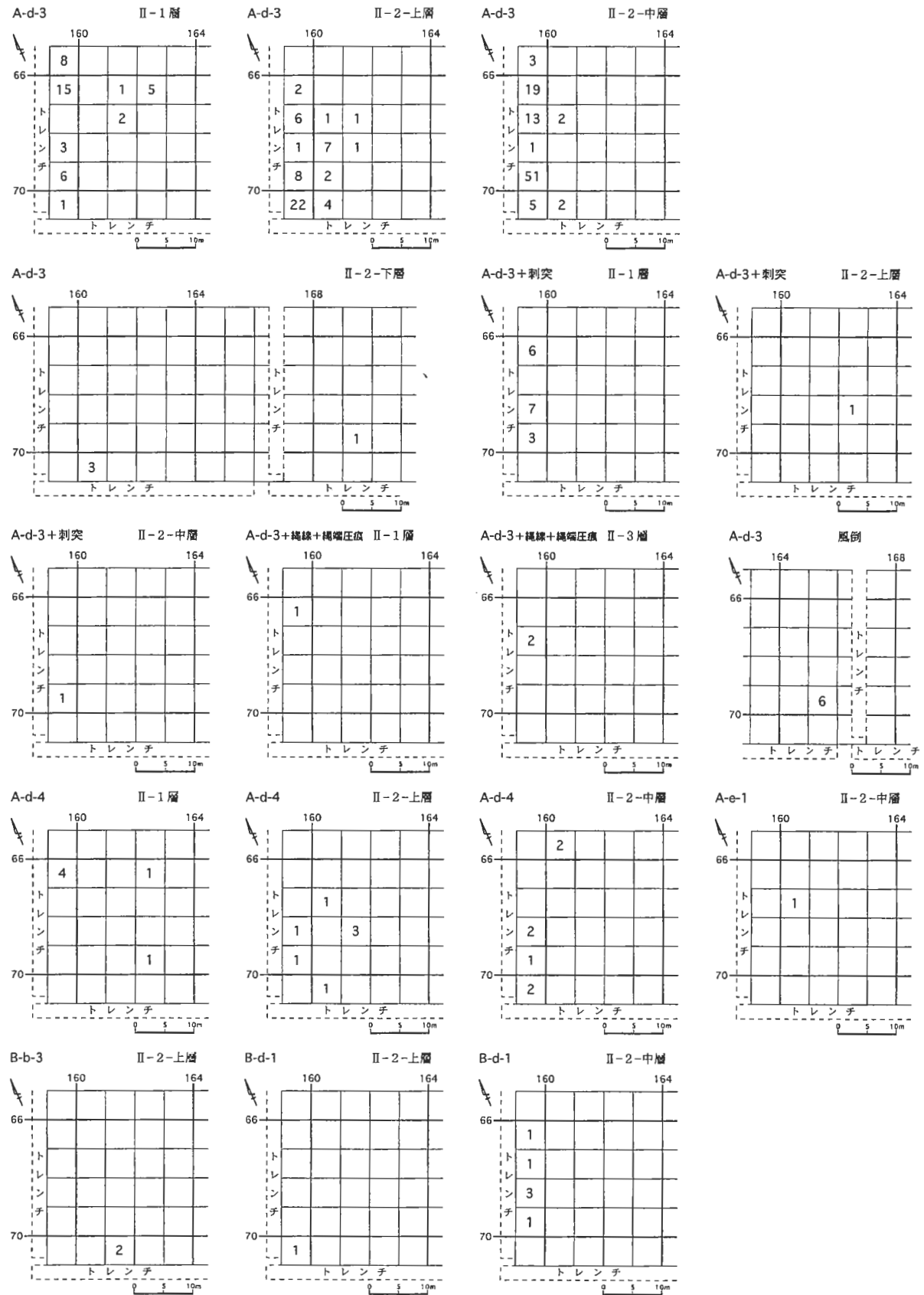
1 土器

深鉢・口縁部(1)



図V-1-16 土器分布図(1)

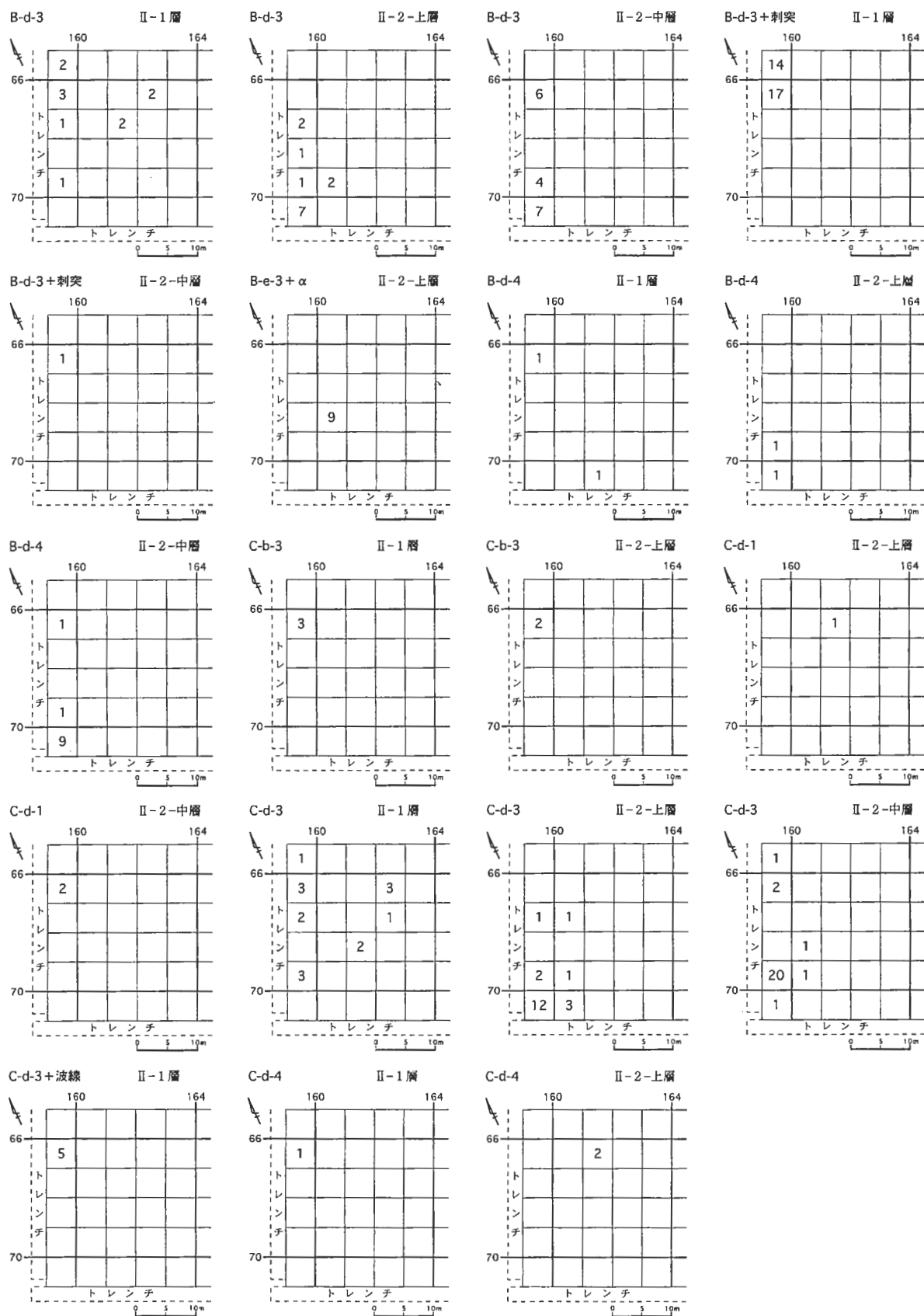
深鉢・口縁部(2)



図V-1-17 土器分布図(2)

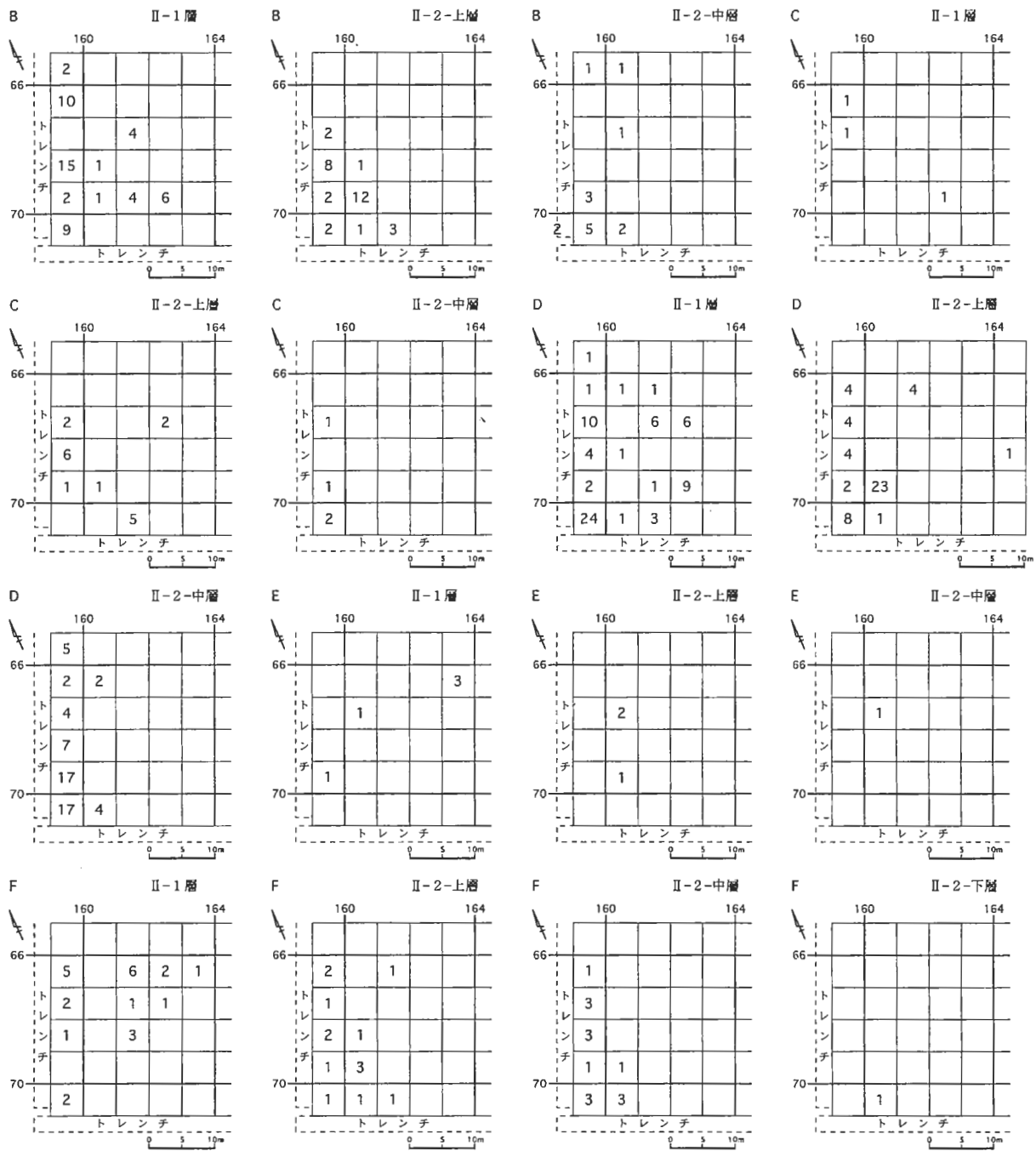
1 土器

深鉢・口縁部(3)



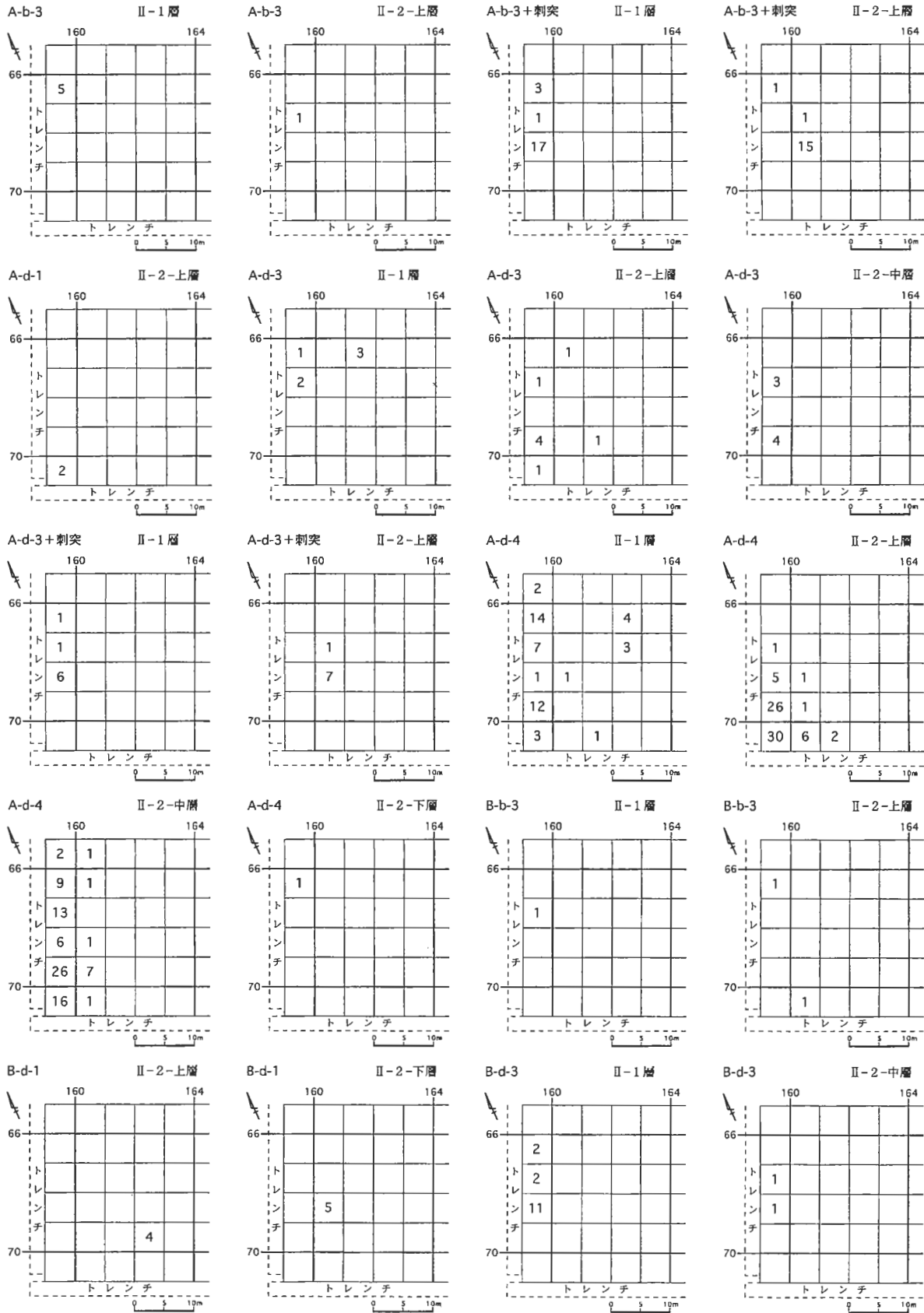
図V-1-18 土器分布図(3)

深鉢・底部



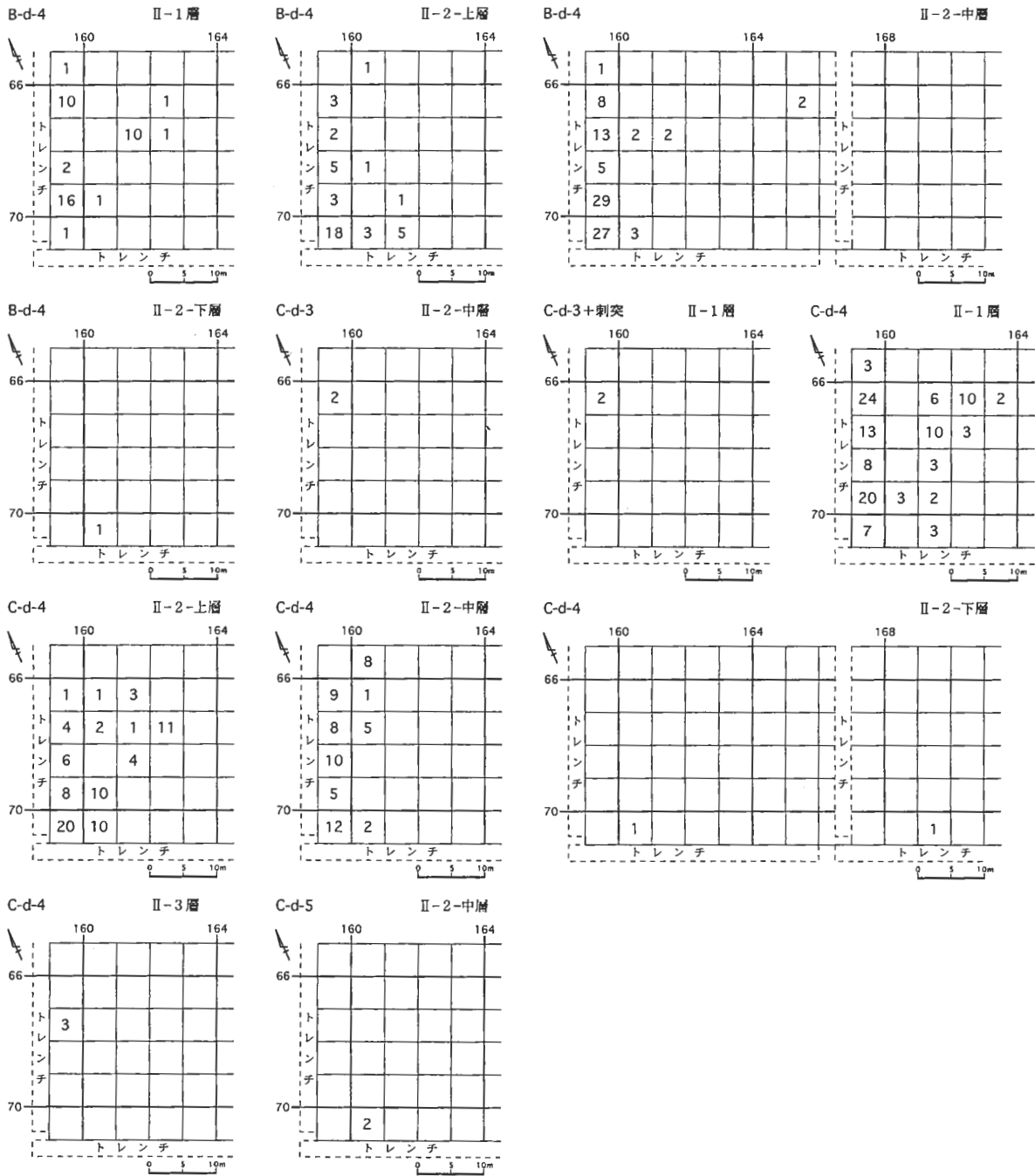
図V-1-19 土器分布図(4)

浅鉢・口縁部(1)



図V-1-20 土器分布図(5)

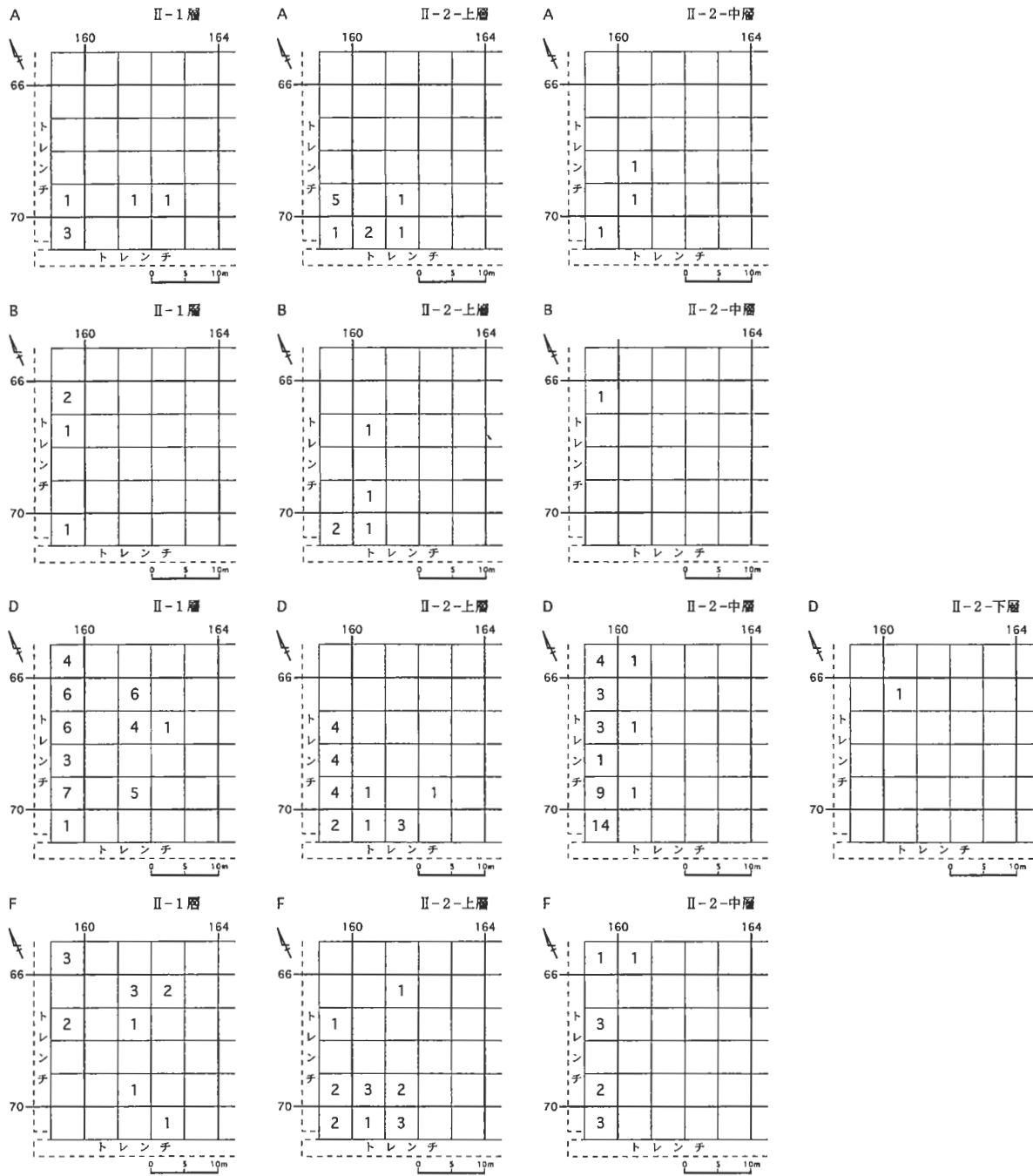
浅鉢・口縁部(2)



図V-1-21 土器分布図(6)

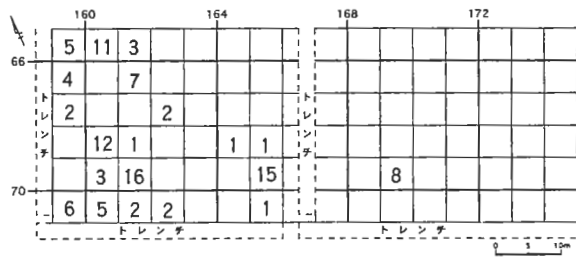
1 土器

浅鉢・底部

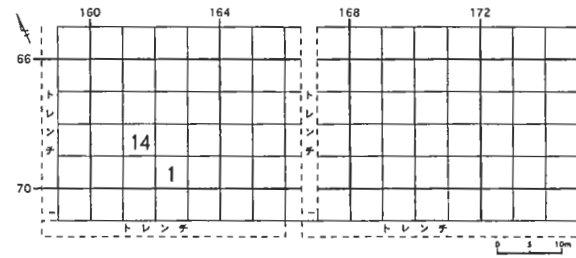


図V-1-22 土器分布図(7)

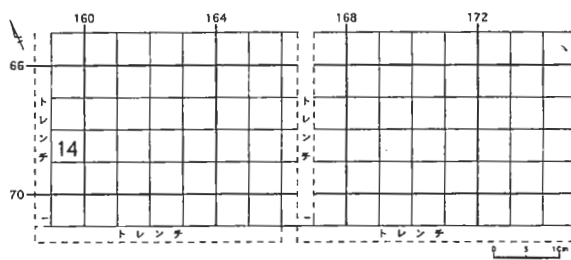
I 層



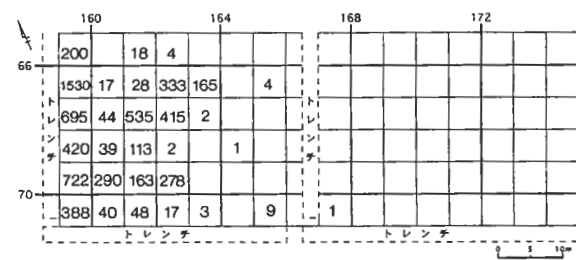
II 層



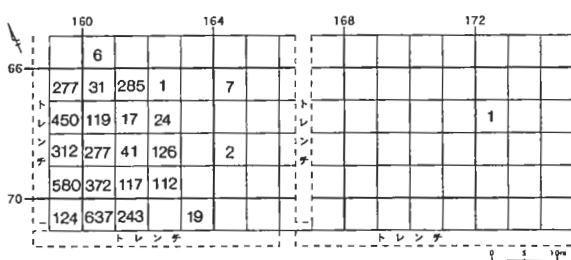
II-2層



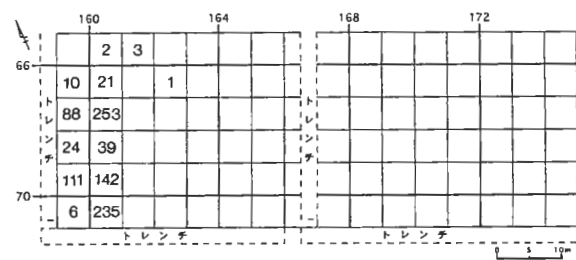
II-1層



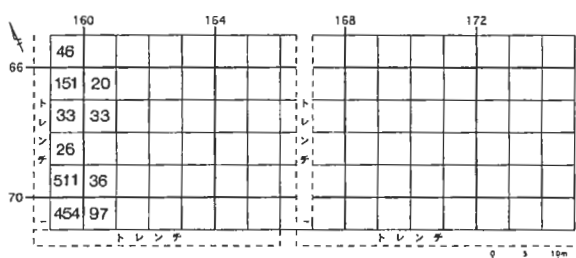
II-2-上層



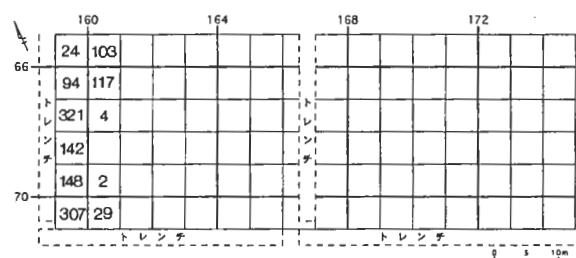
II-2-中層



II-2-中1層



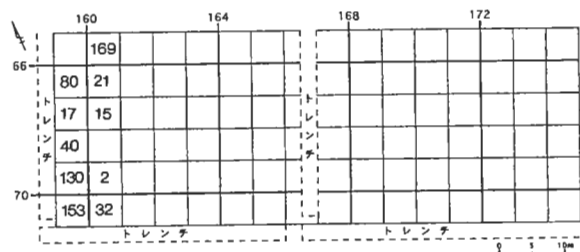
II-2-中2層



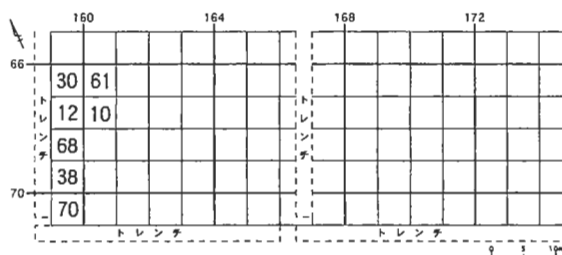
図V-1-23 土器層別出土分布図(1)

1 土器

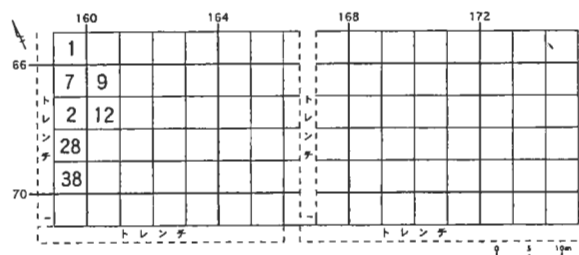
II-2-中3層



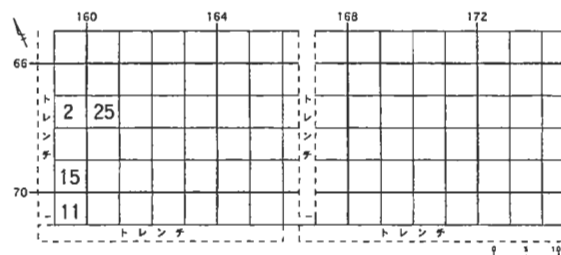
II-2-中4層



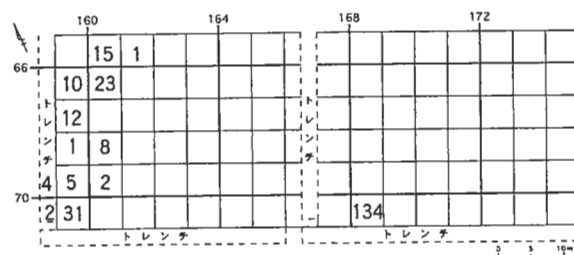
II-2-中5層



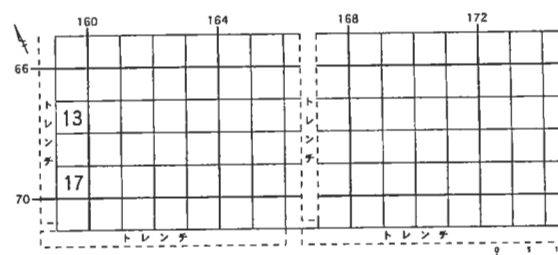
II-2-中6層



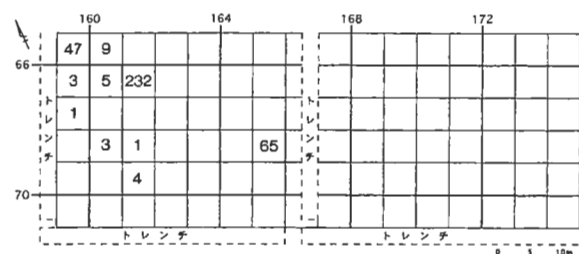
II-2-下層



II-3層



III層 攪乱・層位不明・表採・排土



図V-1-24 土器層別出土分布図(2)

2 石器等 (図V-2-1~3-1~48、表V-2、図版V-2-1~3)

2,914点出土している。包含層出土遺物の約15%にあたる。うち約半数を黒曜石のフレイク・チップが占める。石器では、石鏃、石錐、スクレイパー類、たたき石、台石、砥石、Rフレイク、Uフレイク、加工痕のある礫が出土している。昨年同様、すり石・石皿と見られるものは出土していない。この他には、蛇紋岩製の勾玉が1点出土している。石質では黒曜石のものが多く、安山岩や頁岩のものも見られる。また、礫石器では砂岩や泥岩が多く、珪岩なども見られる。

石鏃 (図V-2-1-1~16)

86点が出土している。三角形凹基が2点、有茎が72点、菱形が1点、未製品が8点、破片が3点である。有茎の石鏃がほとんどを占め、未製品としたものの中にも有茎と見られるものが多い。三角形凹基のものはⅡ-1層でのみ検出されている。石質は黒曜石で作成されたものがほとんどであり、頁岩が1点あるのみである。今回出土した石鏃は、最大長3.4cm、平均長2.1cm、最大幅1.6cm、平均幅1.2cm、最大厚0.5cm、平均厚0.3cm、最高重量1.4g、平均重量0.7gであった。

1~5はⅡ-1層、6~9はⅡ-2-上層、10はⅡ-2-中1層、11・12はⅡ-2-中2層、13はⅡ-2-中3層、14はⅡ-2-中5層、15・16はⅡ-2-下層で出土したもの。

1は三角形凹基。2~8・10~16は有茎。5は茎部の先端が凹基状になっている。この形状のものはこの1点のみである。12は両側縁に抉りが加えられている。側縁に抉りが加えられるものはこの1点のみである。13は刃部を錯向剥離によって作り出している。9は菱形。茎部がはっきりとしないため菱形としたが、有茎に含まれる可能性がある。

石質はすべて黒曜石である。

石錐 (図V-2-1-17)

3点出土している。すべて刺突部を作り出したもの。石質は黒曜石である。いずれもⅡ-2-上層出土である。

17は形状から石鏃からの転用の可能性がある。

スクレイパー (図V-2-1・2-18~34)

97点出土している。定形的な形状をしているものは少なく、フレイクの形状を利用して刃部を作り出しているものが多い。石質は黒曜石のものが多く、安山岩や頁岩が少数ある。

18~21はⅡ-1層出土。22~28はⅡ-2-上層出土。27は25・26の接合図。29・30はⅡ-2-中1層出土。31・32はⅡ-2-中2層出土。33は攪乱、34は層位不明である。

18・22・29・30・33はフレイクの両側縁に刃部を作出しているもの。19・24・32は円弧状の刃部があるもの。23・25・26は下端部に刃部があるもの。20・21・31・34はフレイクの形状を利用して刃部を作出しているもの。

石質は18・21・28が安山岩、34が頁岩、その他は黒曜石である。

石斧 (図V-2-2-35・36)

6点出土している。短冊形が4点、破片等が2点である。石質は緑色泥岩とカンラン岩である。

35はⅡ-1層、36はⅡ-2-中1層出土。

35・36は短冊形。35は敲打による成形の後、全面を研磨している。36は打ち欠きによる成形の後、

2 石器等

全面に研磨をしている。2点とも緑色泥岩製。

たたき石 (図V-2-3-37~41)

41点出土している。石質は砂岩が多い。扁平な礫を使用するものが多く、円礫や亜円礫を使用するものは少ない。使用する場所は腹背部が最も多く、次に両端部、側縁を使用しているものは少ない。また、2つ以上の場所を使用しているものもある。

37・38はⅡ-1層、39・40はⅡ-2-上層、41はⅡ-2-中2層の出土である。

37は棒状礫の両端部を使用したもの。珪岩。38は扁平な礫の腹背部と周縁部を使用したもの。砂岩。39は扁平な礫の腹背部と両端部を使用したもの。安山岩。40は扁平な円礫の腹背部と周縁部を使用したもの。安山岩。41は円礫を使用したもの。安山岩。

台石 (図V-2-3-42)

11点出土している。破片がほとんどである。大きさは小さく片手で持てるくらいのものであり、たたき石とも考えられるものもあるが、形状などを考えこちらに分類した。安山岩や砂岩のものが多い。42はⅡ-2-上層出土。

42は礫の平坦面に敲打痕が見られるものである。砂岩。

砥石 (図V-2-3-43~47)

19点出土している。石質は泥岩と軽石である。軽石のものは溝状のものがあり矢柄研磨器と考えられる。43・44はⅡ-1層、45・46はⅡ-2-上層、47はⅡ-2-中2層出土。

43・47は研磨面のみのも。47は研磨面がほぼ平らであり、砥石かどうかは不明であるが研磨面があることからこの分類した。46は平らな研磨面と溝状の研磨面があるもの。側面に溝状の研磨面が見られる。44・45は研磨面に溝のあるもの。44は研磨面に細い溝が多数見られる。45は太い溝が見られる。

Rフレイク

70点出土している。図示はしていない。フレイクの一部に何らかの加工が見られるものである。スクレイパー的な要素の見られるものが多い。黒曜石が多いが、安山岩もみられる。

Uフレイク

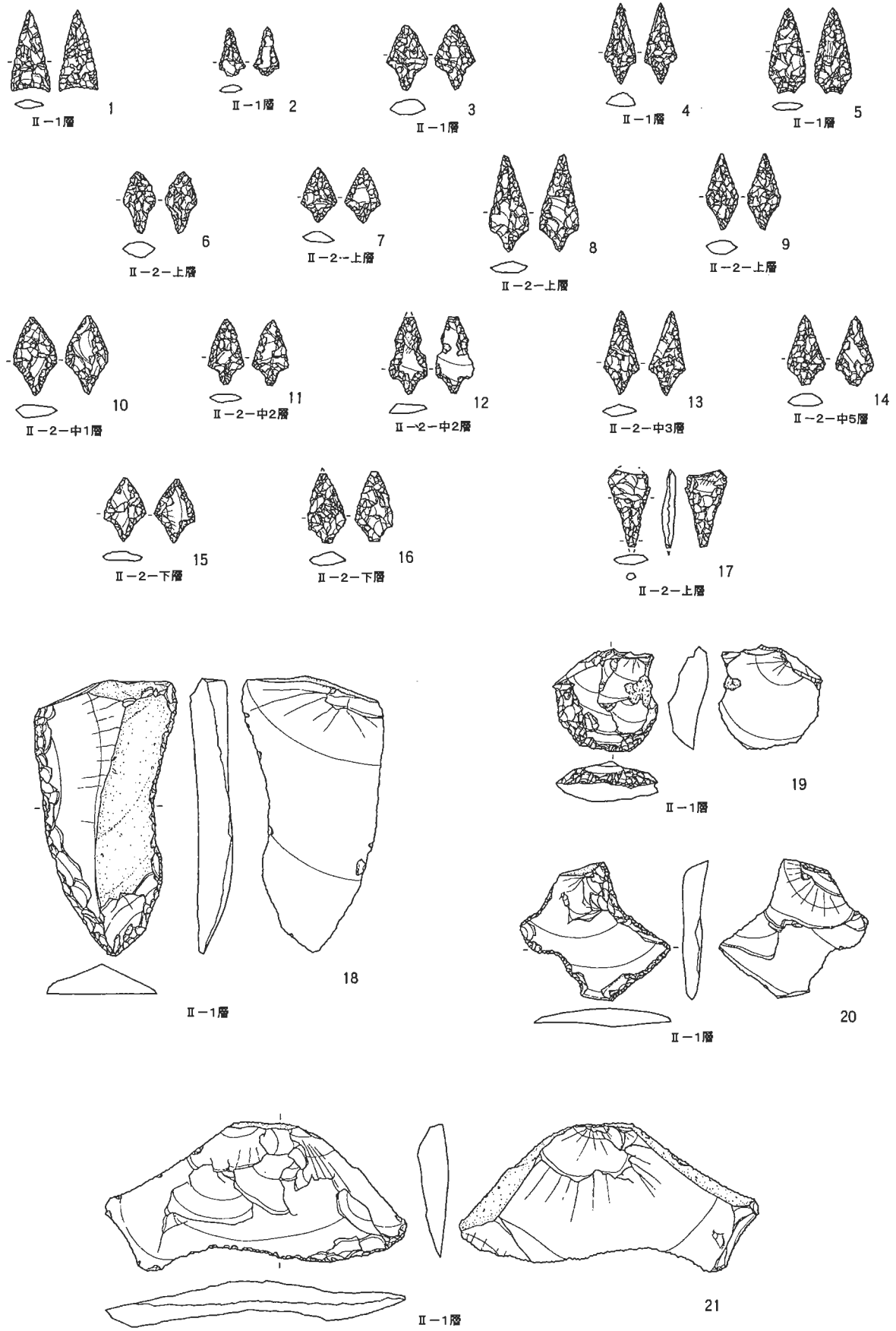
17点出土している。図示はしていない。フレイクに加工痕は見られないが使用痕と見られる微細剥離があるものである。黒曜石のものが多い。

石製品 (図V-2-3-48)

1点出土している。

48は勾玉である。全面を研磨により整形されている。穿孔は両面から行われている。糸ずれ痕は確認できなかった。尾部には横方向の擦りによる一条の刻みがある。石質は蛇紋岩。

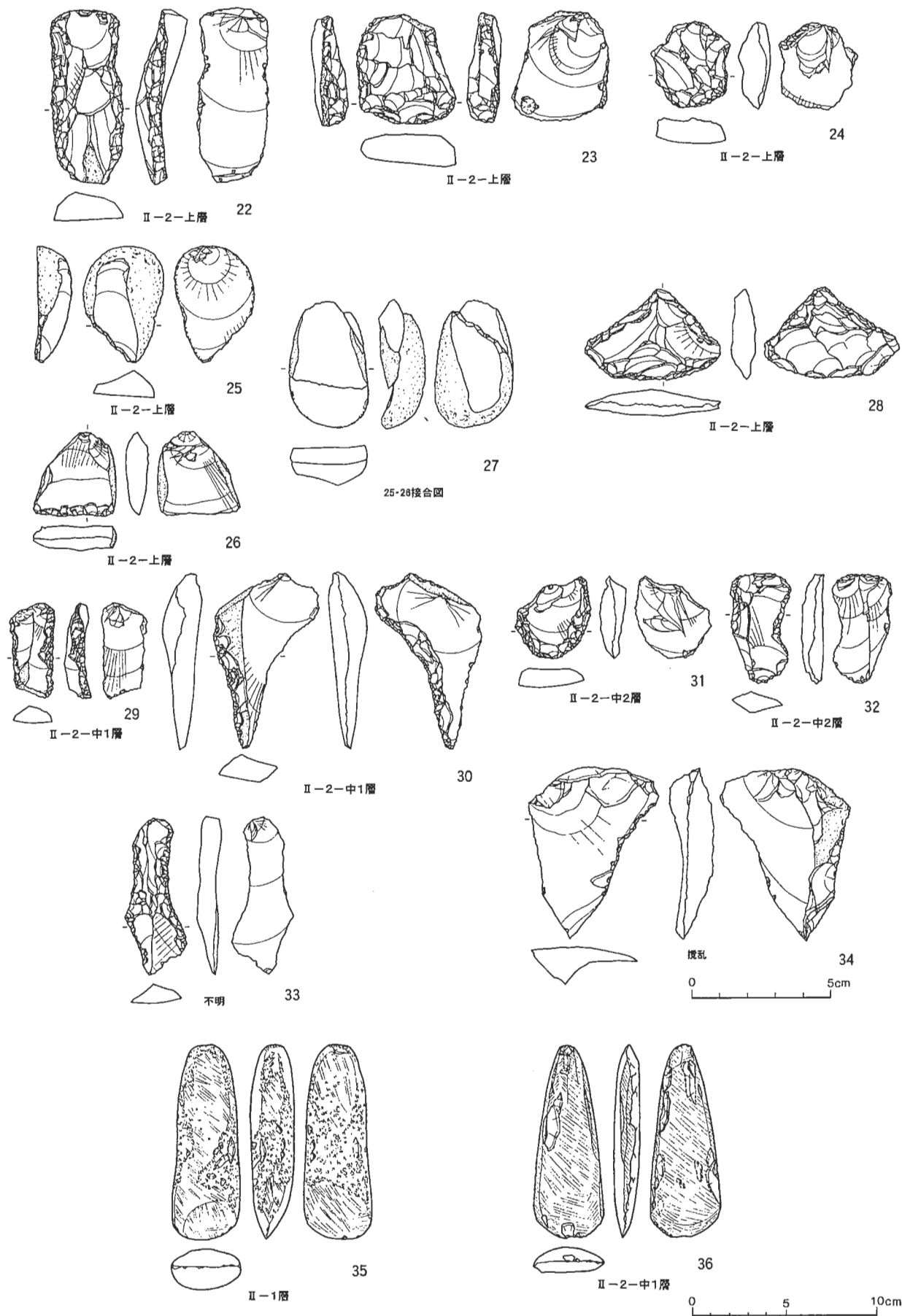
(酒井)



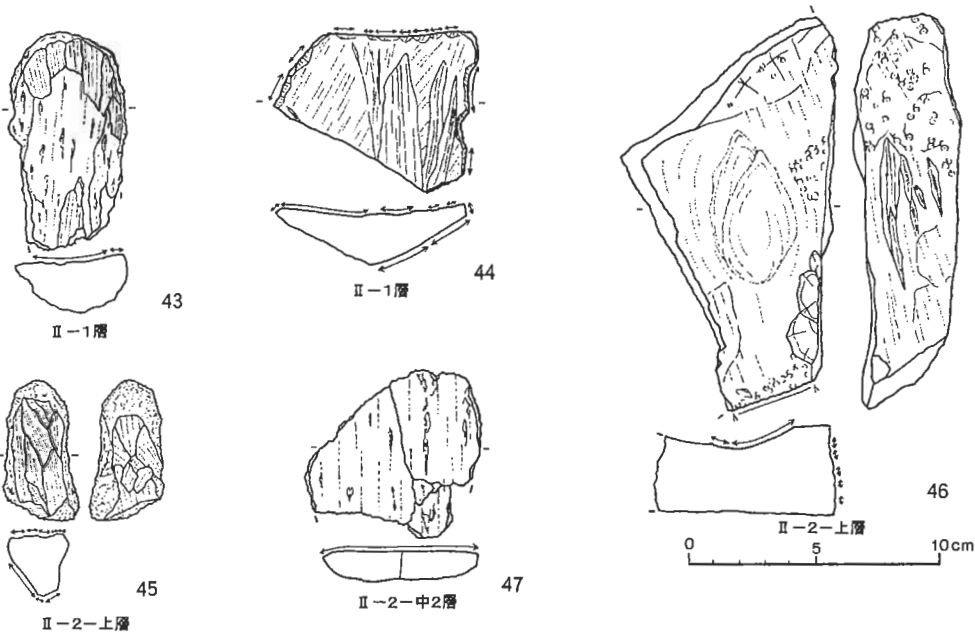
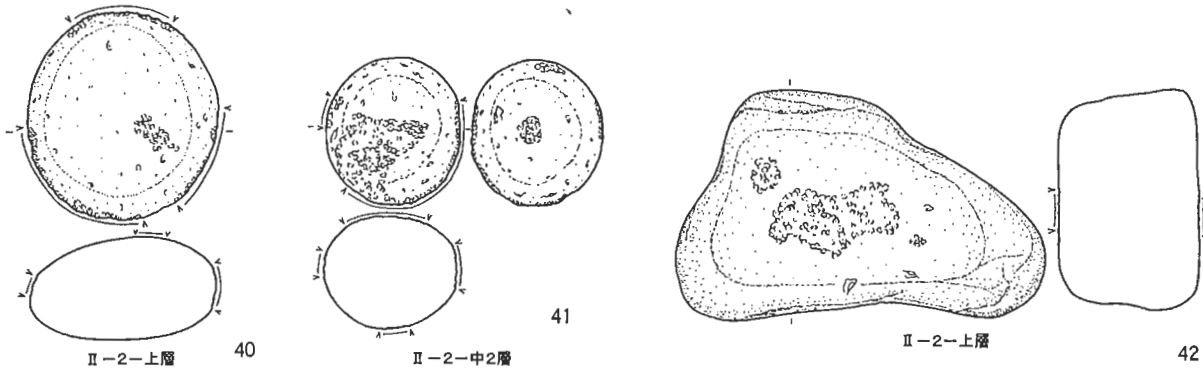
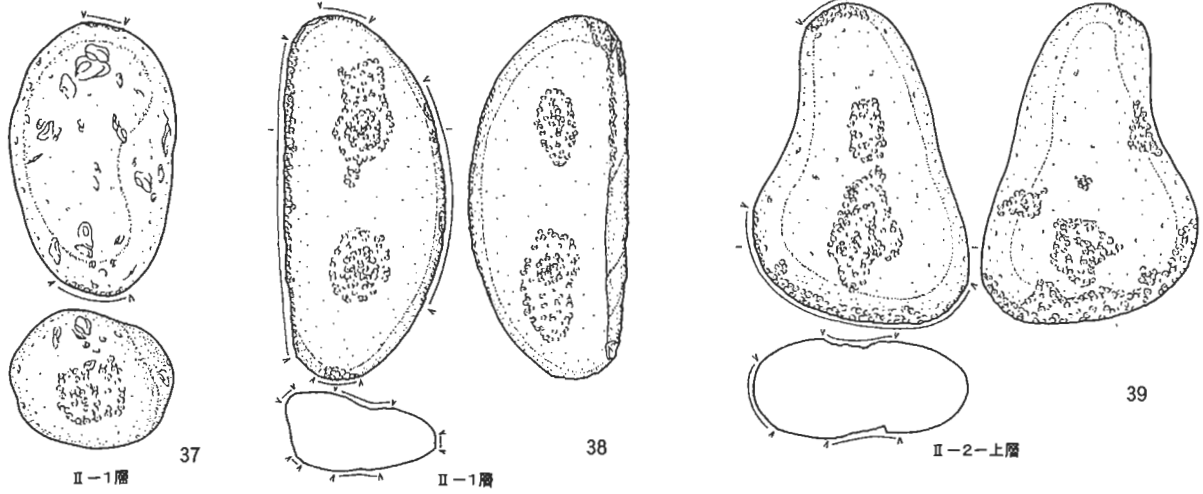
0 5cm

図V-2-1 石器等(1)

2 石器等



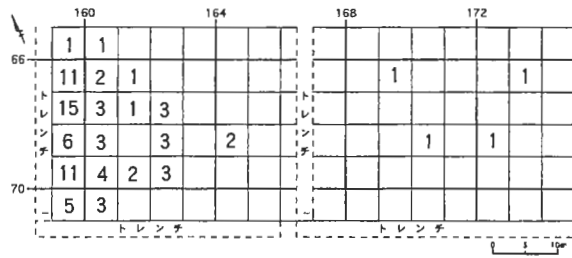
图V-2-2 石器等(2)



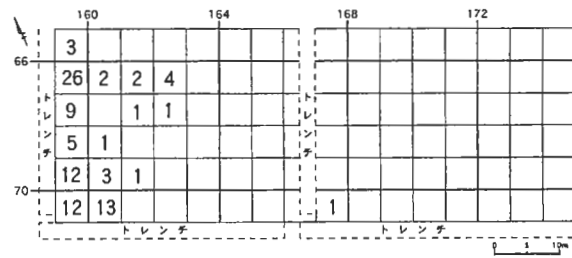
図V-2-3 石器等(3)

2 石器等

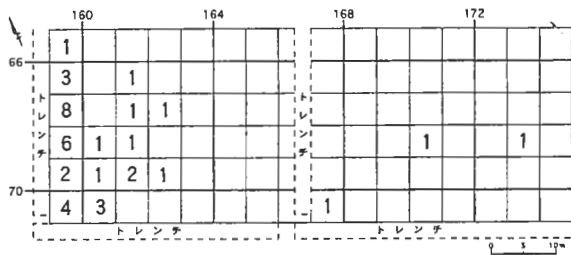
石鏃(86点)



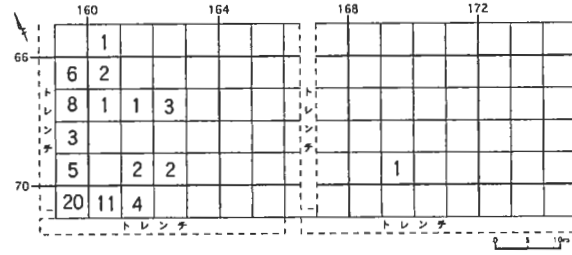
スクレイパー(97点)



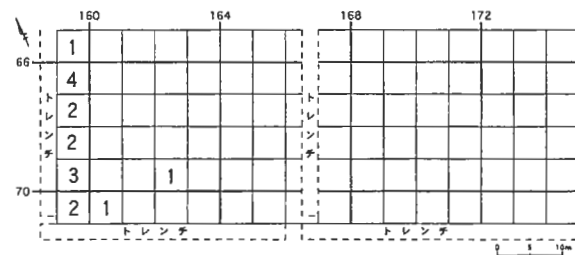
たたき石(41点)



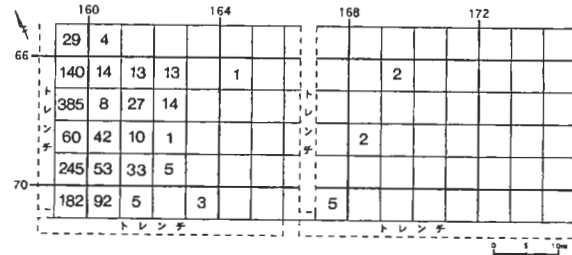
Rフレイク(70点)



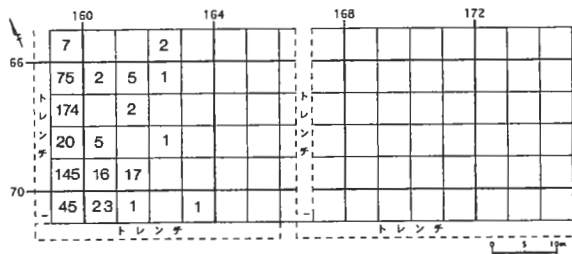
Uフレイク(17点)



フレイク/黒曜石(1396点)

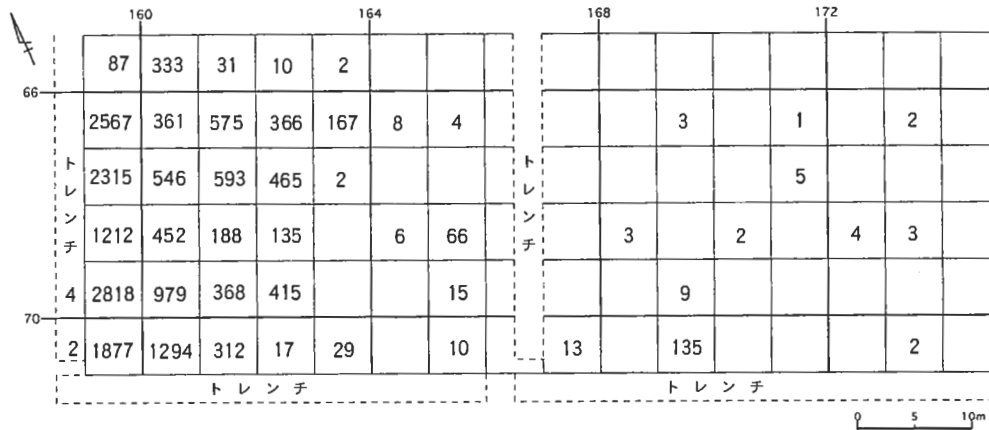


フレイク/頁岩ほか(542点)

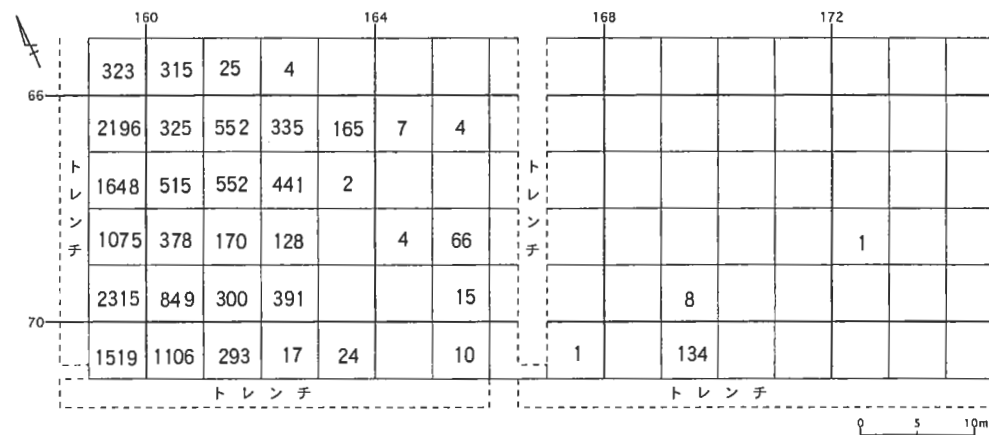


図V-2-4 石器等器種別分布図

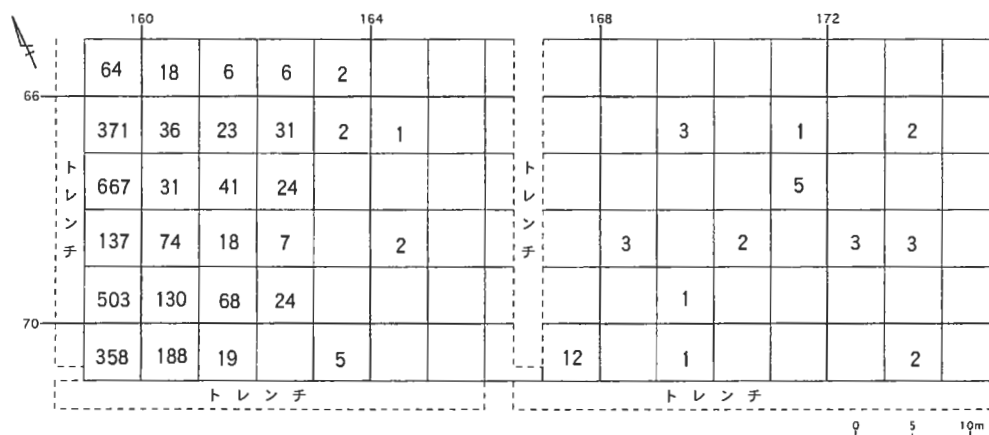
包含層出土遺物分布図(土器・石器等)



包含層出土遺物分布図(土器)



包含層出土遺物分布図(石器等)



図V-3-1 包含層出土遺物分布図

表V-1-1 包含層出土掲載土器一覽(1)

図番号	発掘区	層位	分類	遺物番号
V-1-1-1	65-160-b	Ⅱ-2-中(2)	Vc	16
"	65-160-b+66-160-a	Ⅱ-2-中(4)	Vc	18.19
V-1-1-2	67-161-d/67-162-a	Ⅱ-1	Vc	22/12.29
V-1-1-3	66-160-c	Ⅱ-2-中(3)	Vc	25
V-1-2-4	70-160-d	Ⅱ-2-上	Vc	5~17
V-1-2-5	67-159-d	Ⅱ-2-上	Vc	42
"	66-160-ab/67-160-b	Ⅱ-2-中	Vc	14.15/67
"	67-159-a	Ⅱ-2-中(2)	Vc	104
V-1-3-6	70-159-b	Ⅱ-2-中	Vc	49
"	70-159-b/71-159-a	Ⅱ-2-中(1)	Vc	63.64/167.169.170
"	70-159-b/71-159-a	Ⅱ-2-中(2)	Vc	81/399.400
"	69-158-d	Ⅱ-2-中(3)	Vc	220
V-1-3-7	67-161-cd/67-161-c+67-162-ab/67-162-a	Ⅱ-1	Vc	3.6.7.10.14.15.16.19.22/16/13
V-1-4-8	70-169-b/70-168-c+70-169-b/71-168-d	Ⅱ-2-下	Vc	2.4.10/9/5
V-1-4-9	67-162-ac/67-161-c+67-162-ab	Ⅱ-1	Vc	12.14.15.20.21/16
"	67-162-a	Ⅱ-2-上	Vc	34
V-1-5-10	69-160-b/70-160-a	Ⅱ-2-中(1)	Vc	82/61
V-1-5-11	67-162-a	Ⅱ-1	Vc	2.4~11.24.26.27.30
V-1-5-12	67-160-a	Ⅱ-2-中	Vc	51~53.65.66
"	67-160-a	Ⅱ-2-中(6)	Vc	63.64
V-1-6-13	66-159-b	Ⅱ-1	Vc	14~16.28.29.35
V-1-6-14	69-160-b	Ⅱ-2-上	Vc	47~49.52~54.56
V-1-6-15	67-159-a	Ⅱ-1	Vc	20
V-1-6-16	68-158-d/69-158-d	Ⅱ-2-中(3)	Vc	193/218.219.224.225.238.239
"	68-158-c	Ⅱ-2-中(4)	Vc	232
V-1-6-17	70-160-a	Ⅱ-1	Vc	3
V-1-7-18	67-160-d	Ⅱ-2-上	Vc	4
"	67-160-d	Ⅱ-2-中	Vc	17~19
"	66-160-c	Ⅱ-2-中(4)	Vc	43
V-1-7-19	69-159-b	Ⅱ-2-上	Vc	117.183
"	69-159-ab	Ⅱ-2-中(1)	Vc	82.89~91.137.138.203
"	69-159-b	Ⅱ-2-中(2)	Vc	99~101
"	69-159-ab	Ⅱ-2-中(3)	Vc	145
V-1-7-20	66-162-ad	Ⅱ-1	Vc	9.13.14.27.31
V-1-8-21	66-163-d	Ⅱ-1	Vc	4.5
V-1-9-22	67-161-d	Ⅱ-1	Vc	5.11
V-1-9-23	67-160-d	Ⅱ-2-中	Vc	21.22
"	67-160-ad	Ⅱ-2-中(1)	Vc	23.36~42
V-1-10-24	68-165-cd	攪乱	Vc	1.2.4~8.10~30.33~36
V-1-10-25	70-160-d	Ⅱ-2-中	Vc	45
V-1-10-26	69-160-a	Ⅱ-2-上	Vc	41
"	69-160-b	Ⅱ-2-中(1)	Vc	79
V-1-10-27	66-159-a	Ⅱ-1	Vc	3.4
V-1-11-28	68-159-a	Ⅱ-1	Vc	7
V-1-11-29	66-159-a	Ⅱ-1	Vc	6.32
V-1-11-30	68-160-d	Ⅱ-2-上	Vc	15
V-1-11-31	69-159-b	Ⅱ-2-上	Vc	111
V-1-11-32	68-159-a	Ⅱ-2-中(2)	Vc	97
V-1-11-33	66-159-b	Ⅱ-2-上	Vc	165
V-1-11-34	66-159-c	Ⅱ-2-上	Vc	111
V-1-11-35	66-159-b	Ⅱ-1	Vc	64
V-1-11-36	66-159-b	Ⅱ-2-上	Vc	112
V-1-11-37	66-159-b	Ⅱ-2-中(1)	Vc	95
"	66-159-b	Ⅱ-2-中(4)	Vc	123

表V-1-2 包含層出土掲載土器一覧(2)

図番号	発掘区	層位	分類	遺物番号
V-1-11-38	67-159-c	Ⅱ-2-下	Vc	124
V-1-11-39	65-159-b	Ⅱ-2-中(1)	Vc	25
V-1-12-40	70-159-d	Ⅱ-1	Vc	6.13
V-1-12-41	69-159-c	Ⅱ-1	Vc	10
"	70-159-d	Ⅱ-2-中(1)	Vc	73
V-1-12-42	67-159-c/68-159-d	Ⅱ-2-上	Vc	41/83
"	68-159-a	Ⅱ-2-中(4)	Vc	131
V-1-12-43	67-160-a	Ⅱ-2-中	Vc	49
V-1-12-44	66-159-a	Ⅱ-1	Vc	1
V-1-12-45	68-160-a	Ⅱ-2-上	Vc	53
V-1-12-46	66-159-d	Ⅱ-1	Vc	27.70.72
V-1-12-47	69-158-c	Ⅱ-2-中(1)	Vc	180
V-1-12-48	69-165-d	風倒	Vc	4
V-1-12-49	68-159-c/68-159-d	Ⅱ-1	Vc	16.17.18/20
"	67-160-c/68-159-d	Ⅱ-2-上	Vc	7/64
V-1-12-50	68-161-c	Ⅱ-2-上	Vc	14
V-1-13-51	69-159-a	Ⅱ-2-中(1)	Vc	119
V-1-13-52	70-159-a	Ⅱ-2-中(3)	Vc	91
V-1-13-53	66-159-a	Ⅱ-1	Vc	42
"	66-158-c	Ⅱ-2-上	Vc	83
V-1-13-54	70-159-b	Ⅱ-2-中(1)	Vc	65
V-1-13-55	68-160-c	Ⅱ-2-上		7.8.58
V-1-13-56	67-159-a	Ⅱ-1	Vc	12
V-1-13-57	66-159-b	Ⅱ-2-上	Vc	115
V-1-13-58	66-159-c	Ⅱ-1	Vc	37
V-1-13-59	68-159-a/68-159-c	Ⅱ-1	Vc	25/32
V-1-13-60	66-159-b	Ⅱ-2-上	Vc	164
V-1-13-61	70-160	Ⅱ-2-上	Vc	28
V-1-13-62	68-159-a	Ⅱ-2-中(2)	Vc	98
V-1-13-63	66-159-a	Ⅱ-1	Vc	7
V-1-13-64	66-159-a	Ⅱ-1	Vc	9
V-1-14-65	69-159-c	Ⅱ-2-上	Vc	77
V-1-14-66	69-159-b	Ⅱ-2-中(3)	Vc	176
V-1-14-67	66-159-a	Ⅱ-1	Vc	47
V-1-14-68	69-160-b	Ⅱ-2-中(1)	Vc	83
V-1-14-69	68-158-d	Ⅱ-2-中(2)	Vc	158
V-1-14-70	69-159-c	Ⅱ-1	Vc	9
"	69-159-c	Ⅱ-2-上	Vc	76
V-1-14-71	70-161-a	Ⅱ-2-上	Vc	25
V-1-14-72	70-159-b	Ⅱ-2-中(1)	Vc	65
V-1-14-73	66-158-c/68-160-c	Ⅱ-2-上	Vc	127/21
V-1-15-74	70-159-b	Ⅱ-2-中(4)	Vc	100
V-1-15-75	66-159-b	Ⅱ-1	Vc	20
V-1-15-76	66-159-b	Ⅱ-1	Vc	67
V-1-15-77	66-159-b	Ⅱ-1	Vc	29
V-1-15-78	67-159-a	Ⅱ-1	Vc	18.35
V-1-15-79	68-159-a	Ⅱ-2-中(2)	Vc	107
V-1-15-80	67-159-a	Ⅱ-1	Vc	31
V-1-15-81	67-159-c/67-162-b	Ⅱ-1	Vc	28/18
V-1-15-82	66-159-b	Ⅱ-1	Vc	66
V-1-15-83	70-159-b	Ⅱ-2-上	Vc	33
V-1-15-84	69-159-c	Ⅱ-1	Vc	40
V-1-15-85	70-163-a	Ⅱ-1	Vlc	2

表V-2 包含層掲載石器等一覧

図番号	名称	発掘区	遺物番号	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石質	図版番号	備考
V-2-1-1	石鏃	68-164-c	1	II-1	2.8	1.3	0.3	0.7	黒曜石	V-29	三角形凹基
V-2-1-2	石鏃	69-162-a	6	II-1	1.7	0.9	0.2	0.3	黒曜石	V-29	有茎
V-2-1-3	石鏃	69-162-a	13	II-1	2.2	1.4	0.5	1.1	黒曜石	V-29	有茎
V-2-1-4	石鏃	66-159-b	41	II-1	2.8	1.1	0.5	0.9	黒曜石	V-29	有茎
V-2-1-5	石鏃	70-160-d	5	II-1	3.0	1.3	0.3	1.1	黒曜石	V-29	有茎
V-2-1-6	石鏃	68-160-d	8	II-2-上	2.2	1.1	0.5	0.8	黒曜石	V-29	有茎
V-2-1-7	石鏃	69-160-b	34	II-2-上	1.9	1.2	0.3	0.6	黒曜石	V-29	有茎
V-2-1-8	石鏃	69-160-b	49	II-2-上	3.4	1.4	0.4	1.4	黒曜石	V-29	有茎
V-2-1-9	石鏃	68-162-b	5	II-2-上	2.6	1.1	0.5	0.8	黒曜石	V-29	菱形
V-2-1-10	石鏃	67-159-b	131	II-2-中1	2.7	1.5	0.4	1.3	黒曜石	V-29	有茎
V-2-1-11	石鏃	70-159-a	123	II-2-中2	2.3	1.2	0.3	0.6	黒曜石	V-29	有茎
V-2-1-12	石鏃	68-159-a	59	II-2-中2	(2.7)	1.3	0.3	(0.7)	黒曜石	V-29	有茎
V-2-1-13	石鏃	69-159-a	206	II-2-中3	2.9	1.2	0.4	0.8	黒曜石	V-29	有茎
V-2-1-14	石鏃	66-160-c	14	II-2-中5	2.4	1.3	0.4	1.0	黒曜石	V-29	有茎
V-2-1-15	石鏃	68-159-b	89	II-2-下	2.2	1.4	0.3	0.7	黒曜石	V-29	有茎
V-2-1-16	石鏃	68-160-b	33	II-2-下	(2.4)	1.3	0.4	(1.1)	黒曜石	V-29	有茎
V-2-1-17	石錐	68-160-d	9	II-2-上	(2.2)	1.4	0.5	(1.0)	黒曜石	V-29	
V-2-1-18	スクレイパー	66-161-d	6	II-1	9.6	4.9	1.4	54.3	安山岩	V-29	
V-2-1-19	スクレイパー	66-159-a	61	II-1	3.6	3.6	1.4	12.9	黒曜石	V-29	
V-2-1-20	スクレイパー	68-159-a	5	II-1	4.8	5.2	0.9	10.9	黒曜石	V-29	
V-2-1-21	スクレイパー	67-161-c	7	II-1	5.2	10.4	1.1	46.6	安山岩	V-29	
V-2-2-22	スクレイパー	67-159-b	120	II-上	6.3	2.6	1.9	17.7	黒曜石	V-30	
V-2-2-23	スクレイパー	70-160-a	21	II-2-上	4.0	3.5	1.3	18.2	黒曜石	V-30	
V-2-2-24	スクレイパー	70-160-b	7	II-2-上	3.2	2.9	1.1	9.0	黒曜石	V-30	
V-2-2-25	スクレイパー	70-160-a	75	II-2-上	4.3	2.9	1.3	11.3	黒曜石	V-31	27と接合
V-2-2-26	スクレイパー	70-160-a	10	II-2-上	3.1	2.9	1.0	8.3	黒曜石	V-31	26と接合
V-2-2-27	接合資料	70-160-a	10・75	II-2-上	4.5	2.9	1.5	19.6	黒曜石	V-31	26・27接合
V-2-2-28	スクレイパー	69-160-b	74	II-2-上	3.3	4.9	0.9	11.7	安山岩	V-31	
V-2-2-29	スクレイパー	70-159-a	85	II-2-中1	3.5	1.6	0.9	3.8	黒曜石	V-30	
V-2-2-30	スクレイパー	70-159-a	86	II-2-中1	6.4	3.8	1.4	13.6	黒曜石	V-30	
V-2-2-31	スクレイパー	70-159-d	165	II-2-中2	4.0	2.2	0.8	4.7	黒曜石	V-30	
V-2-2-32	スクレイパー	70-159-d	147	II-2-中2	3.0	2.7	0.9	5.1	黒曜石	V-30	
V-2-2-33	スクレイパー	69-159-a付近	127	不明	5.7	2.2	0.9	5.8	黒曜石	V-30	被熱
V-2-2-34	スクレイパー	65-159-b	8	攪乱	6.2	2.7	1.6	22.4	頁岩	V-31	
V-2-2-35	石斧	67-162-a	1	II-1	10.5	3.6	2.3	132.0	緑色泥岩	V-31	短冊形
V-2-2-36	石斧	69-159-d	172	II-2-中1	10.4	3.7	1.4	73.0	緑色泥岩	V-31	短冊形
V-2-3-37	たたき石	67-161-d	4	II-1	10.9	6.6	5.5	508.3	珪岩	V-32	
V-2-3-38	たたき石	69-162-b	3	II-1	14.4	6.3	3.1	379.7	砂岩	V-32	
V-2-3-39	たたき石	70-160-a	22	II-2-上	12.7	8.5	3.9	510.8	安山岩	V-32	
V-2-3-40	たたき石	70-160-a	17	II-2-上	8.3	7.5	4.1	465.2	安山岩	V-32	
V-2-3-41	たたき石	68-159-a	64	II-2-中2	5.7	5.2	4.4	182.2	安山岩	V-32	
V-2-3-42	台石	68-161-d	4	II-2-上	9.1	14.5	5.6	1146.3	砂岩	V-32	
V-2-3-43	砥石	67-161-d	3	II-1	8.6	4.6	2.3	21.2	軽石	V-32	
V-2-3-44	砥石	65-159-b	19	II-1	(6.3)	(8.0)	(2.4)	(77.2)	砂岩	V-32	
V-2-3-45	砥石	69-160-c	15	II-2-上	5.5	2.9	2.5	11.1	軽石	V-32	
V-2-3-46	砥石	66-159-b	120	II-2-上	(15.5)	(8.6)	(4.3)	(414.4)	砂岩	V-32	
V-2-3-47	砥石	70-159-d	155	II-2-中2	(6.6)	6.9	1.2	(11.9)	軽石	V-32	
V-2-3-48	石製品(勾玉)	70-159-b	77	II-2-中	2.1	1.3	0.5	1.9	蛇紋岩	V-31	

VI Ⅲ層の調査

昨年度のトレンチ調査で壁面の崩壊の危険性からごく一部を除き調査を見合わせていたⅢ層の調査を行った。今年度調査区の25%調査の後、159～163-65・66・67/162-68・69・70ラインをⅡ層の全面調査とした。その他のグリットのⅠ・Ⅱ層の部分は少量の遺物が出土したが遺構は確認できなかった(図Ⅴ-3-1)。そのため、標高約7mまでを重機により除去した。その後、164～175ラインの25%調査でⅡ-3層とⅢ層1回目の調査を行い、標高約5mまでを確認した。Ⅱ-3層から少量の遺物が出土したためその周囲は範囲を拡大して調査したが、遺構は検出されなかった。これにより、65～68-163～175/69・70-167～175ラインをさらに重機により標高約5mまで除去し、9グリットの調査を行った(図Ⅵ-1)。人力による掘り下げであったが、遺構・遺物は検出されなかった。標高約4.7～3.5mで多数の自然木やオニグルミなどが検出された。調査はグリッドを深さ1mほど掘り下げて調査し、さらにグリッド内に幅1mほどのトレンチを設け、深さ1mほど掘り下げて調査を行った。これらのグリット調査では標高3.5mほどまで掘り下げたことになる。

Ⅲ層はオリーブ～茶褐色・青灰色粘質土と暗オリーブ～暗黒茶褐色砂の互層となっており、鉄分と見られる暗赤茶褐色の土層が見られる。Ⅲ層は基本的に西に向かって落ち込んでいく土層を示す。この土層の生成過程については風成層とみなしているが、更なる検討を要するものと考えている。Ⅱ-3層との境界においては不整合面となっている。土質としては砂質分が多いため、崩れやすい状態である。

Ⅲ層からは遺構・遺物と見られるものは検出されなかったが、現在の石狩川の汀線付近から遺物が確認されている(Ⅱ章-3)。ここから確認された遺物には約3,000年ほど前のものと考えられる土器片が見つかり、Ⅲ層との関係について検討を要すると考えられる。

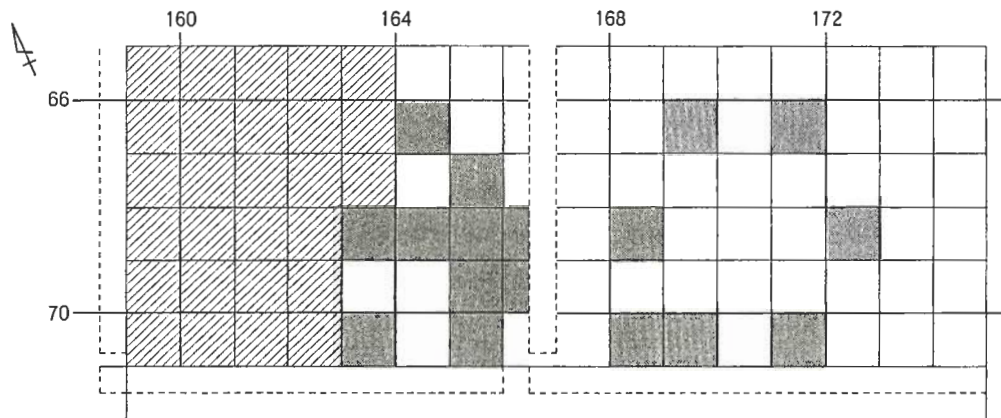
Ⅲ層から検出された自然木についてサンプル採取を行い、樹種の同定を行った。そのほとんどがヤナギ属であることが分かった(表Ⅵ-1参照)。樹種同定の詳細はⅦ章-2で報告している。また、出土した自然木やクルミを使って¹⁴C年代測定を行った結果、約3,000年前のものであるということがわかった(表Ⅵ-2参照)。測定結果についてはⅦ章-1で報告している。

このことから、遺跡の東側、Ⅲ層の標高3.5mから4.7m付近は、今から約3,000年ほど前の時期にはヤナギ属の多く生える砂の多い裸地であったことが推測される。

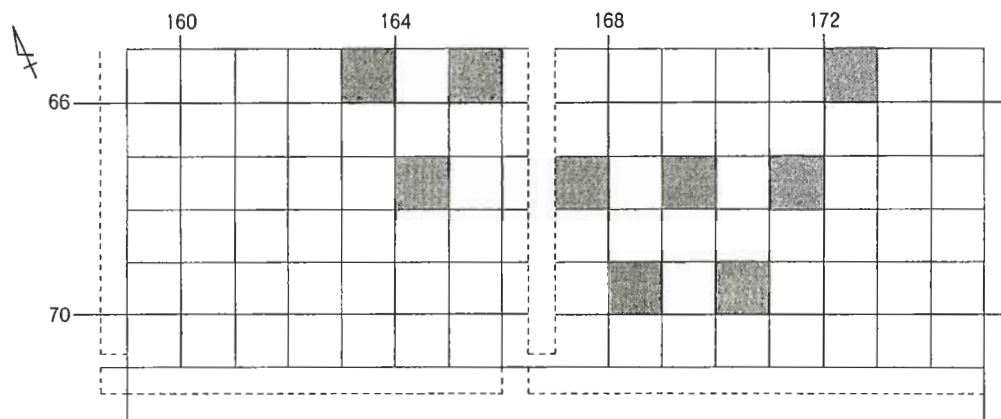
(酒井)

Ⅲ層の調査



Ⅲ層 1 回目調査

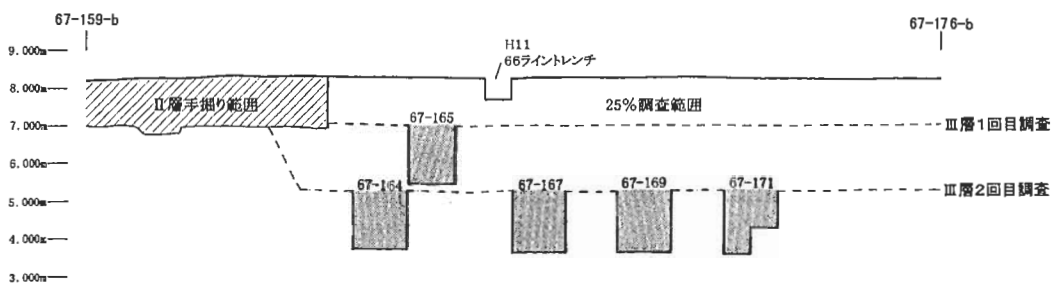


Ⅲ層 2 回目調査



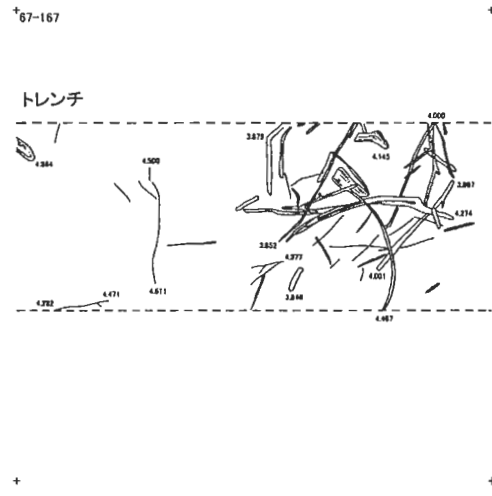
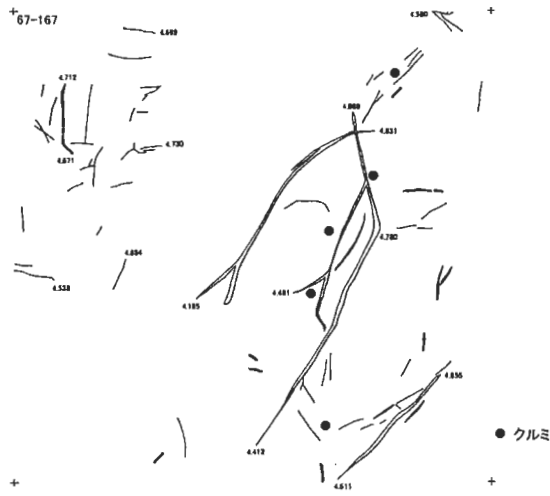
0 5 10m

 Ⅱ層手掘り調査範囲
  Ⅲ層調査範囲

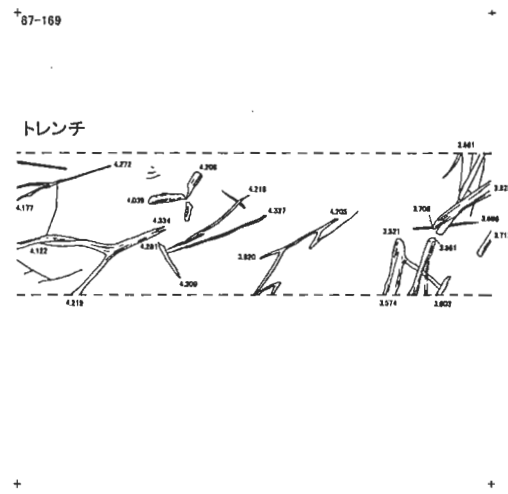
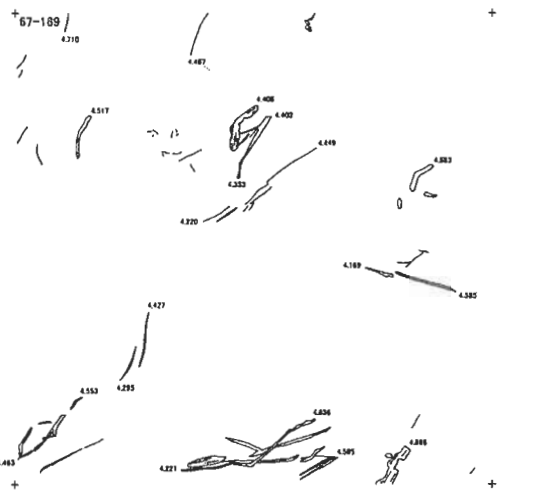


図Ⅵ-1 Ⅲ層調査範囲図

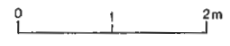
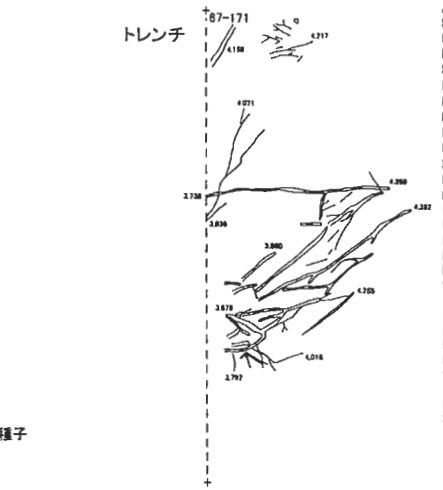
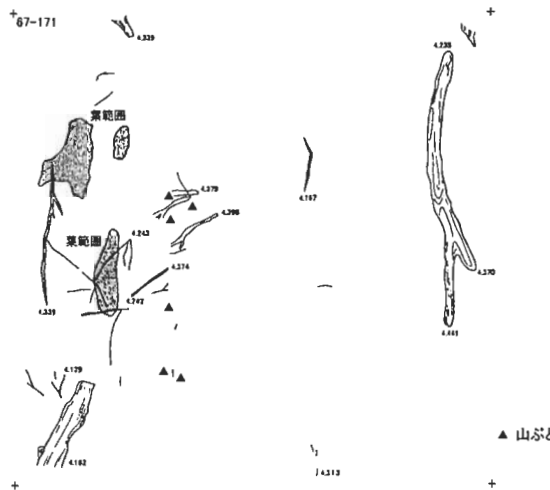
Ⅲ層自然木出土状況



Ⅲ層自然木出土状況



Ⅲ層自然木出土状況



図VI-2 自然木出土状況図

Ⅲ層の調査

表Ⅵ-1 Ⅲ層出土自然木樹種同定結果

調査区	樹種											合計	
	ヤナギ属	ハコヤナギ属	オニグルミ	ハンノキ属	コナラ属	ニレ属	クワ属	カエデ属	ヤマブドウ	トネリコ属	ニワトコ属		同定不可能
65-172	2								1				3
67-167	36	1		2	1	1	2			2			45
67-169	32		1	2		1		1			1	7	45
67-171	20									1		2	23
69-168	59					2			1	3		14	79
69-170	4											19	23
合計	153	1	1	4	1	4	2	1	2	6	1	42	218

表Ⅵ-2 ¹⁴C年代測定結果

調査区	遺物番号	標高(m)	遺物名	¹⁴ C年代	備考
67-167-a	9	4.069	クルミ属・内果皮	2920±40	
67-167-d	1	4.860	クルミ属・内果皮	2910±40	
67-167-d	8	4.505	クルミ属・内果皮	2840±40	
67-167-c	4	4.673	クルミ属・内果皮	2830±40	
69-168-b	73	4.304	クルミ属・内果皮	2930±40	
69-168-b	26	4.581	クルミ属・内果皮	2860±40	
69-168-b	10	4.700	クルミ属・内果皮	2920±40	
67-169-c/d	41	3.550	ハンノキ属・幹	2860±40	
67-169-c/d	39	3.720	コナラ属?・樹皮	2880±40	
67-169-a	30	4.040	ヤナギ属・幹	4740±40	

VII 自然科学的分析

1 江別市 対雁2遺跡 放射性炭素年代測定結果報告書

(株)地球科学研究所

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

14C age (y BP) : 14C 年代 "measured radiocarbon age"
試料の 14C/12C 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。
半減期はリビークの5568年を用いた。

補正 14C age (y BP) : 補正 14C 年代 "conventional radiocarbon age"
試料の炭素安定同位体比(13C/12C)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り
14C/12C の測定値に補正值を加えた上で、算出した年代。
試料の 13C 値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代値である。
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

δ 13C (permil) : 試料の測定 14C/12C 比を補正するための 13C/12C 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)
で表現する。

$$\delta 13C (\text{‰}) = \frac{(13C/12C)[\text{試料}] - (13C/12C)[\text{標準}]}{(13C/12C)[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、13C/12C [標準] = 0.0112372である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の14Cの測定、サンゴのU-Th年代と14C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))により約19000yBPまでの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いため、補正前のデータの保管を推奨します。

"The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a "best fit" compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results."

測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによるβ-線計数法

処理・調製・その他 : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸 - アルカリ - 酸洗浄

acid washes : 酸洗浄

acid etch : 酸によるエッチング

none : 未処理

調製、その他

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理

Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出

Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出

Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関 BETA ANALYTIC INC.

4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A 33155

試料データ	C14年代[y BP] (Measured C14 age)	δ 13C(permil)	補正C14年代[y BP] (Conventional C14 age)
Beta- 150489 試料名 (16492) TK2-21 : 67-167-a Ⅲ層 測定方法 Standard-AMS 試料種/前処理など nutshell : クルミ属 内果皮 / acid-alkali-acid	2980±40	-28.8	2920±40
Beta- 150490 試料名 (16493) TK2-22 : 67-167-d Ⅲ層 測定方法 Standard-AMS 試料種/前処理など nutshell : クルミ属 内果皮 / acid-alkali-acid	3000±40	-30.4	2910±40
Beta- 150491 試料名 (16494) TK2-23 : 67-167-d Ⅲ層 測定方法 Standard-AMS 試料種/前処理など nutshell : クルミ属 内果皮 / acid-alkali-acid	2850±40	-25.4	2840±40
Beta- 150492 試料名 (16495) TK2-24 : 67-167-c Ⅲ層 測定方法 Standard-AMS 試料種/前処理など nutshell : クルミ属 内果皮 / acid-alkali-acid	2830±40	-25.3	2830±40
Beta- 150493 試料名 (16496) TK2-25 : 69-168-b Ⅲ層 測定方法 Standard-AMS 試料種/前処理など nutshell : クルミ属 内果皮 / acid-alkali-acid	2940±40	-25.7	2930±40
Beta- 150494 試料名 (16497) TK2-26 : 69-168-b Ⅲ層 測定方法 Standard-AMS 試料種/前処理など nutshell : クルミ属 内果皮 / acid-alkali-acid	2920±40	-28.5	2860±40
Beta- 150495 試料名 (16498) TK2-27 : 69-168-b Ⅲ層 測定方法 Standard-AMS 試料種/前処理など nutshell : クルミ属 内果皮 / acid-alkali-acid	2950±40	-26.9	2920±40
Beta- 150496 試料名 (16499) TK2-28 : 67-168-cd Ⅲ層 測定方法 Standard-AMS 試料種/前処理など wood : ハンノキ属 幹 / acid-alkali-acid	2920±40	-28.6	2860±40
Beta- 150497 試料名 (16500) TK2-29 : 67-169-cd Ⅲ層 測定方法 Standard-AMS 試料種/前処理など wood : コナラ属 樹皮 / acid-alkali-acid	2940±40	-28.4	2880±40
Beta- 150498 試料名 (16501) TK2-30 : 67-169-a Ⅲ層 測定方法 Standard-AMS 試料種/前処理など wood : ヤナギ属 幹 / acid-alkali-acid	4790±40	-28.2	4740±40

年代値はRCYBP(1950A.D.を0年とする)で表記。モダン リファレンス スタンダードは、国際的な慣例として、NBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

試料名: TK2-21

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-28.8;lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-150489**

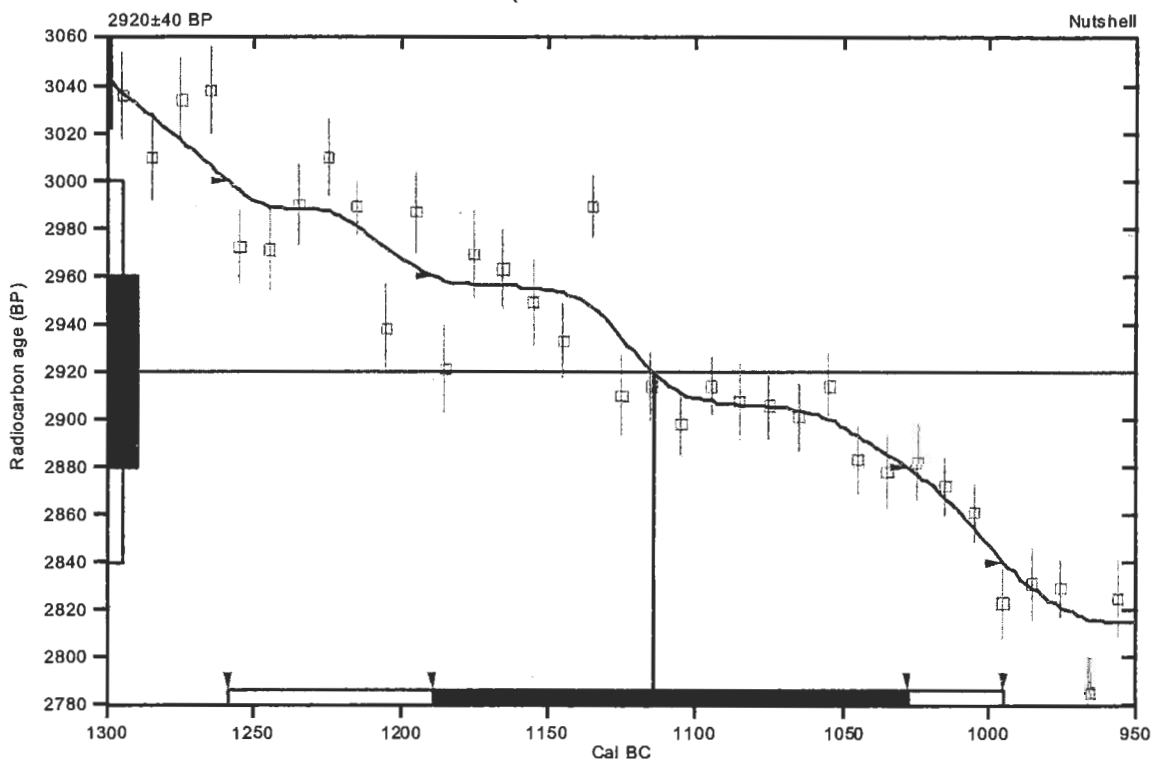
Conventional radiocarbon age: **2920±40 BP**

2 Sigma calibrated result: **Cal BC 1260 to 1000 (Cal BP 3210 to 2940)**
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: **Cal BC 1110 (Cal BP 3060)**

1 Sigma calibrated result: **Cal BC 1190 to 1030 (Cal BP 3140 to 2980)**
(68% probability)



References:

Database used

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Inc.

4985 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667 5167 • Fax: (305) 663 0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

試料名:TK2-22

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-30.4;lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-150490

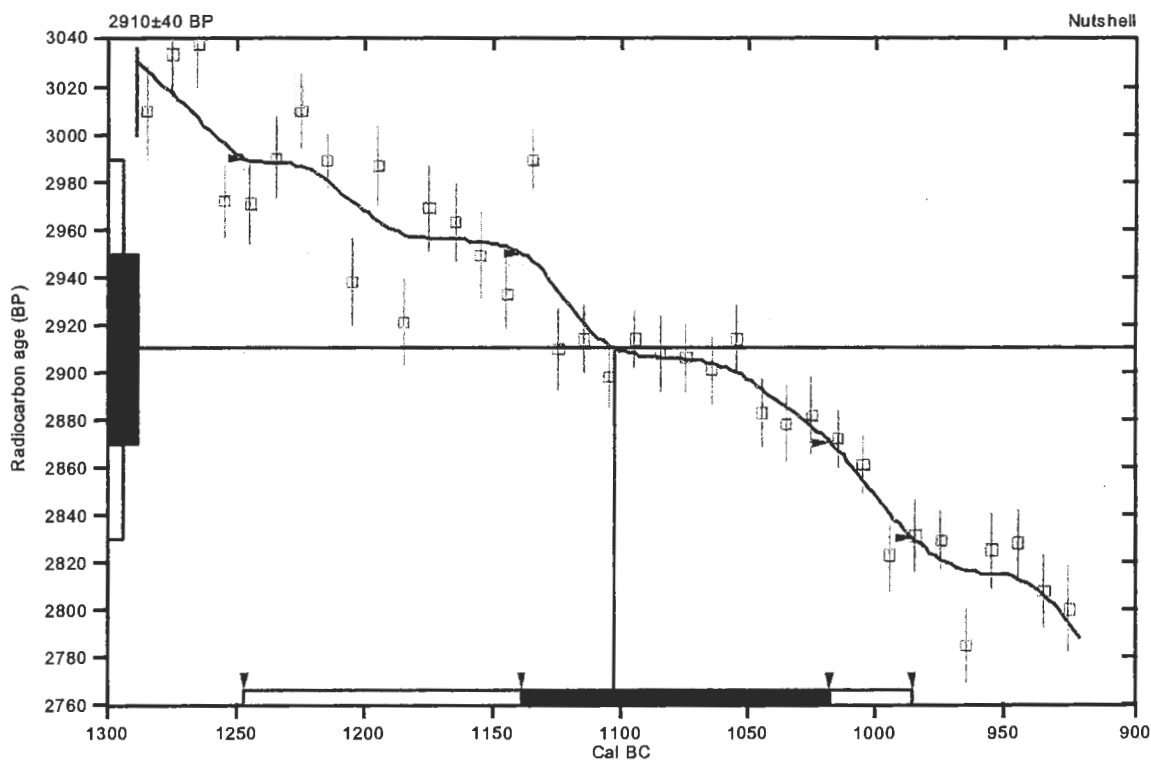
Conventional radiocarbon age: 2910±40 BP

2 Sigma calibrated result: Cal BC 1250 to 990 (Cal BP 3200 to 2940)
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 1100 (Cal BP 3050)

1 Sigma calibrated result: Cal BC 1140 to 1020 (Cal BP 3090 to 2970)
(68% probability)



References:

Database used

Calibration Database
Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, *Radiocarbon* 40(3), pxi-xiii
INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et al., 1998, *Radiocarbon* 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, *Radiocarbon* 35(2), p317-322

Beta Analytic Inc.

4985 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667 5167 • Fax: (305) 663 0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

試料名:TK2-23

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-25.4:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-150491**

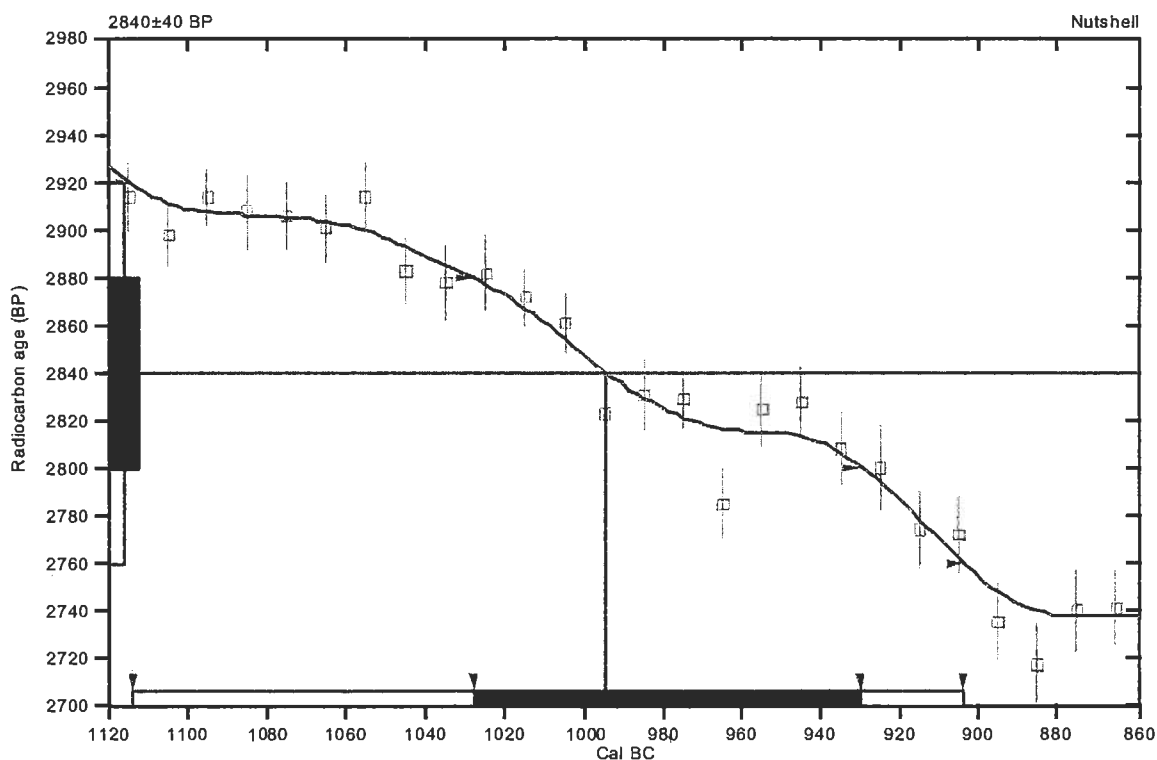
Conventional radiocarbon age: **2840±40 BP**

2 Sigma calibrated result: **Cal BC 1110 to 900 (Cal BP 3060 to 2850)**
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: **Cal BC 1000 (Cal BP 2940)**

1 Sigma calibrated result: **Cal BC 1030 to 930 (Cal BP 2980 to 2880)**
(68% probability)



References:

Database used

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Inc.

4985 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667 5167 • Fax: (305) 663 0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

試料名:TK2-24

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-25.3:lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-150492

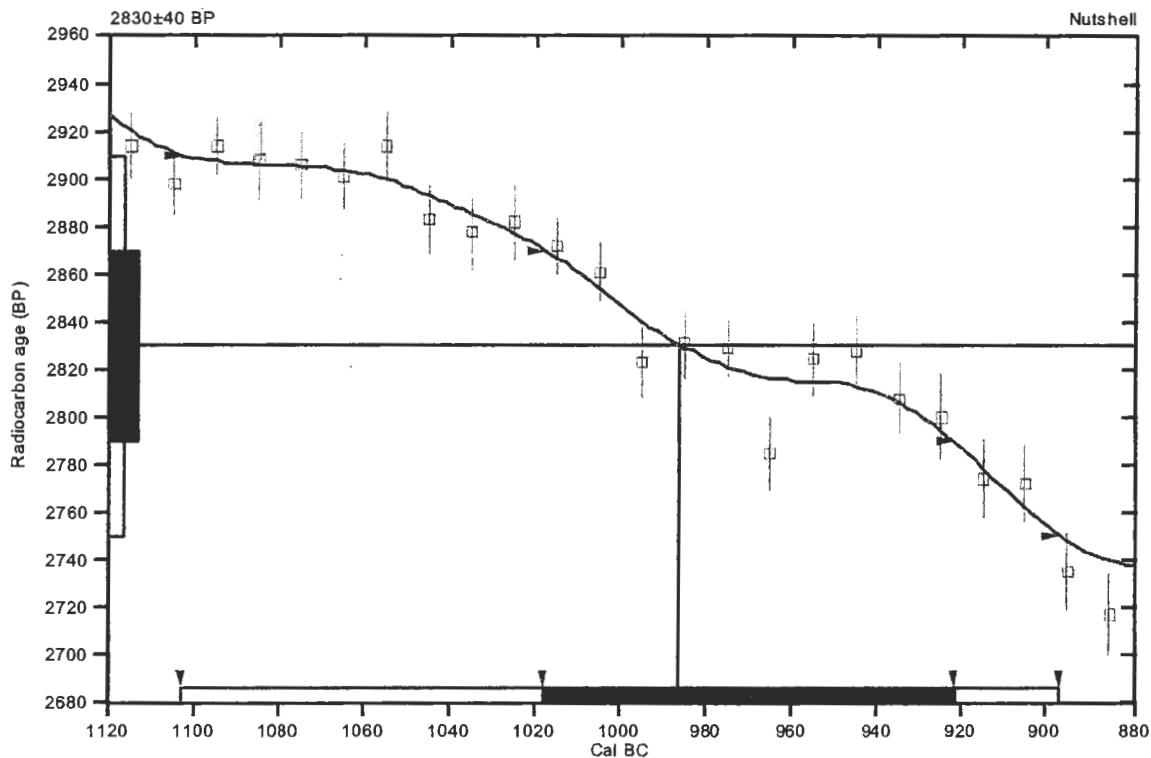
Conventional radiocarbon age: 2830±40 BP

2 Sigma calibrated result: Cal BC 1100 to 900 (Cal BP 3050 to 2850)
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 990 (Cal BP 2940)

1 Sigma calibrated result: Cal BC 1020 to 920 (Cal BP 2970 to 2870)
(68% probability)



References:

Database used

Calibration Database
Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, *Radiocarbon* 40(3), pxi-xiii
INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et al., 1998, *Radiocarbon* 40(3), p1041-1083
Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, *Radiocarbon* 35(2), p317-322

Beta Analytic Inc.

4985 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667 5167 • Fax: (305) 663 0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

試料名: TK2-25

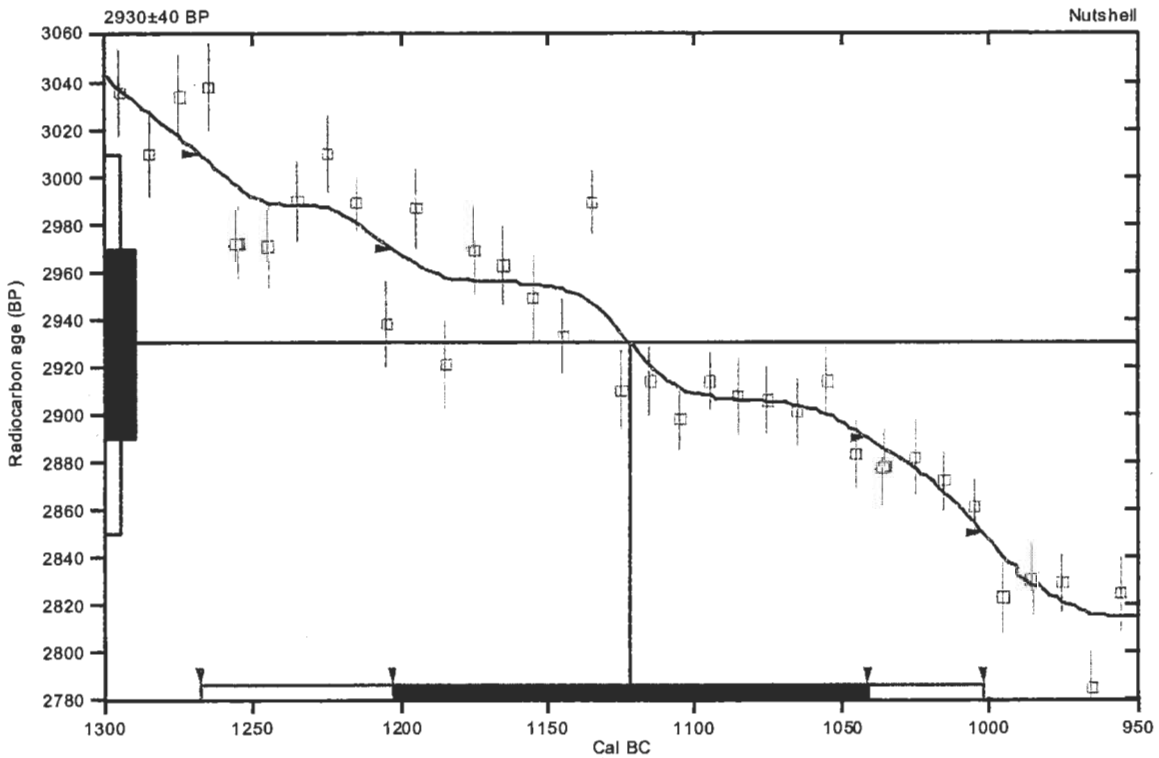
CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-25.7:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-150493**
 Conventional radiocarbon age: **2930±40 BP**
 2 Sigma calibrated result: **Cal BC 1270 to 1000 (Cal BP 3220 to 2950)**
 (95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
 with calibration curve: **Cal BC 1120 (Cal BP 3070)**
 1 Sigma calibrated result: **Cal BC 1200 to 1040 (Cal BP 3150 to 2990)**
 (68% probability)



References:

Database used

*Calibration Database
 Editorial Comment*

*Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xiii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration*

Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Inc.

4985 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667 5167 • Fax: (305) 663 0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

試料名:TK2-26

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-28.5;lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-150494**

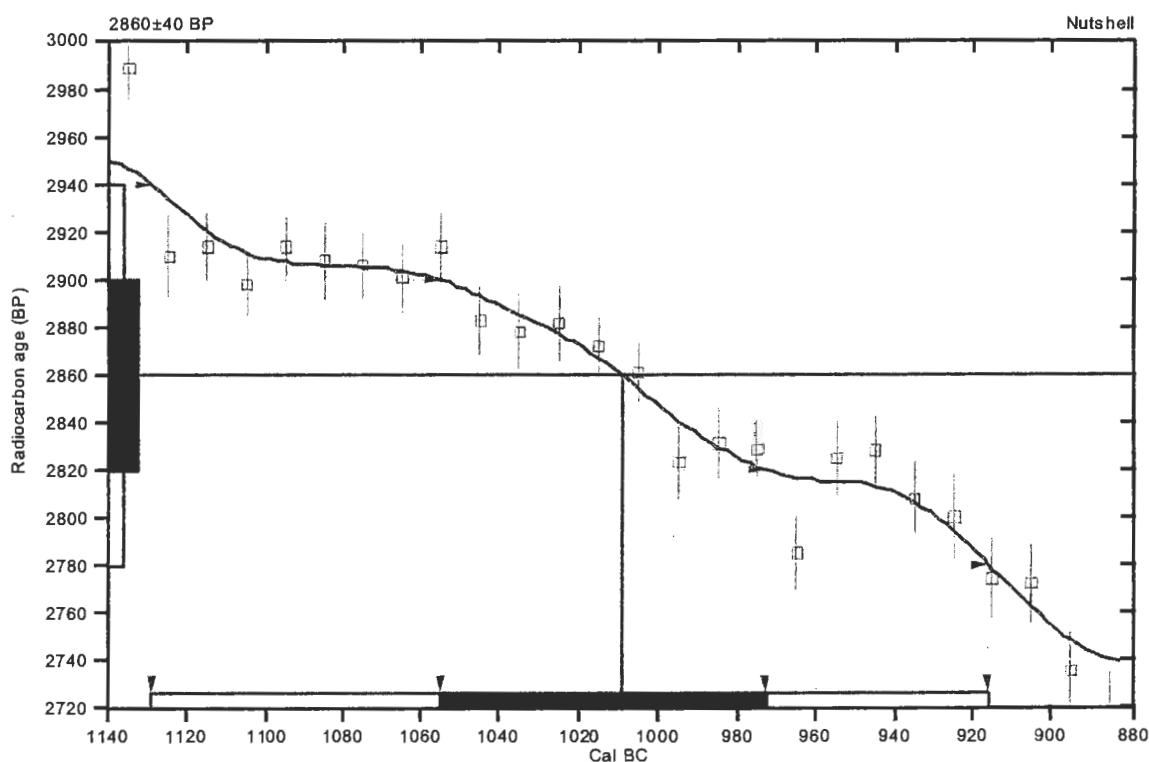
Conventional radiocarbon age: **2860±40 BP**

2 Sigma calibrated result: **Cal BC 1130 to 920 (Cal BP 3080 to 2870)**
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: **Cal BC 1010 (Cal BP 2960)**

1 Sigma calibrated result: **Cal BC 1060 to 970 (Cal BP 3000 to 2920)**
(68% probability)



References:

Database used

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, *Radiocarbon* 40(3), pxi-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et al., 1998, *Radiocarbon* 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, *Radiocarbon* 35(2), p317-322

Beta Analytic Inc.

4985 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667 5167 • Fax: (305) 663 0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

試料名:TK2-27

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-26.9:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-150495**

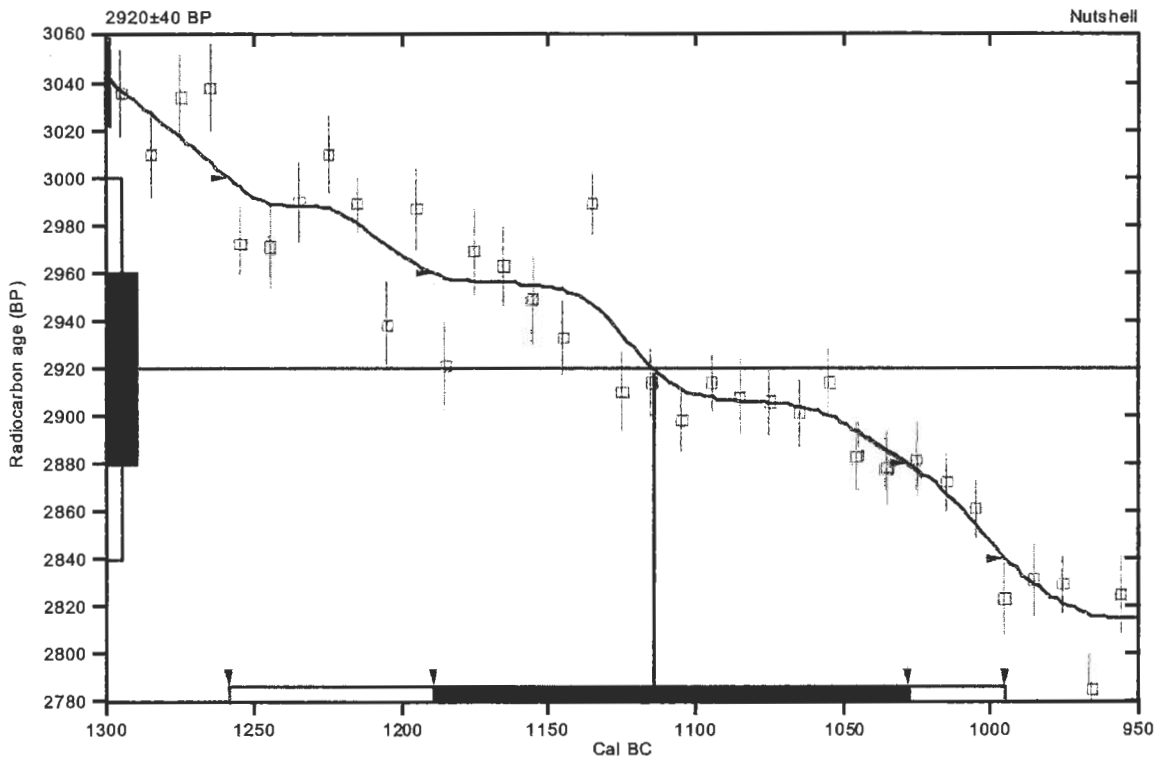
Conventional radiocarbon age: **2920±40 BP**

2 Sigma calibrated result: **Cal BC 1260 to 1000 (Cal BP 3210 to 2940)**
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: **Cal BC 1110 (Cal BP 3060)**

1 Sigma calibrated result: **Cal BC 1190 to 1030 (Cal BP 3140 to 2980)**
(68% probability)



References:

Database used

Calibration Database

Editorial Comment

Suiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Suiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Inc.

4985 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667 5167 • Fax: (305) 663 0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

試料名:TK2-28

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-28.6:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-150496**

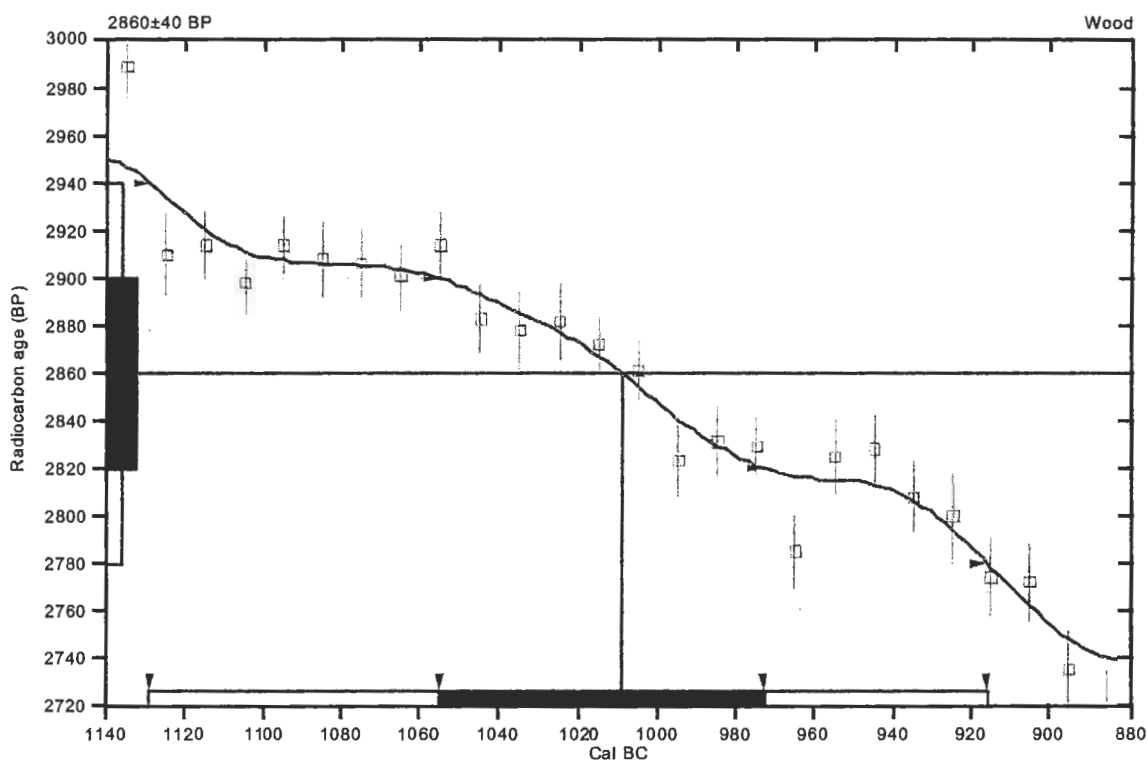
Conventional radiocarbon age: **2860±40 BP**

2 Sigma calibrated result: Cal BC 1130 to 920 (Cal BP 3080 to 2870)
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: **Cal BC 1010 (Cal BP 2960)**

1 Sigma calibrated result: Cal BC 1060 to 970 (Cal BP 3000 to 2920)
(68% probability)



References:

Database used

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, *Radiocarbon* 40(3), pxi-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et al., 1998, *Radiocarbon* 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, *Radiocarbon* 35(2), p317-322

Beta Analytic Inc.

4985 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667 5167 • Fax: (305) 663 0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

試料名: TK2-29

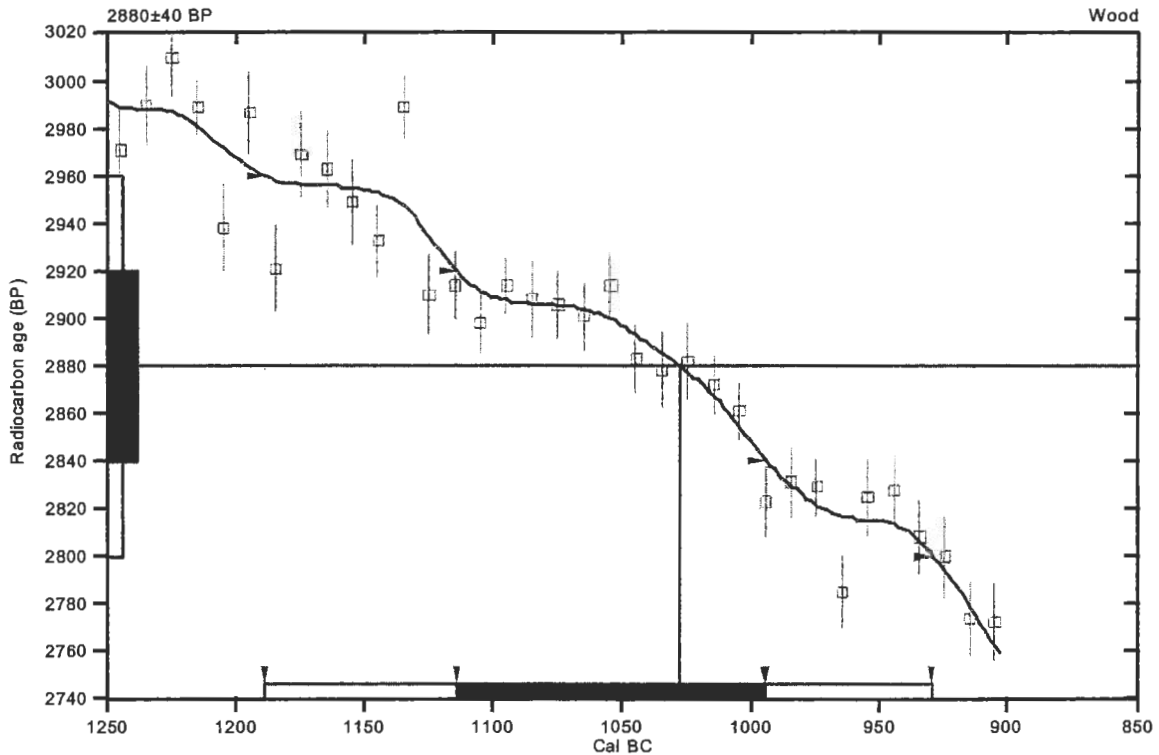
CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-28.4;lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-150497**
 Conventional radiocarbon age: **2880±40 BP**
2 Sigma calibrated result: Cal BC 1190 to 930 (Cal BP 3140 to 2880)
 (95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
 with calibration curve: **Cal BC 1030 (Cal BP 2980)**
1 Sigma calibrated result: Cal BC 1110 to 1000 (Cal BP 3060 to 2940)
 (68% probability)



References:

Database used

Calibration Database
Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Inc.

4985 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667 5167 • Fax: (305) 663 0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

試料名: TK2-30

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-28.2;lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-150498

Conventional radiocarbon age: 4740±40 BP

2 Sigma calibrated results: Cal BC 3640 to 3500 (Cal BP 5590 to 5450) and
(95% probability) Cal BC 3460 to 3380 (Cal BP 5410 to 5330)

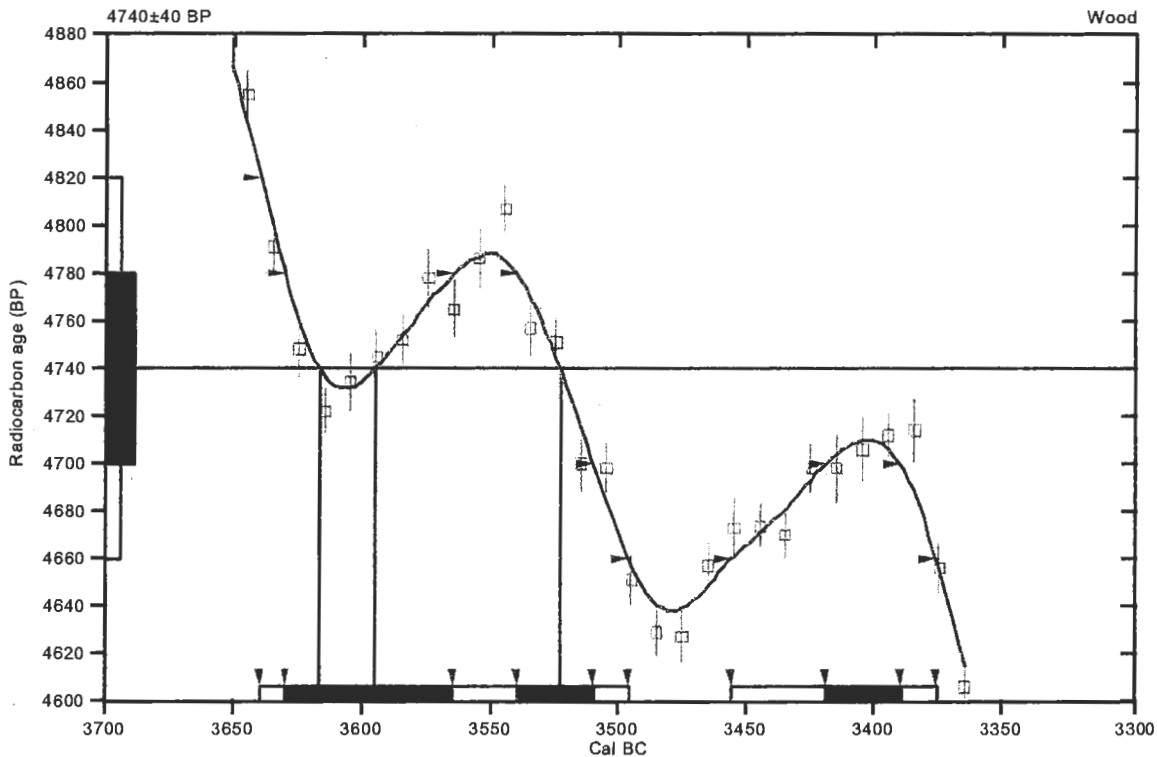
Intercept data

Intercepts of radiocarbon age
with calibration curve:

Cal BC 3620 (Cal BP 5570) and
Cal BC 3600 (Cal BP 5540) and
Cal BC 3520 (Cal BP 5470)

1 Sigma calibrated results:
(68% probability)

Cal BC 3630 to 3560 (Cal BP 5580 to 5520) and
Cal BC 3540 to 3510 (Cal BP 5490 to 5460) and
Cal BC 3420 to 3390 (Cal BP 5370 to 5340)



References:

Database used

*Calibration Database
Editorial Comment*

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Inc.

4985 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667 5167 • Fax: (305) 663 0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

2 木質遺物の樹種同定について

II-2-上層(F-199)及びII-2-中層(どちらも縄文晩期)より出土した炭化材のサンプル14点と、III層より出土した自然木のサンプル(¹⁴C放射性炭素年代測定結果から縄文後期)のうち、木質部の残っている218点について、当時の遺跡周辺のおおよその植生を知る手がかりを得るために、樹種の識別を行なった。

〈1〉試料及び識別方法

試料は、正常な組織構造の観察ができるように、腐れなどによる劣化の進んだ部分、節など組織の乱れのある部分、髄に近い部分は極力避けることに留意し、木口面、板目面及び柃目面から採取した。

炭化材については、各サンプルから小片を採取(サンプル中にいくつかの樹種が含まれそうな場合には複数の小片を採取)し、2~3日室内に放置して乾燥させた。次に、ルーペ及び実体顕微鏡で確認しながら両刃カミソリで切り込みを入れて割裂し、各断面を露出させた。さらに、それらを一年輪以上が含まれるブロックになるように整形し、ひとつの試料台に1断面ずつを導電性接着剤(ドータイト)で固定した。その後、イオンスパッタリング装置(JEOL-JFC-1300)で白金(Pt)のコーティング(40mA, 60秒)を施し、走査電子顕微鏡で観察を行なった。

自然木については、両刃カミソリを用いて各断面の一年輪以上が含まれる切片を採取した。次に、3断面を1セットとしてプレパラートを作製し、生物顕微鏡で観察を行なった。

〈2〉識別結果

識別の結果として広葉樹10科11属を同定した(表VII-2-1~3)。そのうち2属については種までの同定を行なった。それらの同定の根拠となった組織構造的な特徴を以下に記載する。

ヤナギ属 *Salix* (やなぎ科 SALICACEAE) 顕微鏡写真No. 4・5

木口面：散孔材である。道管は時折2~3個の複合管孔を形成する。

板目・柃目面：放射組織は単列で異性である。道管要素は単せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。また、道管相互壁孔は交互壁孔である。

エゾノカワヤナギ、オノエヤナギ、ネコヤナギ、エゾノバッコヤナギなどが推定される。

ハコヤナギ属 *Populus* (やなぎ科 SALICACEAE) 顕微鏡写真No. 6

木口面：散孔材である。多くの道管は2~4個の複合管孔を形成する。

板目・柃目面：放射組織は単列で同性である。道管要素は単せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。また、道管相互壁孔は交互壁孔である。

ドロノキ、ヤマナラシが推定される。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr.

(オニグルミ属 *Juglans*) (くみ科 JUGLANDACEAE) 顕微鏡写真No. 1・7

木口面：散孔材である。大型の道管が単独もしくは2~3個複合して存在する。道管内には顕著にチロースが認められることが多い。柔細胞の接線方向への配列は本属の特徴である。

板目・柃目面：放射組織は1~3細胞幅で3~20細胞高であり同性であるが、方形細胞を含む場合がある。道管要素は単せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。

ハンノキ属 *Alnus* (かばのき科 BETULACEAE) 顕微鏡写真No. 8

木口面：散孔材である。多くの道管は2~4個が放射方向に複合する。

板目・柃目面：放射組織は単列で同性である。集合放射組織を形成する。道管要素は階段せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。

2 木質遺物の樹種同定について

ハンノキ、ケヤマハンノキ等が推定される。

コナラ属 *Quercus* (ぶな科 FAGACEAE)

顕微鏡写真No.9

木口面：環孔材である。孔圏部の大道管にはチロースが認められ、付近には周囲仮道管が存在する。

孔圏外の道管は、やや放射状に配列することがある。

板目・柾目面：放射組織は単列と広放射組織からなり、同性である。道管要素は単せん孔をもつ。

ミズナラ、カシワ、コナラが推定される。

ニレ属 *Ulmus* (にれ科 ULMACEAE)

顕微鏡写真No.10

木口面：環孔材である。孔圏部の道管は2～3列になり、孔圏外では多数の小道管が接合して集団管孔を形成し、接線方向にかなり規則的に配列する。

板目・柾目面：放射組織は1～6細胞幅、3～70細胞高で、同性である。道管要素は単せん孔をもち、内壁にはらせん肥厚が存在する。道管状仮道管が存在し、時にらせん肥厚が認められる。

ハルニレまたはオヒョウが推定される。

クワ属 *Morus* (くわ科 MORACEAE)

顕微鏡写真No.2・11

木口面：環孔材である。孔圏部では単独あるいは2～3個の道管が複合する。孔圏外では小道管が複合して団塊状をなす。道管内にはチロースが認められる。

板目・柾目面：放射組織は1～6細胞幅、5～60細胞高で、異性である。道管要素は単せん孔をもつ。小道管のらせん肥厚は、走向が不規則な場合がある。

ヤマグワが推定される。

カエデ属 *Acer* (かえで科 ACERACEAE)

顕微鏡写真No.12

木口面：散孔材である。道管は、単独または数個が複合して均等に分布するが数は少ない。

板目・柾目面：放射組織は1～8細胞幅、5～30細胞高で、同性である。道管要素は単せん孔をもち、らせん肥厚が存在する。

イタヤカエデ、ヤマモミジ、ハウチワカエデ等が推定される。

ヤマブドウ *Vitis Coignetiae* Pulliat

(ブドウ属 *Vitis*) (ぶどう科 VITACEAE)

顕微鏡写真No.13

木口面：道管の配列は特殊であり、径の大きい道管が1年輪内のほとんどを占め、径の小さい道管が2～6個放射方向に集まって、集団管孔を形成している。

板目・柾目面：放射組織は1～12細胞幅で異性である。道管要素は単せん孔をもつ。道管相互壁孔、道管放射組織間壁孔は階段壁孔である。らせん肥厚が存在する。

ツル性植物の同定には資料が乏しいが、ヤマブドウであると考えられる。

トネリコ属 *Fraxinus* (もくせい科 OLEACEAE)

顕微鏡写真No.3・14

木口面：環孔材である。道管は孔圏部で大きく、孔圏外では急激に小さくなり、単独のもの2～3個が放射方向に複合するものがある。道管の周りには周囲柔組織が存在する。

板目・柾目面：放射組織は1～4細胞幅、10細胞高ほどで比較的均一であり、同性である。道管要素は単せん孔をもち、らせん肥厚は存在しない。

ヤチダモ、アオダモが推定される。

ニワトコ属 *Sambucus* (すいかずら科 CAPRIFOLIACEAE)

顕微鏡写真No.15

木口面：散孔材である。道管は放射状、斜線状など不規則に複合する。

板目・柾目面：放射組織は1～3細胞幅で異性である。道管要素は一般に単せん孔をもつが、稀に階段せん孔も存在する。らせん肥厚は存在しない。鞘細胞がみられる。

エゾニワトコが推定される。

自然木のほとんどは、腐朽が進んで細胞組織がかなり劣化していた。中には切片採取のできないものもあり、識別も難しく同定不可能な遺物が多かった。一方、炭化材には、泥状の物質の沈着が認められるものの、腐朽はあまり見られなかった。

自然木は出土状況から河川の氾濫によるものと考えられる。それらの樹種構成は、ヤナギ属が殆どを占め、ほかにハンノキ属、トネリコ属、ニレ属などで構成されている（表VII-2-1）。この結果から植生を類推すれば、当時の遺跡周辺において湿地または河畔に一般に見られる植物が多かったものと考えられる。また、ヤナギ属が圧倒的に多いことから、ある程度の浸水には耐えるネコヤナギ、エゾノカワヤナギ等が泥の堆積地を中心に低木群落をつくっていたものと推測される。

(菊池育子)

参考文献

- 岡本省吾・北村四郎（1981）『原色日本樹木図鑑』，保育社
 島地 謙・伊藤隆夫（1982）『図説木材組織』，地球社
 島地 謙・須藤彰司・原田 浩（1976）『木材の組織』，森北出版
 島地 謙・佐伯 浩ほか（1985）『木材の構造』，文永堂出版
 村田 源・平野弘二（1989）『検索入門 冬の樹木』，保育社
 (財)北海道埋蔵文化財センター（2000）『江別市 対雁2 遺跡(1)』北埋調報147

2 木質遺物の樹種同定について

表Ⅶ-2-1 自然木サンプルの樹種同定結果集計

樹種	調査区						計
	65-172	67-167	67-169	67-171	69-168	69-170	
ヤナギ属	2	36	32	20	59	4	153
ハコヤナギ属		1					1
オニグルミ			1				1
ハンノキ属		2	2				4
コナラ属		1					1
ニレ属		1	1		2		4
クワ属		2					2
カエデ属			1				1
ヤマブドウ	1				1		2
トネリコ属		2		1	3		6
ニワトコ属			1				1
同定不可能			7	2	14	19	42
合計	3	45	45	23	79	23	218

表Ⅶ-2-2 炭化材サンプルの樹種同定結果集計

樹種	調査区		計
	F-199 65-162 (Ⅱ-2-上層)	70-160-d (Ⅱ-2-中層)	
オニグルミ	5		5
クワ属	5	1	6
トネリコ属		2	2
合計	10*	3	13

※ サンプル11 (オニグルミ、クワ属) は範囲採取のため集計に含まない。

表Ⅶ-2-3 炭化材サンプルの樹種同定結果

F-199 65-162 (Ⅱ-2-上層)	70-160-d (Ⅱ-2-中層)
サンプル番号1 オニグルミ	サンプル番号① トネリコ属
サンプル番号2 オニグルミ	サンプル番号② トネリコ属
サンプル番号3 オニグルミ	サンプル番号③ クワ属
サンプル番号4 クワ属	
サンプル番号5 クワ属	
サンプル番号6 クワ属	
サンプル番号7 オニグルミ	
サンプル番号8 オニグルミ	
サンプル番号9 クワ属	
サンプル番号10 クワ属	
サンプル番号11 オニグルミ、クワ属	

a:木口面 b:板目面 c:柃目面



1 オニグルミ a×37



b×100



c×100



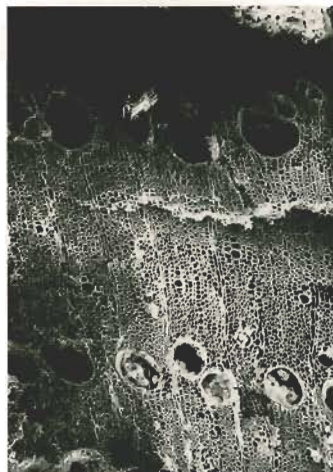
2 クワ属 a×38



b×250



c・らせん肥厚×370



3 トネリコ属 a×50

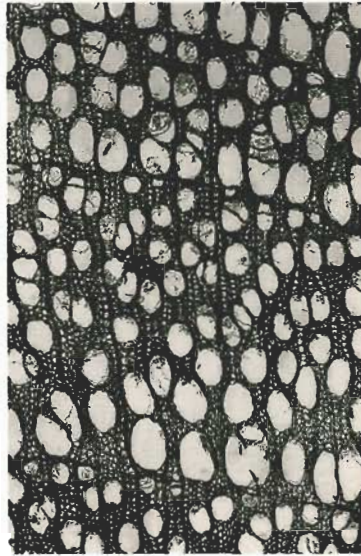


b×100



c×180

炭化材組織顕微鏡写真



4 ヤナギ属 a ×40



b ×100



c ×100



5 ヤナギ属 a ×40



b ×100



c ×100



6 ハコヤナギ属 a ×40

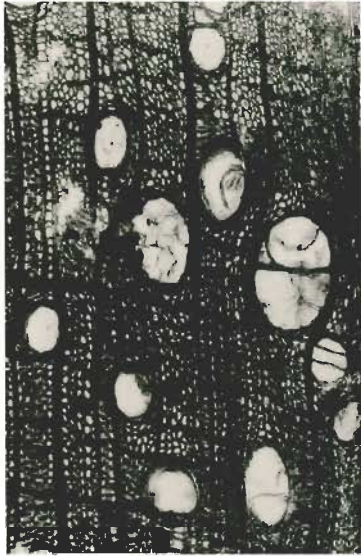


b ×100



c ×100

自然木組織顕微鏡写真



7 オニグルミ a × 40



b × 100



c × 100



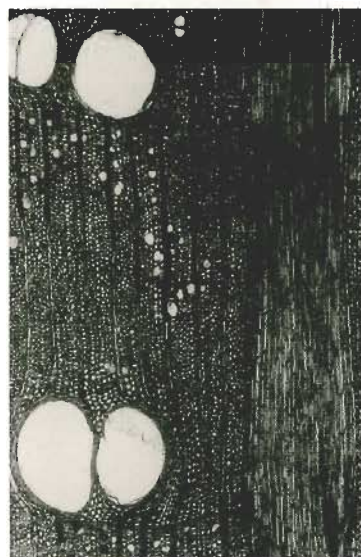
8 ハンノキ属 a × 40



b × 100



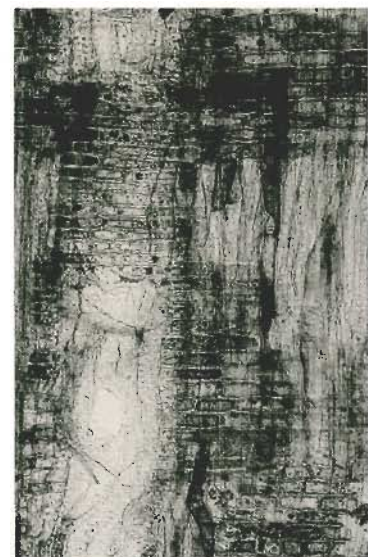
c × 100



9 コナラ属 a × 40

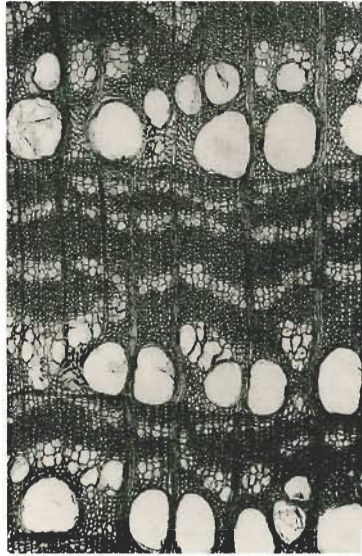


b × 100



c × 100

自然木組織顕微鏡写真



10 ニレ属 a ×40



b ×100



C・らせん肥厚×200



11 クワ属 a ×40



b ×160



C・らせん肥厚×400



12 カエデ属 a ×40

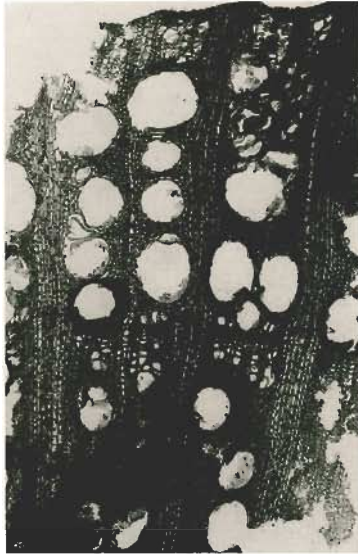


b ×100

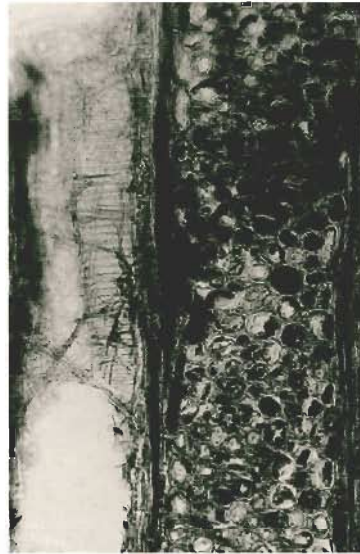


C・らせん肥厚×200

自然木組織顕微鏡写真



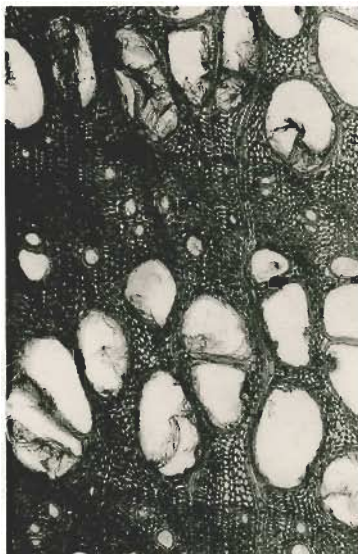
13 ヤマブドウ a X40



b X160



c X100



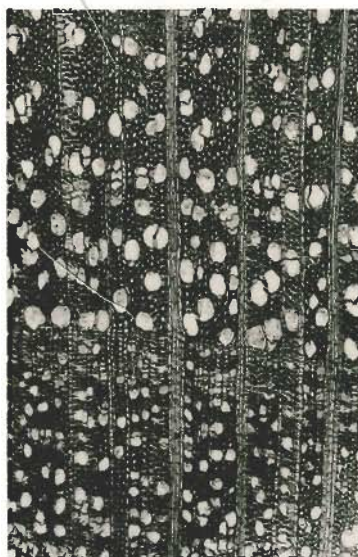
14 トネリコ属 a X40



b X100



c X100



15 ニワトコ属 a X40



b X100



c X100

自然木組織顕微鏡写真

写真図版



NW→SE



W→E

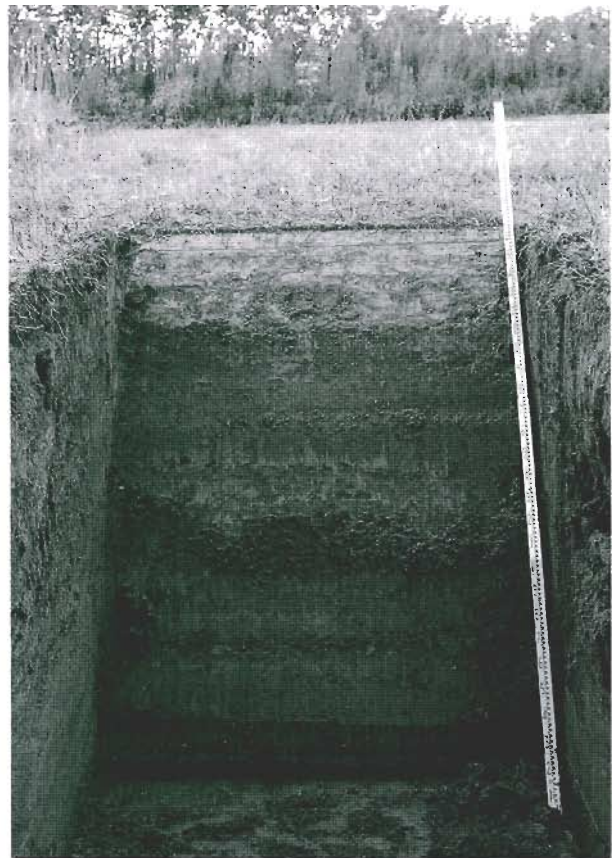
遺跡遠景



調査風景 E→W



調査風景 E→W



試掘坑断面 (71-112) SE→NW

試掘調査



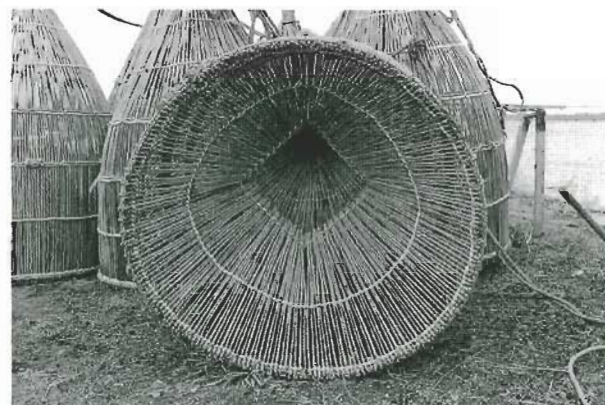
試掘調査の遺物



世田豊平川の河口部付近



ヤツメウナギ漁用のドウ



ドウの口



現場内から数多く発見される暗渠 現場内に残された鹿の足跡(平成12年10月2日撮影)
遺跡の周辺(1)



表採土器出土状況



表採土器出土位置

遺跡の周辺（2）



表 採 土 器



検出状況 (70-161) NE → SW



炭化物集中分断状況 (66-161) NE → SW



断面 (68-172) NE → SW

噴



断面 (68-162) SW → NE

砂



69-161 SW→NE

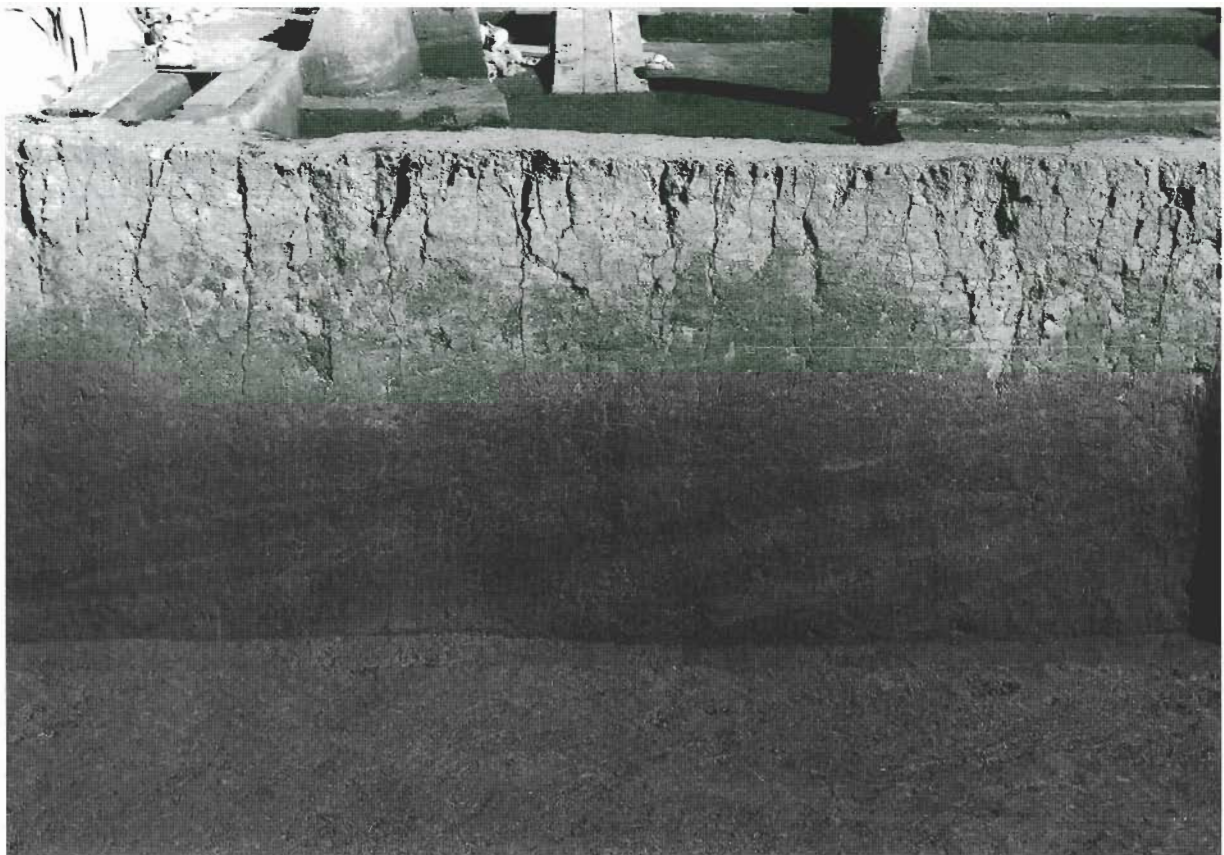


降雨後ベルト崩壊状況 (69-161) S→N

基本土層 (1)



67—159 SW→NE



69—159 SW→NE

基本土层 (2)



P-12土層断面 SW→NE



P-12炭化物検出状況 SW→NE



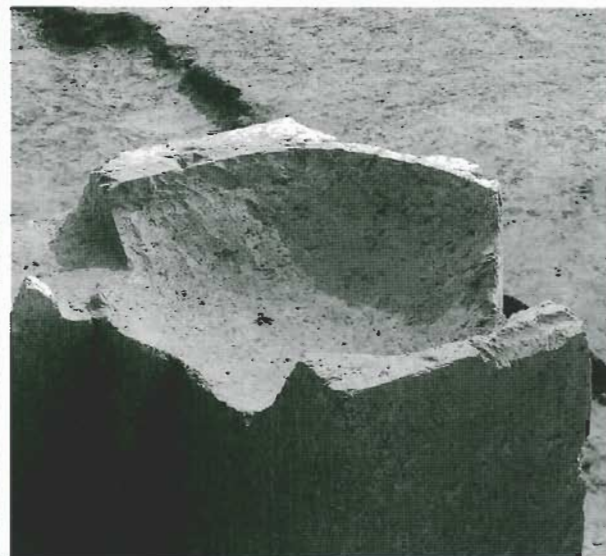
P-12完掘 SW→NE



P-22土層断面 NE→SW



P-22遺物・炭化物出土状況 N→S



P-22完掘 NW→SE

土坑(1)



P-16遺物出土状況 SW→NE



P-16完掘 SW→NE



P-21遺物出土状況 S→N



P-21完掘 W→E



P-19土層断面 S→N



P-19遺物出土状況 E→W

土坑(2)



P-17土層断面 W→E



P-17完掘 NE→SW



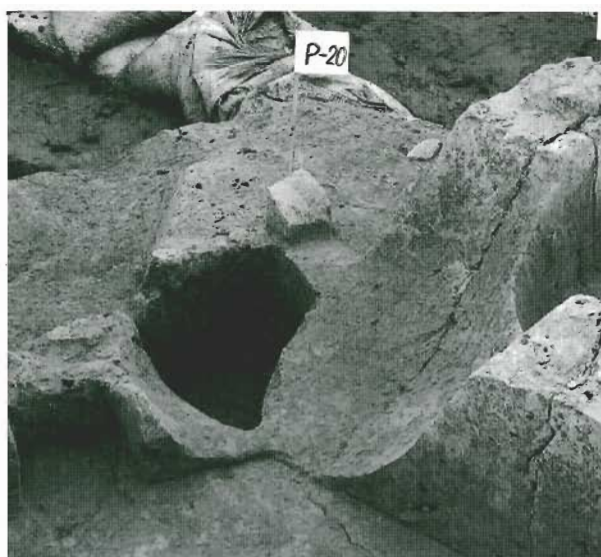
P-15炭化くるみ出土状況 SE→NW



P-15完掘 NE→SW



P-20遺物出土状況 S→N



P-20完掘 E→W

土坑 (3)



P-14確認状況 S→N



P-14遺物出土状況 S→N



P-14完掘 S→N



P-10土層断面 S→N



P-10遺物出土状況 E→W



P-10完掘 E→W

土坑 (4)



P-11 (手前) ・ P-13 (奥) 完掘 E→W



P-11土層断面 W→E



P-11遺物出土状況 W→E

土坑 (5)



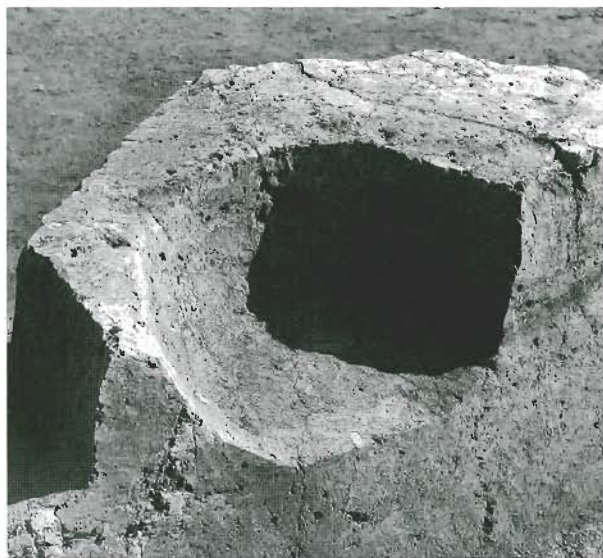
P-13土層断面 W→E



P-13遺物出土状況 W→E



P-24・F-91土層断面 NW→SE



P-24完掘 N→S



P-25確認状況 N→S

土坑(6)



P-25土層断面 NW→SE



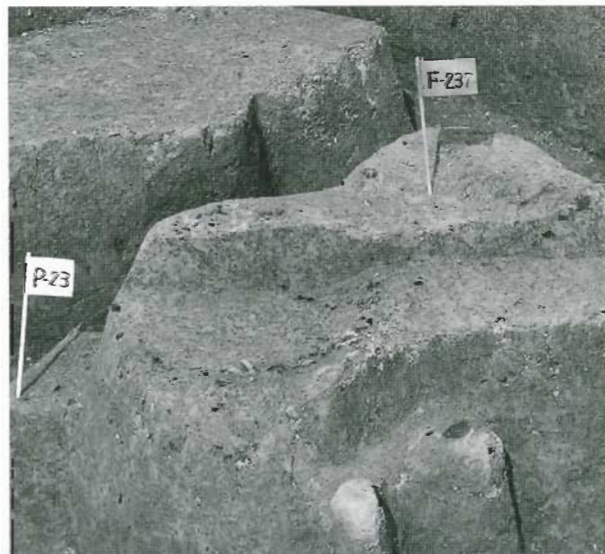
P-25完掘 E→W



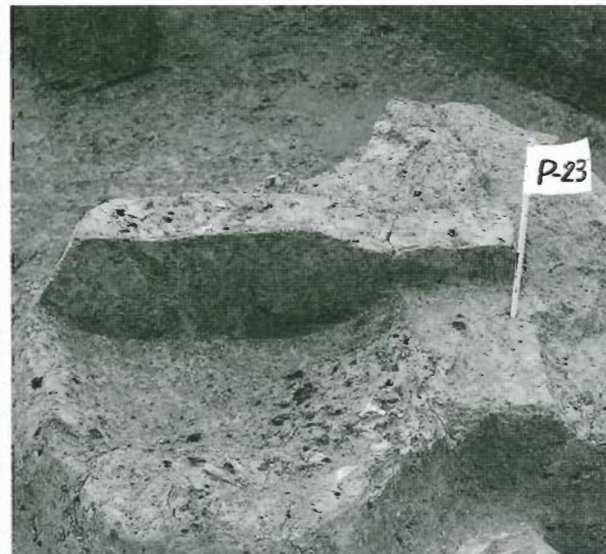
P-18土層断面 SW→NE



P-18遺物出土状況 E→W



P-23確認状況 S→N



P-23土層断面 S→N

土坑(7)



P-23遺物出土状況 N→S



P-2完掘 E→W



1



3

土坑(8)・土坑の土器(1)



2

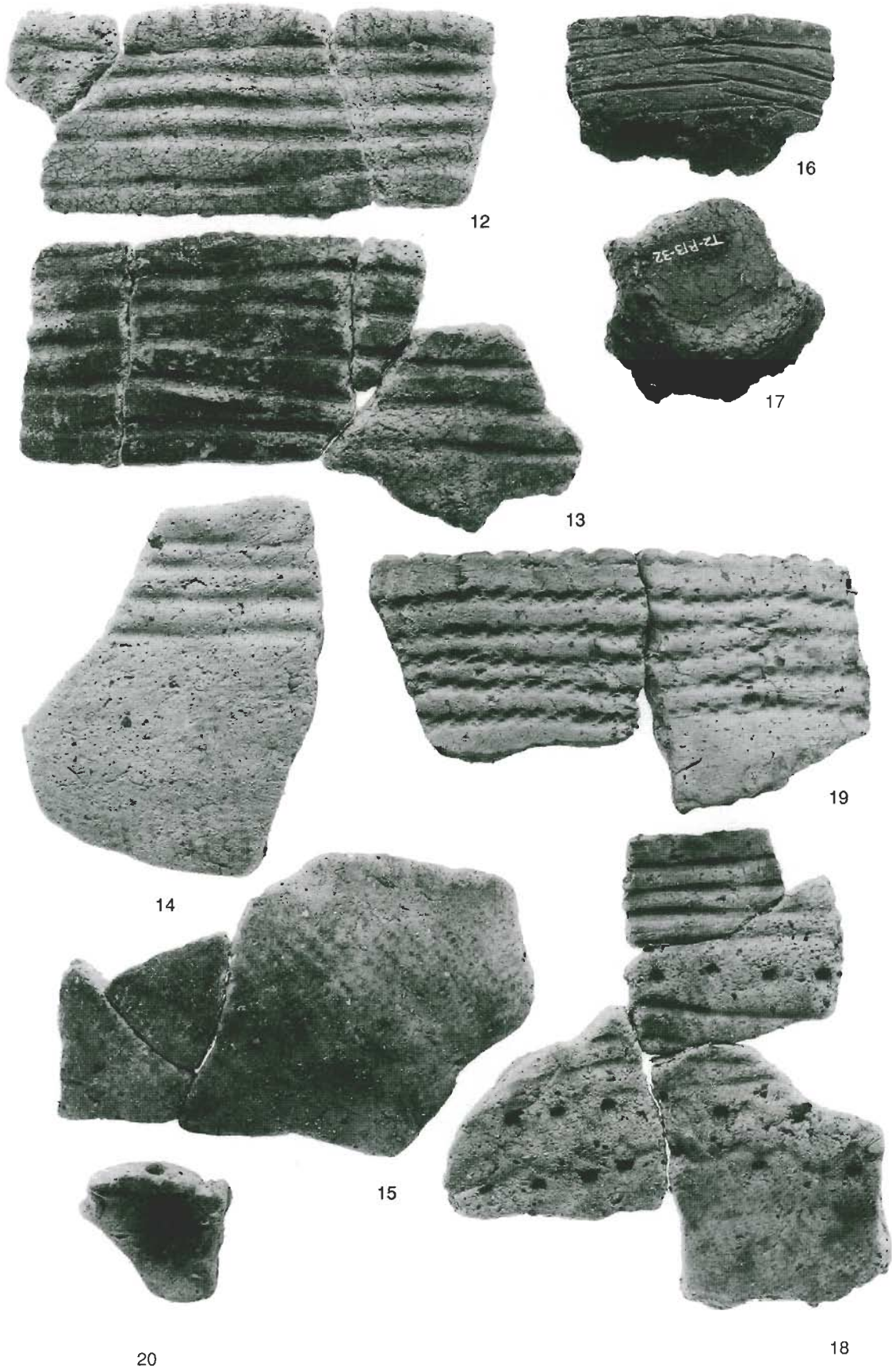


4

土坑の土器(2)



土坑の土器(3)



土坑の土器(4)



1



3



2



4



5



土坑の石器



F-200断面 W→E



F-236断面 SW→NE



F-185断面 W→E



F-239·F-259·F-260断面 E→W

烧土(1)



F-205・F206・S-12検出状況 E→W



F-204検出状況 NW→SE



F-186検出状況(1回目) E→W



F-186検出状況(2回目) NE→SW



F-186断面 SE→NW

焼土(2)



F-58断面 NW→SE



F-193断面 S→N



F-222・F-223検出状況 E→W

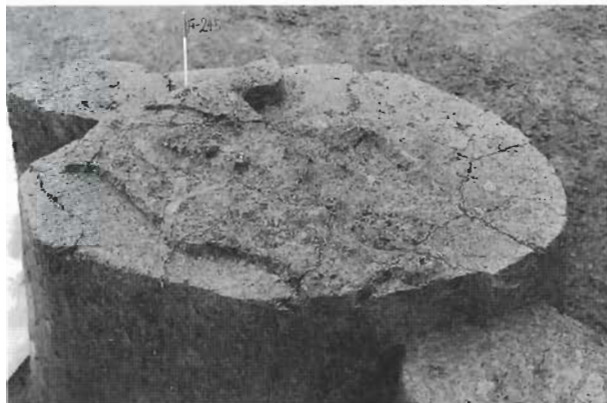


F-222・F-223断面 W→E



F-220断面 SW→NE

烧土(3)



F-245検出状況 E→W



F-214・F-237検出状況 SE→NW



F-245断面 SE→NW



F-214断面 SW→NE



F-210断面 E→W

焼土(4)



F-16・F-218・F-219・F-220・F-221～F-225・F-234検出状況 S→N

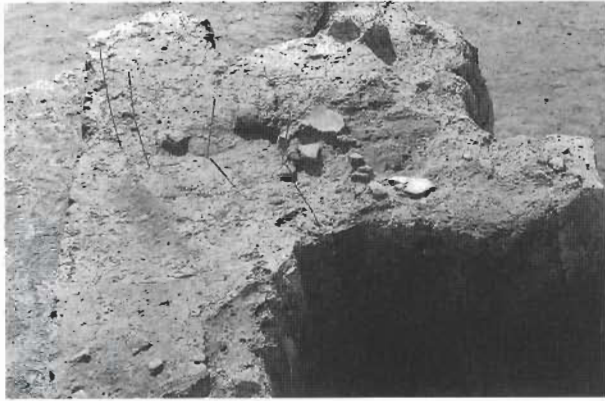


F-16・F-234断面 S→N

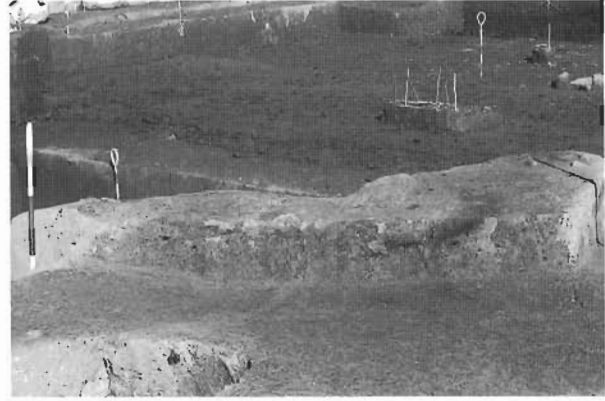


F-221断面 S→N

焼土(5)



F-253・F-260検出状況 N→S



F-253断面 S→N



F-250・F-258断面 S→N



F-109断面 SW→NE



F-242検出状況 E→W

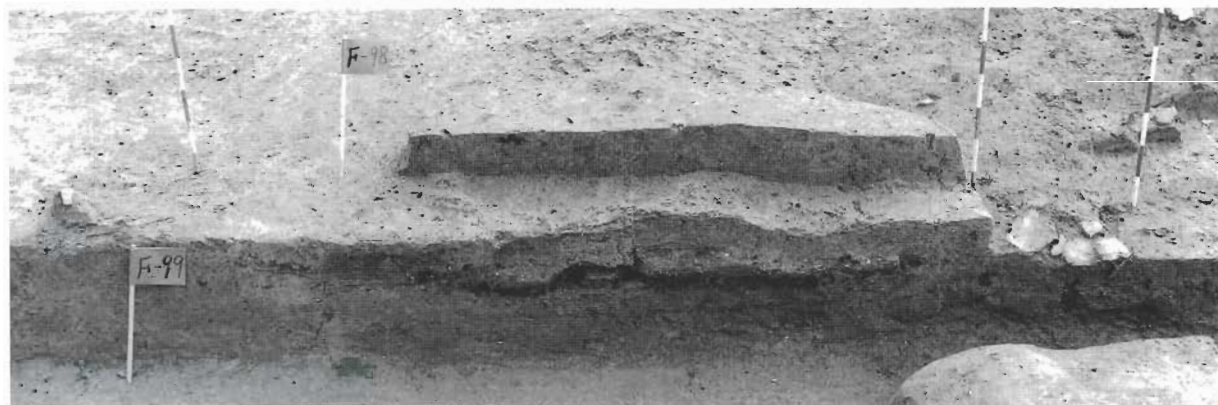


F-242断面 SE→NW

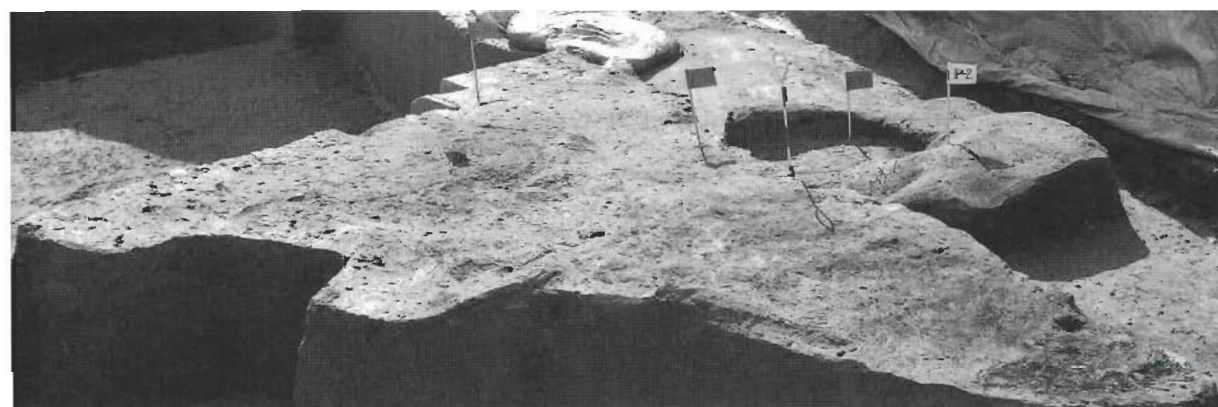
焼土 (6)



F-95断面 SW-NE



F-98 · F-99 · F-252断面 NW→SE

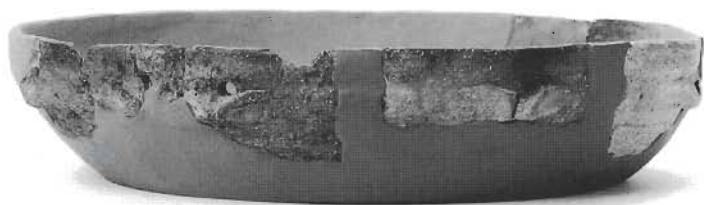


F-97 · F-99 · F-250 · P-2 検出状況 E→W

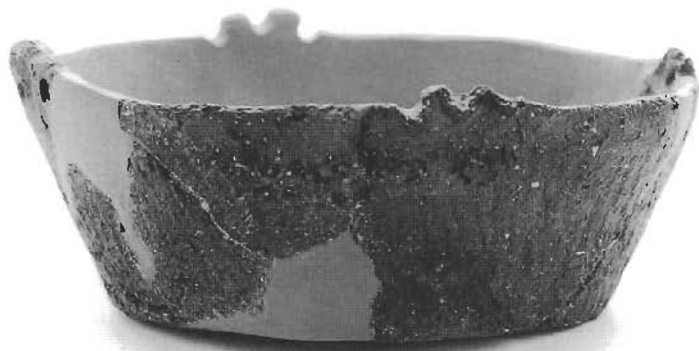


F-247断面 SE→NW

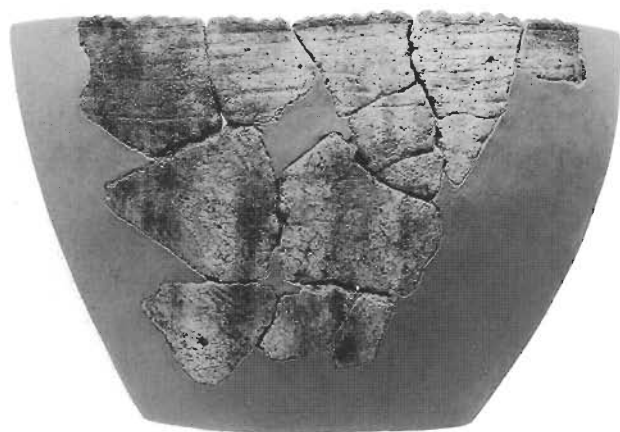
烧土(7)



22

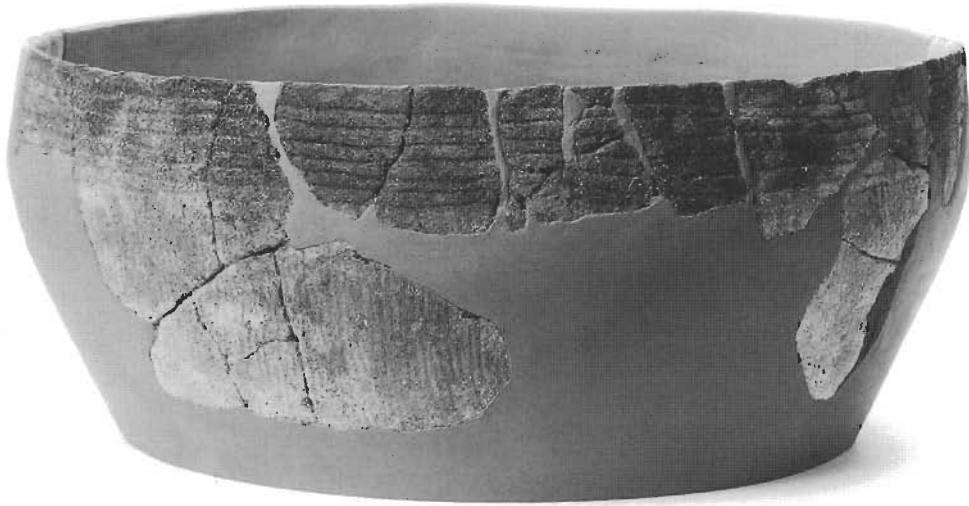


23



24

焼土の土器(1)

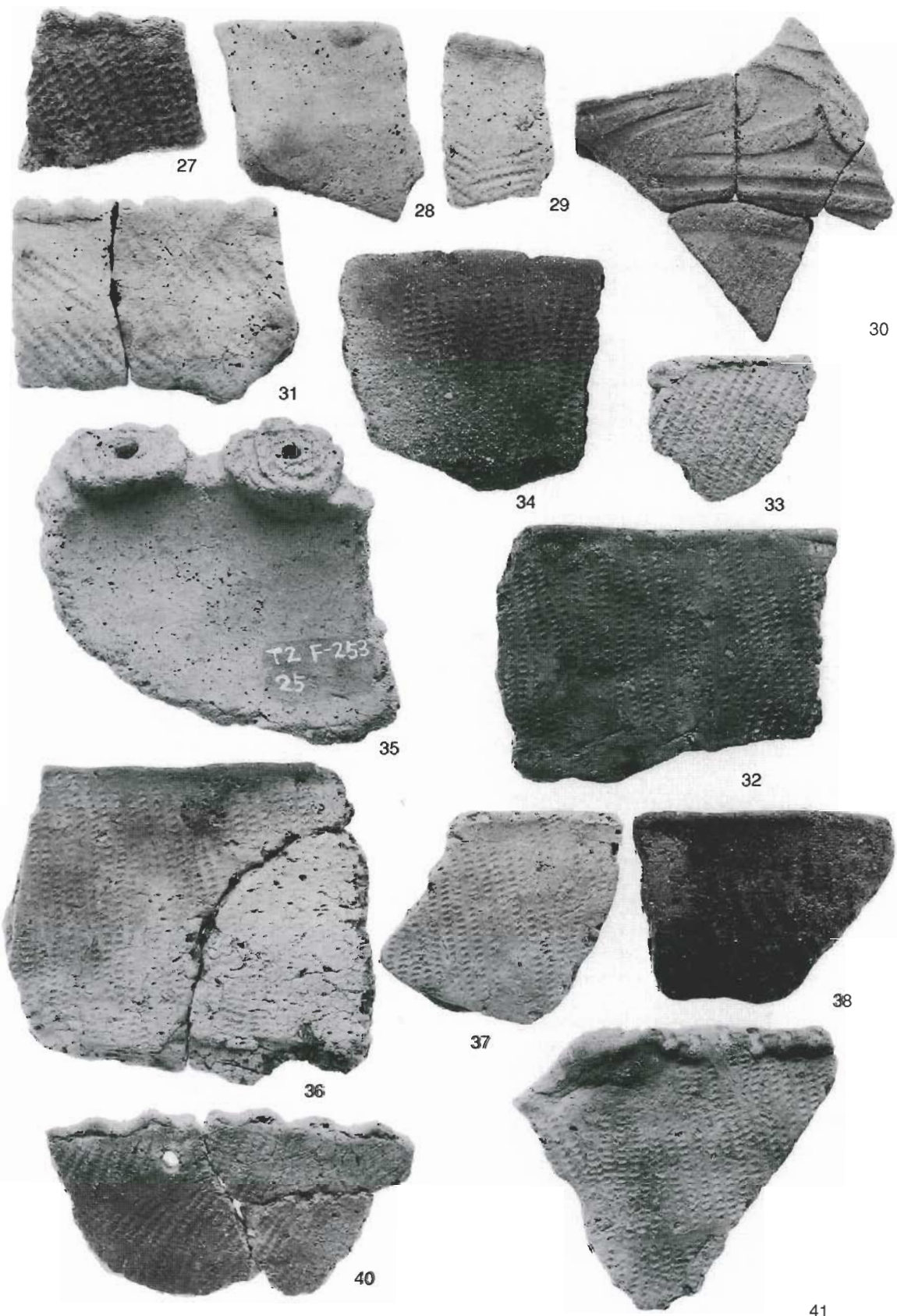


25



26

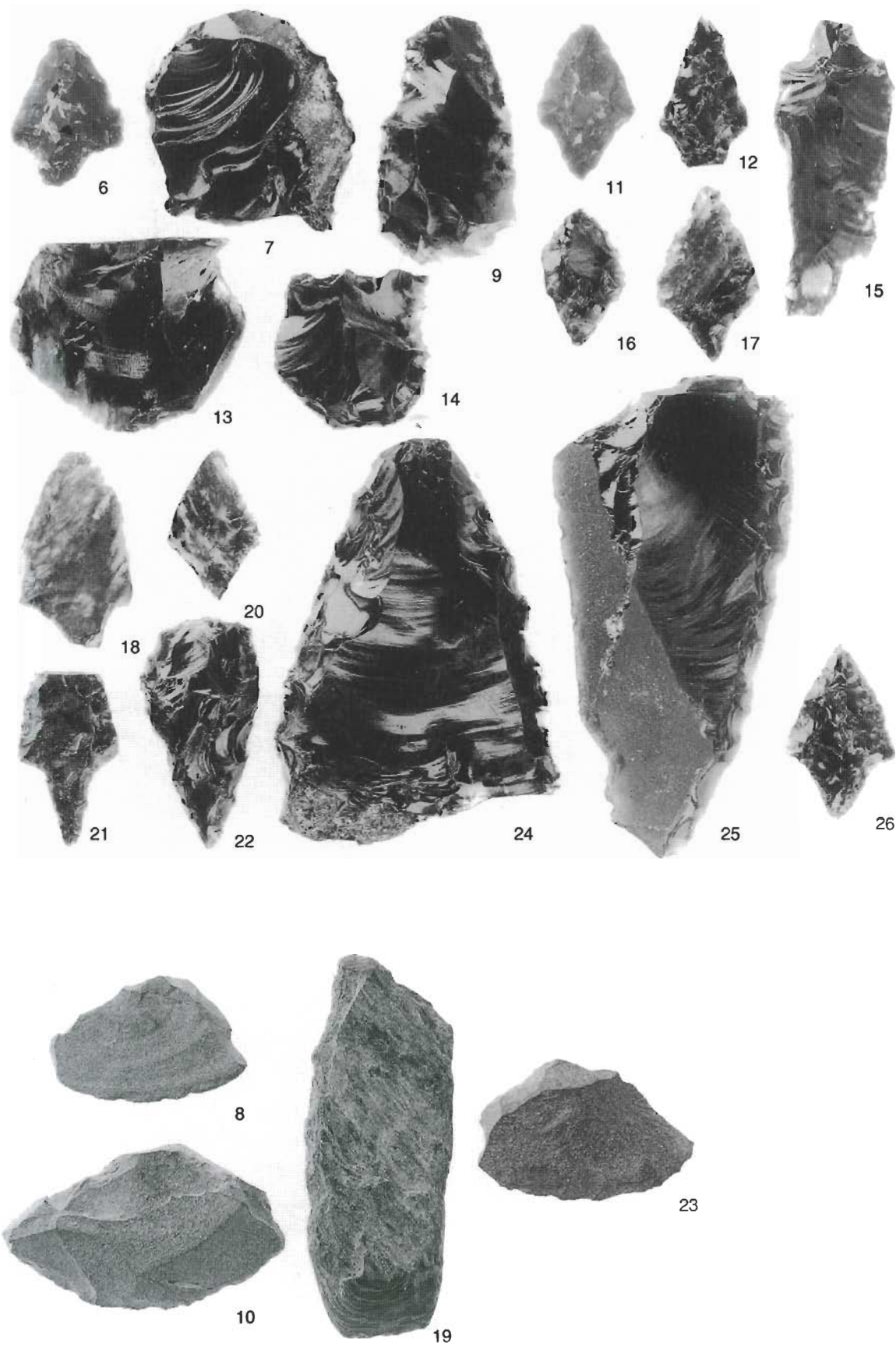
焼土の土器(2)



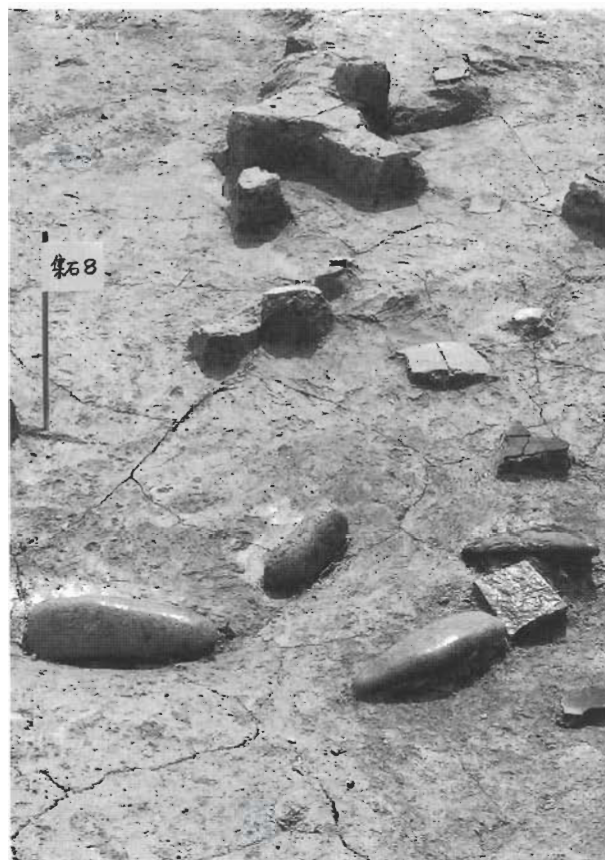
焼土の土器(3)



焼土の土器(4)



焼土の石器



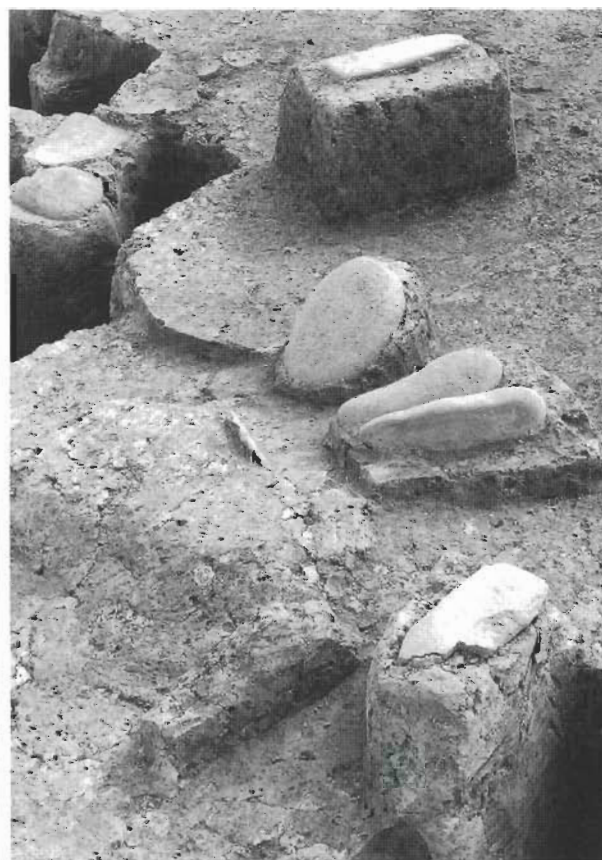
集石8 検出状況 NE→SW



集石10 検出状況 N→S

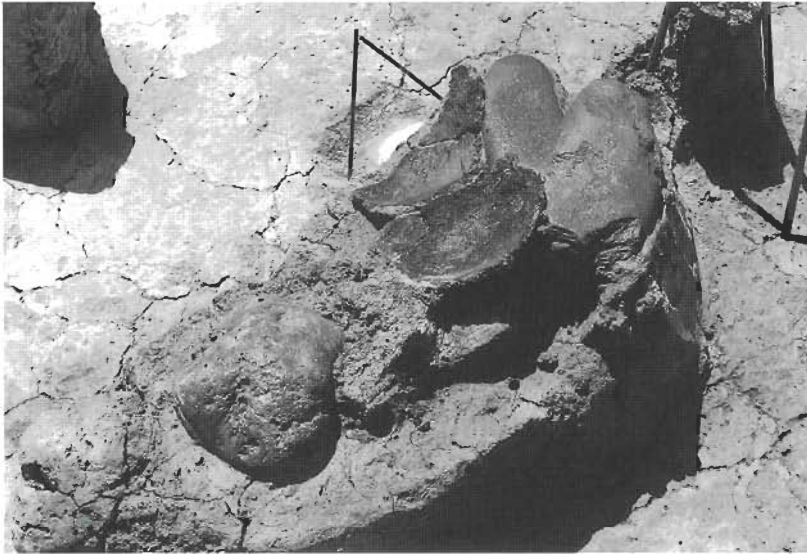


集石11 検出状況 SE→NW



集石12 検出状況 N→S

集石 (1)



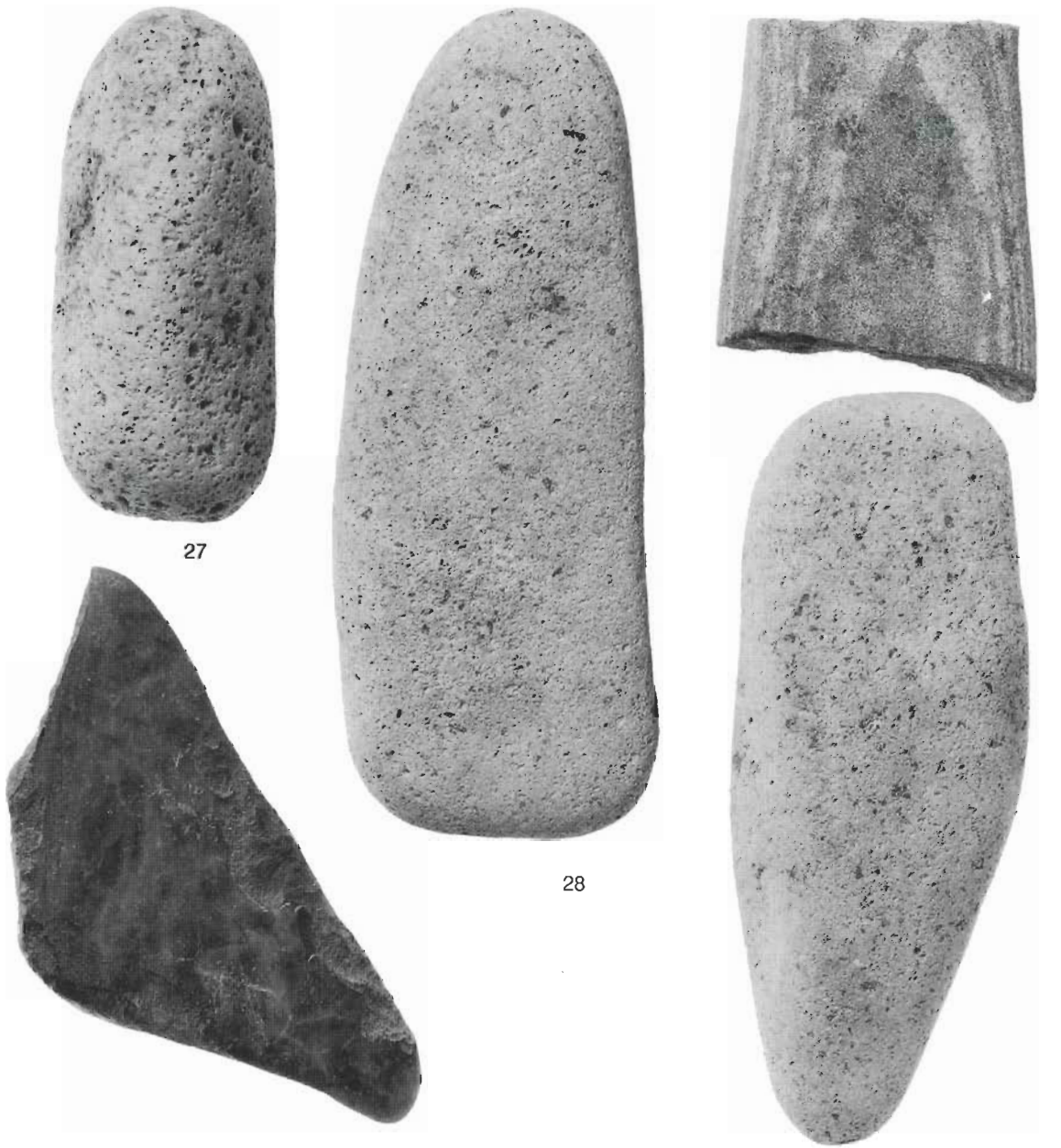
集石9 検出状況 NE→SW



集石13 検出状況 S→N



集石14 検出状況 W→E
集石(2)



集石の遺物(1)

S-8

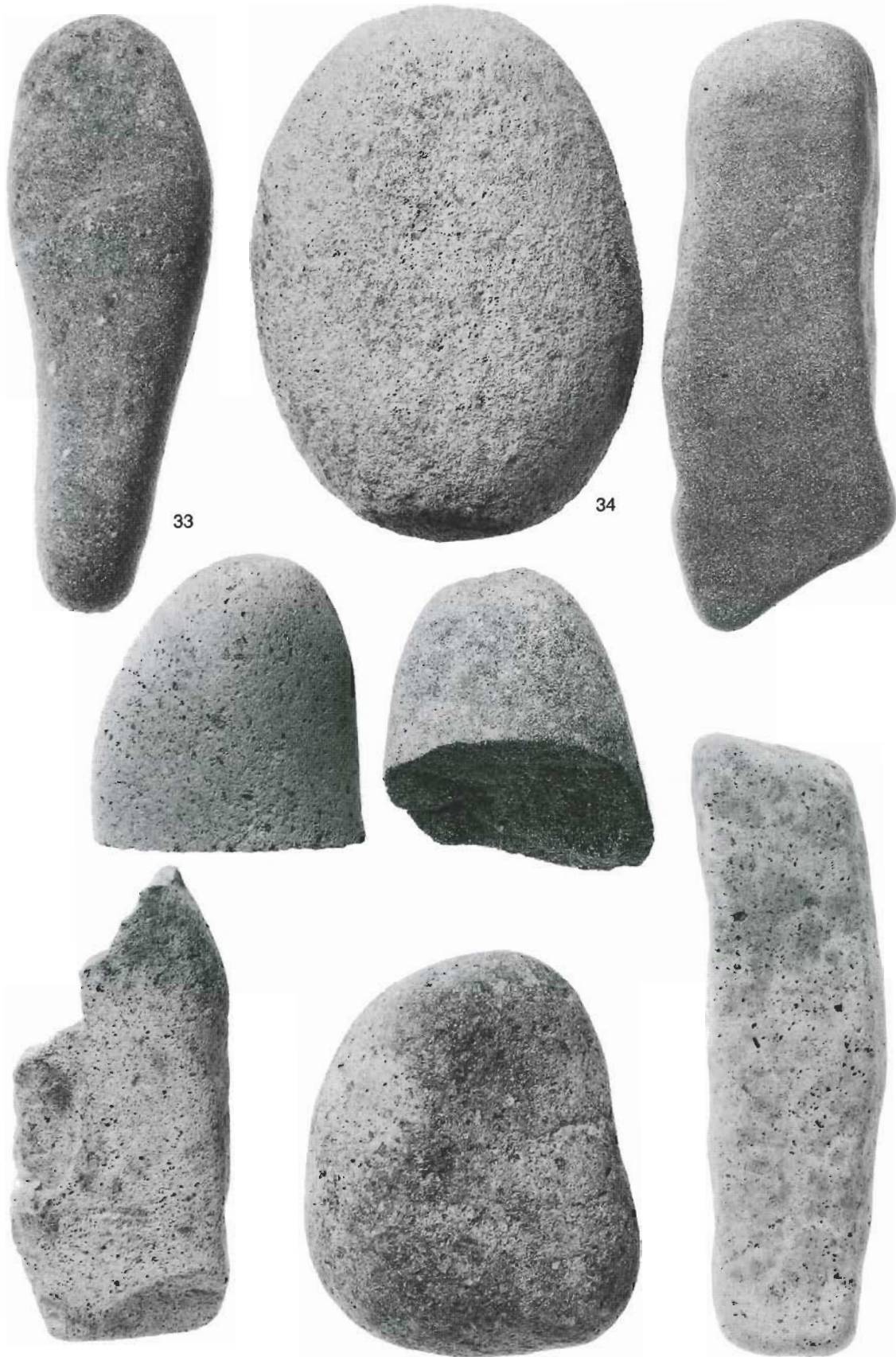


S-10



S-11

集石の遺物(2)



S-12

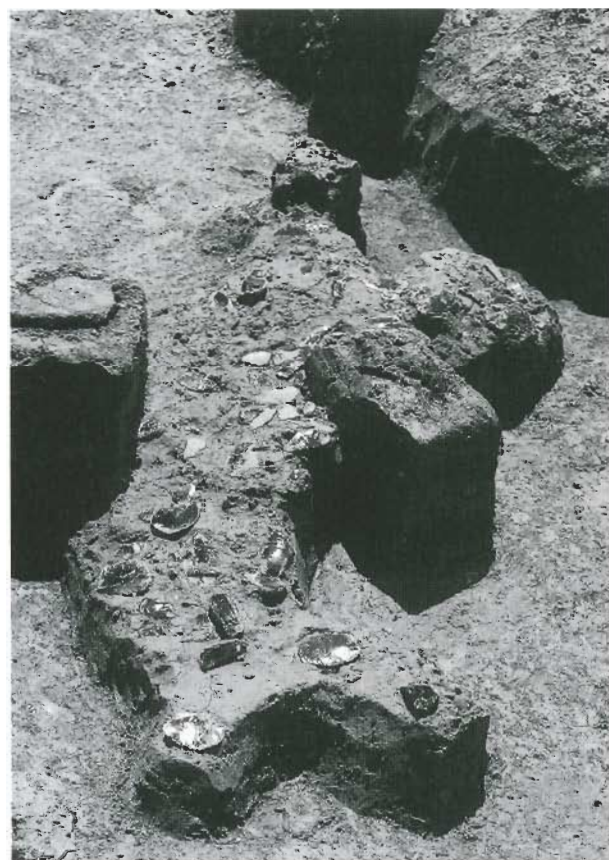
集石の遺物(4)



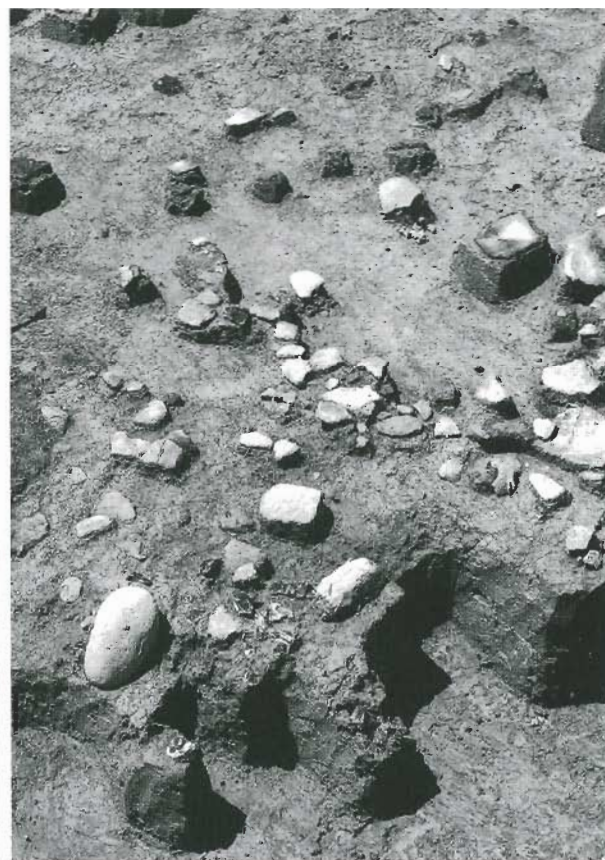
集石の遺物(5)



フレイク集中6 検出状況 NW→SE



フレイク集中2 検出状況 N→S

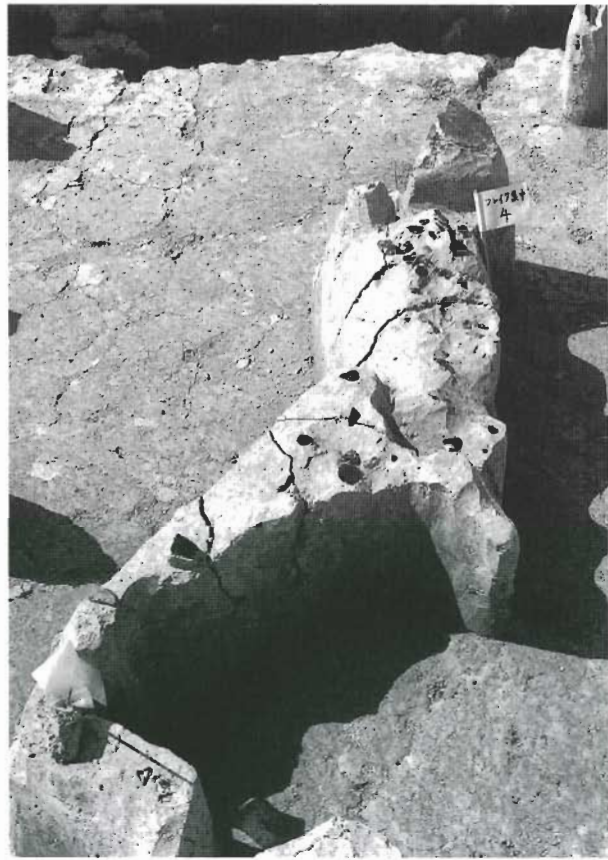


フレイク集中3 検出状況 NE→SW

フレイク集中(1)



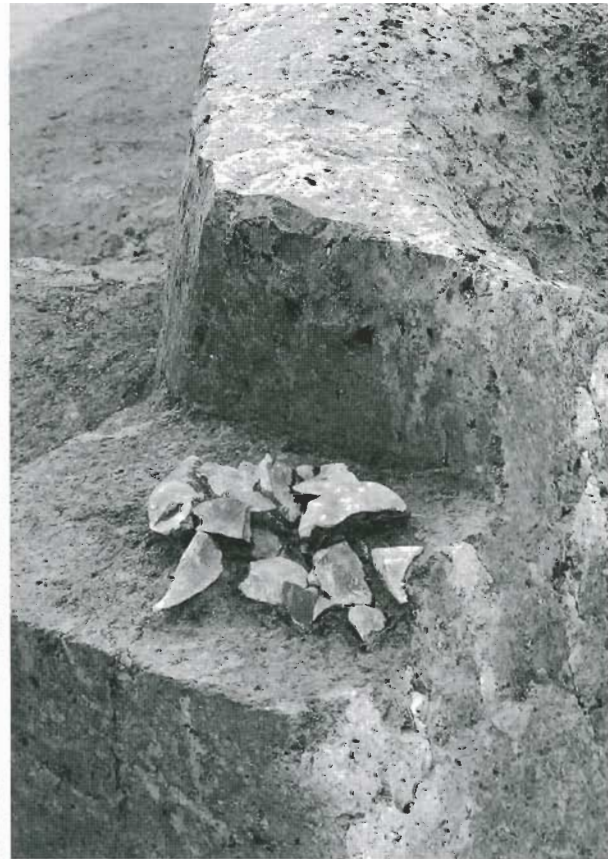
フレイク集中4・F-194遺物出土状況 N→S



フレイク集中4検出状況 NE→SW

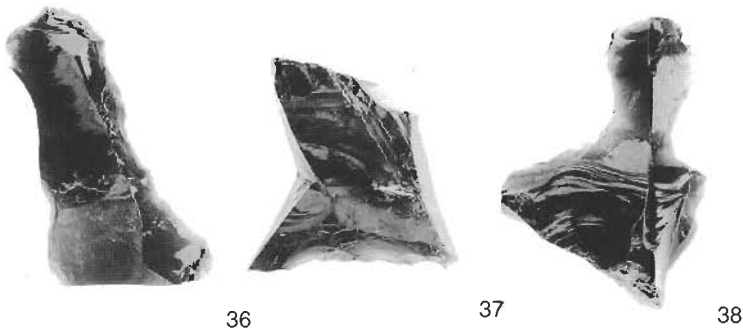


フレイク集中5検出状況 N→S



フレイク集中8検出状況 N→S

フレイク集中(2)



36

37

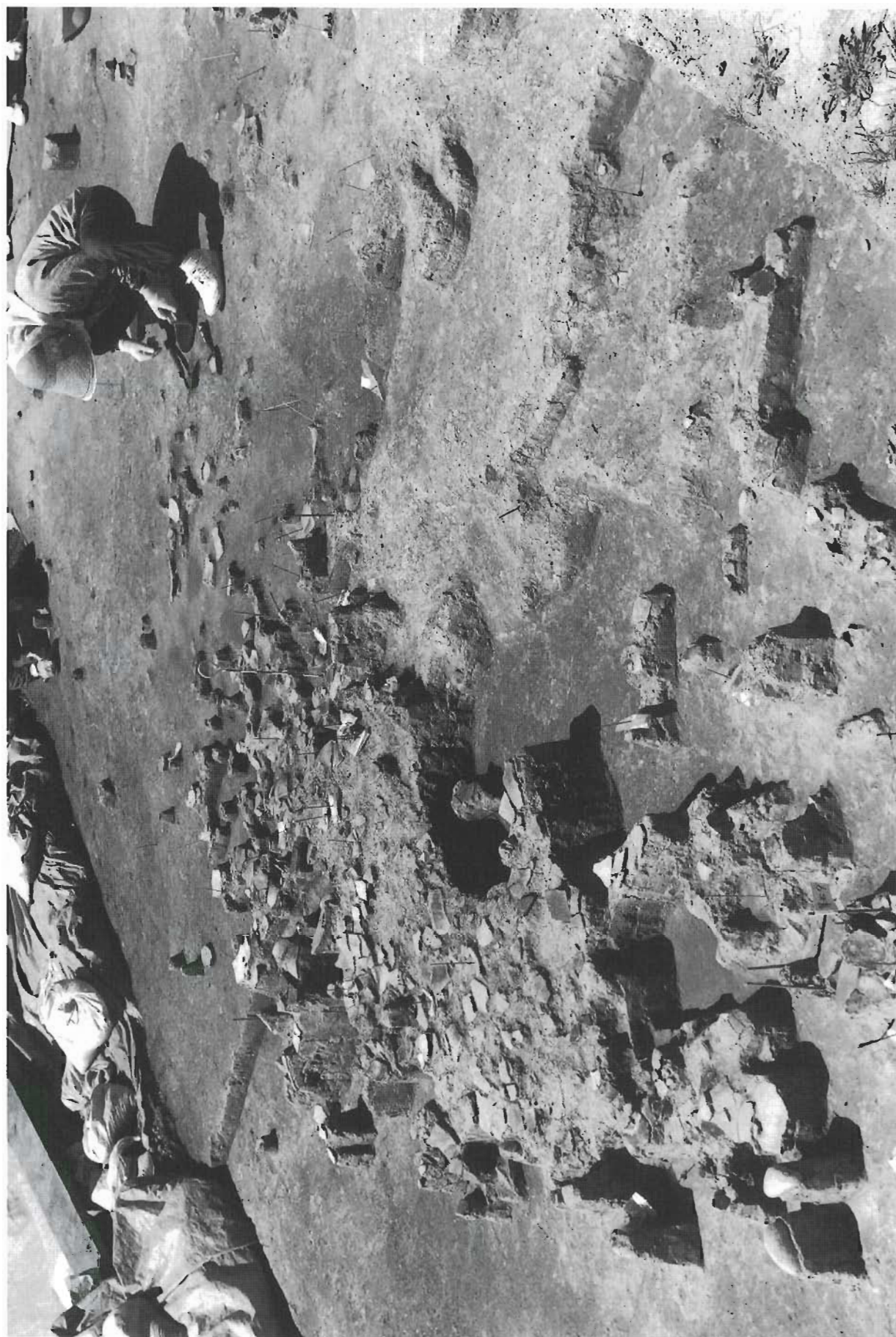
38

フレイク集中 3



フレイク集中 8

フレイク集中の遺物



檢出狀況 E→W

遺物集中1



46



47



48

遺物集中1の土器(1)



46

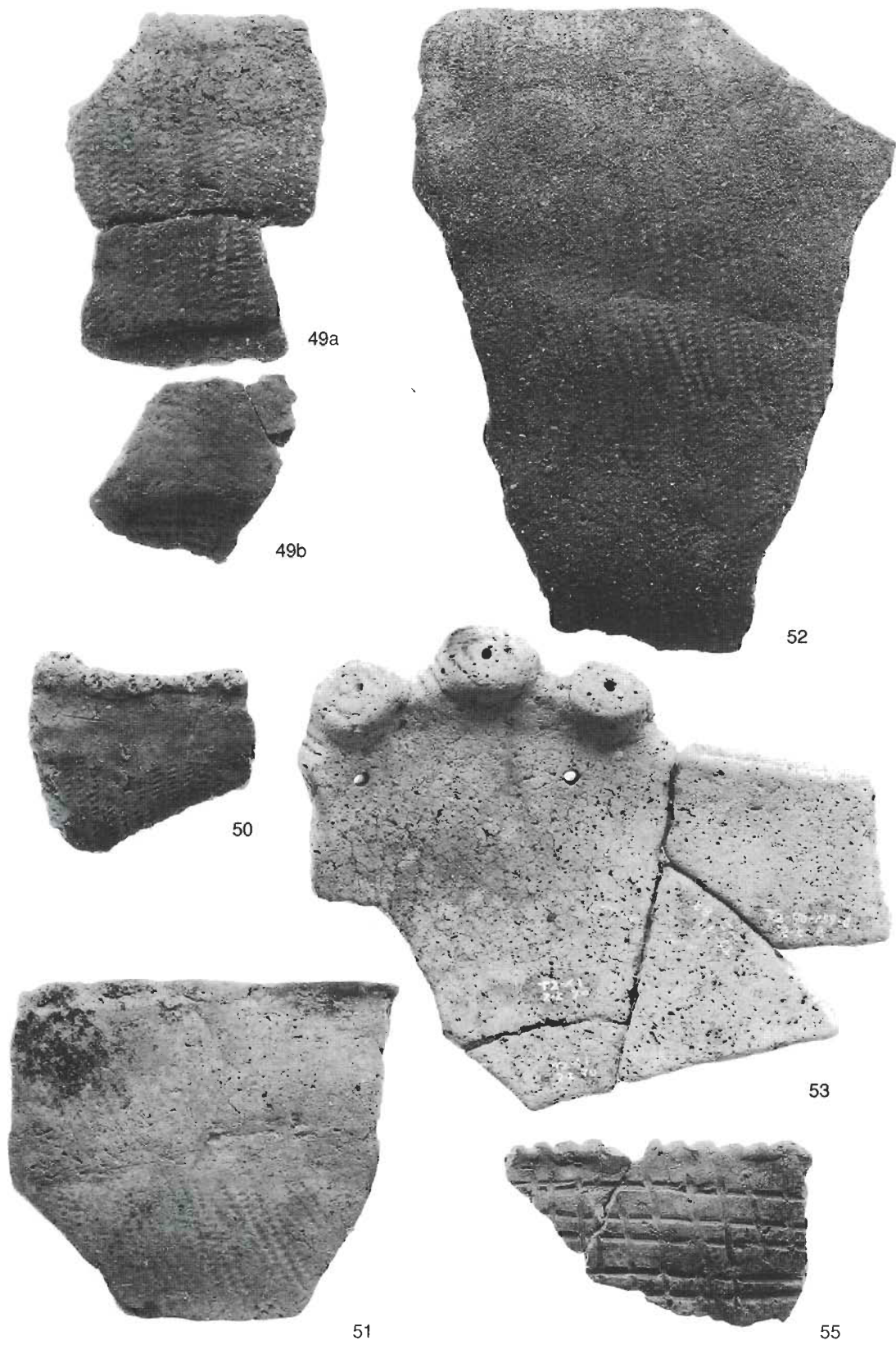


47

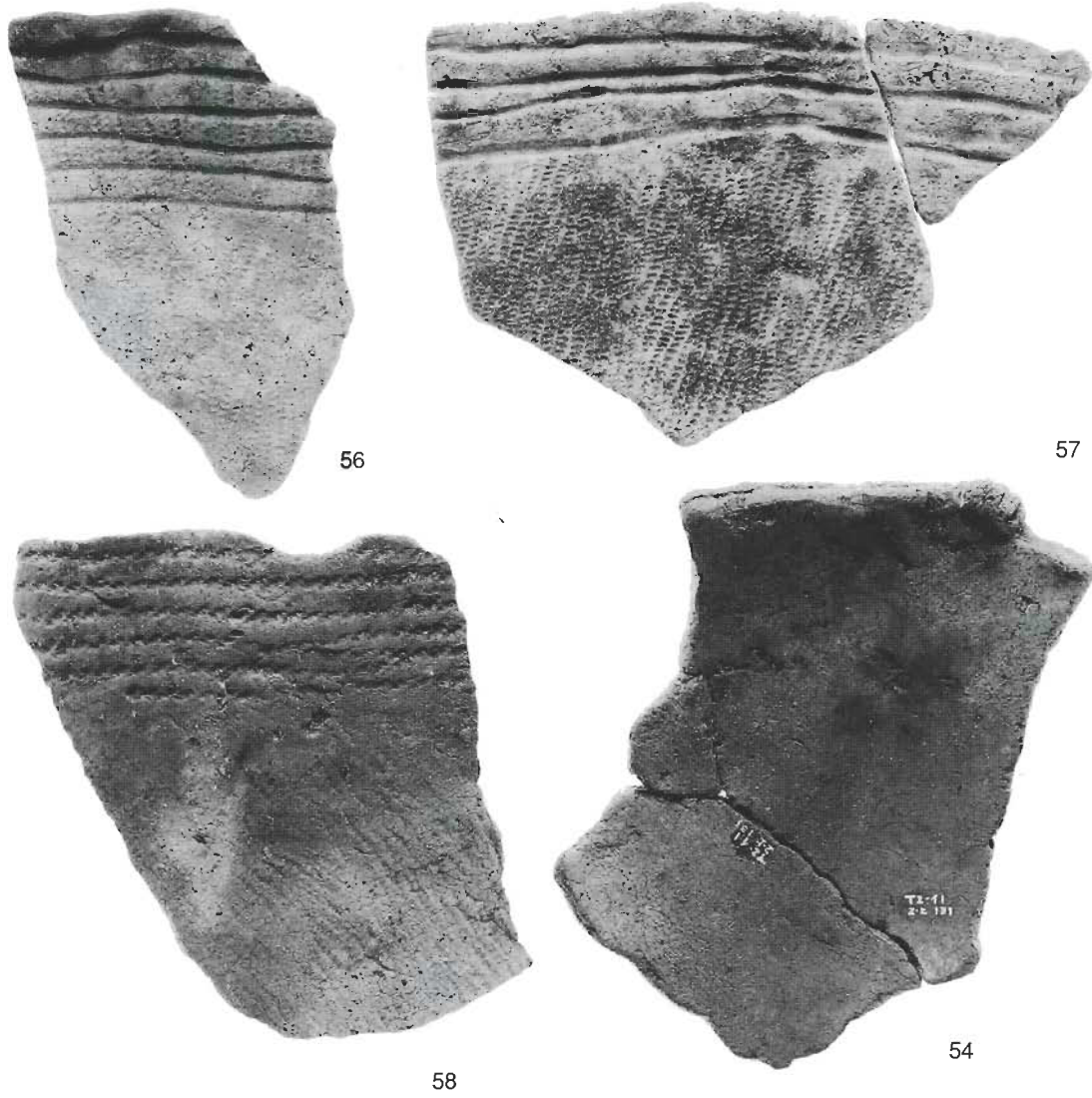


48

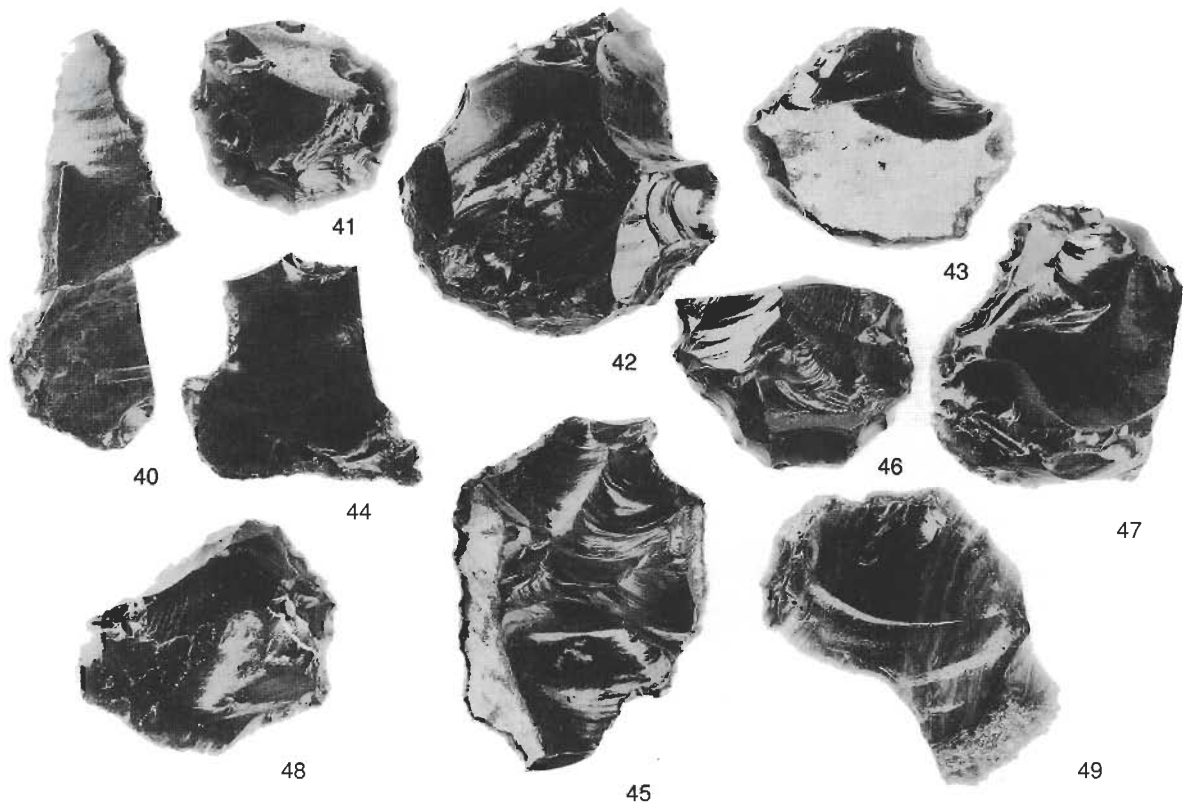
遺物集中1の土器(1)



遺物集中1の土器(2)



遺物集中1の土器(3)



遺物集中1の石器



E→W



W→E

調査前状況



SE→NW



25%調査 SE→NW

調査開始状況



SW→NE



SE→NW



重機による確認調査 S→N

調査風景(1)



W→E



W→E

調査風景 (2)



70-160 S → N



69-159 NE → SW

調査風景 (3)



69-159 NW→SE



大型土囊除去作業 SW→NE

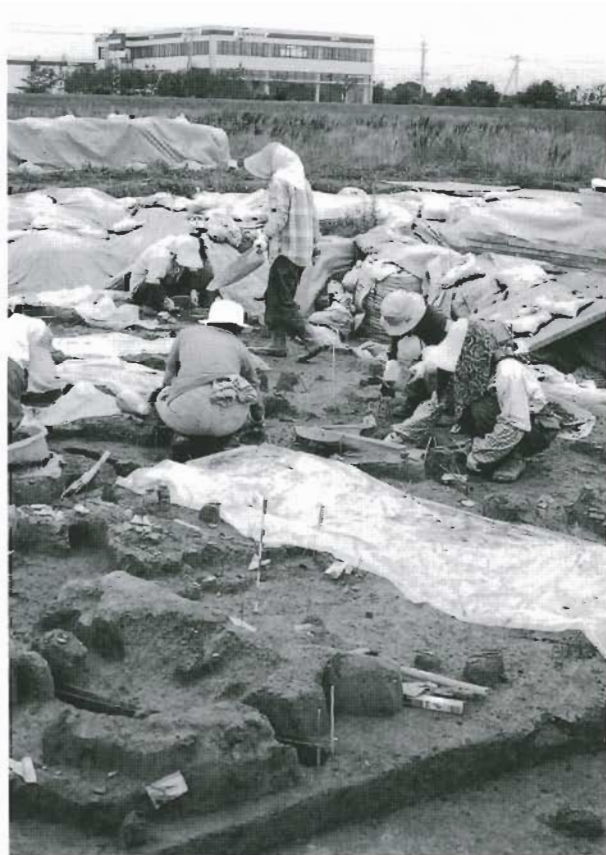


S→N

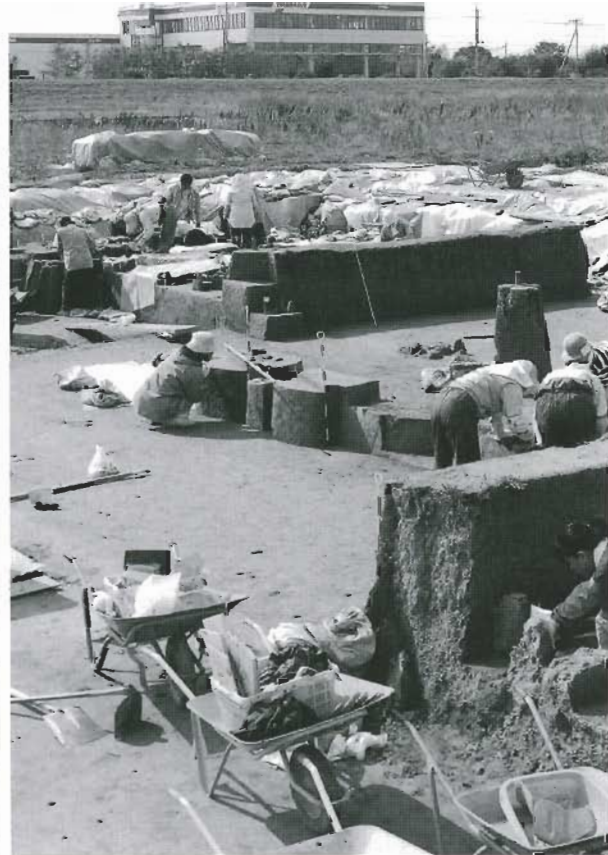
調査風景(4)



69-159・70-159 E→W

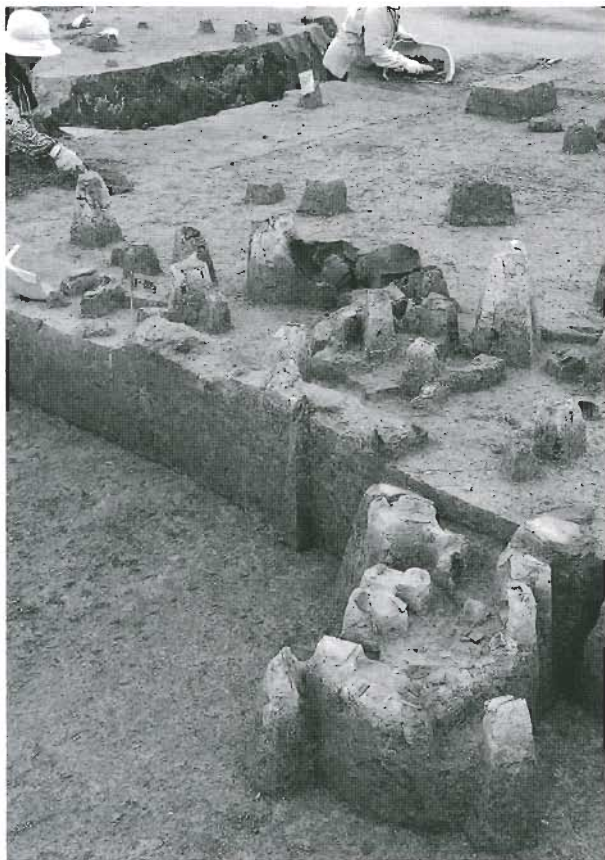


69-159 E→W

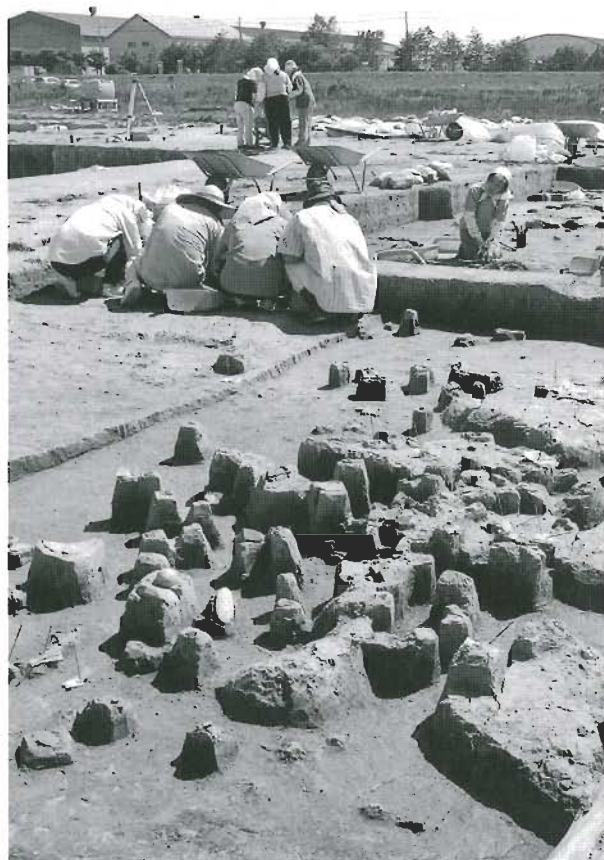


161ラインより西 NW→SE

調査風景(5)



67-161・67-162 (II-1) W→E



68-159 (II-1) E→W



69-159 (II-1) NE→SW



70-160 (II-1) SW→NE

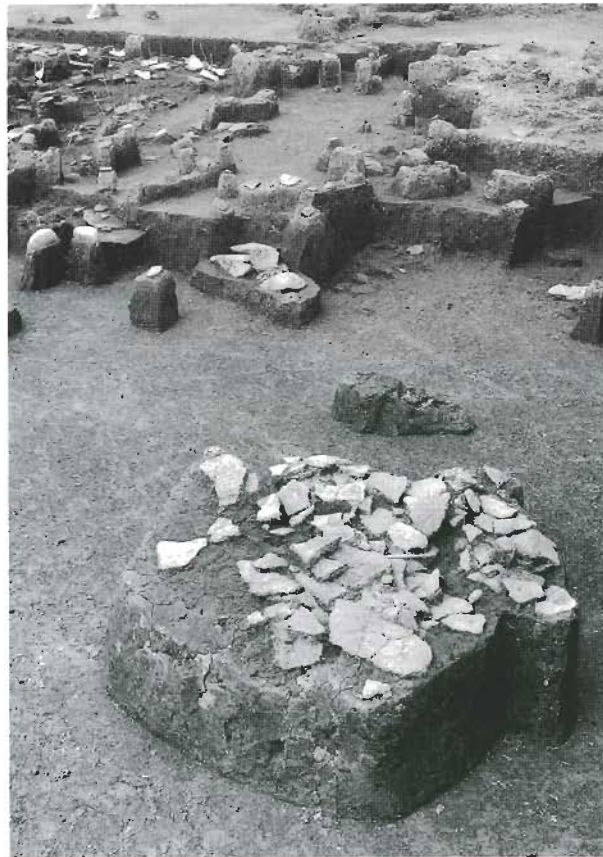
遺物出土状況(1)



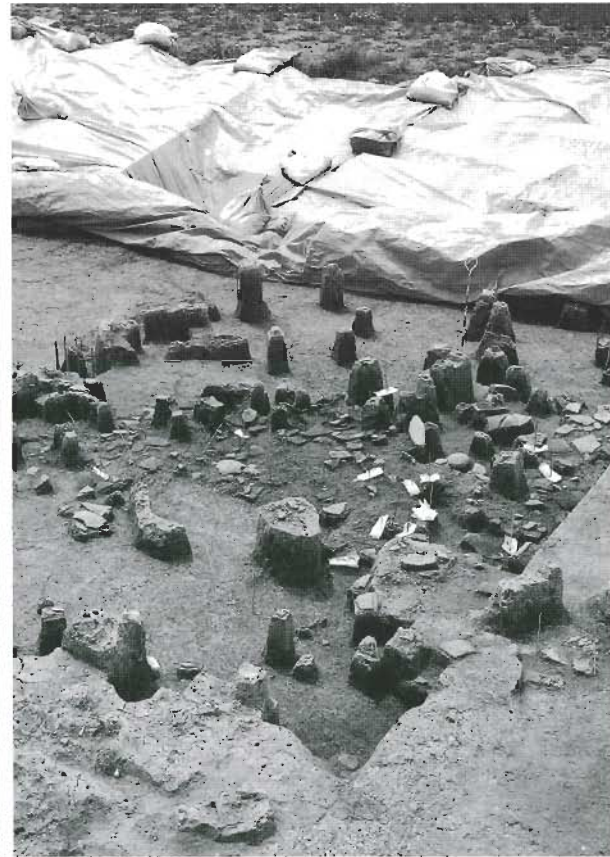
67-161 (Ⅱ-2-上) NW→SE



69-159 (Ⅱ-2-上) SW→NE



70-160 (Ⅱ-2-上) E→W



70-160 (Ⅱ-2-上) SW→NE

遺物出土状況(2)



70-159 (II-2-上~II-2-中) S→N



67-160-a (II-2-中1) E→W



66-163-d (II-2-上) N→S



左と同一個体 E→W

遺物出土状況(3)



60-160-b (Ⅱ-2-中1) NE→SW



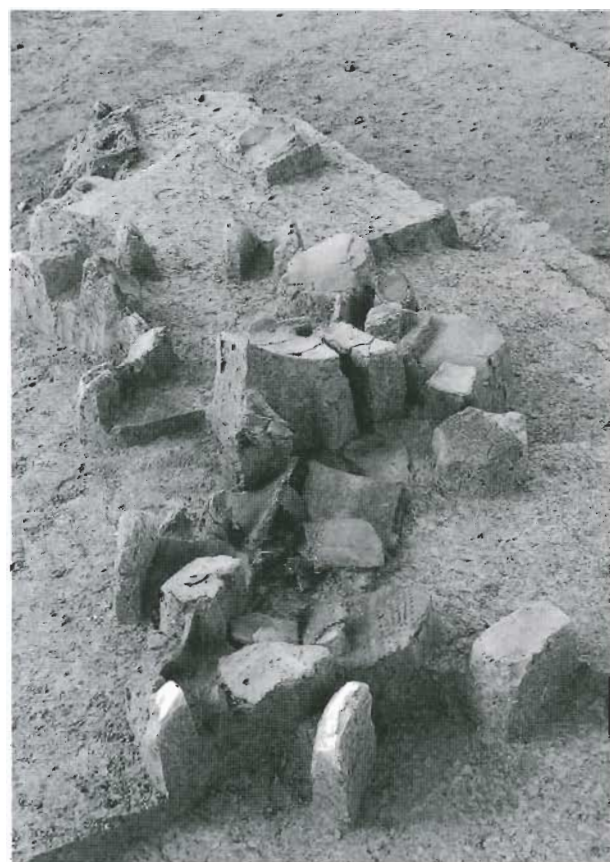
65-160-b (Ⅱ-2-中1) W→E



70-159-b (Ⅱ-2-中1) S→N



69-159-a d (Ⅱ-2-中1) W→E



65-160-b c (Ⅱ-2-中1) E→W

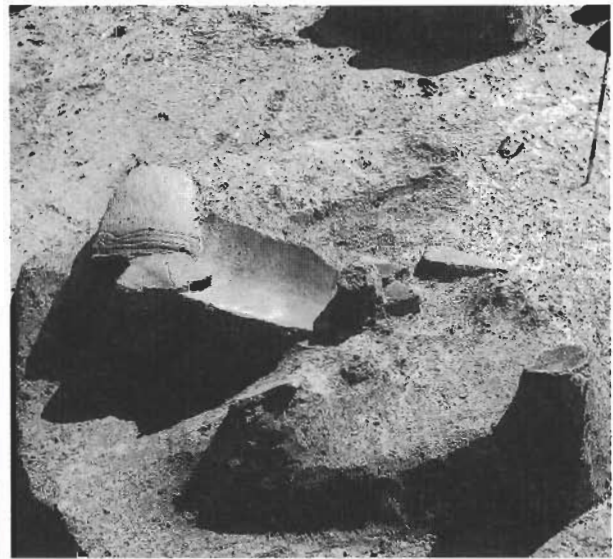


67-160-b (Ⅱ-2-中) NW→SE

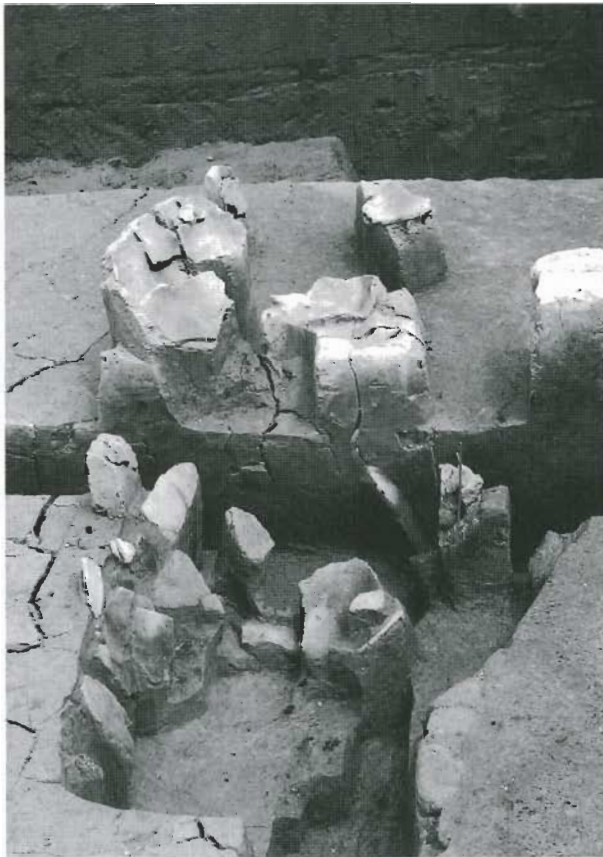
遺物出土状況(4)



70-168-c · 70-169-b (II-2-下) E→W



67-159-b c (II-2-下) N→S

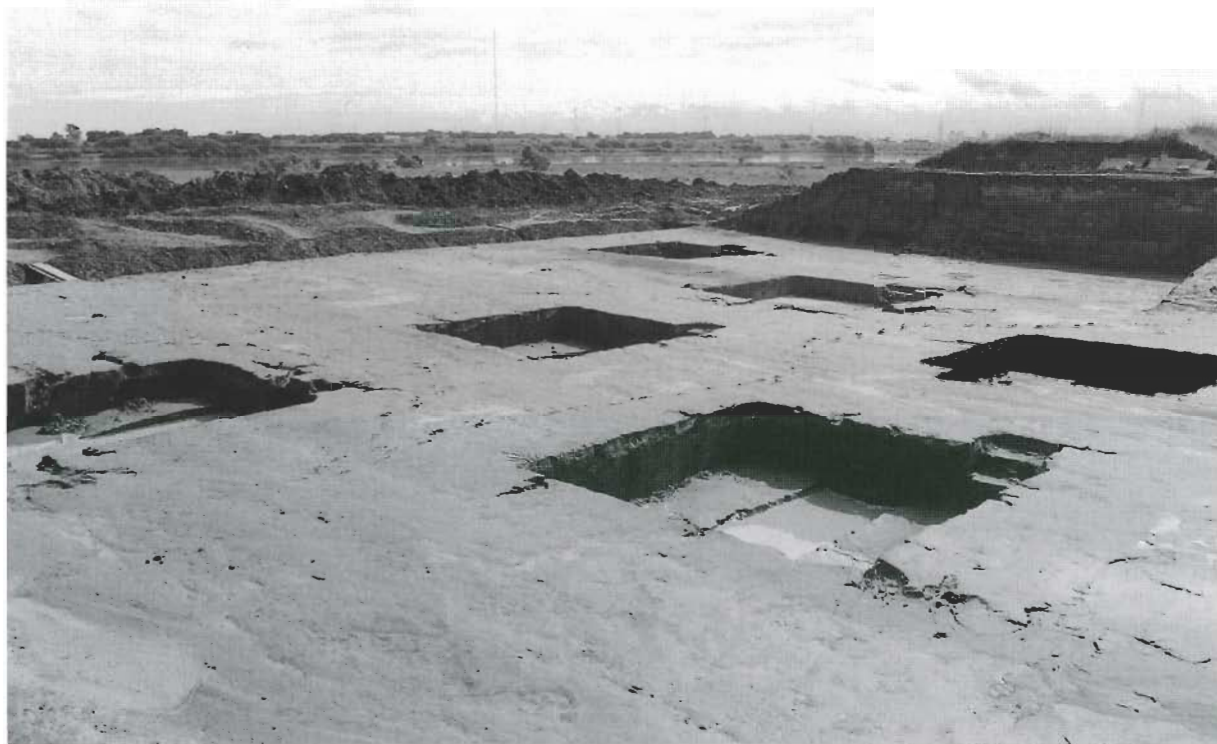


68-165-c d (II-3) SW→NE



67-159-d (II-3) S→W

遺物出土狀況(5)

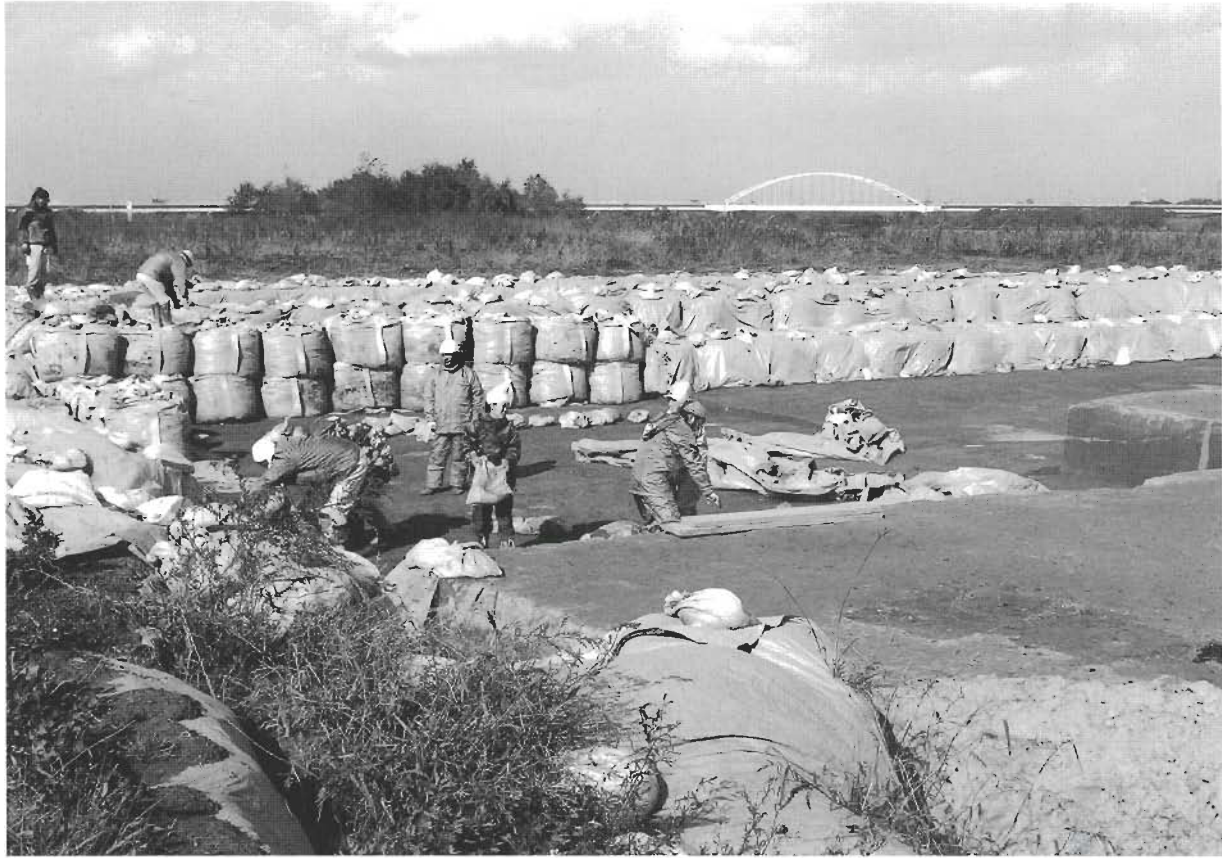


W→E



W→E

調査完了状況



大型土嚢による壁面保護作業 SE→NW



E→W

埋め戻し作業



1



2



3

包含層の土器(1)



4



5

包含層の土器(2)



6



7

包含層の土器(3)



8



9

包含層の土器(4)



10



12



11



13



14



15

包含層の土器(5)



16



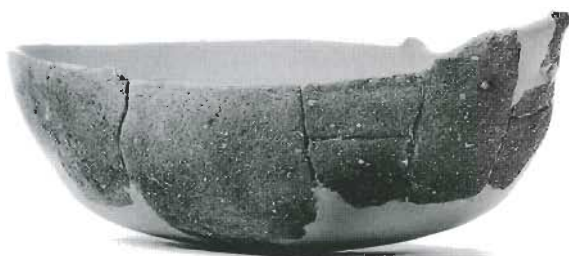
18



17



19

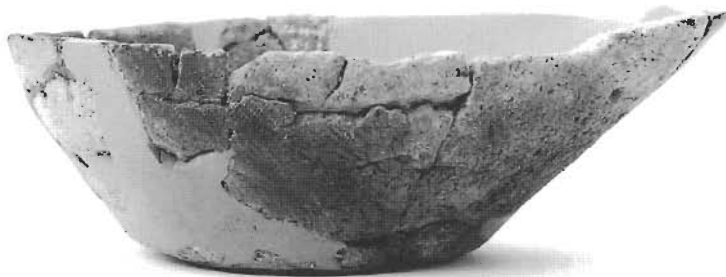


20

包含層の土器(6)



21



22



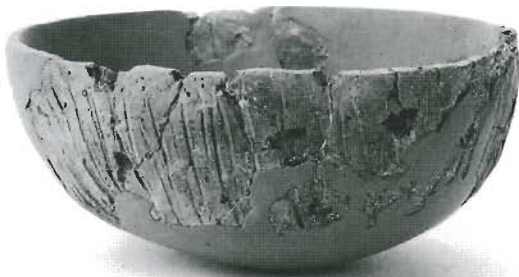
23

包含層の土器(7)



24

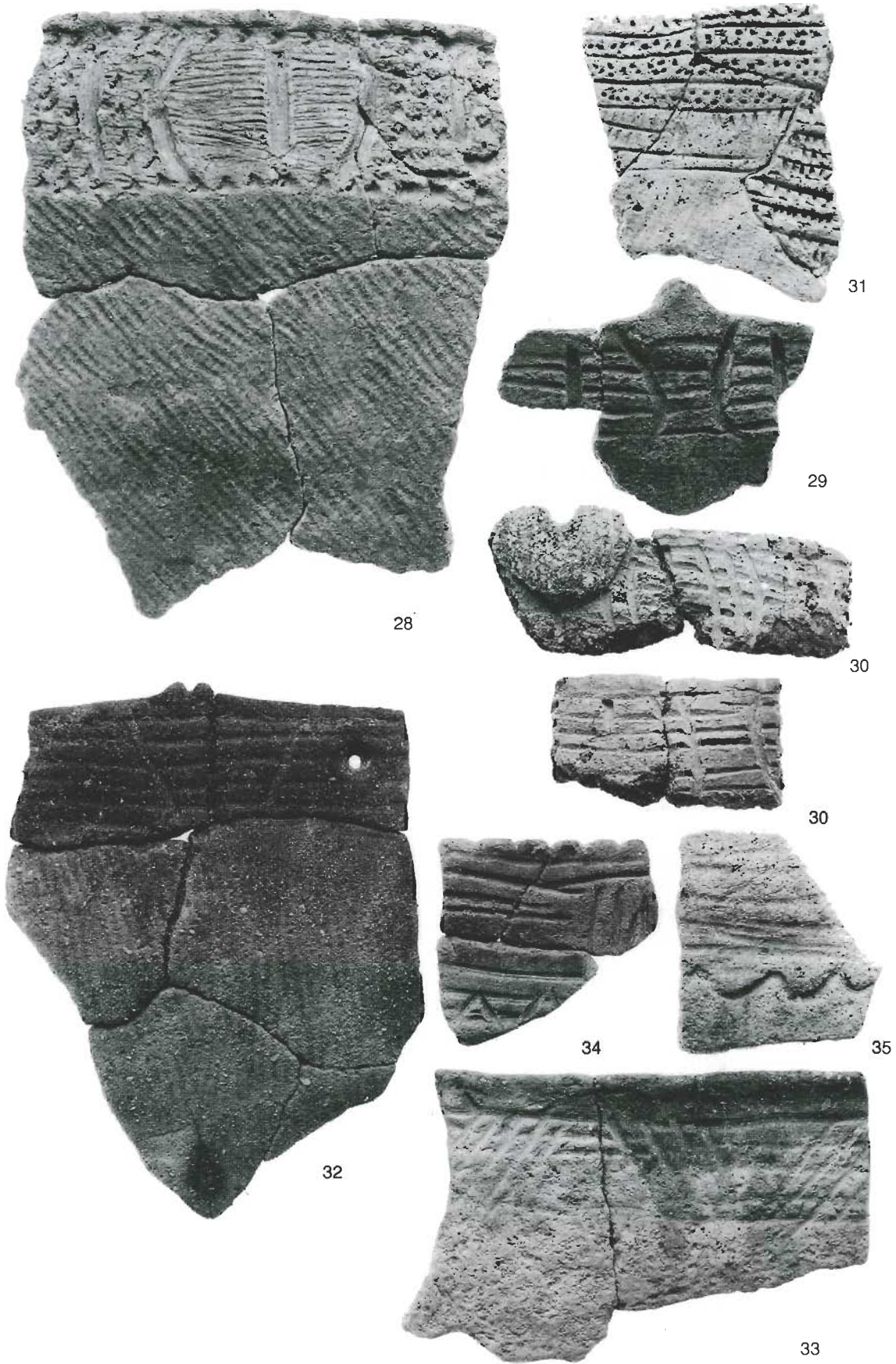
25



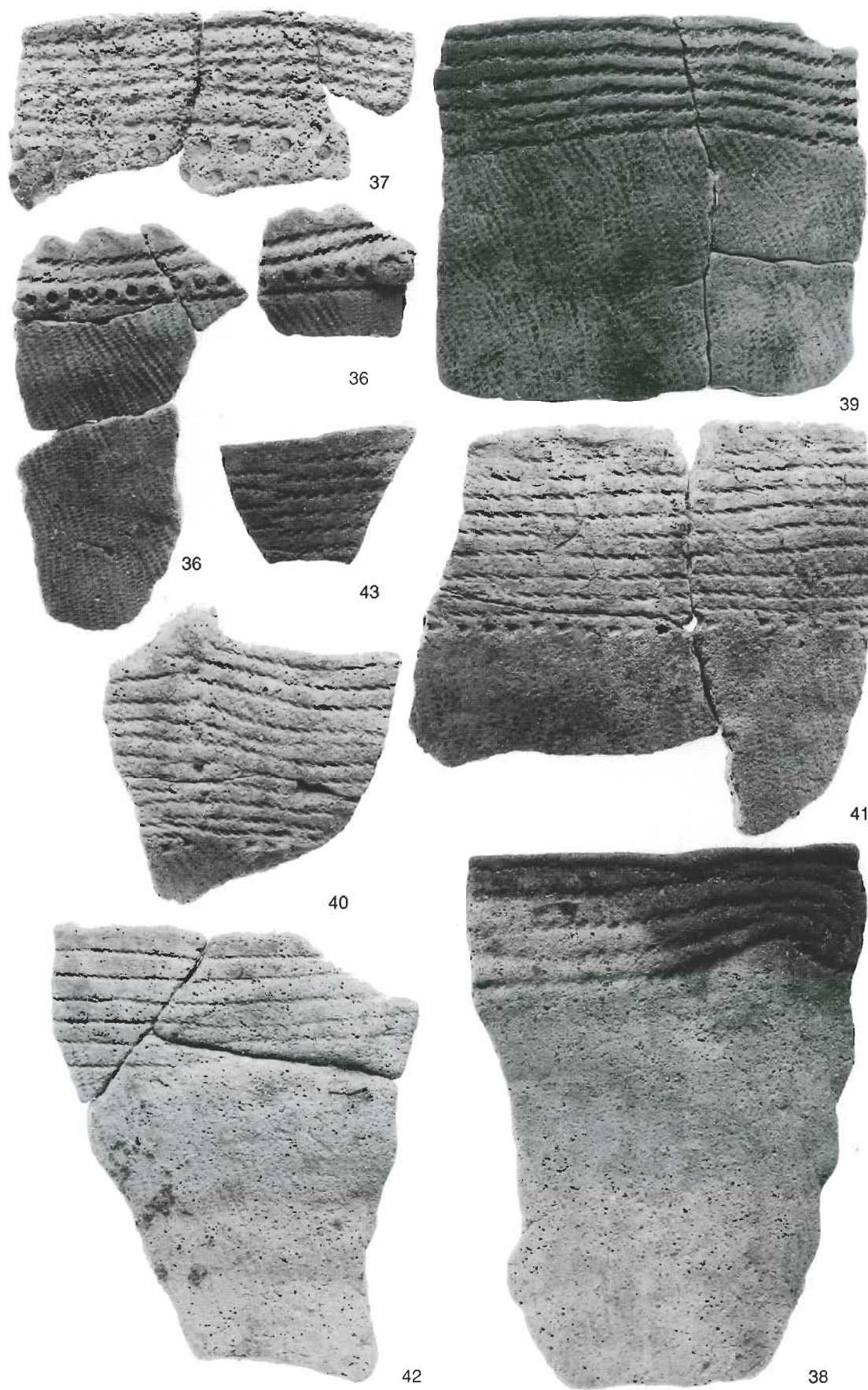
26

27

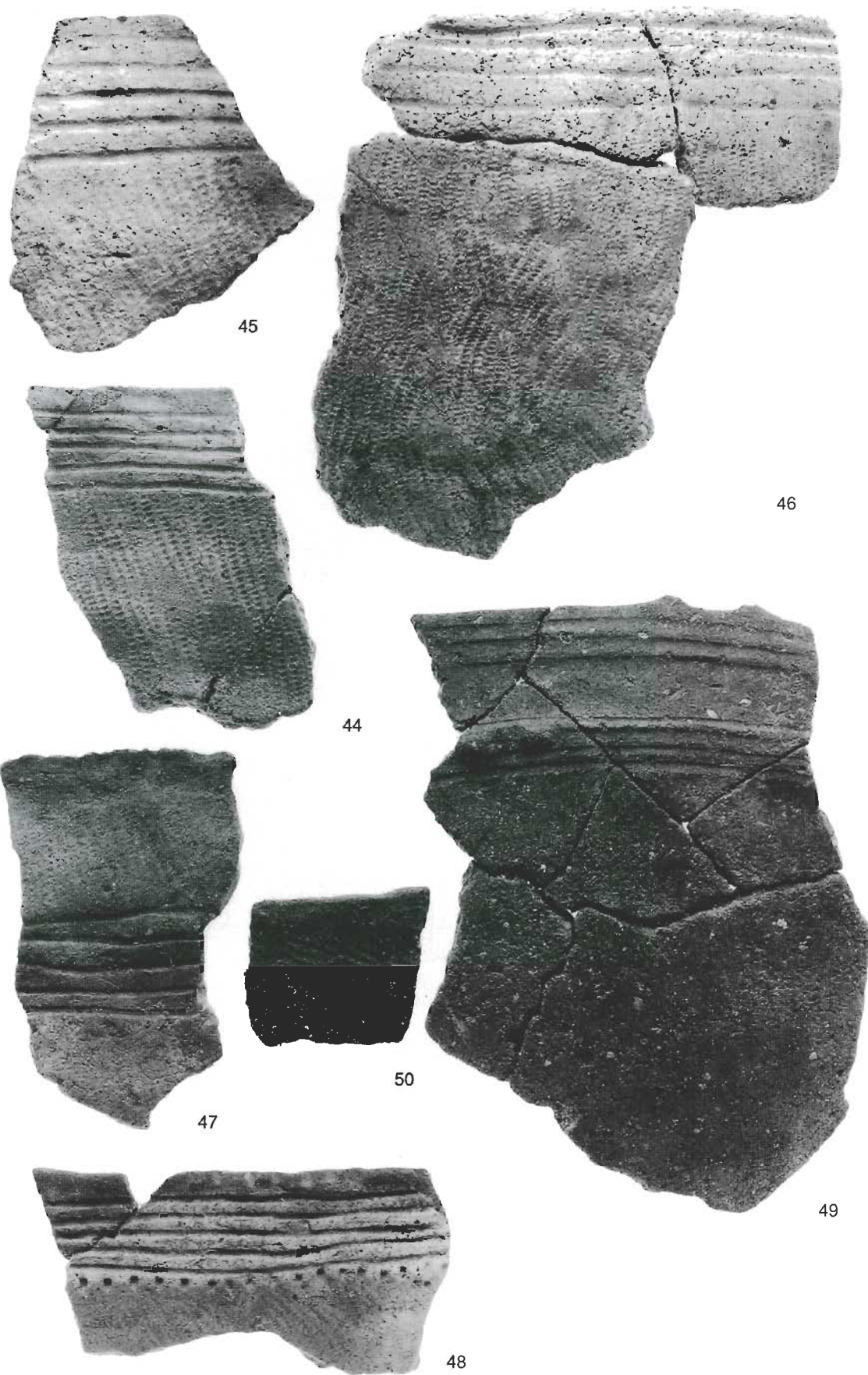
包含層の土器(8)



包含層の土器(9)



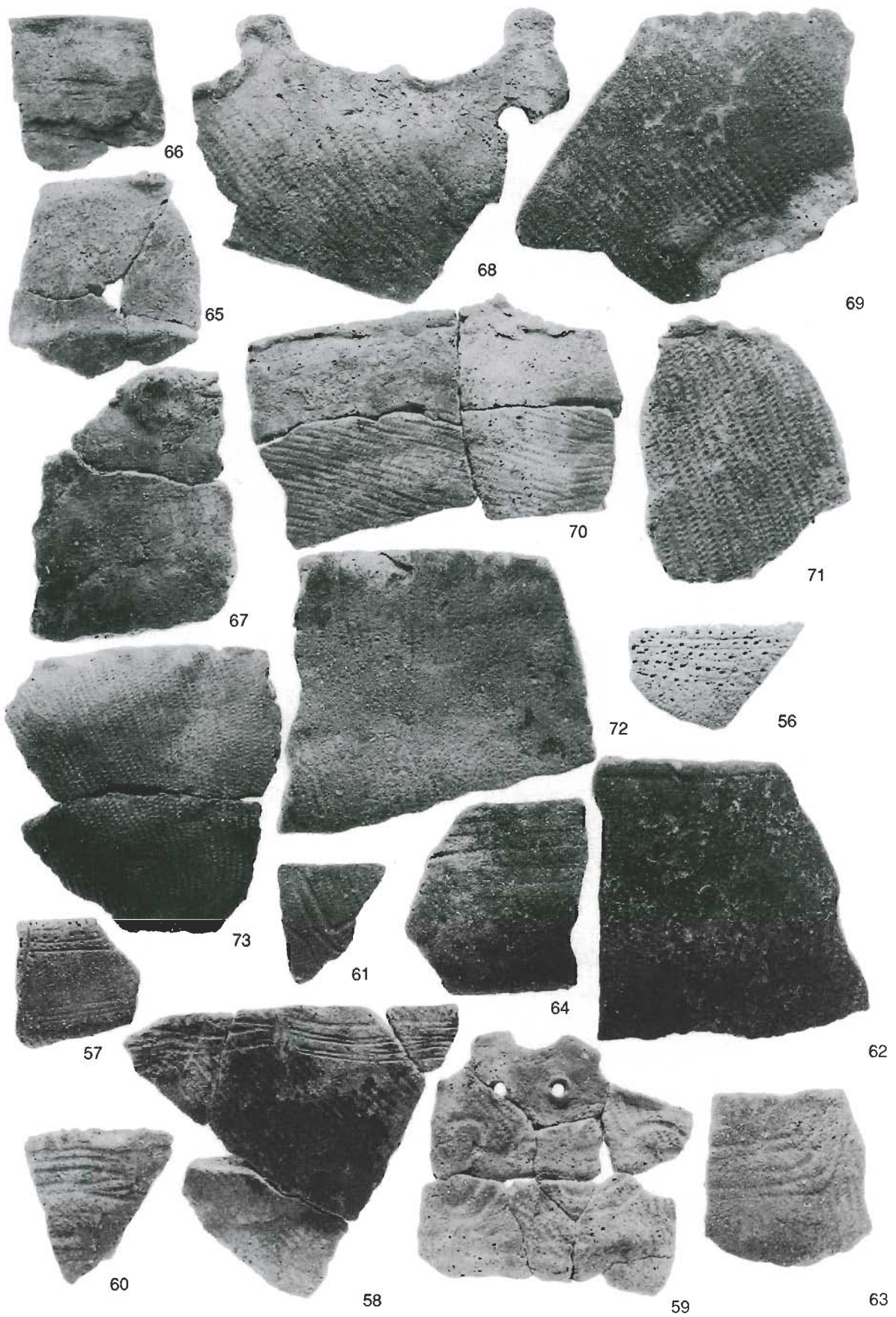
包含層の土器(10)



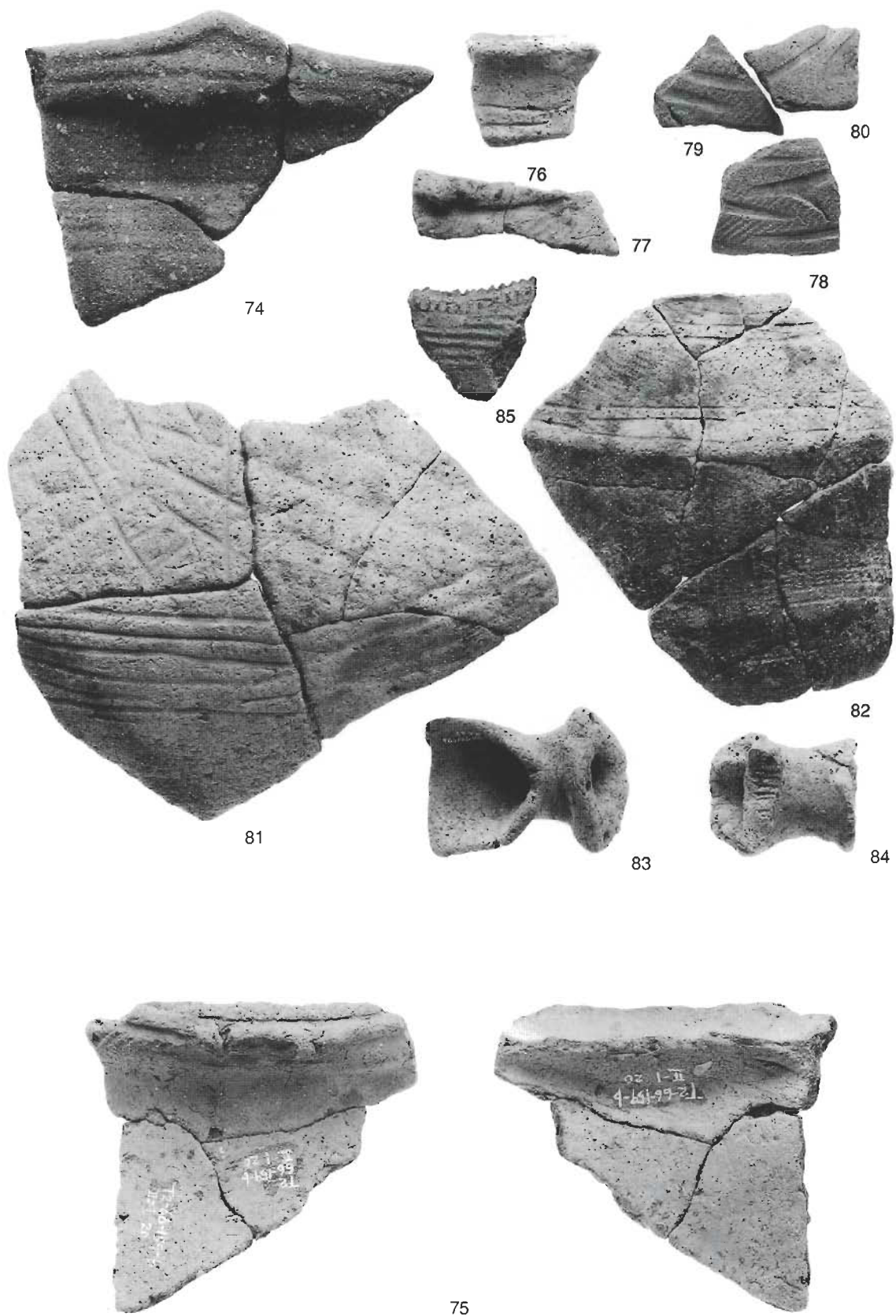
包含層の土器(11)



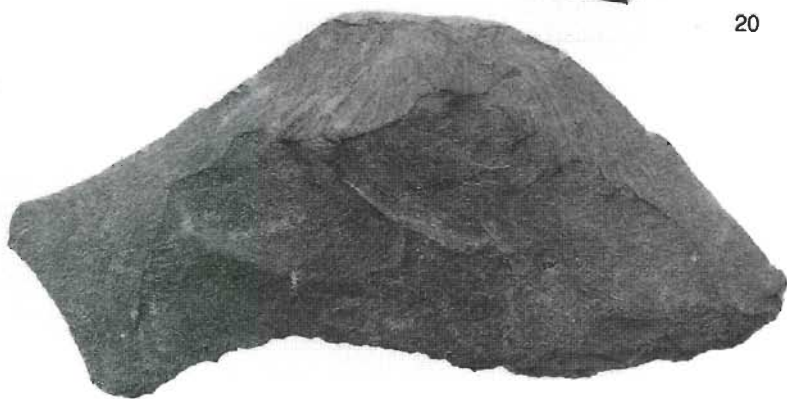
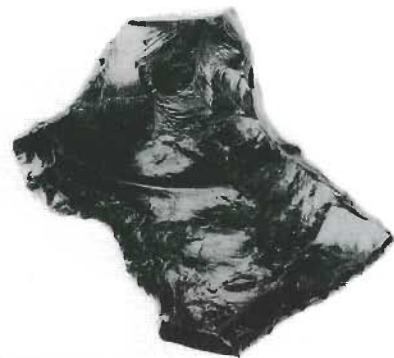
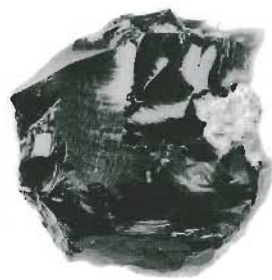
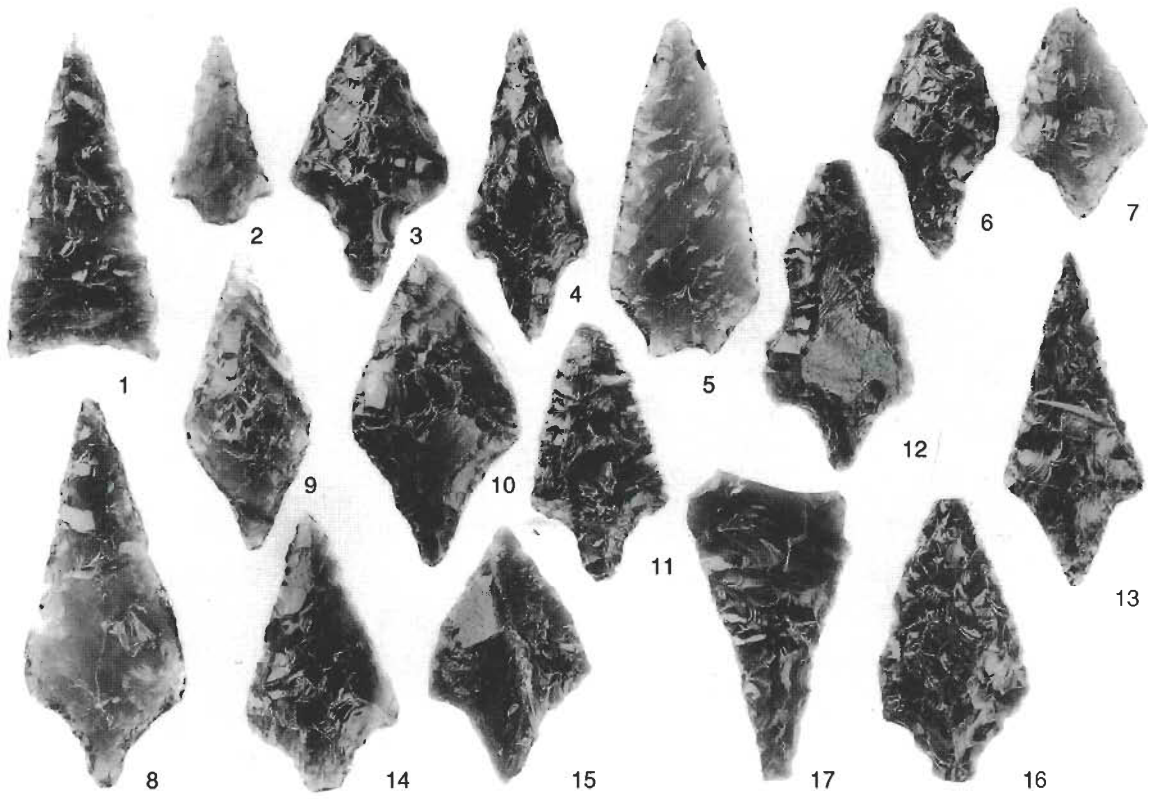
包含層の土器(12)



包含層の土器(13)



包含層の土器(14)



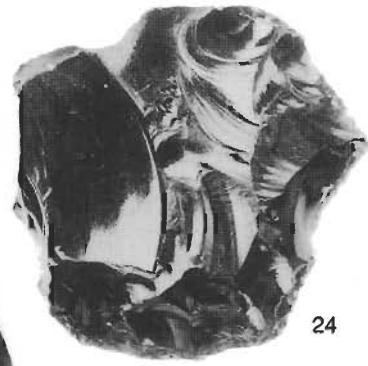
包含層の石器(1)



22



23



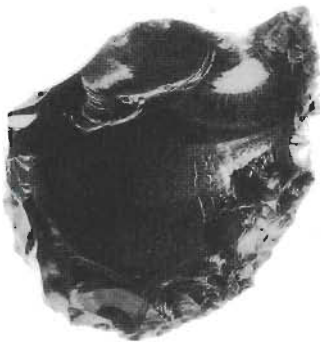
24



29



30



31

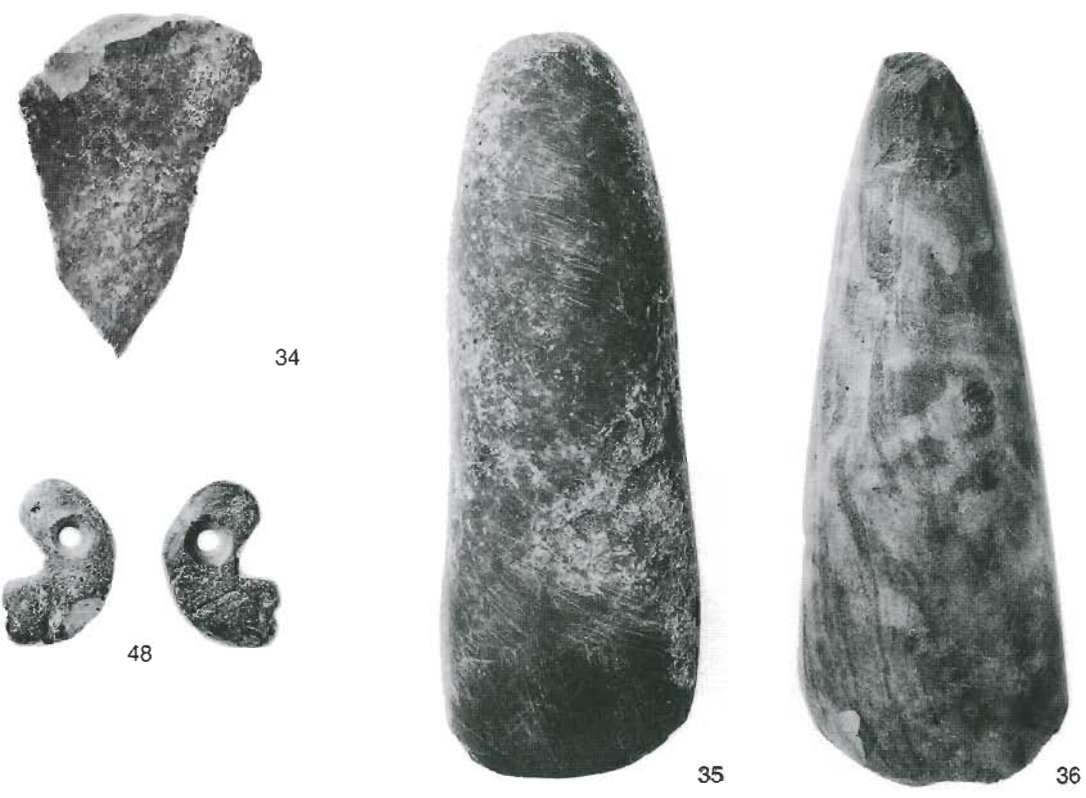


32

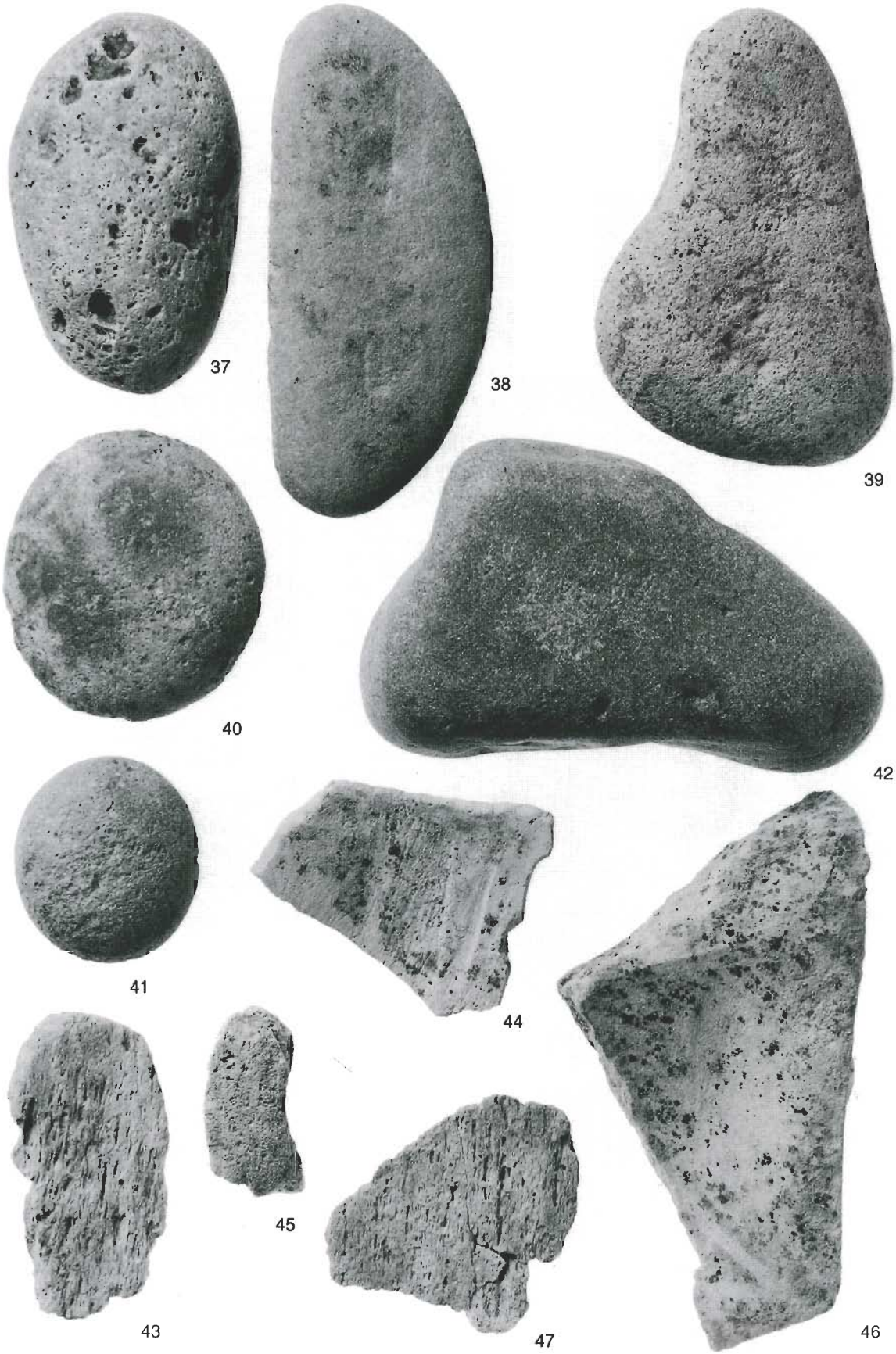


33

包含層の石器(2)



包含層の石器(3)・石製品



包含層の石器(4)



東西ライン (71-167~71-171) NE→SW



南北ライン (69-168) SE→NW

基本土層



W→E

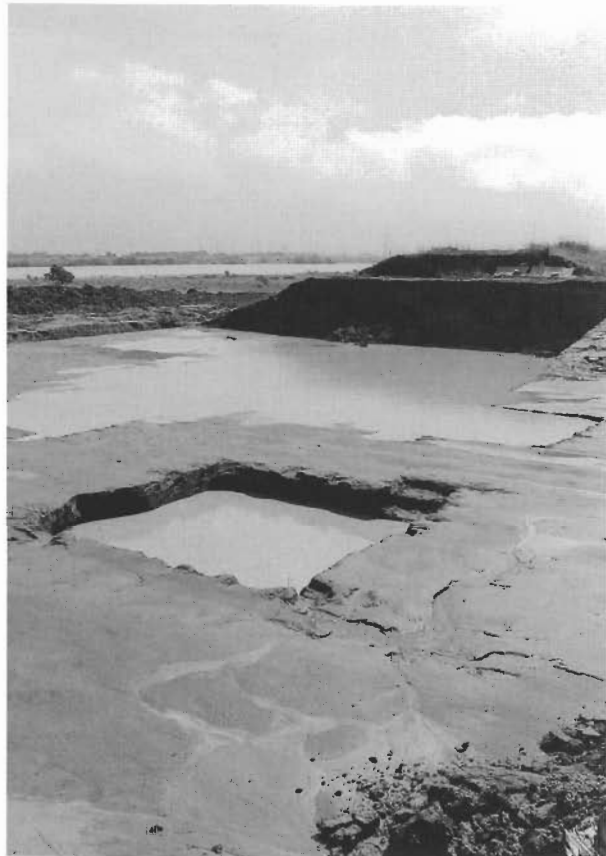


SE→NW

調査風景(1)



降雨後壁面崩落状況 S→N



降雨後冠水状況 W→E



水の進入防止用の溝 N→S

調査風景 (2)



67-167 W→E



67-167 W→E

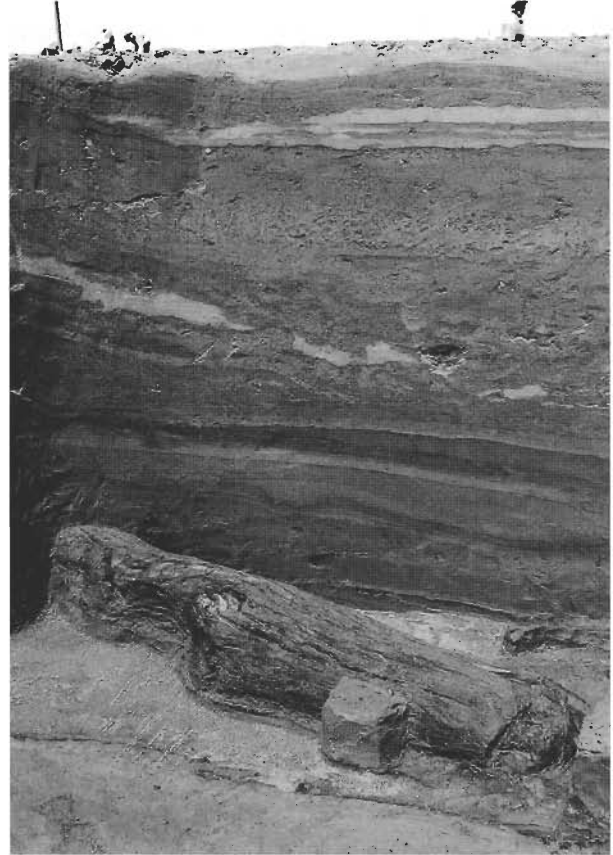


67-169 E→W

自然木出土状况(1)



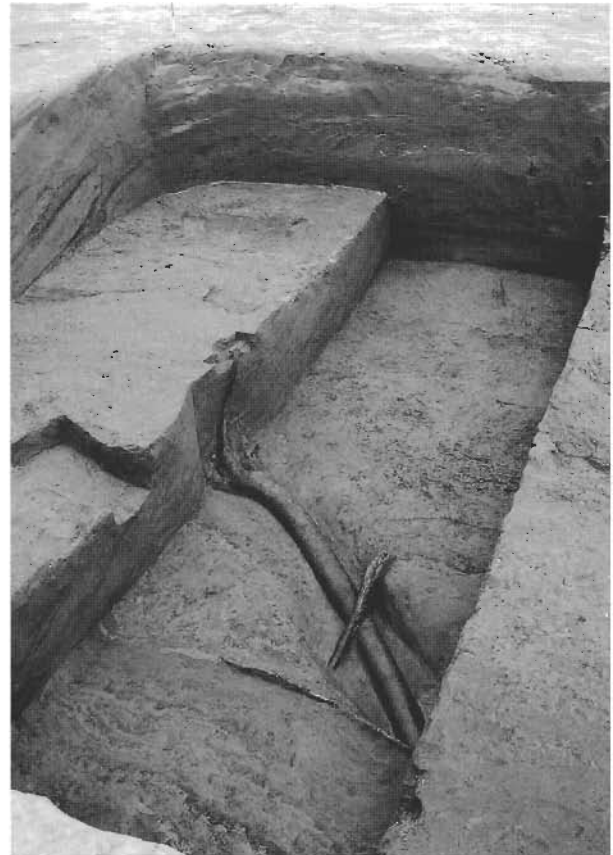
67-169 NW→SE



67-171 E→W



67-171 N→S



69-168 W→E

自然木出土状况(2)

報告書抄録

ふりがな	えべつし ついしかり2いせき 2
書名	江別市 対雁2遺跡(2)
副書名	石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	北埋調報
シリーズ番号	第160集
編著者名	西田 茂・三浦正人・鈴木 信・吉田裕吏洋・酒井秀治
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター
所在地	069-0832 江別市西野幌685番地1 TEL(011)386-3231
発行年月日	西暦2001年3月30日
ふりがな	ついしかり2いせき
所収遺跡	対雁2遺跡
ふりがな	ほっかいどう えべつし こうえいちょう ちさき
所在地	北海道 江別市 工栄町 地先
市町村コード	01217
遺跡番号	A-02-110
北緯・東経	43度07分34秒・141度31分21秒
調査期間	20000508~20001031
調査面積	2,400m ²
調査原因	河川改修に伴う事前調査
種別	散布地
主な時代	縄文時代晩期~統縄文時代初頭
主な遺構	土 坑 15 焼 土 104 集 石 7 フレイク集中 7 遺物集中 1
主な遺物	土器が約7割を占める。内訳は縄文時代晩期後葉がそのほとんどを占める。 石器はその点数のほとんどが黒曜石フレイク・チップである。石鏃、石錐、スクレイパー、石斧、たたき石、台石、砥石、Rフレイク、Uフレイク等がある。 他には蛇紋岩製勾玉1、ベンガラ、焼獣魚骨片がある。
特記事項	★包含層がわかる場所で11層確認されている。 ★縄文時代晩期~統縄文時代初頭の重複する焼土群を確認。 ★Ⅲ層確認で多量の自然木を検出。(約3000年前) ★調査区全域に縄文時代晩期以降の噴砂(砂脈)が見られる。

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第160集

江別市

ついでに

対雁 2 遺跡 (2)

—石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年月日 平成13年3月30日

編集・発行 (財)北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌685番地1

TEL (011) 386-3231

FAX (011) 386-3238

印刷 株式会社 広報社印刷

〒064-0808 札幌市中央区南8条西10丁目石黒ビル

TEL (011) 532-8160(代表)

FAX (011) 532-9060
